

恵迪



KEITEKI

第四号



雪の茅2農場

- 二十一世紀を迎えた北海道大学―北海道大学中村睦男新総長に聞く
- 「恵迪寮」命名と「都ぞ弥生」の誕生
- 「恵迪寮と日本人」ノンフィクション作家 向井承子さん（開識社講演）
- 寮歌「時潮の波の」はこう歌おう
- 「日本のスキー史に輝く 北大スキー部」

営 業 種 目

- ◎ 水力・火力・原子力発電所工事
- ◎ プ ラ ン ト 設 備 工 事
- ◎ 環 境 設 備 工 事
- ◎ 昇 降 機 ・ 立 体 駐 車 設 備 工 事
- ◎ 変 電 所 工 事
- ◎ 動 力 ・ 制 御 ・ 計 装 ・ 電 気 工 事
- ◎ 一 般 土 木 工 事
- ◎ 建 設 機 械 整 備 ・ 改 造

✳ 株式会社 繁富工務店

代表取締役会長 **繁富一雄** (機械10期)

代表取締役社長 **繁富文承** (機Ⅱ修士1期 工博)

本 社 札幌市中央区南12条西6丁目1番28号 ☎(011)511-3428
江別事業所 江別市緑町西3丁目10番6号 ☎(011)382-2994
苫小牧事業所 苫小牧市字沼ノ端228番218 ☎(0144)51-6200
泊事業所 古宇郡泊村大字堀株村字ヘロカルウス789番地 北電株泊発電所補修事務所内 ☎(0135)75-3402
知内事業所 上磯郡知内町字元町28番地13 ☎(01392)5-6157
札幌事業所 札幌市西区発寒11条12丁目2番5号 ☎(011)661-3588
旭川事業所 旭川市永山3条9丁目1番5号 ☎(0166)48-2660

My Retreat at *Plaza Time*

とき
～そこにあるのは、上質な時間の流れ～

9月1日、4F チャペルサイドに
カリヨンガーデン誕生!

- ゲストルーム／509室
- レストラン・バー・ショップ／10店舗
- 25mの温水プール・サウナ他
- 駐車場400台(24時間営業)



 京王プラザホテル札幌

〒060-0005 札幌市中央区北5条西7丁目 Tel.011-271-0111(代表)

<http://www.keioplaza-sapporo.co.jp/>




SAPPORO

麦芽
100%



ここだけのスタンダード

CLASSIC

サッポロクラシック

ビールは20歳になってから。
あきかんはりサイクル。⑧

いいものだけを
サッポロビール
www.sapporobeer.co.jp



Aコース9番グリーンよりフェアウェイを望む

開場38年、北海道が誇る北の名門！

全国無比、大空に連なるはてしない原始の森

札幌国際カントリークラブ 島松コース

理 事 長	繁 富 一 雄
	恵迪寮同窓会会長 (工学部機械10期)
副 理 事 長	勝 木 郁 郎
常 務 理 事	加 藤 信 吉
常 務 理 事	田 垣 親 雄
キャプテン	
常 務 理 事	福 山 達 彦

コ ー ス 北広島市島松49番地5

(011) 376-2221

札幌事務所 札幌市中央区北2条西4丁目 北海道ビル

(011) 231-1875

健康って、おいしい。

MEIJI

「食」の新しい価値を創造し、
お客様の健康で
幸せな毎日に貢献します。



明治乳業株式会社

東京都中央区京橋2-3-6
TEL: 03-3281-6122

代表取締役社長 中山 悠

お酒は20歳になってから。
お酒はおいしく適量を。

いい人と、いい酒を。

月桂冠

月桂冠株式会社
<http://www.gekkeikan.co.jp/>

恵迪

KEITEKI

第四号 目次

グラフィック 探訪

『北海道大学・二〇〇一年夏』

巻頭言

会長 繁富 一雄(昭和六年入寮)

16

『二十一世紀を迎えた北海道大学』

—北海道大学 中村睦男新総長に聞く—

井口 光雄(昭和二十八年入寮)

18

【主張】

恵迪寮同窓会新役員の選出と

恵迪精神復興ルネッサンス運動を

辻山 昌佑(昭和二十六年入寮)

30

●特集・北大・恵迪・人脈II 第4回

「恵迪寮」命名と「都ぞ弥生」の誕生

◆「恵迪寮」その命名と寮歌誕生

白井 俊三(昭和二十七年入寮)

36

◆横山芳介—東京・札幌・静岡、四十六年の生涯—

鈴木 勝男(昭和二十九年入寮)

44

◆「都ぞ弥生」作曲者の赤木顯次さん

高井 宗広(昭和三十一年入寮)

56



二〇〇〇年度 掲載士 青島ミナ

「恵迪寮と日本人」

ノンフィクション作家 向井承子氏

恵迪寮歌・寮史をめぐる

- 「瓔珞みがく」 作曲者 置塩（星野） 奇遺稿と群馬寮歌祭
織茂 利治（昭和十五年入寮）
寺井 幸夫（昭和十九年入寮）
94
- 寮歌「時潮の波の」はこう歌おう
94
- 「瓔珞みがく」とハマナス
水庭 久尚（昭和二十六年入寮）
89
- 仙台出身の二人の北大寮歌作者を尋ねて
小出 精（昭和三十年入寮）
92
- 「蟹玉」のこと、そして「Paul I. Ota」のこと
石村 義典（昭和四十年入寮）
98
- “寮歌で北大へ入って、いまだに寮歌に生きている”——炉辺談義——
〈旧・旧寮最後の入寮生（昭和五年） 中山二郎さん〉
102



思い出の恵迪寮

- 旧寮を想う
中川 義一（昭和 三年入寮）
110
- 腕白恵迪寮生
繁富 一雄（昭和 六年入寮）
113
- 恵迪寮のぬくもり
大久保一良（旧恵迪寮居候）
117



自由論文・エッセイ・文芸

- | | | | |
|------------------------|----------------|-----------------------|----------------|
| ▼ 自作『わたしのススキノ』有線曲第5弾発進 | ▼ 人生楽在相知心 | ▼ 惠迪寮と適塾——教育の原点を求めて—— | ■ 「惠迪寮の想い出」追記 |
| 田中 信義 昭和三十二年入寮 | 見直そう。生命体の常識 | 異文化の共存——世界遺産と惠迪寮—— | 昭和十七年ごろの惠迪寮 |
| 小林 正人 昭和二十八年入寮 | 俳句「秋灯」 | 一人、オンブズマンを行く | 寮歌感傷 |
| 157 | 東京『惠迪会ゴルフ会』 | 日本の学校教育の諸悪の根元 | 懐かしき惠迪寮の壁 |
| 156 | つるのママの死を悼む | 「受験勉強」を断ち切る教育運動 | ゴジラ映画の中の「都ぞ弥生」 |
| 155 | 中村 勝美 昭和二十年入寮 | | |
| 154 | 小沢 久弥 昭和十七年入寮 | | |
| 140 | 高木 任之 昭和二十六年入寮 | | |
| 138 | 横山 清 昭和三十一年入寮 | | |
| 136 | 坂下 五郎 昭和二十八年入寮 | | |
| 134 | 小寺 義彦 昭和二十七年入寮 | | |
| 130 | 神野 善司 昭和二十六年入寮 | | |
| 128 | 佐久間哲郎 昭和二十六年入寮 | | |
| 127 | 小出 精 昭和三十年入寮 | | |
| 126 | 清水 信 昭和二十八年入寮 | | |
| 124 | 鈴木恭一郎 昭和二十八年入寮 | | |
| 122 | 小沢 久弥 昭和十七年入寮 | | |
| 118 | 野原 博 昭和十二年入寮 | | |



世界をめぐる

● 北欧からのご挨拶―北欧の年金制度・大洋低層海流etc―

太田 昌秀(昭和二十八年入寮)

159

● 北斗と南十字

伊藤 雅夫(昭和十一年入寮)

163

● 天津脱出顛末記―天安門事件秘話―

村山 正(昭和二十三年入寮)

166

● 初めて感じた人種的偏見

岡本 勝群(昭和二十六年入寮)

170

● 道をたずねて

福田 新葉(昭和五十四年入寮)

171

● 私の研究留学

阿部 英樹(昭和五十六年入寮)

174

シリーズ四

「日本のスキー史に輝く北大スキー部」

高橋 邦臣(昭和二十八年入寮)

177

恵迪寮同窓会

☆ 関西恵迪会の歴史と現況

辻山 昌佑(昭和二十六年入寮)

188

☆ 恵迪寮同窓会設立の足取り

中瀬 篤信(昭和二十六年入寮)

193

編集後記

(編集委員会)

198

題字 北海道帝国大学初代総長 佐藤昌介

表紙・目次・本文カット

河辺 傑(昭和二十八年入寮)

「素敵な時間」贈ります。



全国デパート共通商品券

ナイスジョブ

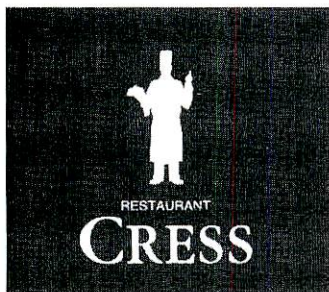


国内・海外約550のデパート・ショッピングセンターで使えます。

●券種は、500円券、1,000円券、5,000円券の3種類がございます。

お求めは旅のJTB各店で

JTB札幌支店 TEL. 011-232-0555 札幌市中央区北3西4
日本生命ビル1階



フランス厨房 クレス

札幌市清田区美しが丘3条1丁目7-3

TEL(011)885-5500

E-mail cbv55430@popo1.odn.ne.jp



リストランテ クレス

夕張郡長沼町東3線北10番

TEL(01238)2-5500

E-mail cress@spa.att.ne.jp



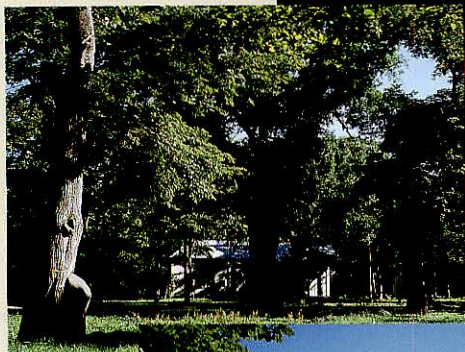
代表取締役社長 干場 一正 (昭和31年入寮)

北海道大学・二〇〇一年夏

モデル・バーン(重要文化財)

農業の成否は、厳しい冬から家畜を保護する広々とした家畜小屋に依存するというクラーク先生の信念により明治十年(一八七七)に建立。一九世紀のアメリカ家畜小屋スタイル。同四十三年(一九一〇)に現在の場所へ動かされ、昭和五十一年(一九七六)に大規模な修復が行われた。

夏のキャンパスに、朝の光が……

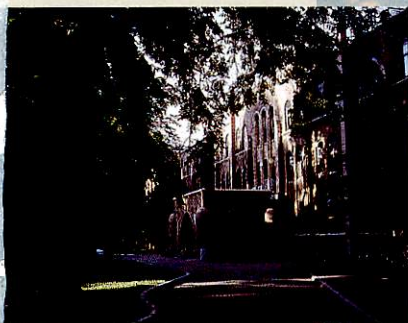


1

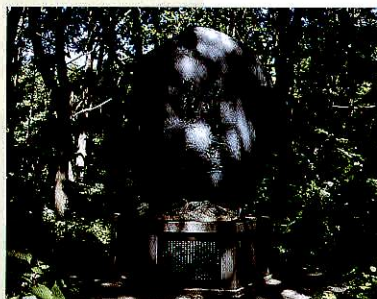
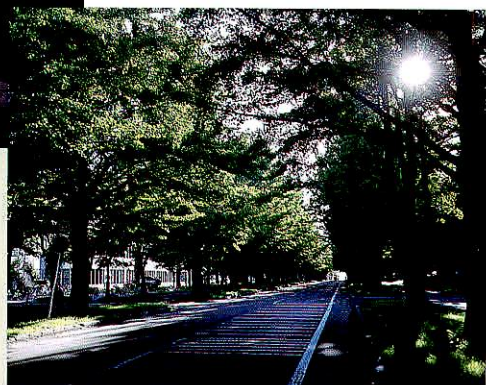
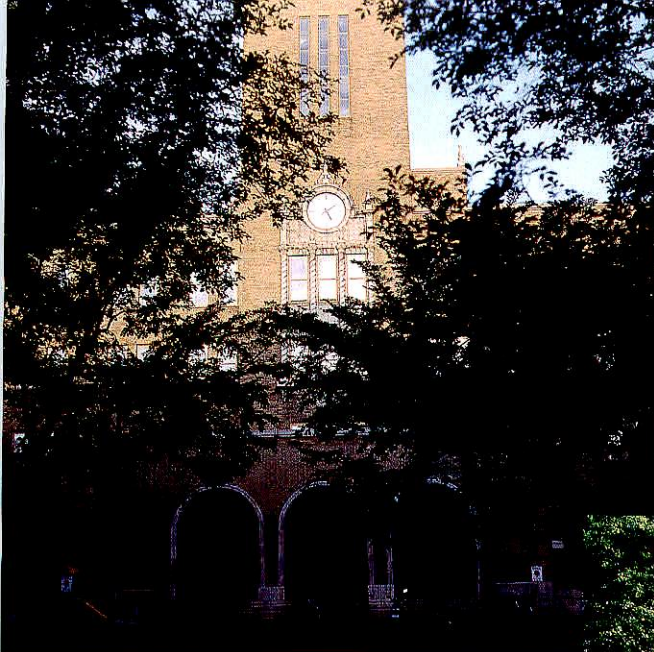


2

3



- 1、明治三十四年建造の旧札幌農学校昆虫学教室
(北大で二番目に古い建造物)
- 2、古河記念講堂(明治四十二年完成、北大における三つの指定歴史建造物の一つ)
- 3、北大総合博物館となった昭和四年建造の理学部旧本館
- 4、北大の顔・農学部本館(昭和十年建設)
銀杏並木として知られる学内北十三条通りの静かな佇まい
- 6、原始林にひっそりと建つ「旧・恵迪寮」記念碑と「都ぞ弥生」記念碑



二十一世紀初頭の今年(二〇〇一)、北海道大学は開学百二十五周年を迎えた。

明治九年(一八七六)八月十四日、北大の前身、札幌農学校は、アメリカからマサチューセッツ農科大学長 W・S・クラーク先生を招請して開校した。爾来百二十五年、その間、明治四十年(一九〇七)に東北帝国大学札幌農科大学に、また大正七年(一九一八)には北海道帝国大学、第二次世界大戦後の昭和二十二年(一九四七)には、学制改革によって北海道大学となった。

現在の北大は、十二学部、十四大学院研究科、一短期大学部などに約一万一千名の学部学生、約五千六百名の大学院学生が学び、二千名を越す教授陣を含む四千名余の職員が働く日本でも最大級の国立の総合大学である。

八月の、とある日曜日、北大を訪ねる

二〇〇一年八月の、とある日曜日、北大キャンパスを訪ねた。夏休みとあって学生の姿は少ないが、北大は、今も昔と変わらず札幌では人気の観光スポット、観光バスや車などは日曜日でも入構禁止だが、多くの人々が散策していた。

人気観光スポットといえば、市の中心部に残る旧札幌農学校演武場の札幌時計台、ここは意外に知られていないが、恵迪寮の前身、札幌農学校寄宿舎（明治九年開舎）の跡地で、内村鑑三や新渡戸稲造（いずれも二期生）らが寄宿舎生活を送った所、その頃は、演武場は北側に隣接して建っていた。

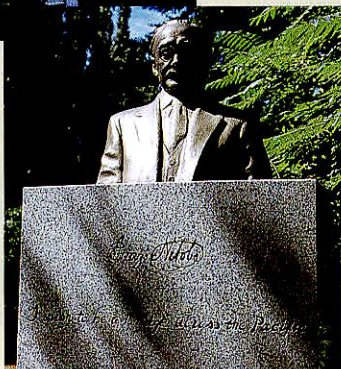
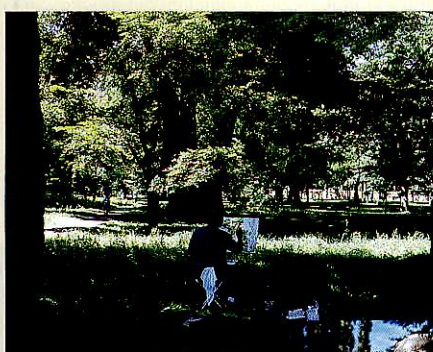


2



3





- 1、藻岩山からみた札幌、左の緑濃い辺りが北大のキャンパス、右が豊平川
- 2、北大正門
- 3、観光客で賑わうクラーク先生の銅像辺り
- 4、伐るか、伐らないかでもめるボブラ並木には注意標識が
- 5、五千円札の新渡戸稲造先生の像
- 6、北大構内は広い。観光客目当ての人カタクシーも出現
- 7、札幌時計台（旧・札幌農学校演武場）は札幌観光のメッカ

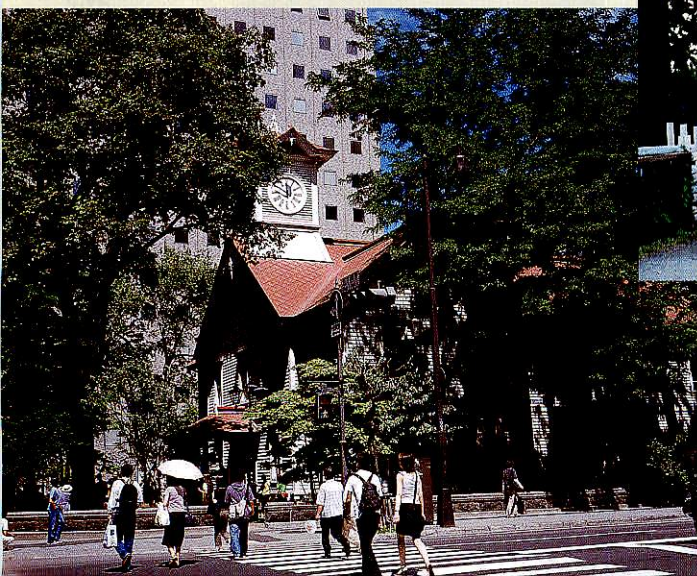
5



4



6



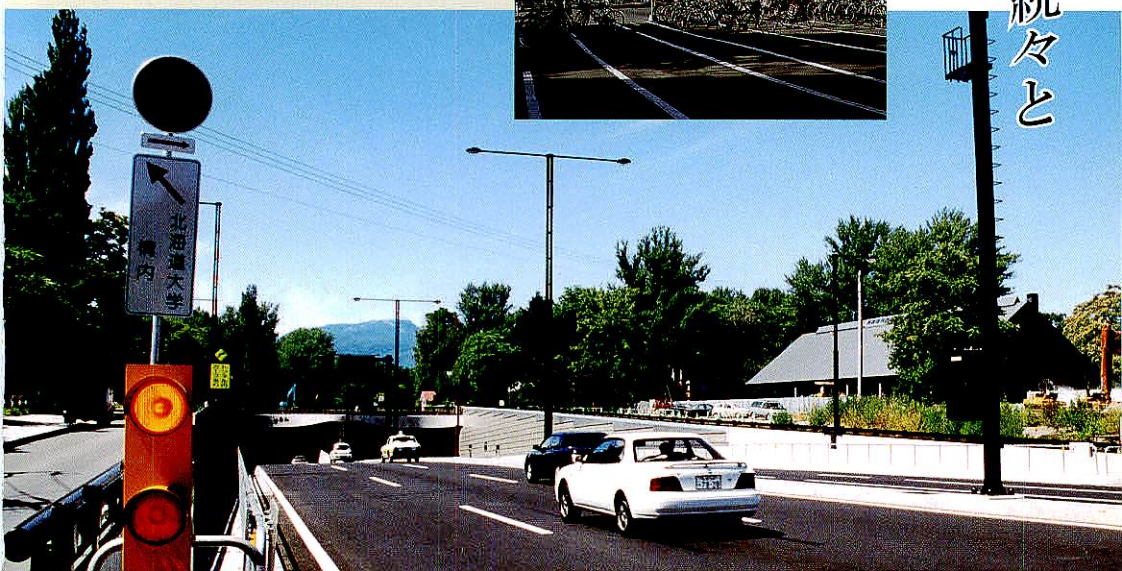
7

変わり行く学内風景、新しい研究棟が続々と



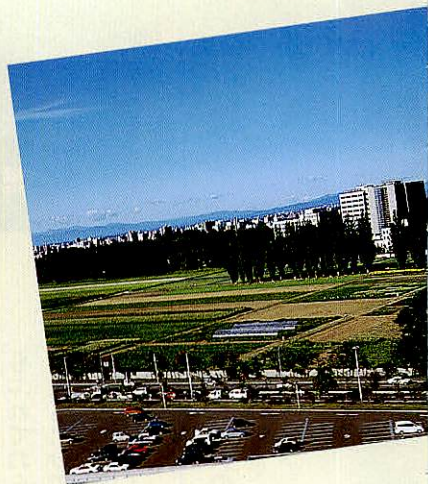
- 1、北大の新しい研究棟。ポプラ並木の向こう左側は大学院工学研究科関連
- 2、その右側は医学部付属病院、並木の右は理学研究科関連棟
- 3、農学研究科本館の向こうに発展著しい札幌駅北側のビル街が迫って見える
- 4、高等教育機能開発総合センター（旧教養部）。左の建物は、情報教育館
- 5、貫通した環状通エルクムトンネル
- 6、建物の増設進む法文系の大学院研究科棟
- 7、六百名を越す留学生の拠点、留学生センター
- 8、現恵迪寮は濃い樹木の中に
- 9、建設進む「遠友学舎」

5



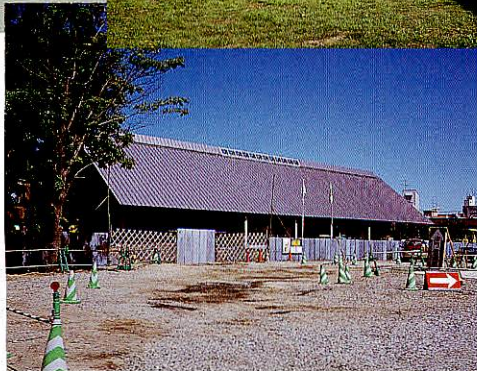


6



7

8



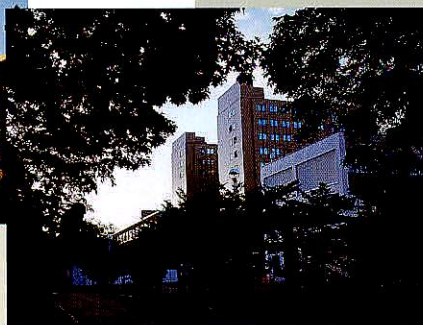
9



学内を歩く。南北を貫くメイン通りの左右に面する各学部（現在は、大学院研究科の名の方が一般的か）の風景も変わりつつある。特に一步奥へ入ると高層の新しい研究棟が並び、目を見張らされる。ところで、この夏、北大の最大の話題は、北十八条を東から西へ抜ける環状通エルムトンネルが貫通したこと、今年中にはトンネルの上も整備され、獣医学部や低温科学研究所なども離れ小島から解放される。また、開学百二十五周年事業として建設中の「遠友学舎」は九月末の開館、学生、先生、卒業生の交流の場として期待されている。

今日も、手稲の山々に夕日が落ちて：：。

—北大の二十一世紀は、もう始まっている—

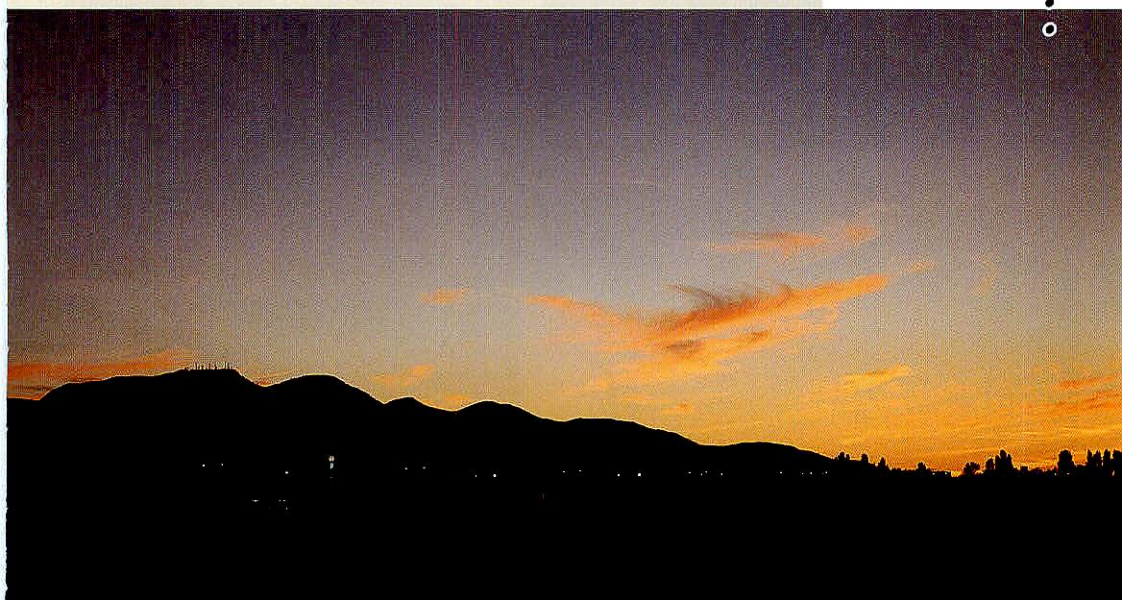


二十一世紀、北海道大学は大きく変わるだろう。既に大学院大学への移行はほぼ目途がつき、目下の大きな話題は大学の独立法人化である。この問題については、本誌のインタビュで中村新総長もふれておられるが、社会的な存在として今後、北大も自分で生きていく算段をより強く求められるようになるだろう。

北海道の、日本の明日に、大学院大学・北海道大学はどのような役割を果たして行くのか、ともあれ、北大の二十一世紀がもう始まっている。



(文責・井口光雄―昭和二十八年入寮―)
(写真撮影・現代ビュロー)



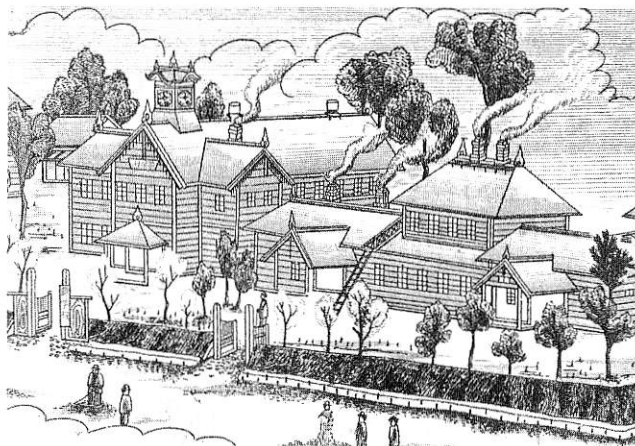
恵迪

KEITEKI

第 4 号

2001・9・15

祝・札幌農学校寄宿舎開舎125周年



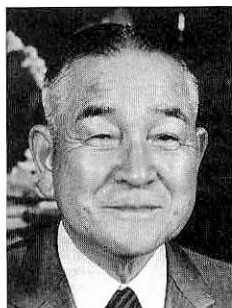
【寄宿舎 一右一と演武場（現・札幌時計台）一左一】

寄宿舎開舎百二十五年を迎えて

恵迪寮同窓会会長

繁 富 一 雄

(昭和六年入寮)



北海道大学は今年八月、創立百二十五年を迎え、大学では今その記念事業の準備が進んでいると聞く。

「明治九年七月三十一日午後三時、学校に入る。札幌農学校に入りたるは、札幌農学校の寄宿舎に入ったこと……」第一期生で後の北海道帝国大学総長佐藤昌介先生は日記にそう記している。その寄宿舎は、現在の札幌時計台の位置にあり、西洋風が加味された白亜の瀟洒な建物であった。こうしてわが恵迪寮の前身、札幌農学校寄宿舎も農学校開校と機を一にして有為の学徒を育む寄宿舎としてスタートした。

かのクラーク先生は、寄宿舎規則（舎則）の制定が話題に上がった際「Be gentleman! これで沢山」と語り、諸先生もこれを受け入れたという。わが恵迪寮の自治の伝統は、クラーク先生が指示した Be gentleman! にそのルーツを有す。寮生たちは、寮生時代も、また社会に巣立ってから後も、Be gentleman! のクラーク精神と自主と自治の精神を誇りとして、一世紀有余の歴史を生きてきたといえよう。

翻って、今日の恵迪寮とわが同窓会について言及したい。聞くところによると、十八年前に新しい寮舎に移って以来、長年続いた大学当局との入寮選考等をめぐる紛争も、寮側が現実的な対応策を受け入れ、ここ数年、寮生は落ち着いた寮生活を送っていると思う。うれしいことである。長い歴史的事実を背景とした、これまでの寮側の主張も十分に理解出来るが、北大だ

けではなく今日、日本の国立大学の寮が置かれている状況を考えれば、ここは寮を所管する大学に一步譲るのもやむをえないのではない。要は、学内で近年薄れがちな学生同士の友情と信頼感を、恵迪寮生が寮生相互間において率先して育み、自主性のある確固たる信念と豊かな感性を互いに切磋琢磨し、それを学内に及ぼし、さらに社会に巣立ってからも強く生きていくる精神力を涵養して欲しい。Be gentlemenの精神は、現代の恵迪寮生に、二十一世紀を担えうる柔軟な思考力と、自主的でたくましい精神力を有する若者に育ってほしいというクラーク先生からのメッセージであると私は考えたい。

わが恵迪寮同窓会も、発足して既に十八年が過ぎた。この間、同窓会は様々な活動を行ない、歴史を将来に伝える多くの貴重な事業を実施した。発足当初の最大の課題「旧恵迪寮舎の保存」は、北海道開拓の村に再現出来、「恵迪寮名と寮歌作成」も立派に継承された。全国的な恵迪寮歌祭の開催、文集「恵迪の青春」の発刊もあり、いずれも同窓会の発足が大きな原動力となった。私のこの十年間の会長時代においても、歴史写真集「青春の北大恵迪寮」の発刊や明治以来の全寮生を網羅した「恵迪寮生名簿」、会誌「恵迪」の継続的発刊によって恵迪寮OBの縦、横の絆が強まり、同窓会の全国的な組織化を一層進展させることが出来た。これらは中瀬、井口両君を始めとする同窓会役員の皆さんの絶大なご協力があってこそと衷心より感謝している次第である。

こうした様々な活動を成功裏に推進してきたわが同窓会も、会員数の伸び悩みなど、現在いくつかの問題を抱えているのも、また事実である。明治九年入舎の第一期生以来、わが寮は今日までに優に一万名を超す寮生を社会に送り出した。しかし、現在ご健在と推定されるOB約六千人のうち、同窓会員登録OBはわずか二千名程度に過ぎない。特に昭和四十年代、五十年代の若い同窓世代にその傾向が顕著である。

私は、来年三月で四期十年間務めた会長職を退く。新しく選ばれる会長、代表幹事には、特にこうした若い世代に積極的にアプローチしていただきたいと心から期待している。大学院大学となり、学生数も一万六千名を越える今日の北海道大学にあつて、恵迪精神は決して単なる歴史の遺産ではない。確かに現在の寮生数は全学生数の三〇％程度に過ぎないが、脈々と受け継がれる自主自立のタフな恵迪精神は、二十一世紀を担う若者の精神的なバックボーンとして、現在の北大生には最も必要なことと私は真剣に思っている。

以上、恵迪第四号の発刊にあたり、OBの皆さんに私の所感の一端をお伝えし、巻頭言としたい。

「二十一世紀を迎えた北海道大学」

北海道大学中村睦男新総長に聞く

井 口 光 雄

(昭和二十八年入寮)



中村新総長のプロフィール 昭和十四年札幌市の生まれ。室蘭栄高校を経て、昭和三十二年北海道大学入学。昭和三十六年同大学法学部卒業、昭和三十八年同大学大学院法学研究科修士課程を修了。北海道大学法学部助手、助教授を経て、昭和四十九年から教授。法学博士。昭和五十九年北海道大学評議員、同六十三年法学部長・評議員、平成九年北海道大学副学長・評議員、同十二年同大学大学院法学研究科教授、同十三年同研究科付属高等教育研究センター教授を経て、同年五月 北海道大学総長に就任。「研究分野」憲法、基本的人権、フランス憲法。「在外研究歴」フランス・ボワチエ大学、パリ大学。「所属学会」日本公法学会、日本教育法学会、全国憲法研究会、日本憲法学会、日本比較法学会。「主な著書」『社会権法理の形成』『社会権の解釈』『論点憲法教室』など。

現代の学生の風潮

井口：先生が北大にお入りになったのは？

中村：昭和三十二年です。

井口：まだ戦後十数年しか経っていないその頃の北大と、今日、大学院大学という形で進んでいる北大との間には大きな違

いつていうものがあると思いますが、先生はどんなふうにお感じになりますか？

中村：三十年の頃ですと、札幌で北大生というところ、やっぱりエリートだったと思うんです。全体の大学進学率はまだ一〇％以下の時代で、大学へ行くっていうこと自体が、普通の家庭ではなかなか難しかった時代だったと思うのです。それに対して、今はとにかく五〇％近くが大学に進学していて、大学に行くのが普通になった。北大の場合でも我々の頃ですと、人数は一学年で八百人位だったでしょうか。それが現在では二、五〇〇人近くです。そんな意味では大学が大衆化したっていうことが大きな流れとしてあるんじゃないかと思つてはいます。

井口：そういうところに、北大が現在、大学院化していくという背景があるんでしょうね。

中村：そう思います。ですから、昔の大学の学部が、今の大学院修士（マスター・コース）、そういう形になつてるんじゃないかなと思うんです。そういう意味では、昔は学部学生でもけっこう本を読むというようなことで、学部でかなり専門教育もできた。けれども現在ですと、専門教育自体も、マスターに行つて完成するっていう形で、これは学問が、全体が細分化して発展してきたっていうこともありますけれども。

今と昔の違いつていうのは政治的にも顕著に見られます。私の時は、四年生の時にいわゆる六〇年安保。その前

の時代ですと、イールズ事件とかがあつて、やっぱり政治的に非常に関心を持っていた。学生自身はある種社会のエリートで、だから、政治を動かさなきゃいけないという意識が、多かれ少なかれ昔の場合はあつたんじゃないかと思うんです。

その点現在は、政治的には学生の特色は全くなくなつちやつて、街の人と同じように学生も考えている。だから、一般社会の政治に対する関心、たとえば小泉さんが現在人気があるつていえば、おそらく学生の中でも人気があるつていう、そういう点では一般社会の政治的動向と学生の政治的動向がたいして変わらないんじゃないかという印象は受けますね。

井口：なるほどね。

中村：昔は、一般社会は保守でも、学生は革新じゃなきゃいけないつていうような（笑）、そういう意識つていうのが多かれ少なかれ、学生にあつた。で、我々の時代は、社会主義つていうことが一つのシンボルのようなところがあつたんですが、その社会主義に対する幻想が崩れちゃつた。おそらく今の学生はマルクスの本も読んでいないんじゃないか。昔のように「マルクス・エンゲルス全集」が本屋に並んで、学生はそれを買ふとか、「資本論」を読むなんてことは今の学生にはないんでしょうね。

井口：私も教養部時代「原書で資本論を読む会」にしゃにむに入られて、ものすごく高い本を買わされたけど、ものの

一ヶ月もしないうちに「南陽堂（注・古書店）」に持ち込んでしまった（笑）。

今日、北大が直面する課題

井口：ところで、北大は今年、建学百二十五周年を迎え、その百二十五年目に中村先生が総長になられたわけですが、今後の北大についていろいろお考えと思うんですが。

中村：今の一番の問題は、国立大学の設置形態そのものが変わろうとしていることです。それはおそらく大学のありようについて、戦後の学制改革、新制大学の設置と同じような大きな変革期におかれているのではないかと、実感としてあります。社会からの大学への期待というんですか、それが変わってきたということでしょう。

今までは、大学は大学の先生方の好きなようにまかしかけていたのがあって、高等教育にそれなりにお国はお金を出した、ある種鷹揚に出してくれていた。それが、これからそうは行かなくなってきたということです。

これは、我々が研究をする場合でも、そのことがどういう意味があるのかということを、たえず社会に説明していかなくやらない。まあ、これは我々も、国民の税金を使っているんですから、その説明をしていくっていう必要性はあるんだとは思っていますが。その意味では、大学も市場原理の中におかれちゃう。

そうすると、本当の学問というのがそこで成り立つのかという、その危機感というのが、一方では大学人の中には非常に強いと思っています。他面ではやはり、社会に対する期待には応えなければならない、これからはそういう二面性を持つてなきゃいけない。

私どもの学生時代は、圧倒的に国立大学優位でしたから、黙っていても国立大学には優秀な学生が集まってきた、事実、授業料も私立大学に比べると国立は非常に安かった。現在では、たとえば文系なんかは、国立大学と私立大学の授業料もそんなに違わなくなった。それから全体の大きな流れとして、私立大学、特に首都圏の私立の有力大学なんかが人気が出ている。

すると、北海道大学もよほどきちんと教育をしないと優秀な人材が集まってこないんじゃないか、あるいは、優秀な人材をきちんと養成しないと新しい人材も集まってこないんじゃないかということで、やはり大きな課題の一つは、北大も教育に本腰を入れてやらなきゃいけないということです、そこがもっとも大事な点だという。

これは、研究はもちろん大事で、国際的な水準の達する研究をどんどんしなきゃならないというのは、これは当然のことですけれども、この教育と研究の二本柱をもう一歩前に進めないとすね、北大は過去の遺産で食っているようなことになりかねないのです。

これからは特に独立行政法人化が問題になっておりま

す。それが実施された場合には、五年ごとに我々は評価を受けるようになるのですね。まあこの評価システムが非常に大事なことで、単なる経済的効率性で評価されちゃうと、結局経済的に役立つ研究しか行われないうことにヘタするとなりかねないのですね、そういう危機感があるということですよ。

井口：私が長年付き合っている北欧のフィンランドには、大学は国立しかありません。人口わずか五百万人と、北海道より少ないこの国が、いま世界のIT大国として大きく発展している背景には教育がしっかりしているからと、歴代のフィンランド大使が必ず強調します。小学校から中学、高校での教育もそうですが、特に、大学の教育がしっかりと確立しているということだと思えます。こういう時代ですから独立法人という考えもわからないわけではないのですが、二十一世紀における日本の人材育成のためにも、私は大学は国立でしっかりと教育を進めてもらいたいと思っています。

中村：ヨーロッパですと、基本的にはどこの国も国立中心ですよ。イギリスはオックスフォード、ケンブリッジにしても、準国立、実際は国の助成、補助によって成り立っています。

アメリカが私立型っていったところで、日本という国立にあたる州立大学があり、学生数から言えば、州立の方が多いというわけで、高等教育を市場原理にゆだねている

国っていうのが世界にないにも関わらず、日本ではあたかもそれがよいかのような議論が中央政府なり、財界の中にはあるんですね。

学術研究や教育の公共性ですが、今、公共性っていうことを言うとなんか悪いことだっていうふうな、民がよくて、公が悪いというふうな、なんかそういう雰囲気があるのが私には非常に残念に思われるんです。

開かれた大学への努力

井口：さて、北大も今日、様々な形で、地域に開かれた大学になりつつあるというふうには、新聞等の報道で承知しておりますが、いかがでしょうか。

中村：数年前から、北大でもそういう方針で先端技術共同開発研究センターや、PLO、つまり技術移転。特許なんかを民間に移転する会社を北大構内に作ってるんです。

それから私どもは、教官がどういう研究をしているかを、北大のホームページの中でも全部じゃないが公開して、我々の研究情報をなるべく民間に門戸を開くようにしています。先生方も積極的に協力する姿勢を持っておりますし、地域との連携というのは大事な問題の一つであり、共通の認識にもなっていると思うんです。

まあ、昔は産学協同っていえば反対っていう空気が非常に強かったと思うんですけども、今日ではやはり、社会

的サービスが必要だということでしょう。

井口：まあ、そうなりつつあるんでしょうが、率直に言って北大というところは、市民にしろ、一般の人には、やはり入りづらいところだという感じはありますね。

中村：そうでしょうね、まわりからそういう風に見られても。これがやはり、国立大学の行政法人化という問題が起ころとも、大学人は非常に危機感を持っています。一般社会の人はそんなに関心がないっていうか、ある種、冷たく見てるっていうのは、やはり我々大学の方の姿勢にも問題があったということでしょう。

ただ、だいぶ前から公開講座なんかも積極的に開いており、どういうことを大学でやっているかということを広く知らせようになってきました。広報活動は、まだ十分だとは思いますが。

井口：前総長の丹保先生が一度行かれましたが、フィンランドの北極圏の近くにオウル大学のあるオウル市がございます。人口十三万人位ですが、「オウルの成功」ということで、世界的に高い評価を受けた街なんです。

この特色は、昔風にいえば、産学協同なんでしょうけれど、それには行政ですね。市と研究機関の大学と、それから地域のいろんな企業、その代表が世界的に有名なノキア社ですが、地域の三つの機関が非常によく機能しているんですね。私も、知りあいの先生がいるので行ってみたんですが、本当に大学がオープンで、市民や企業関係の人々が

気軽に訪れている。札幌でも、ああいう風に地域との間で非常に良いコミュニケーションができると、北大も札幌市民にもっともっと身近な存在になると思うんですが。

中村：そういうことは確かに大事ですね。民間の研究要請を受け入れることも、いろんな意味で最近かなり自由になってきて、規制も緩和されてきていますので。

井口：二年前にラップランド大学の学位授与式に招待されたんです。五年に一度この学位授与式があるんですが。そこで非常に感心したのは、五十代、六十代なんていう年代の方がザラにいるんですね。リルハンメル冬季オリンピックの開会式で、北欧先住民族の伝承歌を歌ったニルス・アスラクバルケアパーという有名なサーメ人がいるんですけど、この方もドクターの学位を受けておりました。大学卒業後、一度社会に出て様々な仕事や活動をしてから、再び大学で勉強する、あるいは社会での研究成果が認められたとか、いろいろなケースがあるんじゃないでしょうか。

中村：文系ですと、そういう例はけっこう出ています。社会人の場合には特別選考っていう、社会での職業上で研究したことを評価して、通常の試験じゃなくて、社会人選考の枠で受験して大学に入学できます。私のいた法学部でも二三年前になりました。私定年になってから、大学院に入って研究して、ドクターをとったという方がおりましたし、現在でも、社会人でドクターコースに在学している人も何人かいますので、だんだんそれは増えてくるというよ

うに思います。

その意味では生涯教育っていうような、そういう方向に向かつて、大学自体の生き残り戦術にもなっていると思うんです。つまり、少子化で新入生が減ってくるとなると、そういう社会人教育っていうのを重要視するのが大学の戦略上の問題でもありますし、また社会の中での需要が出てきていることでもあるのです。

実際に学問自体も社会科学なんかは特に、過去ではわりと理論研究って言うんですか、そうしたことが優位にたっていたということがあって、基本的にいえば、外国のことをきちんと調べて、あるいは外国の文献を引用しないと、ドクター論文にはならなかったというような傾向があったかと思うんです。

けれども最近は、たとえば、実践的な研究でも充分なレベルがあれば博士に値するというふうになって、学問と実務との境目がだんだん流動化してきております。法学部では、社会人教授っていう形で、実務経験の豊富な方々がいれば、二年なり三年間の任期で教授にきている。他学部でも社会経験のある人が教授になっている例がだんだんだん増えております。

これは全国的な傾向ですから、その意味では実務と研究、あるいは社会と大学との境目っていうのが流動化してきている。それはけっこうな事だと思っています。

大学の国際化について

井口：北大では外国人の先生は増えているんですか？

中村：ええ、外国人の先生も増えてきております。教育学部では、台湾の方が教授をされていますね。確かに、まだ教授となるとそんなに多くはないかもしれませんが、助教授や助手はかなり出ています。

井口：今、留学生はどのくらいおりますか。

中村：六百八十名程度です。年々、五十名くらいずつ増えておりますが、ただ、いわゆる旧七帝大の中では一番少ないんですね。本来、留学生をたくさん迎えるっていうのは日本の学生にとってもプラスになるはずなんです。いろんな異文化経験ができるもんですから。ただ、どうも最近の日本の学生は、あんまり積極的に留学生と付き合わない。校内に留学生がいても積極的に友達になつて交流するって雰囲気は欠けていることは事実なんです。

井口：ヨーロッパからの留学生が少ないようですね。

中村：そうかもしれませんね。北大の知名度が低いのでしょうか。やっぱり一つは、日本がアメリカの方に向いているっていうのがあったかもしれませんね。ヨーロッパよりは、それから三分の一くらいが中国。ヨーロッパとの交流は、本当はもつともつとやらなければいけないですね。フランスの大学とも去年、協定結んだりしてきてはいるんですけども、まだ少ないと思いますね。

井口：ヨーロッパの、特にユーロ圏の大学間には非常に風通しのいい環境が整っておるようですよ。

中村：ヨーロッパの大学と北大が交流を深めていくことは本当は必要でしょうが、結局は、日本人の語学能力の問題があると思います。やはり最低限、講義についていくだけの英語力をつけていかなければならない。せっかく、協定を結んで留学生が送れることになっても、適格者がいないんじゃないということにもなりかねないですから。

井口：北方圏にある大学相互の学術交流が五、六年前から進んでおりましてね。北海道にも北欧からいくつかプロボーズがありました。結局実ったのは、私の知っている限りではラップランド大学と北海道東海大学と道都大学の二つの私学でした。向こうはやはり、北海道を代表する国立の北大を期待し、何回か北大にアプローチしたんですが、なかなか北大は動かない。

中村：北大が動かないというよりは、だれかが引き受けるっていったいいんです。中の人。その人がいないとなかなか動かないということです。別に組織としてそういうことをしなきゃいけないとかということではないんです。

井口：北大があまり大きすぎるというのもありませんね。道内にある私大はそんなに大きくないから、学長さんとか、あるいは国際交流担当の教授に話せば比較的スムーズに話が進んで、協定が結ばれ、学生の交換がスタートしていくんです。北大でも機能的にというか、あるいは学部の独

立性でそういうことができるかと。

中村：それはできます。学部間協定が出来ますし、ひとつの学部が非常に熱心に推進すれば、それを全学大学協定に進んでいくことが出来る。だからやり方としては、やっぱり下からの積み上げ方式にしているんです。

ですから、ある学部にも熱心な先生がいて、自分がやるって、そういう風に言って、これからの交流計画を立てることを、むしろ奨励しているんです。また、風通しが悪いというのは、どこにアプローチしたいのかが分からないということもありますが、それと、やはりそういう熱心な教授がどれくらいいるかということにもあります。まあ、自分の研究の方が忙しくて、そんなことは構ってられないということもあるんじゃないでしょうか。

現代の北大生たちへ

井口：ここで話題を変えます。北大の学生たちは大学の四年間、現在ではマスターも対象にすると大体六年間というのが学生生活の基本になってきてるんじゃないけど、つまり十八才位から二十代の中ごろまでを、学生たちは大学キャンパスで過ごすんですね。人生の中で一番大事な時期をおくる学生たちに、この時代をどのように生くべきか、先生のお考えをお聞きたいと思います。

中村：これからは、人間として、総合的に教育するっていうこ

とがますます求められてきているんです。北大では従来、教養部っていうのがあって、そこで専門の違う者を一緒に教育してたっていうことは非常にメリットがあったと思うんですね。それが、教養部を廃止して、現在のような学部一貫教育という形となっても、北大では全人教育ということをもットーにして取り組んでおり、これはもともと強化しなきゃいけないと思っております。

一つは教養教育の中で、すべての学生たちは、その専門に関わらず、歴史なり人間なり環境なりの大事なことを学ぶということが必要です。同時に、これは（恵迪）寮も含めてのことですけれども、やはりサークル活動、ボランティア活動っていうようなことを通して、専門の違う人間と一緒に協力してやっていくっていうのが、若い時代には不可欠だっていうふうに考えています。

かつては、黙っていても学生が仲間たちといろいろ活動していたのが、最近では、コンパでも先生がやるうって言っても、幹事を引き受ける学生がいなくなっているんですね。そういう時代になってくるとなおさら、学生の自主的な活動が大切になります。スポーツでも芸術でもボランティアでもいいんです。この場合、ある程度は大学としても仕組みを考えて、学生に対して仕向けていくことが必要になってきていると思います。

井口：そういう意味では、恵迪寮の寮生は、少なくとも仲間に関しては問題ないんじゃないですか。

中村：ただ、寮生と外の一般学生との格差というのがあるんじゃないでしょうか。自分達の中だけで仲間になっているっていうふうに見えますね。ですから、一般学生なり、外国人留学生を積極的に受け入れるようにやっているかというのを傾けます。恵迪寮の中に留学生の棟もあるんですが、留学生の棟の外国人学生とこっちにいる日本人の恵迪寮生たちが、積極的に交わっているかというと、どうもそうでない、というふうに聞いているんです。だから、まずそこからやってほしいと思うんですね。

寮が本当に大事だっていうんなら、その寮の中で、留学生ともこれだけ、きちんと異文化交流してると、それをぜひ、やってほしいと思ってるんです。

恵迪寮の変遷と現状について

井口：それは同感ですね。寮生が出てきたこのあたりで、恵迪寮のこともっとお聞きしたいと思います。我々の頃の、戦後まもなくの時代ばかりでなく、それ以前の旧制時代の恵迪寮も含めての比較ですが、大学との関係で恵迪寮の存在が、今日ではかなり変ってきていると認識した上での質問ですが、まず、現在の寮や寮生について、総長はどんな風に感じていらっしゃるかを伺いしたいと思います。

中村：確かに恵迪寮の機能がずいぶん前とは変ったんじゃないか。前はまさに自治っていう形で、寮の全体の運営自体も

寮生が行っていて、それで寮が機能していたが、ある時期からそうはいかなくなつたつていうふうに理解しております。それは大学の方とのコンフリクト（紛争）が、いくつかの時代にあつてですね、それほど詳しく内情は知りませんが、現在ではどうも入寮希望者がそんなに多くない。

選考は経済基準でやっていますが、定員が満たされない、満たしても途中で出ていく人が、毎年かなりいて、実際は定員数を埋められない。他方、北大では女子学生の寮が少ない。それから外国人留学生のための寮となるともっと少ない。このため留学生は一年しか寮にいられない、一年たつとあとは民間に行かなければいけないというのが現状です。

私なんかは、理想としては、外国人も一緒に寮に入れるようにしなきゃいけないっていうふうに考えているんですけど、ただ、問題は今の一般寮生が住んでいる寮棟は汚くて、外国人はどうも入れないという。

井口：今のお話の中で、ある時期から自治というものがいなくなつたとおっしゃっておられました。これにはいろんなことがあつたとは思いますが、私の知っている限りでは、寮生側というよりも、国の、あるいは大学の方針の中で変つていかざるを得なかつた、というふうに受け止めているんです。

中村：それはそうじゃないですか。昔は、国としても非常に安い寮費で賄える寮を作つて、寮生主体で運営するという方

式が続いていた。

おそろくその後のトラブルの最初は、学生にも負担区分を求めるといふ、つまり光熱水道費など自分で使つたものは自分で払えという問題から起きてきた。それがかなり長いあいだもめて、今度は、負担区分を払ってもらつと同時に、やっぱり管理についても、国や大学としても責任を負えるようにしようということになり、そこで寮生と大学が衝突している。

つまり国として寮に金をどんどん投資して、寮を安い寮費で、ある種の教育の場でもあるというふうに位置づけをしていたのを、ある時期から国は、寮を厚生施設というふうに位置づけしちゃつたんですね。

経済的余裕のない人をいれるためのものが寮で、したがつて、そういう経済基準で選ぶのなら、寮生が選考や運営をするんじゃないくて、大学が選ぶんだ、経済基準で選考するんだというふうだね。そして管理権の問題が対立の争点になつていったわけです。寮では自主入選をやるっていうようなことがあつて、一時期には、一年間だつたでしょうかと、恵迪寮の入寮停止っていうようなこともあつた。そのあと、ある種の了解のもとで、現在のような方式につながっていると思うんですけど。

井口：しかし、僕は基本的には寮っていうのは、教育の一環だと今でも強く思つております。

寮は教育の一環とは思うものの

中村：でなけりや、うまくいかないと思いますね。寮を大学の中に置く意味がないんですね。ヨーロッパなりアメリカでは、大学において寮って言うのがかなり重視されていますよ。教育の一環として。そこには専任のプロフェッサーも、フランスなんかですと館長になってですね、たとえばパリ大にある日本館なんかですと、歴代、日本の有力な教授が館長になって、それから専任のスタッフも寮で一緒に住んでいるっていう形です。またイギリスの寮っていうのはもっとシステムテックだと思うんです。

それで、日本で本当にきちんとした寮を作るとなると、国は相当お金をかけてやらなきゃいけないでしょう。今、日本の大学の現状からいくと、たとえば国立大学の寮を国立大学の教育の一貫として位置づけるということは全く不可能っていうか、おそらく日本人からもこうした声は出てこないでしょうし、それもうまくいかないということ、なんか寮の機能がすっかり変ってしまいました。

じゃあ、どうしたらいいのかっていうと、現状でいくより今のところは仕方ない、つまり現状の中でできるだけよくやってもらいたいっていうのが、私の正直な気持ちです。

井口：たしかに、かつての自治寮をおかしたの、ある面では負担区分を拒否しつづけた寮生のエゴでもあったかもしれない、というような気は私もあります。

先生がいまおっしゃったように、ヨーロッパにしろ、どこの国にしろ、今でも多くの寮が教育の一環のなかで存在し、健全なものとして継続されている。今となると、日本ではむずかしいかもしれないけど、長い人生教育の場として、青春期の貴重な時代をおくる寮っていうものをもう一回考えていく必要があるんじゃないかという気がやはりするんですが。

中村：これは、現在の日本の高等教育政策だと思うんですね。かつては、国立大学は授業料が非常に安かったですね。で、今でもヨーロッパがそうですね。基本的に授業料がなかったりして、実際ヨーロッパの大学は安いです。しかし、日本はある時期から国立大学もかなり高い授業料をとるようになりました。で、今日ではさらに、独立行政法人化の問題も出て、もっと効率性を求められているときに、国に寮を教育施設として作つてと、ま、我々がそういう主張をしても、到底受け入れられないという状況にあります。

それで、教育の一環としての寮をやるとするならば、まさに民営化でやらなくてはならない。寮を民営化しちゃう。しかし、そうすると寮費は非常に高くなっちゃいますよね。でも高くても教育の場としてやるのかっていうと、それもむずかしいんじゃないかと思われます。これは、日本ではこれまで私立大学だって寮を成功させてる例っていうのはほとんどないんじゃないか。大きな私立大学では本当はできるはずですね、やろうと思えば。だけれど、できてない

っていうのは、どうも、日本では寮を大学の教育の一貫として位置づけるっていうのは、むずかしいかなという気がするんです。

井口：総長には、そういう考えには至れないと、

中村：至れないということですね。そうしたらいいんじゃないかと考えても、現実的には無理だという考えが先に立つちやうんです。ただ、特に留学生なんかのことを考えれば、本来は寮で留学生も教育し、日本の生活に慣れていくっていうのが本当は必要だと、私は思っているんですけれど。

現実には、留学生は民間では差別されるっていうことがあります、部屋を借りるときにですね、「外国人おことわり」っていうのがけっこうあるんですね。札幌ではそれほどないとしても、首都圏なんかひどいようです。教育っていうことを考えれば、留学生なんかには寮というものは非常に大事だというふうに思うんです。やっぱり外国における寮の観念と、日本の寮の観念、今の寮の観念があまりにもかけはなれちゃっていて、どうもあんまりうまく機能してないんじゃないかっていうような印象は受けていますね。

でも、それではどうやっていいのかっていうのは非常に難しくて。

現在の寮における自治権

井口：話はもとに戻るようですが、いわゆる寮の自治、特に現

在の寮における寮自治について、先生はどのようにお考えですか。

中村：現在の恵迪寮は寮生の自治活動によって運営されています。ただ、それ以上の管理権なんかのことにすると、大学と寮とがぶつかる面というのが出てくるんですけれど。

井口：つまり、入寮に関しては、大学が決定する。

中村：今のところは、相互了解で経済基準でやるということになっている。そして、経済基準によって入寮を決めるということとは、やっぱり（寮が）厚生施設だということですよ。つまり、教育施設という考えじゃないということだとは思っています。

井口：なるほど。だけど寮の自主的な運営については、そこにお互いの知恵の出し方…。

中村：知恵の出し方があると思いますね。それに、これまで寮で火事が起こったとか、不幸にも飲酒による死亡事件があったりしたもんですから、寮生の自覚という意味でも自主性が大切で…。

井口：そうですね。その辺は寮生もしっかりしてもらわなくちゃならないですね。先日、寮に行って数人の寮生と立ち話したんですが、今のところ、現状では了解しているようですね。でも、それでも口の端々に、やっぱり自分たちの（自治の）範囲をもっと広げたい、特に入寮の決定権については、というふうに言っていました。ただ、全体としては、現状の中で自分達のことをまずしっかりやろう、とい

う気持ちがあるみたいですね。

中村：それは我々としては大変ありがたいですね。

井口：現在、女子寮生も、五十人くらいいるんですね（女子寮生の定員は六十名とか）。しかし、やはり今年入った新入寮生は十人くらいは出て行ってしまったらしい。

中村：やっぱり今年もそうですか。

井口：私はやはり一因は、経済という基準のみで寮に入つてくるといふ現在の入寮方法にもあるという気がしますね。昔みたいに寮に入りたくて入りたくてという時代には、簡単に寮から出て行く気など起きなかったですよ。まあ、現状ではある程度はしやうがないとは思ふんですけど……。

中村：ただ、今状況の中でも、さつき井口さんもおっしゃったような形で、お互いに知恵を出し合つて、最大限、自治的に活動するってことは可能だと思ふんですね。生活のことまで大学が干渉する気はないですから。

ほしい教師と寮生の心のつながり

井口：前回の「恵迪第三号」で私、有島武郎を改めて調べてみました。二十年ほど前、ニセコにある有島記念館の設立に関わったこともあつて、それらを思い出しながら、有島武郎が寄宿舎係りとして恵迪寮に泊まりこんでいた明治四十四年早春からの約六ヵ月間を中心にあらためて調べ、まとめてみたんです。私が深く感動したのは、当時、有島さん

のような先生が、寮の担当として寮に泊り込んでいた。そして寮生のいろんな悩み事を聞いてあげたり、（生活に）困っている寮生にはお金をあげて、励ましてあげておられた。ああいう先生と寮生との心触れ合う関係をみると本当にうらやましいし、今のこういう時代だからこそ、そういうふれあいがあったらいいなあと心から思いました。

中村：それはその通りだと思います。やつぱり大学で寮を残すんなら、教育的意味を付与しなきゃ意味がないと思うんですけどね。ですから確かに、ボランティアでもいいですから、教官がしょっちゅう、寮に行つてですね、寮生と積極的に接触するというのが必要ですね。

井口：そういう先生も、つい最近まで何人かいらつしやいましたけれども、だんだんいなくなってきました。我々寮のOBも、たまには行くべきと思つています。また、うちの恵迪寮同窓会の中に寮生との交流を図る委員会をおき、現寮生と出来るだけ接触を図る場をもうけており、また寮歌祭などのOBの集まりには出来るだけ呼んでいるんですけどね。

中村：それは、ぜひ進めて下さい。先輩というのは大変大事だと思ひますのですね。

井口：そうですね。いろいろお話有り難うございました。

主張

恵迪寮同窓会新役員の選出と

恵迪精神復興ルネッサンス運動を！

辻 山 昌 佑

(昭和二十六年入寮)

平成十三年五月六日、懐かしの札幌で恵迪寮同窓会理事・幹事合同会議が開催され、関西から西日本を代表して参加しました。大通りのライラックは未だ早かったが、桜の季節、往時の円山・寮生花見を想い出しました。

さて、会議の冒頭挨拶で繁富会長（昭和六年入寮）が引退声明をされました。第三代会長として母校との交流・総会・開識社、雑誌恵迪の発刊その他多くの事業の運営、さらに遠く西日本大会、東日本大会へご夫人ともども出席されるなど、会の発展に尽力され、厚くお礼申し上げます。想えば、この会が発足して幾年たったのか、出席者の顔や頭を眺めました。

へなつかしき恵迪寮舎に別れを告げる

恵迪寮が取り壊される、「へなつかしき恵迪寮舎に別れを告げる会」を開くから集まると、招集がかかったのは昭和五十七年の八月十四日、一九八二年ですから、ざっと二十年になります。

この八月十四日は明治九年に札幌農学校の開校式が十時に挙行され、クラーク先生が崇高なる大志 (Lofty Ambition) と演説された意義のある日です。

卒業してから寮友と会するのは初めて、これで寮舎ともお別れかと思うと万感胸に迫り、大食堂で、涙して大声で寮歌を歌

いかつての自分の部屋を見て廻りました。

あの夏には、私たちの昭和二十五年から二十八年入寮組（一九五〇～五三年）百六十名の他に、昭和二十九年から三十二年入寮組（一九五四～五七年）に一部昭和三十三年・三十四年入寮の有志も加わった百六十名がやはりお別れの会をやっています。

この二十九年から三十二年組は、あの年の十二月に閉寮記念文集「恵迪寮よ永遠に」という鎮魂の文集を発刊しています。

〈恵迪寮同窓会の発足〉

そうして遂に昭和五十八年四月に寮舎は取り壊され、これを契機として、その年の三月に恵迪寮同窓会が設立されました。初代の役員には会長 星光一（昭二）、代表幹事 佐山峻（昭二五）、副代表幹事 中瀬篤信（昭二六）、以下今日も会の屋台骨を支えている幹事として、河原克美（昭二六）、辻井泰輔（昭二七）、井口光雄（昭二八）、佐々木勝敏（昭二八）、岡部賢二（昭二九）、幸健一郎（昭三〇）、横山清（昭三一）、高井宗宏（昭三一）、等の名前が見えます。

勿論これ以前にも、昭和三十六年に関西恵迪会、昭和五十五年に関東恵迪会が設立されているなど、各地域や入寮年次で同窓会はありましたが、全国、全寮生での同窓会はこの時が始まります。

〈今まで会を支えてきた者たちは年老いた〉

そして、ここが言いたい所ですが、この日、五月六日の役員会出席二十八名中、昭和二十五年から三十二年入寮組は二十名を数えます。年齢は約六十九歳から六十二歳になります。昭和三十三年以降の入寮は四名のみです。あと五年もしたら「なつかしき恵迪寮舎に別れを告げる会」「恵迪寮よ永遠に」の感激メンバーは七十四歳から六十七歳になり、大きな問題になると痛切に思います。

小生、現在北大関西同窓会の幹事長をしていますが、ここ十年程見ていると、同窓の方々は大体七十歳を越して参りますと急激に会の催し事に参加される人が減って参ります。繁富会長の引退声明をきいて、幹事についても昭和四十年台の入寮組に引き継いでいかなければ「恵迪寮よ永遠に」とは参りません。

〈後継者〉

この役員会のあと札幌駅近くの三十三間堂という居酒屋へ、雨の中、横山、高井、湯浅（昭三三）の面々に連れられて参りました。

いつもは皆様ご存知の寮生時代によく行った千歳鶴へ行つて、二次会の論議をしますが、この日は三十三間堂です。（一寸話が外れますが、あの千歳鶴の君代ママがこの三月に亡くな

られたそうです)。三十三間堂では世相や会の話や談論風発、楽しい刻が流れていましたが、「ところで繁富会長のあとどうするのか、又現在の執行部はどうするのか」と尋ねてみました。今ひとつの質問は東日本です。同窓生の大半を占めており今後も益々ウエイトは高くなるでしょう。心の故郷である母校と現恵迪寮のある札幌は本部として当然だが、東日本本部と二本部制もあってよいと小生は考えています。

〈恵迪はすばらしい〉

旧制高校の全国寮歌祭では、他学校から「北大はよいなあ」と、とてもとても羨ましがられています。唯一今でも寮が現存し、しかも、今でも毎年寮歌を作っているところは他にはありません。他の旧制高校生は年老いて静かに消えてゆくのみです。昭和三十年代入寮の三氏に、それだからこそ北大は恵迪精神の発揚を計り、天下に知らせ広めねばならぬとハッパをかけましたる所、異口同音に「恵迪はよいなあ」と賛同し、意気大いに上がりました。

昭和五十八年の閉寮記念ビデオというのがあります。当時外部の人間を入れなかった寮生でしたが、寮歌振興会が閉寮を惜しんで取材を申し入れ、プロのアートボーンが撮影したビデオ、大形のリールが二十本もありましたか、それを濃縮して二十分ものに西日本恵迪会が編集した、今では唯一の閉寮記念ビデオと思われませんが、その中で当時の寮生が閉寮を惜しんで「恵迪

はイイッスヨ」と語っています。古いOBも心は一つ。又、寮歌は年寄と若い人達をつなぐ共通の言語であります。

〈都ぞ弥生は北大の寮歌ではない〉

しかし乍ら、気になることもあります。寮歌祭で「都ぞ弥生」を歌う時に「北海道帝国大学予科恵迪寮、明治四十五年寮歌、都ぞ弥生、一番二番アインス・ツバイ・ドライ」と歌っていくのですが、北大の歴史に詳しい方は、明治四十五年は北大は東北帝国大学農科大学であると申されます。他校の方々の中には、心の内で、北大はこの時東北大学の分校であると思っておられる人もいます。

たしかに北大は古い、札幌農学校からだから、しかし札幌農学校は専門学校だからなと思っておられます。正しくは明治九年日本で初めて予修科をもつ四年生の学士号を与える農科大学として設立されたのが札幌農学校です。大学という言葉を使い始めたのは翌明治十年、東京開成学校と東京医学校が合併し、予備門をもつ三年制の東京大学ができた時からです。

札幌農学校は開拓使によって開設されましたが明治十五年に開拓使が廃止され、その後、農商務省の管下と変りついで内閣府・内務省下の北海道庁の管下、そして遂に明治二十八年に文部省の管下になります。

この文部省下の時に、札幌農学校は四年制の高等技芸学校つ

まり専門学校に格下げとなりました。東京駒場に農学校があったためです。

明治十九年に帝国大学令が発令され、帝大には法・文・医・理・工・農の各分科大学を設置することが定められています。日清・日露の大戦に勝利し、日本は多数の人材を必要とするようになり、明治三十年に京都帝大が設立され、明治三十八年頃に東北と九州に帝大設立の動きがでてきました。

明治四十年に三番目の帝大として東北帝大が、札幌農学校を予科をもつ三年制の農科大学として改組して誕生します。続いて四年後の明治四十四年に仙台に東北帝大の理科大学が、更に四年後の大正四年に医科大学が設置されます。従って北大は分校というのも、分科大学制ですから、誤りとは言えないかもしれません。今日でいう所の本校に対する分校ではありません。東北帝大の源流の一つといえます。

又当時の恵迪寮は本科生と予科生が一緒に入寮していて、どちらかという本科生が主体で、予科生だけの寮となったのは大正十一年からです。“都ぞ弥生”の作詞者横山芳吉君は明治四十三年の入寮、作曲の赤木顕次君は明治四十一年の入寮ですから、その時横山先輩は予科二年、赤木先輩は本来は本科生ですが、一度落第していたので予科三年でした。二人は同室で余りに寮歌の作製に熱中したため二人とも落第しました。

〈恵迪精神の伝承と発展〉

北大開基一二〇年記念のとき、大阪の全国寮歌祭で北大が取り上げられて、いつもより多くの北大寮歌の時間が与えられ、更に寮歌祭冊子に北大の頁が設けられ、「ボーイズビーアンビシャス」は、青年よ大志を抱けとのみ世間に膾炙しているが、そのあとに続く言葉が忘れられている」という一文を載せましたところ、旧制富山高校OBからお問合せを受けそのお返事をするため、改めて勉強させて頂きました。

その折考えさせられましたことは、北大の源流の精神とは何か、恵迪寮の名簿には寮生として内村鑑三、新渡戸稲造先生が載っているが、恵迪精神とはいかなるものかということでした。同窓会の規約には本会の目的は会員相互の親睦を計り、恵迪精神の伝承・発展に努めるとあります。一般に同窓会の目的としては親睦と相互援助及び母校の発展に寄与するとある所ですが、〇〇精神の伝承と発展に努めるとあるのは余り例がありません。

恵迪寮同窓会設立、規約作成のメンバーは、ここの所を強く意識しております。他の同窓会とは異なる所と将に吾が意をえたりです。

〈恵迪精神とは何ぞや〉

所がこの恵迪精神なるもの、どうも人によって時代によっていろいろにとらえられているようです。例えば、このような事がありました。

十年程前のこれ又大阪での全国寮歌祭の折です。寮歌のリーダーに昔ながらのバンカラストایل（いや質実剛健スタイル）の羽織袴、弊衣破帽から変えてみてはということとで若手を起用いたしました。北大控室でリハーサルを行いました。大阪の北大の「都ぞ弥生」は山本吉之助（大正九）先輩（故人）のご指導による、近代的な標準テンポですとやっていまして、いわゆる寮生テンポではないのです。

所がこの起用された若手は、近時の大学の応援団スタイルで、手を振ってキビキビとやりましたる所、昭和十四年入寮組から、そのスタイルは恵迪にあらずと一喝され、中止となつてしまいました。

時は流れている、昔は昔。人が若く新しく変れば新しい様式。新しい酒は新しい革袋に、というのは真理です。しかし乍ら私達が北大に誇りを持ち、北大の源は恵迪にあるならば、恵迪の依つて立つ所源流をも勉強すべきでしょう。

恵迪寮が恵迪と命名されたのは明治四十年、しかるに恵迪寮名簿には、私達が誇りとする札幌農学校の一期生佐藤昌介、大島正健、黒岩四方進他、又二期生の内村鑑三、新渡戸稲造、広井勇、南鷹次郎、宮部金吾他の方々のお名前が載っています。当時は学校に併設された寮に全員入寮して、クラーク先生も訪れ、寮の規約については「ビー・ジェントルマン」のみでよろしいと伝えられています。恵迪寮の源流はここに溯ります。

クラーク先生がこられて寮生との間で「禁酒・禁煙の誓い」が交わされました。先生は学生の徳育に聖書を用いられ、キリ

スト教精神を教えられました。そしてあくる年三月、日本、札幌農学校を離れるに当り一期生全員と「イエスを信ずる者の誓い」を交わされました。先生不在の後も一期生の勧めによつて二期生の大半も又この「誓い」にサインしたのです。

今でも北大にはこの「イエスを信ずる者の誓い」の信教活動が脈々と行われています。この頃は弊衣破帽、飲酒しての高歌放吟、ましてや寮雨などとてもないことであります。

〈同窓会約二十年の足跡〉

所でこの恵迪寮同窓会規約の目的の達成のために、更に具体的に事業が定めてあります。恵迪精神の伝承と発展の見地から私なりに重要度順に変えてみます。

- (1) 恵迪寮名の継承と寮歌の継続作成並びにその普及
- (2) 初代恵迪寮舎の保存と活用
- (3) 恵迪寮大寮歌祭の開催、ならびに開識社や講演会の開催
- (4) 会員名簿の発行ならびに会誌恵迪・会報・文集等の発行となります。

これを改めて眺めますと、この規約作成メンバーはまことによくポイントを押さえていると驚きに堪えません。

そしてそれ以上に驚くのは、幾多の苦難をのりこえて全て実現していることです。

(1) については二度にわたる大学側の新規入寮中止の中、寮生と大学を辛抱強く説得し実現したことは、これ以上

の貢献はありません。

(2) につきましても、一度廃棄してしまつたら再現できない、昔の元のままの部材を使つての保存と活用は広く北大関係者のみならず札幌、いや北海道いや更に日本の重要文化財であり、その精神の広宣、普及に大きな功績です。

(3) については申すまでもありません。札幌のみならず、東日本と西日本で定期的に大寮歌祭が開催されているというのはい大偉観です。

(4) の中で私が特に一つだけ強調したい出版物があります。写真で綴る「青春の北大恵迪寮」四〇〇〇円です。

ここには明治九年以来の北大の歴史が貴重な写真でよくもここまで集めてあるということ。寮の写真集にとどまらず、これは北大の写真集でもある。明治二年から平成三年までの略年表が巻末についているのも北大の歴史を調べるのに便利である。ぜひ購読をおすすめする。

今ひとつは恵迪寮史第一巻の復刻版の出版と第二巻出版の恵迪寮史編纂委員会への援助である。これによって、明治から昭和六年の第一巻と、昭和七年から昭和六十一年の第二巻、つまり一八七六年から一九八六年八月までの一一〇年間の学生史が出来上がった。まことに偉大である。これらの達成は同窓会結成後およそ二十年かかっている。辛抱強い、かつ強力なエネルギーであった。

〈結語〉

いろいろ申し上げましたが、小生の言わんとする所は、単に同窓会の事務を若い人に引き継ぐだけではダメだ。恵迪精神を共に引き継がねばならぬ。

恵迪精神はどうも人、年代によって理解しているものが異なっている。従つてここで恵迪精神とは何ぞやと論議を起し、意見を戦わすべしと。

恵迪精神復興運動、ルネサンスを行ふべし。

今一つは、東日本は恵迪寮同窓会員の大集団である。札幌本部と東日本本部とを設けよ、であります。そしてこの二大テーマは今刷新しく選出される役員によつてリードされ、この任期三年以内に実施すべしである。

この大事業、エネルギーのいる仕事は、先輩も年老いた今、「なつかしき恵迪寮舎に別れを告げる会」と「恵迪寮よ永遠に」の人々以外にいない。そして若い人達と共に仕事を遂行していく中で、心と体、行動を通して引き継いでいつて始めて真の引き継ぎが完成するのであります。口頭だけでは心が伝わらないのであります。

(恵迪寮同窓会西日本支部長代行)

特集 『北大・恵迪・人脈』 第四回

明治九年の札幌農学校寄宿舎発足以来今日まで、北海道大学百二十五年の歴史の礎を築いた先人たちの足跡を追い、広く紹介する「北大・恵迪・人脈」。今回は、寄宿舎に「恵迪寮」の名を冠し、今日まで続く「恵迪寮歌」の誕生と名歌「都ぞ弥生」を世に送り出した明治四十年代を特集する。

『恵迪寮』その命名と寮歌誕生

白 井 俊 三

(昭和二十七年入寮)

編集者から「恵迪寮」の命名と由来について書くように要請されたが、すでに『恵迪』第三号に柴田松太郎氏が寮名と原典の「大禹謨」について執筆されているので、重複することを予め了解していただくことで、由来を纏めてみた。だが、明治四十年ともなれば、私達の親の世代のこと、やはり書物上の世界にならざるをえない。

時は日露戦争が勝利に終わり、日本は大国への道を歩き始めた頃、当時の学生たちは時代の流れを敏感に受け止め、国の将来や自らの身の処し方を考えていただろう。そんな中で学生た

ちは何を考えていたのだろうか。
時代の背景はどういうものだったのか。寮の命名の経緯を調べながら、そんなことに興味が湧いてきた。

明治四十年六月、札幌農学校は「東北帝国大学農科大学」と改められ、正式に大学となるのだが、明治十四年の政変以来、札幌農学校はその設立趣旨から財政縮小などの影響を受けて、存立の危機が幾度か訪れている。当時の学生は明治政府の「学制」に翻弄されていたと考えられるので、多少その「学制」についても触れることにした。

寮名・寮歌の決定については、「恵迪寮史」を中心として書き留め、出典に関わるものは書経の「大禹謨」とあるので、これについては文献を参考に書き記すことにしたい。

なお、これらについては、浅学な小生が文献を参考にしながらのものだけに独断が多いことを諒としていただきたい。諸兄のご指摘、ご叱正をお待ちする次第である。

「恵迪寮」の命名

「恵迪寮史」（復刻版）の中の“回顧録”で田中義麿氏が「寮の命名当時」の一文をしたためている。この一文の中で「…私の入舎した頃までこの寮は単に札幌農学校寄宿舎と呼ばれていたが、何とかもう少し感じのいい名前を付けようじゃないか」ということが次第に舎内の話題に上るようになり、明治四十年の初私が庶務委員をやっていた頃、舎生の中から寮名を募集し、三月二十六日の開識社例会で応募寮名を披露した」と書いている。

この開識社は第二十八回、明治四十年三月二十六日開催のも

ので、「次いで募集したる寮歌及び寮名の披露をなし、其の採用は委員を選びて之に付託するに決し、寮名寮歌選定委員及び寄宿舎委員の選挙を行い、…」と記録されている。このときには応募寮名の中には適当なものはなく「結局その決定を寮歌及寮名委員に付託することとなり、選挙の結果私（四十票）と高松正信（十八票）鳥海二郎（十六票）大久保敬（十二票）早川直樹（十二票）を選任したので、越えて三月三十一日私は当時予科の作文を担当されていた漢学者湘香新居郭二郎先生を訪ひ、事情を話して左の四つの名称の提示を受けた。

猶 興（雖無文王猶興）
有 隣（德不孤必有隣）
有 恒（有恒雖戔）
恵 迪（恵迪吉）

そこで四月二日の夜寮名委員会を開き以上の四つに就き詮衡したが「…有隣、有恒は書店や旅館などの屋号で既に使用されていたことで除外し、猶興と恵迪の何れかを選ぶこととなったが、「異論紛々中々決しない」と記されている。結局「猶興」は中央政界の一団体名に使用されているということで、「恵迪」の文字が採用されることとなった。

「四月八日記念祭会場（食堂）内正面に吾々本科二年の寮友の手に成った恵迪寮の大額が天井から吊るされ舎生一同並びに来賓に深い印象を与えたのである。

人の知る如くこの語は書經の大禹謨中にある「迪に恵へば吉し」の句から出たもので、輒ち以つて寮是となすべき延いては広く人生の箴言となすに足るべき名句である。」(以上「寮の命名当時」田中義麿)と結んでいる。「恵迪寮」の名称は、この時から使用されることとなった。

こうした経緯から寮名は誕生したが、舎生はどうして寮名をつけようとしたのだろうか。また、寮歌を作ろうとしたのだろうか。これにはどうやら明治時代の「学制」が影響しているように思う。少し時代を遡ってみよう。

札幌農学校寄宿舎は、明治三十六年に新築移転することに決定したが、その年から閉鎖され、新築移転する明治三十八年四月までの間、舎生は「：或いは下宿屋に隣室の喧騒を感じ、或いは栄養不良をかこちつつ、ありとあらゆる勉学の不自由の渦中より、新築寄宿舎の竣工の一日も早からんことを鶴首して待つ者は誠に之を云うて不可ないのである。漸く(実に漸く)開舎に至ったことは誠に幸福な事である。」(文武会会報第四十六号)と率直に喜びを述べている。

この旧寄宿舎が閉鎖された明治三十六年は、「学制」の上でも大きな変化のあった年でもある。

「恵迪寮史」(復刻版)では「：三月勅令第二十九号を以つて実業学校令改正し本校は実業専門学校と規定された。同月二十八日に電報以つて寄宿舎に通知が来たが誰一人信ずる者がなかった。此の頃本校職員生徒は勿論、札幌区民を挙げて帝国大学設立の運動を行っていたのである。それ故に本校を一実業学

校と規定したことは本校の前途を否定したものであり、之が事実と知るに及んで学生の不満不足は非常なものであった。乃ち数回会合して協議した結果、実業専門学校に反対して大学速成のことを協議した。：」と記録されているように、学制の変化は学生の不安と動揺を産み出していった。とくに明治三十六年は札幌農学校創立二十五周年を迎えていただけに寄宿舎の閉鎖とあいまって、学生が学校の前途と寄宿舎の新築をいかに待ち望んでいたかを窺い知ることができる。

この一実業専門学校と規定した「学制」改正とはどんなものであったか。少し触れてみよう。

明治時代の教育は、明治十九年森有礼による「小学校令」をはじめとする諸学校令で普通教育中心の学校階梯が提示された。その内容は人口を基準として全国を八大学区に区分し、一大学区に大学を一所、一大学区を三十二中学区、一中学区を二百十小学区として、学校を設置するもの。その後、社会の要請と進学熱の高まりから、高等中学校の学校系統上の位置付け、専門学校と実業専門学校との関連などが議論を呼び、明治二十七年「高等学校令」によって高等中学校の本科と予科との地位を逆転させて、これを専門教育機関とした。この改革は、帝国大学予備門としての高等中学校を高等学校とし、これを中等教育としての尋常中学校へ接続する高等専門学校教育機関にするというもので、この高等学校では国家の各分野に働く技術的指導層の養成を図るものだが、「大学予備教育か、または独立した専門か、で論じられる高等学校制度の改革は、いづれにしても

問題をやらんでいた。すなわち、一方では帝国大学を終点とする学校系統上のロスをいかにして減少させ、それを合理化していくかという問題があり、また他方では、需要が高まりつつあった、帝国大学卒業よりやや「低度」でよいとされる国家的指導層を具体的にどのように形成していくか（「帝国議会と教育政策」本山幸彦編著）という問題である。これによって普通教育の一貫性を定めたものの、実業諸学校は、いつも残余部分として寄るべき法規のないまま、そのおさまるべき居場所を探しあぐねていた。

そのために明治三十六年の「実業学校令」によって一応の解決を計った。当然のことながら学生は驚いたであろう。「高等学校令」によって設立された、いわゆるナンバー・スクールとの差を感じ取ったに違いない。これが前述の「恵迪寮史」に記録されている内容である。

こうした時流の中で、学校の前途と寄宿舎の新築までの期間を、自治制度を早くから取り入れて誇り高き舎生達は、さぞかし不安な思いで過ごしたであろうことは、想像に難くない。

明治三十一年、札幌の「北門新報」は、「北海道大学の要望」と題する長文の社説を掲載し、札幌農学校の大学昇格への世論を喚起した。だが日露戦争の勃発で実現をしなかったが、三十九年古河財閥が校舎建築費を寄付したことによって大学昇格への道が開けた。

「……東京に並ぶ高い教育機関としての歴史を持つ札幌農学校の帝国大学昇格が当然のこととして議論され始めつつあった。

こうしたときを迎えて、学生の意気は軒昂たるものがあったのである。……」（「札幌農学校」復刻版中「解題」高倉新一郎）と記されているように、学生が寮名と寮歌を定めようとする気風が生まれたのは、こうした時代背景があったと見るのは、穿ち過ぎだろうか。

明治四十年六月、札幌農学校は大学に昇格したが、明治三十八年に新築寄宿舎に入り、大学昇格を迎えんとする舎生の気持ちに想像できようというものだ。

寮歌誕生を彩る人々

寮歌・寮名の募集は、前述したように第十九期委員会（明治三十九年第二学期）が議決し、寮名は誕生したものの寮歌については、まだ誕生していない。

弊衣破帽に朴藺の高下駄、白線帽に黒マントをまとい、高歌放吟して歩くバンカラ・スタイル。今は語り草だが旧制高校生の世俗に反発する独特のスタイルは、古い映画の中だけでしか見ることはできない。新制高校に移行する昭和二十四年頃から数年は、バンカラ・スタイルも受け継がれていたが、男女共学が当たり前の世代になると影を潜め、細々と高校の応援団にその姿を見られるのみとなった。

高歌放吟する歌は、もちろん寮歌である。

寮歌は、校歌ではない。学生寮の歌であり、学生の歌である。男の青春の歌でもある。

「寮歌、それは若き血潮のうた、われら北大予科の青春のシンボルであった。周知のように、旧制高校には、各校に必ず寮歌があり、寮祭はもとより、対抗戦、コンパ、そして逍遙に、それはあらゆる機会に歌われた。寮歌はわれわれの青春と密着し、学生生活と一体化していた。」（昭和三十一年寮歌集 序 矢島武）と記されていたように、寮歌は、青年の意気と理想を謳いあげている。

だが、バンカラ・スタイルが見られるようになったのは大正の末頃で、それ以前は、札幌農学校開学以来の、純朴なピュウリタンの気風であった。

寮歌の始まりは、明治二十七年「高等学校令」によって設立された、いわゆるナンバー・スクールの中でとりわけ古い一高に始まる。明治三十四年東寮寮歌として『嗚呼玉杯に花うけて』が誕生、全国を風靡する一方、日清戦争の勝利によって列強国の仲間入りを果たした国内では、時流に乗って各地で寮歌が作られていった。

恵迪寮寮歌の最初は『一带ゆるき』である。

作詞者の田中義麿氏（写真）は、誕生までの経緯を次のように記している。



明治四十年「四月二日夜特に先輩大竹温孝君の来会を求めて……寮歌の協議に移る。ところがこれはなかなか容易でなく、三篇の応募作の中から筆者のもの

のが採択されこれを骨子として多少の修正を加えることとなったが、日記をみると、沈案苦吟佳句を獲ること真珠を探るよりも難く一節一時を費やしてもなお成らず、大竹君まづ辞去し高松、早川両君は楽譜を選定せんとて去り、残るは大久保、鳥海、田中の三人のみ、鼎座して互いに相見、黙々として語らず時空しくし移り、早くも夜半を過ぎ、すなわちこれを明日に譲りて散会す」とある。（『都ぞ弥生』昭和四十九年）。翌四月三日、田中義麿氏は大久保敬氏と共に最終案を作り上げた。

こうして完成した『一带ゆるき』は、明治四十年四月八日寮記念祭の夜会場で合唱されたことで産声をあげた。

「以来幾星霜、寮歌の作成は年中行事の一つとなり、今日に及んでいる。その多くが美しい北海道の自然を詠っているのは、自然が如何に彼等の純真な心に感激を与えたかを物語るものであろう。他校の寮歌に往々にしてみられがちな立身出世主義のにおいが見当たらないのも、このためであらう。」（『北海道の青春』北大B・B・A会 昭和三十一年）と述べられているように、毎年寮歌が作られるようになるのだが、この伝統を築き上げたのは、翌年の『太虚の齢』であらう。何事もそうだが、続ける努力は、二回目にある。作詞者田中義麿氏は、次ぎのように綴っている。

「そもそも寮歌というものは、毎年別人の作歌作曲に成るのが普通で、恵迪寮のように二回続けて同一人の作というのは異例といわなければならぬ。……略……筆者の日記によると、明治四十一年二月二日臨時舎生総会において寮歌委員の選挙を行い、

田中、小熊、藍野、原田、谷村、前川（得票順）を選んだ。：略。苦慮沈吟、僅かに一節を得たのみで消灯の汽笛がなり、七人の委員ただ哑然たり呆然たるの。という始末。」

結局、作歌を谷村、原田、田中が担当、作曲は早川、前川が担当することに決まり、三月七日の委員会、田中義麿氏の歌詞が採用され、当時寄宿舎係であつた有島武郎の校閲を受けて完成している。

作曲は、早川、穂積（舍外生）の手になる二編の内、穂積貞三氏の楽譜をもとに早川直樹、前川徳次郎両氏によつて作られた。

こうして完成した『太虚の齡』は明治四十一年三月二十八日開識社例会で発表され、以来『希望の光』（明治四十二年）、『帝都を北に』（明治四十三年）、『藻岩の緑』（明治四十四年）、と続き、日本の三大寮歌の一つといわれる『都ぞ弥生』へと受け継がれていくことになる。

寮歌作成・寮の命名の過程で、積極的に動いているのは、田中義麿氏だが、第十七期委員会（明治三十八年三学期 佐瀬雄委員長）以降の委員会を構成する人々によつて醸成されていったことを忘れてはならないだろう。

その名を挙げれば、大竹温孝（第十七期庶務委員）、高松正信（第十八期委員長）、鳥海二郎（第十九、二十期委員長）、早川直樹（第二十一期衛生委員）などである。こうした人々は委員会で結びついているのだが、この時代、大きな事件として明治三十八年頃に起こった「賄い問題」がある。これは外部委託

していた食事に端を発しているが、この解決として明治三十九年六月から発足した「自炊制度」がある。委員会は随分と苦勞を重ねたらしいが、この「自炊制度」によつて、寮はかつてみなかった円滑で運営されるようになり、大正七年頃まで札幌農学校時代と変わりない寮生活の爛熟期が続いたと、記されている。こうした活動と寮歌の誕生とは、決して無縁ではないだろう。

恵迪の原典

恵迪の原典については「恵迪」三号に、柴田松太郎氏が『書経・大禹謨を読んで』のなかで詳しく書いているので、少し書いて書くことにする。

恵迪の由来は、原典が書経のなかの大禹謨にある。しかし、我々の世代、つまり中学以来、戦後の教育を受けた者は書経（四書五経）の名は聞いた事はあつても馴染みもなく、その内容について知るべくもない。

文献によれば書経は中国最古の史書で、中国古代の太史が書き置いたものの一小部分にすぎないといわれている。

現代に伝わるものは歴代のもの全部ではなく、昔は百編あつたと伝えられているが、原本は五十八編だけ。内の二十五編は「古文尚書」で魏・晋の頃作られた偽書、残りの三十三編は「古今尚書」でこれだけが本物とされている。「古今尚書」の内訳は

堯・舜・皋陶・禹に関するものが六編。

殷の湯王・般庚・高宗・微子のもの七編。

周の武王・成王のもの十五編。

康王のもの二編、その他三編。

から成る。

書経は周初のものが大部分で、とくに周公の言葉が多い。堯・舜・皋陶・禹に関する記録も相当部分を占めているが、これは伝説であとから加えられたと見られている。

書経は春秋時代（紀元前七百年～四百五年）から、中国最古の統治者に関する記録であるところから、貴族の教養のための必読書とされていた。

日本の歴史に登場するのは、継体天皇の七年（五一三）に、百濟から五経博士段楊爾が貢上されているところから始まる。勿論、書経はそれ以前百年以上も前に渡来しているのだが、當時はこれを読めるものが居なかったからのものだろう。五経博士というのは、儒教の經典である五経を教える学者で、中国の漢代におかれた制度。日本では国家の規模がこの時代に漸く整いはじめたことで、中国の儒教やその他の学問の本格的な摂取が始まったといえよう。

その後鎌倉時代以降、五山派の禪僧が他の宗派とは違い、専ら四書五経、史記などを使用しており、朱子学者としても高度の学識を有しているところから、当時の知識の最高学術的な存在になっている。

ところで「大禹謨」だが、これは虞書の篇名で偽古文尚書と

されている。禹は、夏王朝の始祖で治水民政の安定につとめた功によって人望を得て、舜のあと天子の位についた人物。国号は「夏」で、安邑に都したと伝えられているが、それが現在のどの地方であるかは、判明していない。歴史上では伝説に属する。

「大禹謨」の「大」は美称で、「謨」ははかりごとの意で、「偉大なる禹の世を治める方策」という意味。

「大禹謨」は大きく三段に分かれており、舜・禹および皋陶・益稷などの嘉言善政を述べて、堯舜二典の備わらないところを補っている。先ず舜帝と益稷（舜の賢臣）と禹の三人が政治上の問答を行い、禹が民衆を治める方法について舜帝に献言する。ついで禹が舜帝から禪譲を受けて皇帝の座に着いたことが語られ、最後に、禹が異民族を征服した功績が述べられている。

恵迪寮の原典となった一節『恵迪吉、従逆凶。惟影響（みち）
恵へば吉にして、逆に従へば凶なり。惟れ影響たり』の言葉は、冒頭の舜・禹・益（益稷）の三者による問答の部分に、舜帝と益とが堯帝（舜に天下を譲った聖王）の徳を称えたのに答える禹の言葉として出てくる。これを砕いて書くと、次のような問答になる。

禹 「皇帝が皇帝であることの難しさを理解し、臣下が臣下であることを理解していれば、政治はよく治まって、民衆は道徳に従うでしょう。」

舜 「その通りだ。お前の言葉の通りになれば、正しい意見が打ち捨てられることもなく、賢人が民間に埋もれていることもなく、世界中が平和になるだろう。大勢の意見を聞き、我意を捨てて人に従い、頼りとする所もない民衆を虐げることなく、困窮している民衆を捨てることもなかったのは、先代の堯帝こそおできになったことだ。」

益 「ああ、堯帝の徳は広く遠くまで及び、聖（すべてに通じている）、神（人には計り知れない）、武（威厳がある）、文（華やかさが外にあふれている）であらせられました。そこで偉大なる天は堯帝に命を下し、全世界を領有し、この天下の君主とされたのです。」

禹 「恵迪吉、從逆凶。惟影響」善道に従えば吉事があり、惡道に従えば凶事があるのは、影が形に従い、響きが音に應ずるように確かで明らかなことです。」

益 「ああ、慎重にしなければなりません。予測できないことにも警戒して法度を踏み外さないようにし、安逸に流れることなく、賢者を任用して疑わず、悪を除いて迷わず、疑わしい計画は遂行しないようにするならば、さまざまな意向は広く遂げられていきます。正しい道に背いてまで人民からの称賛を得ようとしてはいけません。人民の考えに逆らってまで一身の欲望を満たそうとしてはいけません。このようにして怠ることなく、なおざりにすることがないようにしていくならば、四方の異民族達も来朝してくるでしょう。」

さらに禹は君主が政治上務めなければならないことについて述べている。

「恵迪吉」以下の言葉は、よく善道に従った堯帝を称えると共に、君主たるものが善道を踏むよう戒めたものと考えられている。

先に「大禹謨」は偽古文尚書であると述べたが、現在伝わっているものが実は後世（一説によると三国から六朝時代）に偽作されたものであることを示している。しかし、偽作とはいっても、全くのたぐひではなく、偽作された当時に伝わっていた古代の文章の断片を編纂したものであり、また、真実の経書として尊ばれた歴史も長いので、必ずしも価値が低いわけではない。

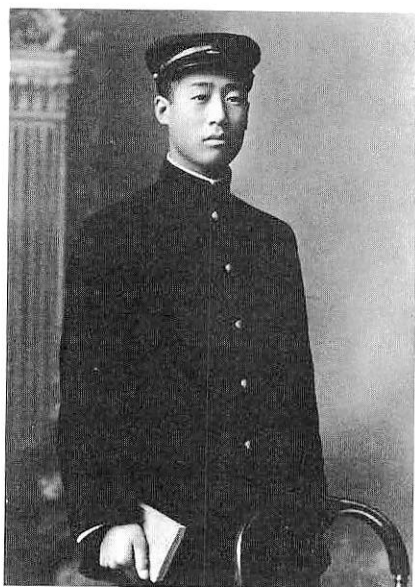
「大禹謨」の原文については、限られた紙幅のため割愛するが、機会があれば紹介したいと思っている。

以上、先輩たちが築き上げてきた「自治の精神」は今もなお、自分の心の支えであり、大切な教えであることと共に『恵迪寮』の名を誇るために、また、受け継ぐこれからの若者の為に、寮の命名について拙文として纏めてみた。

終わりに「大禹謨」については、福田忍氏（文学博士）に多大なるご指導を頂き、誌上から厚くお礼を申し上げますと共に、協力を頂いた昭和二十七年入寮の寮友にもお礼を申し上げます。

横山 芳介

— 東京・札幌・静岡、四十六年の生涯 —



鈴木 勝男

(昭和二十九年入寮)

「明治四十五年寮歌アー、横山芳介君作歌、赤木顯次君作曲、「都ぞ弥生」。一番、二番……。アイン、ツワイ、ドライ……。新入寮生歓迎晩餐会の夜、全員起立の中で初めて聞き、先輩寮生に声を合わせて歌ってから幾年月……。

九十年前、恵迪寮の一室で誕生した「都ぞ弥生」は、まもなく全国各地の学生間に、さらに一般の愛唱歌として広まった。明治三十五年の旧制一高記念歌「嗚呼玉杯に」、明治三十九年の旧制三高逍遙歌「紅燃ゆる」と共に、明治の三大寮歌として、長く歌い継がれ、今に至っている。北大では校歌と同じに扱われ、北大生は「都ぞ弥生」の演奏で入学式を迎える。

作詞の横山芳介は、東京に育ち、札幌で青春を過ごし、静岡で小作民のために奔走、ひっそりと世を去った。その四十六年の生涯を辿る。(敬称略)

東京―その生い立ち

神田生まれ、悩み多い文学少年

横山芳介は明治二十四年（一八九一）五月八日、東京府東京市神田区駿河台鈴木町二十四番地に生まれた。ちなみに石川啄木の誕生は五年前、芥川龍之介は翌年である。

生地は現在の東京都文京区神田駿河台二丁目。JR「御茶ノ水」駅左、お茶の水橋たもとに当たる。当時のお茶の水は神田川の清流、溪谷で名高く、永井荷風が大正四年（一九一五）刊行の「日和下駄」に「お茶の水の絶壁は元より小赤壁の名がある位で、崖の最も絵画的なる実例とすべきものである」とある。「御茶ノ水」駅も、その右手の聖橋も、未だ姿を現しておらず、駿河台から富士山を遠望できた時代である。

父・光次郎は、駿河台の明治法律専門学校（明治大学の前身）卒の貴族院書記官。滋賀県大津出身だが早くに母、兄弟を失い、芳介誕生の五年前には、代々の薪炭業「近江屋」を営んでいた父親も没し、大津を引き払った。「礼儀正しく、立ち居振る舞いの端然とした人」だったという。

ところが父は大の酒好き。それが原因で芳介が二歳の時、実母は幼い一人息子を残して出る。数えの二歳なら乳飲み子で、最初の誕生日を迎えたかどうか。困惑した光次郎は「高橋」という家に芳介を預け、育てて貰った。横山家との関係は判らない。「肺を病みわびしき世をばさりぬとか 我が小さきときな

つきたるお婆」「一年は姉とも呼びし女なり 浪華に行きて酌婦せりとや」の歌が残る。

二年後、光次郎が再婚して、四歳の芳介は我が家に戻る。後妻のとは武家育ちで「しつけの厳しい、几帳面な人」だったという。弟妹は生まれなかった。芳介が小学校二年生の時、担任の先生の話から、母・ともが生母でないことを知った。

ショックを受け、父に問うと「今後、そんなことを一切話してならない」。厳しく叱られたが、父の怒り方は異常だった。胸中に疑念が深まり、夜になると一人で泣いた。胸がつぶれる思いで無口になり、母から「だんまりの芳ちゃん、だんまりの芳ちゃん」と呼ばれる。小説、物語の世界に遊び、孤独を慰めた。「我が心ひびの入りに似たる哉 このままあらばこわれんと思ふ」「兄弟も持たぬ我れ故淋しきは いとよく知れり悲しく知れり」の歌もある。

明治三十七年（一九〇四）、東京高等師範付属中学に入学する。日露戦争が始まった年である。校舎は湯島聖堂隣で、今は東京医科歯科大が建つ。この頃の住居は本郷区駒込曙町十四番地。現在の文京区本駒込一丁目周辺で、東大赤門前の道を毎日歩いて通学したと思われる。

中学時代は文学に熱中して詩歌、小説を読みふける。自分でも書き始め、学校の先生も文才を認めるほどだった。文学好きの仲間と一緒に作品回覧もしたようだ。幼少から俳誌「ホトトギス」に馴染んでいたことから、父・光次郎は俳句が趣味で、文学好きの血筋は父から受け継いだようだ。光次郎・芳介父子

は体格、顔つきともよく似ていたという。

少年時代の横山芳介は、よそ目には物静かで、優しい文学好きな「一人育ちのお坊ちゃん」だったようだ。「自分は社交的な性格でない。見掛けは鈍い様で、案外に神経が過敏。普通の人ならば何でもない事でも自分には妙に頭に響く。自分はまた生来いやに生真面目である」と、寮時代の文章にある。また、表面だけで人を判断するなども書いている。「人には見掛けによらぬ事情があるものだ。学校、家庭の事情で悲しみ煩悶して、気の毒な境遇かも知らないのだ。表面は冷ややかにみえても、熱烈なる情熱を蔵してるかもしれない」。自らを語っているといえよう。

明治四十二年（一九〇二）三月、付属中学を第十八期生として卒業する。

進路をめぐって、父子の対立があった。彼は文学への道を志し、先生も口添えしてくれたが、父はこれを許さず反対する。大学なら文科でなく、法科にとでも主張したのであろうか。父の親友で、大阪在住の「戸田家」が札幌時代の学資を出していた経済的事情も背景にあつたらしい。この頃、仙台に再婚していた実母から芳介あてに「会いたい」と手紙が来た。彼は継母への恩義から断り、二十年ぶりの母子対面は実現しなかったという。

将来の道は決まらず、家庭問題にも思い悩む。多感の青年が親元から離れよう、見知らぬ地で学びたい、と望んだとしても不思議はない。

*

翌明治四十三年（一九〇三）三月、「東北帝国大学農科大学」が札幌貴貴堂から出版された。大学文芸会・編。有島武郎、学生ら五人が執筆に当たり、最後の校正は有島宅に集まって、徹夜となった。版を重ねた「札幌農学校」に替わる大学案内である。

有島武郎が筆を取った第一章「本学の過去」ではまず、明治の教育史を飾る学校として「福沢諭吉の慶応義塾、新島譲の同志社、そしてクラークの札幌農学校」を挙げる。同書は大学の各施設、予科、本科各学科から札幌の自然、学生生活、寄宿舎に至るまで写真三十二枚入りで紹介。「因習の地を脱し、強固な意志、遠大の希望を抱く青年よ、歴史の新しいこの地に来たれ」と呼び掛けている。

天に星あり北斗と云ふ 地に花あり桜と名（づ）く
其の星の光をあつめ 其の花の匂をととりて

我等が学ぶは真善美 吹雪の夜半に真理を説かん
緑の陰に詩集を読まん 来たれ友エルムの森に
来たれ友此の家の窓に

我等が学ぶは真善美

*

彼は七月の試験に合格。「人の世の清き国」とあこがれて九月、津軽海峡を渡った。

札幌―「都ぞ弥生」の前後

対照的な横山、赤木の人柄

明治四十三年（一九一〇）九月、横山芳介は札幌に着いた。駅前通りは広く、馬鉄が走っていた。低い家並みが続き、アカシア並木に秋風が吹いていた。

入学式は十二日、図書館に予科百人の他、農学実科など新入学生が出席して行われた。大礼服の佐藤昌介学長が「今日から紳士として遇する」と訓示の後、宮部金吾教授の立ち会いで宣誓式が行われた。

寄宿舎はグラウンド、現在の理学部の向かいにあった。時計台から明治三十八年に移って五年目、建物はまだ新しかった。すでに恵迪寮と命名されていたが、寮内では従来通り「寄宿舎生」の言葉が、主に使われていた。「自治」が寮の基本精神であり、「自治寮」は寮生の誇りだった。

南寮、北寮の二棟が並び、居室三十二室には各四ベッド、定員百二十八人。予科一、二、三年生が九十人、本科三十人前後が暮らしていた。四月に電灯、九月から電話も通じたばかりで、スチーム暖房は本州出身者には魅力だったが時々故障した。食堂にはクラーク像の絵が飾られ、食事は制服または袴着用が厳格に守られた。閲覧室には新聞六紙、雑誌三誌。娯楽用にオルガン、ピンポン台が備えられ、庭には花壇、鉄棒、土俵。彼が入寮して間もなくレコード、蓄音器も入った。

寮の二階からは、広大な石狩平野、夕日が沈む手稲山が眼前に見えた。山麓を走る汽車が小さく消えていく。本州からの学生は淋しさの余り、よくホームシックになった。横山芳介も「十月に病氣になり頭重、頭痛」が続いたと告白している。

彼は詩や短歌を作ってはノートに書き留めた。「吹雪する北の国なり面白や 櫓の走せゆく鈴の音のよき」など多く残る。

寮内の文芸誌「原人」に加わり、文才は早速認められた。

年が明けると四十四年寮歌の選定委員に選ばれ、当選作「藻岩の緑」を添削している。

明治四十四年（一九一〇）九月、恒例の部屋替えで、予科二年に進級した横山芳介は、予科三年の赤木顯次と同室になったようである。この二人が同室でなかったら、果たして名歌「都ぞ弥生」が誕生したかどうか。

「横山君は東京出身の文学青年。卒業後、第一回の小作官として静岡県に奉職赴任いたし、生来蒲（ほ）流の質にて早世せられたるは遺憾であるが、その優しい性格は歌の文句にも良く現れ、人と交わりて万事遠慮勝（ち）の美青年学生」。「赤木君は頗る元氣一杯にて、万人と交際し、寮でも必ず行交う友人仲間には朝や夕の挨拶を交す習慣でした。寮内の名物男の一人として、衆に愛され、その元氣は良く寮歌に現れております」。

横山と同期入寮者、佐藤隆太郎（大正五年、農学科卒）の追想する二人の人柄である。

二人の性格は対照的だ。横山は体の割に内向的で遠慮がち、余り表に出たがらない繊細な文学青年。小柄な赤木顯次は外向

的で性格明朗、ハーモニカの名手。運動会では長髪、鉢巻姿の応援団長。「熱氣迸る雄弁。多芸多能であり、理を説いて整然、情を穿つて機微に入る」は、当時の寮誌に見る人物評で、宗教家となる素質はすでにみられた。

名歌誕生までの曲折

さて「都ぞ弥生」である。

明治四十五年（一九二二）一月十三日、寮委員会は「本年度寮歌募集」を掲示した。

応募作は「都ぞ弥生」を含めて三編。ところが入選作はすんなり決まらなかった。今から思えば不思議な気もするが、「都ぞ弥生」が落選の可能性もあった。

寮歌決定までの経過は、寮委員会報告「寮務委員より」で知ることが出来る。寮誌「辛夷」創刊号に掲載。要旨は次の通りである。

「締切当日に集ったのは僅か二編。更に締切期日を繰延べたが、半月後で又一編。自分はこれを見て、舎生には果たして寮歌を作ろうとする誠意、熱心ありや否やと疑うに至った。是れには種々の理由あり原因もあるか知れないが、兎に角応募者が少かったのは事実。加えて適当なる選定者を得られなかったのは、大いに自分を失望させた。

兎に角寮歌は作らねばならぬ、しかも選定者を得られない。此に於いて楽譜選定委員を赤木顯次君（他一名）に依頼して、

楽譜創作上最も可なるものを取る事にして横山君の作を選定した。

適当な選定者を得られず、徒らに時日を送り、寮歌が例年より遅れたのは自分の責任として、大いに舎生諸氏に謝する所である」。

当時の寮務委員は、寮歌選定作業に相当苦勞した様子がある。縮切りを半月も延長したが応募作三編。しかも「適当な選定者を得られなかった」。この年の選定事情はいま一つ明確でない。「選定者」とは「入選作詞者」のことであろうが、「選定委員」とも受け取れる。いずれにせよ、入選作決定は難航した。

このままでは作曲も、新寮歌発表も遅れるばかり。結局、作曲委員の赤木顯次が、「横山君の作品」を推して一件落着。異論があっても、彼には得意の弁舌があった。

作詞が正式に決まり、最終稿の完成を目指して、二人の苦心が始まった。横山芳介は、五節八行の中に「唯々北海の自然の真実な姿を詠み込もうと努力した」。前段に、予科のシンボル「桜」と「星」を取り入れ、新学期の秋、峻烈な冬、一斉に花咲く春の情景を中心部に据え、後段はクラークの教えで締めくくった。作詞で一般的な「七五調」をあえて退け、第一行から第七行まで「八七調」で、最終行のみ「五七五」とした。

格調高い歌詞にぴったりの曲を作ろうと、赤木も苦心を重ねる。曲に合わせて歌詞を変え、歌詞に合わせて曲を変え、これは駄目、これでも駄目、「今日こそと思ひ定めしその日さへ

しがなく紙を塗り散らしたる」の二カ月間だった。

*

実をいうと「都ぞ弥生」に苦吟していた頃、横山芳介の身辺は多忙だった。

まず、寮雑誌「辛夷」創刊号の編集である。二月十一日の寮生大会で、寮機関誌発行が決まった。横山芳介は編集担当の雑誌部委員に選ばれた。

早速、創刊号の原稿依頼、編集作業に追われる一方、自分も誌面掲載の原稿を書かねばならない。新寮歌発表と同じ開寮記念祭の四月八日が、創刊号発行日と決まっている。

次に、「凍影社」である。文芸好きの谷村愛之助（四十三年寮歌「帝都を北に」作歌）が中心で、文学を語り、作品を論じようと、寮内に呼び掛けた。今でいえば読書会、合評会である。横山芳介は「凍影」の命名者であり、有力同人だった。

第一回は二月十七日。付属中学の先輩、永井荷風の新作戯曲「暴君」「わくら葉」を取り上げている。「凍影社はこの夜始めて現出した。よしやその名は未だ定まらなかったとはいえ、明（らか）にその日が凍影社の生れた日であった」（横山芳介・記）。二回目の三月二十八日は、谷崎潤一郎の出世作「刺青」。「興は尽きず、文壇に新しく起らんとする傾向を品し、泰西の作品を論じて、吾等が期する道の一步二歩は築き上げられた」（同）。凍影社同人たちは開寮記念祭当日、谷村愛之助・作の劇「断層」を上演している。横山芳介も裏方などを手伝ったかもしれない。なお、凍影社は大正三年まで続き、出席寮生の中には谷村、

横山芳介のほか、明治四十四年「藻岩の緑」の松山茂助、大正二年「幾世幾年」の木原均、大正三年「我が運命こそ」の樋口桜五と、当時の寮歌作詞者が軒並み、顔を並べている。

さらにもう一つ、横山芳介には秘密の悩みがあった。同室の寮生、亀山源一郎との「友情の破綻」である。これは戦後、「遺稿ノート」に残された詩歌から明らかになった。

*

記念祭まで二週間に迫り、新寮歌がまとまった。「三月二十六日の朝漸く作り了った。人の批評がどうしても自分はかなりな努力を以て此歌を作ったのであることを以て慰めとする。曲は赤木が作った」と、遺稿ノートにある。もともと現在歌われる最終稿となるまで、さらに添削を重ねたのだが……。

早速、寮生たちが集會室に集まり練習、赤木顯次がオルガンを弾きながら新曲を教えた。「ややこしい曲だな」と声が出た。おそらく勇壮活発な曲を予想していた寮生には「どうも調子が湿っぽい」「賛美歌のようだ」と、反応はいま一つだった。しかし発表日が迫っている。とうとう「これで良いのじゃないのか」となった。

第七回開寮記念祭は四月八日。会場の寮食堂には佐藤昌介学長、南鷹次郎、宮部金吾、有島武郎の各教授、外国人講師夫妻らが招かれていた。この席で、明治四十五年寮歌、横山芳介作歌、赤木顯次作曲の「都ぞ弥生」が初めて世に出ることになった。今思えば名曲誕生の、歴史的場面。精一杯努力した二人にその意識はなく、ようやく発表にこぎつけた安堵感、満足感に

ひたりながら、拍手を浴びていたことだろう。

「僕はその後に出来た北大の寮歌の中にも、作詞としてはもつともつといいものがあるように思う。にも拘らず、この歌が好かれるのは、歌のどこかにうたい易い所があるからだろう。ほかの寮歌とちがいは、歌のあとから譜をつけたのではなくって、歌に沿って譜が出来、また譜に沿って歌が出来、いわば二つのものの中に同じ気持ちで流れているということが、この歌がうたいよく、みんなに喜ばれる理由じゃないかと思う」。

横山芳介、晩年の言葉である。

「都ぞ弥生」以後の横山芳介

六月末の学年末試験。二人とも落第して横山は予科二年、落第二度目の赤木は予科三年に残った。「音楽の天才持ちて雪の国に 試験に悩む人の身の上」とは赤木のことか。

明治四十五年は七月で終わった。年号が変わり、大正元年九月、新学期で寮に戻った横山芳介は十二月まで寮務委員を務めた。十二月発行「辛夷」第二号に、紀行文「平家蟹にそへて」と「寮務報告」を掲載。

大正二年二月、農大スキー部員として藻岩山にスキー登山。当日は農大スキー部四十人余が参加し、うち恵迪寮生は十余名。「北海タイムス」が同行取材記を連載した。四月、「辛夷」第三号に「寂漠なりと称せらる寮生活と自分」掲載。繊細な自己分析と青春期特有の内面告白である。十二月、「辛夷」第四号の

編集後記で雑誌継続を訴えている。

大正三年四月、「辛夷」最終号に、巻頭の「廃刊の辞」と凍影社の過去及現在」を書いた。「凍影社」も五月には姿を消した。九月、横山芳介は農科大学農学科に進んだ。教室は南鷹次郎教授の第一部（作物学）を選ぶ。十二月、恵迪寮を退寮。卒業までの住所は判らない。

十一月、有島武郎教授が大学を退き、札幌を離れた。有島が代表をしていた「遠友夜学校」は、その前もその後も、寮生ら北大生が入れ替わり立ち代わり手伝っている。故高倉新一郎名誉教授によると、横山芳介は「遠友夜学校の熱心な教師であった」（「都ぞ弥生」という）。

彼が手伝ったのは何年頃のことか。当時の関係資料や名簿を調べたが、「横山芳介」の名前は確認できなかった。

大正四年。東京の父・光次郎が没する。死ぬ間際まで酒を欲しがっていたという。

大正六年。病気で七月の卒業式には出席出来ず、半年遅れて十二月卒業した。卒業論文は「日本薬用植物ノ解説並ニ日本薬用農産物論」。農学部図書室に保存され、四百字詰原稿用紙七百枚相当の内容である。卒業と同時に大学副手となる。

大正七年四月、農科大学は「北海道帝国大学」に昇格。彼は五月、南教授の世話で空知郡砂川村の土壌調査に当たる。その頃、畜産学科を二年前に卒業した石上数雄から「静岡県農会の技師はどうか」との話があった。石上は静岡県出身者。気候温暖な静岡県は、東京育ちで頑健な体でない横山芳介にとって、

魅力であつたろう。彼は北海道を離れることに決めた。

足掛け九年、青春時代を過ごした恵迪寮、大学に別れを告げ、横山芳介が再び札幌を訪れることはなかった。

静岡—小作官を天職として

横山芳介は静岡県で農会技師、小作官として働き、静岡市を終焉の地とした—という。

当時の北海道では、横山芳介が去った後の大正十一年（一九二二）、有島武郎が父から受け継いだ狩太農場（ニセコ町）を小作人に無償解放した。同年、富良野・磯野農場で発生した大争議は六年間も続き、小林多喜二が「不在地主」に描いている。同時代の静岡県でも、小作争議で血の雨まで降ったのか。「横山小作官」は地主、小作民の間に立って、何をしていたのか。

四月末、静岡市に出かけてみた。静岡地方の桜はとくに終わり、目にしみる若葉の季節。駅では早くも新茶を売り出していた。静岡市立図書館、県立図書館に足を運んだ。大正、昭和戦前の郷土史、農業関係の文献、資料を読みながら、静岡時代の横山芳介像が、おぼろげながら浮かび上がった。

農会技師から小作官に転身

大正七年（一九一八）八月十四日、横山芳介は静岡県農会技師として着任した。以後六年間、農会技師として、県内の農業

技術指導に専念した。

大正十一年（一九二二）四月、焼津出身の祝枝さんと結婚した。すでに三十歳を超えており、当時としては遅い結婚である。間もなく最初に男子、五人の女子が次々と生まれた。

農会は現在の農協の前身ともいえる静岡県農会では月刊誌「静岡県農会報」を発行していた。

横山芳介の初原稿「時勢は新なり」は、大正八年二月号に掲載された。続いて「春の歌」と「吾人は何をなすべきか」（四月号）、「この頃歩いて来た処のお話」（六月号）。以後は毎月のように農政、経営、増収技術、機械化などに健筆を振るい、常連執筆者となった。特に農業経営問題の論考が目立ち、大正九年は「小作農業の改善・序論」五回連載、同十年は「小作農業の改善・本論」四回連載のほか、「私案農業経営法」を十一年九月号まで長期連載、十二年は「農界時論」など八本掲載など、精力的な執筆ぶりである。

彼によると、静岡県は「大地主が少なく、争議も概して温和である。争議が温和なのは自然、人情の温和に原因もあるが、農産物が多種多様で、特に茶、柑橘、梨は有名。他の園芸作物も早出し出来るので他地方より価格面に有利で、農家粗収入は比較的潤沢。このため小作人も余程の事でない限り、小作争議を敢えてしない。しかし大正七、八年以来各地で小作争議が発生している」。

*

横山芳介に転機が訪れた。大正十三年（一九二四）七月に小

作調停法が成立。十月、内閣から静岡県小作官に任じられ、静岡県内務部勤務となる。

小作調停法は、小作争議や地主・小作間の紛争調停に対して一定の役割を果たした。「同法にもとづいて各県に置かれた地方小作官の役割は重要であった。調停幹旋のカギを握る地方小作官の働きによる大きかったからである。ちなみに静岡県の最初の小作官は県農会技師を勤めた横山芳介であった。彼は小作人の立場に身を置きながら県下の地主小作官の紛争調停に奔走した、という」(『静岡県史』通史編・第五卷)

当時の農林省視察報告の中に、「小作官横山芳介ハ数年来、本県農会技師タリシヲ以テ県内ノ事情ニ通ジ、農会其ノ他ノ各方面ニ連絡上好都合ナリ」「山田山梨県小作官、横山静岡県小作官共ニ県庁内ニテ重視セラレ居リ適任ナルガ如シ」などの記述が見られる。横山小作官の評価は高かったようだ。

彼の基本的な態度は「地主と小作人には優劣がなく、同等である」。今では当然の主張だが、当時の農村では違っていた。

「地主小作の協調は、双方の理解と敬愛に基く互譲妥協でなければならぬ。地主を尊敬しろ、然らば小作を愛撫しよう。これは協調ではない。協調を説くにかくの如き気持を以てするのは異端邪説である」。

深刻化する小作争議

昭和に入ると、農村の窮乏は深刻化、農家の生活はどん底に

おちいる。他県に比べると平穏だった静岡県でも、小作人組合が増え、大正十年の八組合が、昭和六年には九十二組合に急増した。小作争議も大正十四年の十件に対し、昭和七年には四十二件も各地に発生し、小作争議も先鋭化した。

横山芳介の周辺は騒がしくなる。当時の小作争議を、静岡県の農民運動資料、新聞紙面に探ると、横山小作官の名前がしばしば登場する。その一部を紹介すると――

「昭和四年(一九二九)一月、駿東郡金岡村(沼津市)の用水池建設に伴い、水利組合による土地取り上げで、小作人ら九人の争議が起こった。横山小作官、農民代表山口伝吉と小作農等が会合。小作農は全農県連の応援で耕作権擁護を基本に四〇日間闘う」

「同年二月、富士郡沼久保村(沼津市)で、小作農七五名が小作料減免で争議、小作調停会議に持ち込まれて吉原裁判所で調停が行われた。横山小作官、農民代表、地主代表が出席の会議中、農民組合側は赤旗を先頭にデモ、二十数名が検挙」

「昭和六年(一九三一)、志太郡東益津村(焼津市)で、地主側の立入仮処分に、小作農側も農民組合の支援を受け、横山小作官に調停を申し立てたが、地主側が拒否」

「昭和七年(一九三二)、駿東郡大平村(沼津市)で、小作側の五割減額要求に地主組合が土地取り上げ、年貢差押え。横山小作官の調停報告も不調に終わり、裁判闘争は長期化」

(『静岡県近代史研究』第十五号)

「突如警鐘を乱打、大挙地主を襲ふ」

遂に血みどろの大闘争となる

農作物は下落する。繭は近来にない大暴落という惨状に粟や稗や薩摩芋等を常食として辛うじて寿命をつないでいる浜名郡三方ヶ原村の農民袴田喜三郎氏外三十数名は、地主の長谷川忠士氏に対し交渉、長谷川氏は頑として応じないので数日前から村民大会を開いた。二十一日午前十時頃、突然警鐘を乱打して同志をまとめ大挙長谷川方に押し寄せ強談判、急報に接し浜松署から署員十数名馳せつけ、一方、県から横山小作官が急行、目下調停に努めている。しかも双方ともなかなか強硬で、容易に解決の見込みなく成行を深く憂慮されている。

（静岡民友新聞、昭和六年一月二十二日付）

薬に親しむ不遇の晩年

横山芳介は家族に、小作官を「天職」と話していた。

「余り丈夫でなかったのに、日曜日など富士郡方面の貧農の人達の訪問を受け、一人々々の苦情をきいて、いつも貧農の人達には神様とまで慕われていた」。昭和初期の四年間、横山宅で子守をしていた故・河田悠紀恵の思い出である。出張先で、困窮した小作人に旅費を全部置いて来たこともあった。

だが元来、頑丈な体の持ち主ではなかった。静岡県開催予定の小作官会議が、彼の病気で他県に変更のこともあった。過労が重なって薬に親しむ。それでも小作紛争に奔走したが、次第に病魔に体を蝕まれ、病床に伏すことも多くなった。その頃、

宗教家となった赤木顯次がしばしば訪れ、「人生は芸術である」と説く。真剣に耳を傾けるようになった。

健康の衰えで、農会技師時代から続いていた農会誌寄稿は減る。掲載は昭和八年が三回、九年は二回。米の統制批判の主張が目立つ。八年五月号掲載の「農村に残された資源は惜しみなく与へよ」では、働く農家の楽しみは晩酌であり、農家に自家用として濁酒の醸造を認めよとの主張。やがて病気を反映して、昭和十年の誌面には一回も見られず、同十一年の静岡県に於ける米作農業の特殊性（四、五月号）を最後に、雑誌から横山芳介の名前は消えた。

昭和十一年（一九三六）秋、晩年の横山芳介に、寮後輩の加藤俊次郎（昭和九年・農経卒）が静岡県庁で会っている。痩身、イガ栗頭。病気で弱々しく、頬の落ちた小さな顔は蒼く、眼だけが光っていた。「都ぞ弥生」当時や近況を話してくれた。

「学校を出たばかりは小説をよく読んだが……。この頃は芝居を見るのも大儀で、ラジオの落語がいちばん楽しみだ。赤木君か。彼は職業を転々して……。僕の許にもよく来て酒を飲んでゆく。夢のような気炎をあげるかと思うと、尺八を吹いて、行先も告げず出て行く」。

加藤は最後に、北海道に行きたくないですかと聞いた。

「学校を出てから一度も行っていないのですよ。手稲山や真駒内の牧場は昔のままでしょうね」。目を輝かし、懐かしげな表情でつぶやいた。

昭和十三年（一九三八）一月三十日、肺結核を患っていた横

山芳介は、静岡県音羽町の自宅で亡くなった。満四十六歳の若さだった。妻、小学六年の長男を頭に女児五人、すでに齢七十の母が残された。昭和二十年の静岡空襲で横山宅は被災、横山芳介の原稿はツヅラ一杯にあったが焼失した。

静岡・長源院の歌碑

歌碑のある長源院を訪ねた。寺は沓谷（くつがい）一丁目。静岡駅から東北に約五キロ、標高一〇八米という谷津山の麓にあった。山門の左に「葦酒不許入山門」の柱があり、なるほど曹洞宗の寺院である。

正面に瓦屋根の本堂、右手に鐘つき堂。山門をくぐり、由来を記した看板を読むと、寺は戦国時代の創建。駿府城にいた徳川家康が鷹狩りの際に立ち寄ったこと、下賜された葵の紋章入り印籠、駿府城代たちの墓もあるなど書かれており、「北大寮歌の歌詞を作りたる横山芳介等の墓塔を存し」とあった。いかにも歴史のある域下町の雰囲気を残す立派なお寺である。

横山芳介の墓は、山門左手の墓地内にあった。上から見えるように低く置かれ、御影石の上側に「横山家」。背後には「都ぞ弥生」の歌詞が彫られた黒い仙台石。でも長年の風雨のせいかな、ほとんど読めなかった。昭和三十二年の建立きっかけとなった河田悠紀恵は数年前、亡くなったと聞いた。



（静岡市、長源院境内の「都ぞ弥生」歌碑）

境内の庭の中、本堂に向かって左手に「都ぞ弥生」歌碑が建立されている。平成四年二月二十九日、新しい碑の除幕式が行われ、三女・川内純子（当時六〇歳）が孫娘を抱き、伊藤寿啓

静岡県北大同窓会長（昭和十五・畜産学科卒）と共に除幕。引き続き、旧制静岡中学で、長男・芳男と同期の鈴木脩造静岡県農協中央会長（昭和二十五・農学科卒）の音頭で「都ぞ弥生」を高らかに合唱した、と記録されている。

歌碑の文字は墓碑から拓本したもので、黒御影石に文字部分を白く着色し、歌詞が鮮明に読み取れるようにした。当初、本堂前のソテツ下にあったが、庭の整備で平成十一年、少し左に移し、台座を新しく据えたという。

碑の背後には梅、桜、枝垂桜が植えられ、北大同窓生による歌碑の由来が、次の通り刻まれていた。

都ぞ弥生の碑

平成十一年三月

この歌碑は、北海道帝国大学予科、恵迪寮の明治四十五年度寮歌、「都ぞ弥生」の碑である。

作詞者横山芳介氏が、北海道の新天地で学ぶ若者の燃ゆる想いを北国の美しい自然の移ろいや牧歌的田園の情景にこめて謳いあげたものであり、今日に至るまで北大同窓生の心のふるさととして歌い継がれ、旧制高等学校の三大寮歌の一つとして、多くの人々に愛唱されている。

横山氏は、卒業後、国の小作調停官として静岡県勤務を命ぜられ、昭和初期の小作争議の調停に尽くし、多くの農民の信望を集めた。氏は、昭和十三年、当地で没し、比処、長源院の地に眠る。

この歌碑にその由来を刻し、永遠に歌の心を遺さんとするものである。

静岡県北海道同窓生一同

【参考文献・資料】

- 寮史編纂委員会「恵迪寮史」
- 東京エルム会寮歌委員会「都ぞ弥生」改訂第四版
- 永井荷風「日和下駄」（講談社文芸文庫）
- 文武会・編「東北帝国大学農科大学」
- 恵迪寮委員会「辛夷」第1～5号
- 札幌同窓会「札幌同窓会誌」第1～4号
- 札幌市教育委員会「遠友夜学校」（さっぽろ文庫18）
- 「有島武郎全集」筑摩書房
- 静岡県教育委員会静岡県史「通史編「五」、資料編19「近現代四」
- 沼田誠「地方小作官と小作調停——横山芳介の場合」（静岡県教育委員会「静岡県史研究」第7号）
- 枝村三郎「静岡県における農民組合運動」（静岡県近現代史研究「第15号」）
- 静岡県農会「静岡県農会報」「農会」
- 長源院「長源院だより」
- 旧「北海タイムス」「静岡民友新聞」「静岡新聞」その他。

「都ぞ弥生」 作曲者の赤木顯次さん

高 井 宗 宏

(昭和三十一年入寮)



(歌碑除幕式での赤木顯次さん(右))

赤木顯次さんが最後に北大を訪れたのは、昭和三十二年(一九五七)九月二十四日に開催された「都ぞ弥生」歌碑の除幕式である。この歌碑は、前年の北大創基八十周年記念事業として企画され、各方面から寄せられた六十万円程の募金と寮生の地均しなどの労力奉仕によって完成した。茨城産の白御影の巨石に黒御影石の板をはめ込んで作られた歌碑は、今こそ道の間際に柵もなくそとと建って威圧感がないが、当時は恵迪寮舎南側の原始林中央にあつて「雄々しく聳えるエルムの梢」に包まれ、丸く盛り土をした中央に建つてすばらしい景観であつた。

除幕式は、作詞者故横山芳介さんのご夫人と長男芳男さん、作曲家赤木顯次・乙羽ご夫妻を主賓とし、杉野目晴貞学長の主催によって進められたが、式典始めの北大交響楽団による「都ぞ弥生」の演奏も荘重であつたものの、除幕後に寮生が歌碑を囲んで歌つた都ぞ弥生とストームは、参加した一人として感極まつたことを覚えている。

赤木さんは、その前日には都ぞ弥生の指導に、除幕式の夜は

寮主催の祝賀会に、翌日にはHBCラジオによる赤木・松山茂介（藻岩の緑作詞者、東京から電話で参加）先輩らと寮生を囲む会の中継放送にと三日続けて恵迪寮を訪れられた。これらの経過については「恵迪の青春」（恵迪寮同窓会刊、一九八六年）と「恵迪寮よ永遠に」（閉寮記念文集編集委員会刊、一九八二年）に掲載済みであるから触れない。

その五日後、赤木さんは、応接・折衝に当った筆者ら寮生四名を招待し、有り余るほどの鳥の水炊きをご馳走しながら、寮生が歌う後年の寮歌を聞き、気候にみずからの人生と宗教について話された。その時の内容ははつきり覚えていゝるわけでないが、その後、筆者に届けられた赤木さんの追悼文集「志のび草」（P.L出版社、一九五九年刊）を資料として思い出しながら、赤木さんの人生を振り返って見る。

一 生い立ち

赤木顯次さん（明治四十一年入寮、以下では登場者とも敬称略）は、明治二十二年（一八八九）十月一日に生まれた。父親の顯吉は小樽市稲穂町で名の通った医院を営んでいたから、顯次は経済的に恵まれた環境で育ったが、生母が早世したのか継母に養育されて、家庭・精神的には好ましい話が残っていない。例えば顯次は子供の時に難聴となったが、当時の医療事情なら何らかの病氣から難聴になる事例が多いにも関わらず、継母のせいとする回顧談であるからである。また、ずっと「大酒

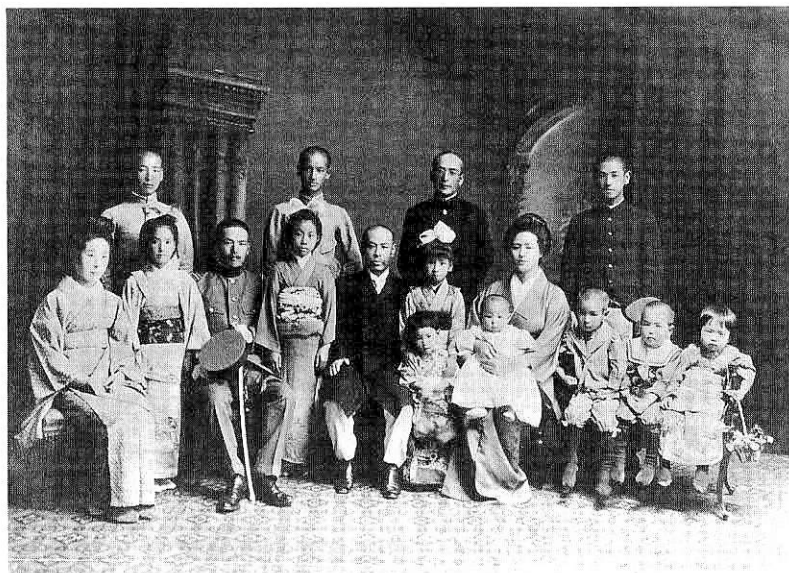
によって気を紛らわした理由には、家族内のまづい関係が影響していたと思われる」（長男稔の回顧文）と言う表現も残っており、後述するようにこの問題が顯次の精神性に影響を及ぼし、人生まで変えたことは間違いないようである。

しかし、子供の頃は「顯ちゃんには相当華やかでした。紺がすりの着物を下前さがりに召され、黒モスの兵児帯をだらりと結び、近眼鏡の奥には柔和なお目が光っていた」などという近隣の人の話があつてエリートの道を進んでいたと考えられる。

尋常小学校を終えると、地元の庁立小樽中学（一九〇二）や札幌の私立北海中学（一九〇五）がようやく開校する頃のため、叔父を頼って上京して京北中学に入学している。中学ではハーマニカで頭角を現し、中学を代表して全国大会に出たり、御伽断で有名な巖谷小波主催の会など種々の会から呼ばれて演奏したりの活躍をしている。都ぞ弥生の作曲後に「作曲手法に沿っていないから専門家に見せたら」という批判が起つても、みずからの自信作として抵抗できたのは、このハーマニカを使った活躍が自信となっていると考えられる。

顯次が生まれた年（一八八九）は、大日本帝国憲法、衆議院と貴族院令が公布されて、ようやく近代日本国家が発足した年であるが、早々に日清戦争（一八九四）、日露戦争（一九〇四）などに直面したから、政党設立の混乱や不可解な政争があるものの、当時の国民がこぞって国家認識に目覚めた時でもある。

特にその頃の北海道は、琴似と滝川（一八八九）を始め、永山・東旭川・当麻・江部乙・秩父別・納内（一八九一―九五）



(学生時代の赤木顯次さん（後方右から二人目）とご両親、兄弟たち）

にそれぞれ四百戸以上の屯田兵が入ったり、雨龍農場などの華族農場が拓かれたり、幌内・幾春別炭鉱と今日のＪＲ北海道の基幹となった鉄道線を運営する北海道炭鉱鉄道会社（北炭）が設立（一八八九）されたりして、開拓が最も進んだ時であった。

さらに札幌農学校は、この社会情勢をバックにして農学単科校から総合大学、すなわち帝国大学昇格への陳情を成功させ、時計台一帯の校舎を現在の農学部地区に移設して、明治四十年（一九〇七）に東北帝国大学農科大学となった。この運動のなかで刊行した文武会編「札幌農学校」は、クラーク博士を始めとする外国人教師の高邁な教育から、北海道の豊かな自然、学生生活までを美文で綴っていたから、当時の青少年に好評となって再販を重ねた。このように、道産子でなくとも北海道への憧れが強い時期であったため、赤木は東京の大学を目指して東京の中学校に在籍していたが、親のいる北海道と言うこともあり、昇格して二年目の農科大学に帰ってきたと予想される。

北大に入学した赤木は、当時はまだ秋の入学であったため、明治四十一年（一九〇八）九月九日に恵迪寮に入舎するが、玄関横の小部屋に宿舍係として住んでいた英語教師の有島武郎に出会う。当時、宿舍係は、予科長が勤める舎監とは別に、寮で寝泊りして寮生の相談に当たっていた。有島寄宿舎係の前任者は、有島に農場開放を勧めた森本厚吉であり、赤木が入寮する年の春に交代している。

都ぞ弥生の作詞者横山芳介は、有島の指導で文集「辛夷」を刊行するなど強い影響を受けているが、赤木はこの面ではあま

り関わっていない。むしろ茶目っ気があって人気者、長髪バンカラで予科の名物男、新入生歓迎会のアジテータ、運動会の応援団長という評価や経歴からも頷けるようである。しかし、後述するように有島に私的な結婚まで世話になっているから、強い絆で結ばれていたのは間違いない。なお、有島宿舍係の次は、一九〇九年十一月から畜産、特に馬の研究で知られた高松正信が入るが、赤木が畜産学科第一部（畜産系、指導教官：山根甚信）に進んだことと無関係でないように思える。

赤木は、筆者らに「中学時代からよく酒を飲んでいたから、大学では学校にも行かないで落第した」と回顧された。一方、友人達の文書は、ほとんどが「都ぞ弥生の制作に熱中したばかりに落第した」と譽めている。確かに作曲時の苦勞は大変だったようであり、「作りながらも、さんざん横山と喧嘩した。作詞にも文句を付けて直させたり、曲に文句を言われて直したり、そういう意味では全く合同で作ったようなものだ。遂には熱中のあまり寮を出てオルガンのある家に下宿し、学校などは殆どサボって作った。」と赤木本人の回顧録がある。

しかし、在学八年となると、その他の年の理由が問題となる。追悼文集から理由を探すと「町に飲みに行つて寮の門限に遅れて締め出されたことがあった。やむなく塀を乗り越えて自室に戻ったが、越えた塀の下がストロブの灰捨て場だったから、自室まで足跡が残つて寮委員会の小熊捍（第二十五、二十七期委員長、元国立遺伝学研究所長）に発見され、委員会の場に呼び出されて禁酒を誓わされた。

ところが部屋の間で間もなくビールを飲むことになり、思案の挙句に窓から頭を出して飲んで室内禁酒の誓いを回避しものの、また委員会に呼び出されてしほられた」とか、「赤木の部屋に行くと机も椅子も飲み代に化けていた」などの文が見られ、天真爛漫に酒と付き合つたことが原因となる。

したがって「卒論は神戸牛の肉質に関する研究で、肉の組織観察をやつていたが、思想的悩みか、家庭的悩みか分からないが、突然に赤木が登校しなくなったので下宿を訪ねた。結局、私と一緒に住んで自炊することとして論文作成に着手し、一気呵成に作り上げて一緒に卒業した」という級友・小松八郎（畜産二部：獣医系、大正五年卒）の友情が必要であつた。

これについて長男稔は、「父は酒を嗜み、そのため乱れることも多く、幾多の失敗や奇行を残した。父の酒癖について、私は物心がつき、考えを深めるにつけて深く悩みましたが、遠く父の生い立ちや環境を推察し、その由つてくる理由を殆どつかんで解決しました。即ち、父は継母に育てられ、その義理関係に加えて財産相続などの複雑な関係が絡み、青年血氣の身として精神的な悩みの処理が酒への逃避という形で表れたと思われる。（以下の文は後述）」と説明している。

二 教育者から宗教家へ

大正五年（一九一六）七月に農科大学畜産第一部を卒業した赤木は、岩手県の大平牧場に勤務するが、本人の回顧録による

と「血統のある牛に入れ替えようと、ろくでない牛を売り払ってしまつて」不仲となり、就職一年に満たないで退職する。その頃は、二年前に始まつた第一次世界大戦の真最中であるが、期せずして日本経済は大戦景気に沸いていた時であるから、いろいろの思惑があつたのであろう。

退職後上京して食品化学の翻訳や帝国書院で中学校教科書の編纂手伝いの仕事で暮らしながら、「カインの末裔」を刊行したばかりの恩師有島を訪れ、いろいろと身の上相談をしている。その中で「まず身を固めて将来に期そう」となり、有島の進めで大正七年（一九一八）に終生連れ添う乙羽と結婚した。

これを契機に、中学校の博物学（理科）と英語教師の道を選び、山口中学を振り出しに、広島県の日彰館、岡山、東京豊山の各中学を歴任する。札幌農学校の卒業生から全国の中学校の教師となった人が非常に多く見られ、札幌農学校が日本の中学教育をけん引した功績を上げねばならないが、赤木もいづれかの手蔓を頼つたと考えられる。遂に昭和四年（一九二九）四月に東京中野中学校の校長に就任する。しかし、一方で赤木の宗教生活はますます深まり、「福田海」という新興宗教をやめて「ひとのみち教団」に入信し、翌年に教師格の准祖にまでなつたから、遂に中野中学校長を退職せざるを得なかつた。

この宗教への接近と中学校教員から宗教家への転向は、前項の最後に引用した長男稔の後続部分によって説明される。

「飲酒の癖は、それが単なる逃避に終わらず、人生に対して自信を失なわしめたり、虚無的にならしめられたりして、一家

の生計を支えながら、或いは各種の宗教を求めながら、恐らくは次第々々に絶望の淵に追い詰められたと思えます。父の入教当時、私はまだ幼少の身でありましたが、当時の環境を検討してみますと、一家は物質的にはともかくも、精神的には正に破産に瀕しているながら、虚勢を張つたり、虚無的になつたり、自暴自棄の一手前まで行つていたのであり、それに飲酒が悪循環的に作用していたと考えられるのです。したがって、入教し、教師を拝命し、教祖に愛されて教団の最高幹部に取り立てられたことは、赤木一家が救われ、再生せしめられたと言つて過言でないでしょう」

その後の赤木は専ら宗教分野で活動しているが、本誌では経歴を述べるに留めて宗教の内容には触れないこととする。

昭和五年（一九三〇）ひとのみち教団の准祖となつて普及に奔走する。昭和十一年に脳溢血に倒れ、数年の闘病後に右半身不随となつて快復するが、その間に教団は解散せられ、警察に追われて昭和二十年（一九四五）には六十五日の留置場生活を経験する。その間は結び体という裏組織でしのぎ、表面上は信者が経営するみやま商会の代表となつて暮らしを立てた。

終戦によつて信教の自由が認められると、昭和二十一年（一九四六）に「PL教団」を結成してひとのみち教を継承し、赤木は筑後吉井、東京、別府、小樽と各支部の長となつて組織作りに専念するが、二十四年に教祖の要請を受けて沼津にあつた本部に戻り、二十六年に副教祖格の祐祖となる。昭和三十年（一九五五）に富田林に本部を移設し、本部で活動を続ける。

昭和三十二年（一九五七）に、本文の冒頭で述べた都ぞ弥生歌碑の除幕式に参列し、本部に帰ると共に癌が発見されて闘病生活に入る。子息が勤務する大阪の病院で万全の治療を試みるが、遂に昭和三十四年（一九五九）八月二十一日に六十九歳の若さで逝去された。赤木顯次にとつて、三大寮歌「都ぞ弥生」の作歌は彼の人生の大きなエポックと言えるが、その歌碑除幕式への参加が最後の晴れの日となったことに不思議な縁を感じざるを得ない。

三 正調「都ぞ弥生」をめぐる

赤木は、筆者が編集委員長となった雑誌「恵迪復刊四号創基八十周年記念誌」（一九五七）に「私の作曲した都ぞ弥生は、全国で歌われている校歌、寮歌の中でも優秀なものの一つと言われてきたし、一般成年男女に愛唱されているものだが、あの歌を作曲されるには随分と苦心されたでしょう。どうか思い出を語って下さい」とたびたび言われたし、講演などに出かけると作曲談を語れと屢々責められたものであった。しかし、私は、そんなに言われると甚だ恐縮するの外のいのである。というのは殊更言うべきほどの事もないからなのだ。」と書いているが、他方で都ぞ弥生の歌い方に疑問を抱いて現寮に物を言い、寮生と接触した回数が数回に及んでいる。

無論、三大寮歌と言われる名歌であればこそであるが、卒業して幾年も経過してから、現寮とこれほど関係を持ったOBは

少ないようにも思われる。この機会にこれらの経過を整理しておきたい。

明治四十五年（一九一二）春、横山と赤木は都ぞ弥生が寮歌に当選して三円の賞金を貰い、買えるだけの饅頭を買って仲間で食べた。応募するまでの徹夜続きの苦勞、特に作詞の横山との幾度とないやり取りがあったものの、当選祝いの饅頭をわいわい言つて食べた一瞬に満足感に変わったという。

なお同年に、最初の寮歌「一帯ゆるき」から「藻岩の緑」までの四曲を収録した最初の「恵迪寮歌集」（北大中央図書館蔵）が出されているが、現寮歌集等には一九二八年が初の刊行となつていて間違ひがある。寮歌はその後毎年制定されたが、北国の自然を余すところなく歌い上げた都ぞ弥生は、いつのまにか飛びぬけて愛唱されるようになったと考えられる。

昭和五年（一九三〇）十二月にコンピアレコードから都ぞ弥生と環瑠みがくの二曲を収録したSPレコードが出された。さらに翌年六月七日NHK札幌放送局創立三周年記念番組で都ぞ弥生、生命の闘争、魔人の呪い、環瑠みがくの四曲を放送した。また、NHKは第二次大戦の終戦の詔勅が伝えられた八月十五日の夜に都ぞ弥生を放送したのを始め、学生愛唱歌として色々の番組で流すようになった。

このようなことが契機となつて、都ぞ弥生は広く全国に愛吟されるようになったが、寮内で歌っている正調とは異なつたテンポや異なつた譜面の曲が広まつてしまった。その理由は、コンピアレコードの場合、SP版の片面に収録できる時間内に

歌わねばならないから、涙を吞んで倍のテンポで歌ったことが記録されている。また、ラジオの場合も同様な時間制限からテンポをかえたことも予想できるし、NHK専属の指揮者が自由に編曲したことも理由となっている。さらには、本家である恵迪寮すら、一息二文字という極端に長いテンポの歌い方も流行らせた。これには諸説あるが、私は戦争中の学徒出陣の際に無言の抵抗・意思表示の手段として生まれたと聞いている。

宗教家となって全国を駆け巡っている赤木は、家族や周囲の人に教えられてラジオから流れる都ぞ弥生を聞くが、作曲した時と異なる歌い方に気付く。しかし、寮歌の発表当時に「この曲はあまりにも乱暴だ。東京の音楽学校に送って仕上げたらどうだ」と忠告されても、曲はきれいに直してくるだろうが、同時に感動は混濁してつまらなくなるだろうと考えて原作のままにしたから、曲の上でも悪かったし、人間的にも後悔することとなった。

ところが作歌時の感動がどうも伝わらないと考え始め、赤木は一九四一年に寮の委員宛に譜面を送った。そうしてもNHKラジオで聞かれる曲が変わらないため、再度、譜面が間違っていると呼び、一九四六年に大阪で寮生と面談し、さらに翌年の歌碑除幕式に参加して指導することとなった。しかし、現寮生が歌う曲を聞くと即座に「これが正調だ」と認め、直前に送ってきた譜面と合唱テープの見本を取り消された。この間の経過は前掲の「恵迪の青春」に詳しく述べたが、作曲家としての感慨は極めて大きかったと考える。

筆者が恵迪寮同窓会の事務局を手伝って二十年近くなるが、その間に五名以上の方から、仮名の違いと譜面の違いを訴えられて対応に困っている。現在、恵迪寮で発行している寮歌集は、一九八六年以前の曲について水野一、川越守による校閲・編曲がなされ、その顛末を巻末に記載している。そのため、作詞作曲家から「意味、表現の取り違えだ」と言われるのも当然である。その点、みずから恵迪寮に乗り込んで確認できた赤木の行動も肯けるものがあるが、その都ぞ弥生も作曲技法の点から大幅に修正されているため、赤木顯次さんは黄泉の国で心から残念に思っていると考ええる。



赤木筆の色紙 「尊き野心、左手、赤木生」

歌碑除幕式の際に恵迪寮に寄贈されたもの
(恵迪寮同窓会蔵、北大学務部寄託中)

二〇〇〇年度開識社講演会

日時 平成十年十月二十八日 十五時 開講
会場 北農健保会館（札幌市中央区北四条西七丁目）

『恵迪寮と日本人』



講演者

向井承子氏

（略歴）

一九三九年（昭和十四年）、東京都のご出身。
北大法学部卒業。著書に「北大恵迪寮の男たち」「医療最前線の子供たち」などがある。フリーライター、ノンフィクション作家としてご活躍。

厚谷 恵迪寮同窓会の開識社部会を担当しております昭和三十年入寮の厚谷でございます。

今日は北大のご出身で、ノンフィクション作家としてご活躍の向井承子さんをお招きいたしまして講演会を開くということになったわけですが、開識社というのは、一八七七年にクラーク先生のご指導でできたといわれております。それが一九三〇年

代までずっと続いてきました。その後戦争をはさんで中断されましたが、戦後復活し、昭和二十年代にも何回かあったと聞いておりますが、その後は殆ど行なわれませんでした。そして平成四年（一九九二）に私も恵迪寮同窓会の主催で第一回の復活開識社の講演会を開いております。これは我々恵迪寮のOBだけではなく大学のOBも含めて、いろいろな知識・経験を広く社会に伝える、あるいは訴えていくというようなことを目標とした、新しい開識社のスタートでした。皆様方のますますのご支援をお願いいたしまして、簡単ですが開識社としての挨拶にさせていただきます。

向井 向井と申します。今日は開識社の大変伝統ある集まりにお招きいただきまして、本当に光栄に思っております。

講演について初めてお電話を頂戴したのは、『北大恵迪寮の男たち』という本を出して間もなくであったと思います。本当に私は札幌市が大好きですので伺いしたかったのですが、母の介護の最後の時にあたっておりまして、自分の身をもたすのが精一杯という状況で、やむなくお断りさせていただいたという経緯があります。

それから一昔経ちまして、ようやく今回お訪ねすることができるようになりました。その間にいろいろなことがあったわけですが、思い出すと本当に時間の経つのは早いものだと思います。そういうことをすべて含みながら、私語りとも言いますか、今日お話をさせていただきます。

恵迪寮で私は戦後史というのを見せていただいたような気がしました。日本人全体の中で恵迪寮の、しかも少ない戦後集団として一つのキイの方にお会いしたことなんです。今日は、それを通して考えたことを中心に語らせていただこうと思つてこういうタイトルにしたのですが、やや大仰なタイトル

になったかなという気もしております。

先ず、「お前はどのような人間なんだ、なぜ恵迪寮なんだ？」と尋ねられたらどう答えようかなと思つて、私自身の北海道との関わり、育ち方みたいなものを最初にちよつとお話させていただきます。

私は一九三九年の一月に東京で生まれておりまして、一九四五年にまだ国民学校といわれていた頃に、東京のほうで入学することになったのです。しかし、四月十三日の空襲で家が丸焼けになりました、両親が北海道出身だったものですから、そのまま両親に連れられて、ちゃんと準備を整えた疎開ではなくて、札幌まで親戚を頼つて流れ着いたというのが一番正しい言い方かなと思います。

あの頃はご存じの通りの時代ですので、日本中が貧しかったのですが、札幌の方に引き受けていただいて、食べ物を含めて、乏しい物を分かち合いながらも、兄が栄養失調で亡くなりました。その時も赤ちゃんにあげるミルクを札幌の方から分けていただいたり、「一杯のかけそば」というエピソードがありましたけれども、本当にそんな感じでした。

けてしまふのですが、本当に自然と触れ合っていたような気がするのです。

私は北四条西十一丁目に住んでおりましたので、北大が非常に近うございました。それで北大の中に遊びに行つて、北大の榆の木に耳を付けますと、雪解けの頃には榆の木の中の水が上ってくる音が聞こえるような気がするのです。

ここに専門家の方がいらつしやるかどうか分かりませんが木の中に音が聞こえるということが本当にあるのかどうか、あるいはたつた六才か七才の子どもだから、自分の春というものに對する思い入れと共に、木の中の音を春の音として聞いてしまつたのか、そこは自分でもよく分からないのです。

雪解け水を吸い込んだ土の中から、水が木の中の上ってくる音があつて、そこにじーっと耳をつけて一日いるとか、北大の農場の中に迷い込んで厩舎の中に入つたり、豚の赤ちゃんが走つているのと遊んでいたり、ある時は草の中に寝ころんでいたりして真つ暗になるまで帰らなかったものですから、親が随分心配したらしいのです。気が付きますと、北大というのが私のお庭になつていたような気がします。

あのまま東京にいたら、自分の中にこういう感性というもののは芽生えなかつたらうと思います。両親が札幌に故郷を持つていて、札幌に来て自然と出会つて、自然に癒されながら、いつの間にか土地に馴染んでいつて土地の子どもになれたという、そういう時期があつたのです。

自分がそういう感覚を持つようになった源流というものをもう少し探つてみますと、両親の生い立ちというか自分の中にある血とか、あるいは私はこの頃人間というのはいろいろなところに記憶があるのではないか、記憶ごと受け継いでいるのではないかと思う時もあるのです。二つの拮抗する両親の北大に對する思いというのがあつたわけです。それが理解できないながらに私の中にあつたのかなという気がするのです。

それは父方と母方の非常に分裂した關係でした。父方は、私の祖母の兄が札幌農学校ということで、また叔父さんとかいゝろいゝろな人たちにも北大出身者が多かつたものですから、それで北大とか農学校以來の源流というものが、悪くすると理想的な教養主義的なものがあつて、随分地に足がつかない會話をしてゐる人たちだなというのが子どもの頃にあつたわけです。

なぜそういうふうになるようになったかという、母を通して得た私の皮膚感覚なんですから、母方のほうが、これまた複雑な北大との縁があるのです。北海道庁に勤めていた父親が早く亡くなりまして、母が八人兄妹で長女だったのです。昔は母子家庭で子ども八人という、娘たちは働かなければいけないし、それから夫を失つた妻は、何らかの形で働かなければいけないということで、下宿屋さんを始めたのです。それが北大生相手の下宿屋さんだったのです。

ところがそうやって勉強している人たちは、泣く泣く小学校で終えた母から見ると、とても羨ましいことでした。家の中には常に寮歌が満ち満ちていたんだそうで、それがとても懐かしい

歌ということになりながら、やはり向学止みがたく、結局母の上から三人の姉妹が遠友夜学校に通うことになりました。その遠友夜学校でいろいろな方たちに出会って、母の妹二人はそこで恋をして結婚をしてということになりました。

実は、ここで先ほど分裂したと申ししたのは、母は遠友夜学校で学んだということとを北大の人たちに言うなというのです。私などは戦後育ちで民主主義であっけらかんと育っていますので、どうしても分らないんですけれども、母は「あなたの恥になる」と言うのです。「どうして？」と聞きますと、「それは貧しい子女のための教育の場であつたのだから、あなたは貧しい子女の子どもだということになるので、それは言わないほうがいい」と言うのです。

途中から言わなくなつたのですが、この本の後書きに遠友夜学校という言葉を書いたのです。そうしたら、もう九十才だった母がすごく悲しみました。私は親不孝をしたとは思わないのだけれども、もしかすると、たとえその北大のロマンといえども遠友夜学校といえども、社会の階層というものを引きずっているわけですので、やはりそういう傷というものがありながら、だけど「ここは有島さんが始めたのよ」とか「私は恵迪寮のこの歌は何番まで歌える」とか、そういうことをすごく誇りにしているという、心の中で複雑なものがトグロを巻いているような感じというのがありました。

でも子守歌として私は結局母が大好きだった啄木の歌をいつもいつも聞かされて、それと同時に寮歌をいつも歌っていました。

た。戦時中、「敵機襲来」というと防空壕に飛び込むのですが、私がおびえると『都ぞ弥生』を歌ってくれるのです。どうして空襲の下で『都ぞ弥生』を聞かなければならないのか分からないのですが、そういう妙な育てられ方をしたなという感じがしております。

恵迪寮のことに關しましては、私は北大の中を遊び場にしていたものですから、本当にあの辺はよくうろろとしておりました。そして、寮生の方と私とはどこか重なり合うところがあるのではないかと思つたのです。故郷を離れて、特に明治から大正にかけての初期の寮歌の頃には、この北海道の寒い中で、何らかの理念とかロマンとか現実と少し距離の違つたものを見出しながら、自分と等間隔の中にそれを引き入れて自分を育てていった人々の思いというようなものが、子ども時代から私が寮歌に感動したものと同じようなものかという、大変恐れながらそう思つたのです。

私自身は、とても原始的な現象的なものとしてそれを身に付けていたわけですが、非常に複雑な環境、精神形成という意味では、分裂しながら一緒になつたような感じだったので。戦後、すべてを失いながら父に連れられて札幌にまいりました時に、父が私にいつも歌ってくれたのは、「昼でも夜でも牢屋は暗い」とか「赤旗の歌」とかで、そういう歌が私にとつての子守歌だったので。

そして母のほうは、相変わらず恵迪寮の「寮歌」を歌ってくれているという子ども時代の中で、自分の求めるものとしては、

本と恵迪寮を中心とする歌とそして自然と、そういうものしかなかったなと。そうしながら、いつの間にか土地の人間として根付いていったのかなという感じがあります。これは私が十才か十一才になるぐらいまでの自分の精神の内側なんですけれども、それが未だにちよつとしたきつかけで自分の中に出てくるのです。

恵迪寮同窓会事務局の佐藤さんから、『恵迪』という本を三冊、創刊号からお送りいただきました。その中に、今日来る時も持つて来て飛行機の中で、有島さんのこととか新渡戸さんのことなど、ずーと読んできたのですが、その中で「広井先生のこと」というのがありまして、それを読んだ時に、今お話したようなことがぎくつと私に戻ってまいりました。

母は姉弟を養うために、手宮鉄道に乗って小樽に働きに出たのです。その話は終生しておりまして、山下汽船があつて、その寮で働いたら食べ物ももらえるし家族にも送れるしということ、十何才から必死に働いたらいいんです。

父は同人雑誌を始め、歌とか小説とかそういうのを載せていた頃でしたので、北海道新聞社から出た『北海道文学史』という本の中の「黎明記」という所にも父の名前が出ています。父は黎明のごとく消えた人間なのですが、ところがその父が母を手宮鉄道に乗って送るんです。そしてまた手宮鉄道の駅で待っているんです。

それは父が亡くなる直前まで私には言わなかったことなんですけれども、母が早くからボケちゃったものですから、母から

は何もそういうことは聞けなくなった頃に、父が「手宮鉄道って懐かしいよ」と。母が一族を背負って働きに出ている姿を見た時に、本当に「文学に出てくる薄幸の乙女という感じがしたものだ」と恰好の良いことを言っていました。

そういうことで、小樽とか手宮とかいろいろすることが懐かしく私の中に響いてまいりました。私自身は知識としてはなく自分の体感として北海道、そして北大、必ずしもそれは北大礼賛ということではなくて、北大を中心にしながら営まれてきたこの北の文化、そしてまたそれに抗っていた人々もいて、様々な寄り合った人間の言葉とか背中とか表情とかいうものが、私の中に蘇ってきたような感じがします。

いきなり時間を飛ばしますが、私は北大に昭和三十二年に入っております。当時北大の同期であつた女性たちが、「延齢草の会」という素敵なお名前を付けて活動されていますが、今日ここにも何人もお見えになつていますので、私は顔を思い浮かべながらお話をさせていただきたいと思っています。多分一人ひとり違う女子学生としての印象というのがあつたと思いますので、また北大に入つた時の私に恵迪寮がどう映つたのかということをちよつとお話してみたいと思います。

先ほどのような経過を通じていつの間にか札幌の人間になつて、そして札幌北高という学校を出まして、北大に入りました。その時は、私は完全に札幌の人間です。その頃は恵迪寮というものもよく分からなくて、母が何かこちゃこちゃ歌を歌ってい

たなというぐらひの話で、もう遠くなっているわけですが、突然皆さんが中央ロンの所で歌を歌っている姿を見たのです。

訳の分からないことを口走って、言ってみると野蠻、アナクロニズム、男尊女卑と、きりがなく出てきますので、とてもじゃないけど否定すべきものではあっても肯定すべきところは一つもないというのが、私の当時の印象でした。十八才から二十才までの私の気持ちの中では、恵迪寮というのはまったくそういう存在でありました。「何で、あんなに大きな声を出さなくちゃいけないのか」、大きな声を出すというのはやはり男を誇示するから出すのだろうと思ったのです。

それから、本当ならちゃんとした恰好ができるにもかかわらず、わざわざ汚い恰好をしてみせるというのは、ある種の驕りであると私は分析したわけです。男尊女卑というのは、女子には門戸が開放されていないわけです。あそこは聖域ということとで、私は一度入っていたずらをしてこっぴどく怒鳴られたことがあったのです。その時に「女子の入る所じゃない！」と言われたのを覚えていまして、多分皆様のご先輩だと思うのですが、ここにももしかするとおいでになるかもしれないですけれども（笑い）、それで「これは男尊女卑だ、とんでもない所だ」という感じがしました。

ただどこか懐かしさというものが多分あったと思うのですが、学生時代を振り返りますとおそらく何も無い、否定の対象ではないというのは事実だったと思います。

何でそんなに否定しなければいけないのかという理由をちょ

つと考えてみました。私の時代は、皆さんご記憶にあると思いますが、大学には女性の姿というのはものすごく少なかったのです。私が「北大を受けたい」と言った時に、当時それだけでなくも貧しい時代ですから、女が学校へ行けばそれだけ家の助けにもならない時間が増えるわけですけれども、それ以上に父が言ったのは「嫁に行くか、北大を受けるかどっちかにしろ」ということです。

あんなにリベラリズムを説いてマルクシズムまで懂れていた父に、四年制の学校を受けると言ったとたんに「嫁に行くか、大学受けるか。大学へ行ったら一生嫁に行けないと思え」なんて言われたというのは、随分ひどい時代だったと思います。そういう中で、女子が何かをするということの壁として男があった。その男の壁をとにかく切り崩す、乗り越えるというののはやはり大きな目標であったと思うのです。

そうはいいながらも、私自身は男兄弟の中で育っており、しやかりきに声を大にして「男女平等！」と叫ぶというタイプではなかったと思うのです。ただ、その後に市川房枝さんの所に流れ込んで、七年間というものを、今で言う「男女共同参画」の本当にまだ夜明け前という時代ですけれども、その時代の活動に身を呈してしまったというのは、おそらくそういうものが燃えていたのかなと思ひ出すのですが、あまり大きな声で叫んだりするタイプではなかったと思います。

ただやはり男尊女卑というのは許しがたかった。そして男の人たちが懂れて言うロマンとか、男の人の文脈中で完成してい

る文化、その中に女性を入れるという時は、私の目から見ますと常に従属的な感じでしか入れなかったのです。文化というのは男の人でできているもので、その中で男の人は自分を謳歌して、こんなにバンカラぶったり、こんなにロマンぶったり勝手なことを言っていられるというところで、一度否定しなければいけなかったのです。

ですから、女性を縛るものとして、社会の中での男の位置というものを否定しなければならなかったという第一段階があり、第二段階には、それをロマンとして掲げて走っている男の子なんかどうしようもないという、二重否定の対象として恵迪寮がおかれたというあの頃を思い出すと、そういう感じがあります。そして、それ以上の何の関心もなかったので、恵迪寮の方には何らお知り合いがいなくて、そのまま時間が過ぎてしまったということになるのではないかと思います。

その後私は北海道庁に勤めましたが、すぐ辞めてしまい、東京の市川房枝さんの所に行きました。そこでは女性問題という形で関わることで、自分の問題として関わる時の時間の落差というものがありました。女性問題という時は、やはりある種、歴史の中で今ある立場とか、女性の位置付けというものに対して、運動としていく時には最大公約数的なものに力を入れていかなければならないということがあるのですね。

ところがその当時の私は、早くから寝たきりになった母とその母を抱えて倒れてしまった父という、二人の存在を引き受け

ることになってしまったのです。そうした中で、日本には社会保障なんてないとか、やはり男の人がつくってきた文化の中で、それを切り崩さなければならぬのは確かなんだけれども、それを切り崩すためには、一つひとつジグソーパズルを埋めるように人間関係をつくっていった、それを土台にしながら地域社会というものをつくっていかねければいけないんだと思った時に、大きな声でものを言うことの大切さは分かりながらも、大きな声で言っているだけではできないこともあるというふう

に、次第に気付いてしまったのです。

七十年代の中頃からそういうことを思うようになって、それには市川さんの所を辞めて、自分でものを書かなければいけないと思うようになったのです。その、ものを書いた最初のきっかけというのが、私の子どもが病気になったことです。

病室には畳一畳ほどのベッドが置かれて、特に慢性的の病気の子どもたちは人生のすべてをそこに置かれるために、病院の中の慢性疾患の子どもたちには、早くからイジメの問題が起きていました。日本は高度経済成長をひた走っているにもかかわらず、小さな者、弱い者には一切時代の関心というものが向かない。お金ですべてが解決できる。ハードなものさえ考えていれば、本当に人間の心の内側なんかどうでもいいというような状況が耐えられなくなりまして、それで子どものために書いたというようなことなのです。

原稿を書いて出版社に持ち込むのですが、その前に書店でいろいろな本を手に取り、私が気に入った本を書いている所の電

話番号と編集者の名前を写して電話をしたのですが、電話をしては断られ電話をしては断られてした。でも一つの出版社に出会って、子どもを背負ってそこに行って、何とかこの子のために書きたいと。でも原稿はほとんど書いてなくて話だけに行ったものですから、あきらめちゃったんですけれども、それから初めて本当に重箱のすみから世の中を見なければいけないんだということを私の仕事にして、重箱のすみを辿るような仕事の仕方をしてきたのです。

七十年代終わり頃からそういう取材を始めるようになり、八十年に入った頃に女性の生き方を追った『女たちの同窓会』という本を書いたのです。その本を書いた時に私はちょうど四十才になっていましたけれども、自分のそれまで女性として生きてきた、結局ものを書いたりインタビューするということは、自分すべてをそこにぶつけるわけです。人間の言葉というのは一つひとつ自分から出てくるわけで、借り物の言葉ではありませんから、自分の四十年の歴史というものを引きずりながらインタビューして、そして得たものとの間で共振関係を持ったものとして、もう一回自分の言葉で編み直すというような作業をしたのです。

それをしながらふと気になっておりましたのが、男の生き方だったのです。と言いますのは、そういう仕事をするさなかに、私もサラリーマンの妻ですけども、女として生きていかなければならないというのを貫いてきますと、結局共に暮らしながら共に暮らさない、心が自分が個を求めるといふことと、個が

共に結び合って良い夫婦関係、家族関係をつくっていくといふことは非常に難しいものがあります。

ちょうど、それが自縄自縛のような、心の中で答えがなくなつて困っていたのが四十代の初めだったのではないかと思えます。それで個を求める、個人の個が孤独の孤になってしまふ、自分がこれだけ頑張つて考えて、何かある時には体当たりぐらいいしても掴み取ったことというのは、結局は自分と他との違いを見分けて、その線路をつくつてその上を走る。

これは、ちよつと立場が違うのですが、もうお亡くなりになりましたが、私の大変尊敬している斉藤茂雄さんが、『妻たちの思秋期』という本を書いていますが、その時の妻たちの言葉として、「あなたは上りのエスカレーターに乗ってどんどん上へいく。私は下りのエスカレーターに乗ってどんどん下へ」というのがありました。それって止めどなく離れていくわけですよ。その止めどなく離れていく、その言葉の中からは男が上に行く一方であり、女は下に行く一方という言葉しか出てこないのです。

斉藤茂雄さんという人は、地面を這いずるようにしながら言葉を拾つて現代というものを証明していこうというジャーナリストでしたから、その悲しさというものを拾われたんじゃないかなと思います。それは多分男にとつての孤独であつたらうし、そう思われている男が必ずしも上にいつているわけでもないし、男も非常に辛い問題を抱えていて、その時にそういう区別なり識別なり差別なり、そして個の関係がつくられていくとい

うことの悲しみと寂しさのメッセージとして、男にも女にも伝えたいのではないかと思います。

私は斎藤さんを存じ上げていたので、その本をいただいた時にそう受け取ったのです。その時に『女たちの同窓会』を書いて何か悪き物が落ちたのです。子どもの問題も『小児病棟の子どもたち』という本を書いて、その後病氣の子どもたちを救うことになったのですが、それはそれで、もう一つ自分の問題としてやっていないことというのが、男のことじゃないかなとったのです。

その前に一つやる仕事がありました、その取材のために長島愛生園にずっと入っていたんです。その頃書こうとしていたのが、ある女性の方の評伝ともいえないのですが、私なりのものを何か書きたいと思ってその方のいろいろな資料を取り寄せて愛生園にも行って、お宅にも伺い、旦那様にもお目にかかってご家族の話も伺ったりずっとしていたのですが、けれども、ちようとその頃父と母が共倒れになっちゃったんです。私が四十七才の時です。

突然父が癌になりました、母も寝たきりで完全にひどくなって痴呆まで入ってき、もう何にもできないという状態になってしまったのです。それで遠くに行って何かをする仕事というのは辞める代わりに、等身大の自分の中で、もう一つ仕事をしなくちゃいけないなど、悩みながら、病氣の中にいる私だから病の戦後史という本を、戦後史の中に人間を位置付けて書いてみたいと思ってそれを始めたんです。

そして始める中で、今度は私が学生の時に「男尊女卑」と叫んだのとぜんぜん別の意味で、一つの戦後史という歴史の中の一つの文化、たとえば医療なら医療という文化をとってみても、これは男の人がつくってきているんですね。良くも悪くも男の人がつくってきている。そしてその中で行き詰まってしまったものとしての様々な、たとえば被害が出ていたり医療被害が出ていたり、女の側でみると自分の体を大事にしたい、子どもの命も生かしたい、できることなら本当に誰の命でも救ってやりたい、家族を守るといいたいと合体しながら、産業構造なり経済構造、社会構造というものができてしまっている。そういう不思議な構造の中で、私どもが蜘蛛の巣の中に捕らえられていて、動けば動くほどガッチリと糸に絡め捕られるような状況に置かれているなどという感じがして、その仕事を終えてからやっぱり気になるな、日本人の生き方が気になるなと思っていたのです。

そこで今日の本題に入りますが、あの方は恵迪寮に入寮したのが三十三年か三十四年になるのでしょうか、長沼さんという朝日新聞の記者で恵迪寮出身の方がいらっしゃいました。私がフリーライターになりました、女性の自立と仕事とどうのこうのと恰好つけて、何でも一生懸命頑張っていた時期なのですが、フリーライターで朝日の仕事をいただいていた頃に、よく朝日新聞の社内でお会っていたんです。

それで何となく書き物仲間と一緒に飲んだり騒いだりという

若い時代というのもあったんですけど、ちょうど五十才になった頃のある日、長沼さんからお電話をいただきました。この本の中に書いてあることなんですが、本を読んでいただいていない方もいらつしやると思いますのでお話しします。

「向井さん、実は栃木県の宇都宮に宝住与一という名前のお医者さんがいて、その宝住が患者さんの言葉を聞いてみたいというので、ちょっと一度会つてくれませんか」というお電話だったのです。長沼さんというのは、すぐく理屈っぽいというか真面目っぽいというか、そういう方なものですから「ああそうですか。では伺わせていただきます」と言つて、私は西武新宿線に住んでいるものですから、長沼さんと東京、新宿の歌舞伎町で会いました。

それで歌舞伎町のご真ん中にどんどん行かれるので、どこに行くのだろうと思つていたら、ぎらぎらネオンの輝く中に連れて行かれました。そうしたら中年のおじさん十何人かが、中学生が集まっているみたいにギャーギャー騒いでいるわけです。いったいこれは何の騒ぎなんだろうと思つたら、それが恵迪寮の方のお集まりだったのです。

驚いたですねえ、四十代か五十代の男が、あんなに羞恥心もなく何のてらいもなく騒いでいる姿というのは生まれて初めて見たんですけれども、あれが私がかつて否定の材料として、肩をひけらかして「あんな男ども」と思つていたおじさんたちのなれの果てかと思いました。

そこに宝住さんという方もいらつしやいまして、お話をしよ

うと思つても話なんかできないんですよ。恵迪寮というのは何だか知らないけどお互いの壁がないというか、皆さんが自治だか共同だか、共同というよりあれば仕切がないというか、私はあの時から「アリスのワンダーランド」に、ウサギと一緒にドリーツと落ちていったという感じなんです。訳が分からなくなつちやつたんですね。

その時は結局話になりませんので、宝住さんの所で医師会の雑誌に対談をしてほしいということだったものですからお伺いしたのです。そうしたらその時に、石川舜さんといつてやはり三十二年入寮の方がいらつしやいました。石川さんもその編集のお手伝いされるからというのでお伺いして、お話をしている、仕事が終わってから栃木の鮎を食べながら居酒屋でちよつと飲んだんです。

その時に、恵迪寮の話だと思つて私はもう出る幕ではないから黙つていたんですが、二人の間では「あいつがどうした、こいつがどうした、あれがどうした」と噂話がわあわあ出ているんです。私はかつて恵迪寮というのは、ひどい所だと思つて否定したんですけれども、どうもはつきり言つて、うちの夫たちが属している社会に比べるとぜんぜん暖かい、進んでいる。つまり日本の普通のサラリーマン像というのと違う何かを持っているのではないかなと思つたのです。

それで私はよくうちの夫とも話すのですが、「生涯の友を得て裸の付き合いをして、そうやって話をしている。不思議な生涯の関係というのを持てて、普通はそれは持てないから恵迪寮

の人が羨ましいね」と言うのです。それがきっかけになって、私は一度お訪ねしてみたいと思ったのです。

前から、私自身は日本人というのを見たい、女は私もわかる、女の人生を辿った本も出した、だから共に生きてきた男というものが、日本の経済社会の中で、何を背負って何を考えているのかという話をしてみたいと思っていました。そして商社の人たちの話を聞いていたのですが、完全に振りほどいて話をするのが難しいということがあったのです。

それで恵迪寮の方たちに、同期の中で連絡を取り合っていただいて、お目にかかっていただけならば、そういう日本人の男性の戦後史というものを見ることは可能なのではないかと、いうことで、初めは仕事という感じでお目にかかり出したというのが事実です。

ところが歩き出して一番驚いたのは、皆さんまだ五十才というところで今から思うと若かったわけですが、寮歌を歌えるか歌えないかというような、踏み絵みたいな感じで、どこへ言っても寮歌が出てくるのです。これは歌えないと付き合えない世界なんだということが初めて分かって、まったく歌えなかったんですけど、私も歌えるようになってしまったんです。

今では「都ぞ弥生」をずっと最後まで歌えるし、次から次へと出てくるようになったのですが、それを聞いていて、私の中に今日最初にお話したような私の心の原点になっている、源流みたいなものに触れてしまったのです。その意味で、寮歌というものを聞いた時に、なんて美しい詩なんだろう、この自然憧

憬があつて現実から世俗というものを一度隔てて大いなるものを求めたい、あるいは倫理観みたいなものを求めたいと思ったのです。

寮歌を若い寮生の方たちがおつくりになって、これまで続いていたということに対して、私にはその環境、教育、その伝承が、今では失われている大きなもの、大切なものというふうに改めて見えるようになってきたのは事実なのです。

寮のOBの方たちとお目にかかった時に、私が一番引き込まれたことは何だったのかということ、最後にちよつとお話します。自分の書いた本の中で大事な所を折って、改めて読んでみたのですが、今日は当事者も何人もおいでになりますので、言いにくいところもあるのですが、私が感動した所だけをちよつとお話させていただきますと思います。

まず抽象的に言いますと、何かが違うと思つたことというのは、みんながそれぞれに現実を生きていられるんだと思います。五十才の男、あるいは五十五才までの男というのは、それぞれに家族を生きて、社会を生きて、あるいは経済社会に所属し、それぞれの社会の中で生きていて、それなりの現実をこなしながら生きていらっしゃるはずなんです。にもかかわらず、もしかすると自分を振り返つてお話をしていただけ年令に入つていらしたのかなと思うのです。

本当に一気呵成にご自分の越し方、行く末に近いものをおつしゃっている方もいらっしゃるのですが、今思うと、お亡くなりになった方にそういうことをおつしゃっている方もあつたり

して、ちょっとドキッとさせられます。もし普通の日本人というものの特徴をつけるとするならば、自分が属している共同社会というものは、日本の場合はほとんど会社であるとか職場であるとかだと思います。

江戸時代以来ずっと引きずってきた勤め人文化、藩閥文化、そういうものの中で引きずってきた性（さが）のようなものがあった、特に男の人にとってはそういうものがあつたのではないかと思います。いくら明治時代に近代化したとはいえ、日本人は和魂洋才というのを掲げながら、ある意味でヨーロッパの先進性というものから、技術というものを文明としてとってしまつた。文明と文化というものを分けてとってしまつたんだらうなと思うのです。

その中でじゃ寮というのがどういう存在であつたのか、寮に関する本を書くにあたって、いくつかの本を読んだんですが、その時に面白かつたのは、藩に所属していた若者たちに、自分を縛ってきたもののすべてを捨てさせて、新しいリベラルな存在として国を担っていく若者とするために、小さな精神を捨てて大きなものにより目がいくようにということで、裸にさせるというイニシエーション、通過儀礼というものを要は大事にしたという言葉に出会ひまして、なるほどと思つたのです。これは恵迪寮の方に私がお話するようなことではないのですが、ここにさらに札幌農学校以来のキリスト教的な倫理観とか、少し日本離れのした開拓精神だとかが加味されている。

クラーク博士の言葉、ボーイズビーアンビシャスというのは、

私は簡単に使つてはいけない言葉だと思っています。実際にアメリカへ行つてみるとこの言葉は日本人が聞いているほど、札幌で言われていたほどきれいなものでも何でも無いということを発見して、日本人というのは、ずいぶん西欧をアメリカを美化してきたんだと、北大の伝統の中にもそういうものがないわけではないなというふうに思うのです。

しかし、もし美化したとすれば、それは当時のアメリカ東部、マサチューセツツの一番精神性が高いところから持ってきた、人間社会というものはそんなに高いものである筈はないところの一部だけを切り取つて、そこに明治以降一度崩れた中から何かを求めて立ち上がろうとしていた当時の若者たちが、その精神性に飛びつきそれを自分のものとして組み替え、編み替えていったものが、北大の人たちにもし伝わっていたとするならば、そういう言葉で伝わるとはまったく思わないのですが、この伝承というものは恐ろしいものだと思います。

言葉ではなくて体とか空気とか環境とか、そういうもので伝わってくるのだらうというふうに私は思つておりますけれども、そういうものがあるとすると、やはりこの恵迪寮の男の方たちというのが、自分では気付かないけれども、もしかするとそういうある倫理観、自分のいる時代を客観視する力、時代と向き合う目、歴史的な眼差し、それから現実を引き受けながら現実を見ることのできる二面性、それともう一つは、そういう現実を見つめるといふ暮らしを自分に強いとするならば、人はおそらく耐えられなくなって崩壊してしまうわけですから、

その時にそれを支えるネットワークという、そういう共生といったらいいような、特にそれが魂を共に抱え合い支え合うというような伝承があるということが、何か違えているものなのかなというふうに私は受け取ったのです。

それは最終的に受け取ったことなのですけれども、私は十何人の方にお目にかかって、その中の何人かを取り上げるとするのは非常に辛い作業です。一般論しか言えないんですけれども、私が折った所をばつと開いて出てきたのがここにいらっしゃる河村さんの所です。河村さんと今入ってこられた多分鰐淵さんでしょうか、まったく違う道のりを辿られた方だと思ふのですけれども、まったく同じ言葉を使われているところがあるのです。

それを河村さんの言葉でいうと、「本州資本に蹂躪されない」というもので、ものすごい強烈な郷土意識があるのです。資本という言葉を鰐淵さんは使われなかったし、河村さんよりも少し素朴な言葉でおっしゃっていたと思うのですけれども、鋤路の母ちゃん方のためにというような「鋤路の母ちゃん」という言葉を何回も聞きまして、この郷土意識というのがばつと出てきたのです。

その次にばつと折って出てきたのが、旭川でお医者さんをしていらして、もうお亡くなりになってしまったのですが安住先生のことです。本当に胸が痛くなるような言葉がいっぱいあったのです。浅香先生という精神科の先生とこのお医者さん二人の言葉の中に、医学部の中でも起きている医療というもの、科

学と人間との関わり、それから科学者の社会的責任、それに等しいことが出てくるのです。それは今日もおいでになっていまず苦小牧の石城先生からも同じこと、科学者の社会的責任という言葉がぼんぼん出てくるのです。これはお医者さんだから学者さんだからということではないのです。

この中で実は一番フアンレターが来たのが、恵迪寮ではおそらく一番地味な存在であつたのではないかと私は想像するんですけれども、この方もお亡くなりになってしまったのですが、銀行マンとしてずっと土地開発の業務にいられた横山さんというお名前の方でした。彼の言葉に対して、本当に涙ながらのフアンレターを横山さんに渡してくださいと言われたことがあつたのです。

自分の人生というものを真面目に生きながら、「私は開発の担当者としてこの方法はどこかおかしい。地元の経済への波及効果が考えられない。実体のない経済。でも私はそれに参加してそれを支えている。そういう私は自分がボロボロになっている。だから般若心経を一日一回読まなければならない。妻と般若心経を読んでいる時だけが救われる」ということを言われたのです。横山さんは亡くなってしまったのですが、開発部門、特に土地開発部門をバブル期に担当して、ずっとやっていられたということがどれほど彼を苦しめたのかなと想像して、痛でお亡くなりになったけれども、ストレスがあつたのかなと思わず思ってしまうのです。

これは大阪の窪田開拓さんという、鉾山を出られた方をイン

タビュールした時のことですが、「今は見えないところを見ないで、うわべだけの建物が建ってしまっている。本当は見えないところが見えないといけないんですね」という言葉を言われたのです。この中に線を引くと切りがないほどいろいろな言葉が出てきたのです。

それからずっと捕鯨船のほうで働いていらして、あとは貿易船、海洋のほうの仕事をしていての方のお話を伺った時も、私は五臓六腑を見せられたという感じでした。日本人がおそらく見ないで済ませている世界というものを、かれはこの船の中に何があるかということ、私たちがうどんを食べている時に、エビがどこからきて麦粉がどこからきて天ぶらの粉がどこからきて油がどこからきて、私たちの中に入っているものは全部、何とかのコースを通ってきたもので、そこで働いている人夫さんがどういいう人であって、その人たちが悪い時は密航を試み、ある時はその中で死んでいくというお話を伺いました。

日本人というのは一人ひとり会ってお話を伺っていると、本当に一部から入るだけでもその五臓六腑の一個所が見えるわけです。

ところがなぜか外側から皆さんにお会いすると、するするつと表面的なお話しになってしまふのです。そういう意味で、日本人の忠実さというものは自分の世界だけに對する、あるいは自分の家族に對するもので、この頃は家族に對する誠実誠意もなくなっているという時代に入っているといわれていまして、アメリカなどへ行くとファミリー、ファミリーでもう嫌になる

くらいファミリーという言葉で社会を活性化、再生しようというので驚かされるのですが、日本はおそらくその前兆にきているのかもしれないと思うのです。

恵迪寮というのが何か日本人と違う、全体として違う、けれども日本にこだわりながらその日本というものが彼らにとつて何かというと、地域であり自分の立っている場であり、誰かと共に振動することのできる、共振することのできる世界をつくることである。しかしやむを得ずその自分が足をつけているもう一つの足というものが、その中で見えたことをも、そういう目で表現できる人々であつたということに、本当にちよつと驚いてしまつたのです。やはり私はこれからもつと男の人は語るべきである、もつと自分を語って、自分史でいいから語って、というのは、こんなにドラスティックに変化してきた時代というのは二度とないわけですね。

轟さんというずっと教員をされてきた方のお言葉の中でも、「本質的なものを離れて、みんなが自分の姿が見えなくなるほうに向かつてどつと流れていく、それがすごく怖い」というのが出ています。それからすすき野の「青い城」というクラブの新井さんがお話くださったことの中で、彼は最初にニッケルの製造工場で臨時工員をされていたけれども、戦後を引きずっていた時代に想像もつかない荒つぱさで底辺の仕事をさせられていた。この底辺の仕事をさせられていたという意味では、最初に恵迪寮の方たちというのはいろいろなところを通つてきた時代だったので、その底辺を経ながら底辺を語る目というのがあ

り、語る言葉を持っているわけです。

それを私はここへ載せさせていただいたことで、実は会社の何十年史を書くという時に労働組合の方からお電話をいただきまして、「すすき野の『青い城』という所の電話番号を教えてくださいませんか」と言われたのです。「何に使うのですか」と聞いたら、「荒っぽい底辺の仕事させられていたとの証言があるのです、こうした証言を残しておいていただいたために私たちは社史にその記録を残すことができる」ということを言われまして、その時は本当に嬉しかったのです。

一つの地だけを通して見ただけでも、こういう言葉というのが私はいただくことができ大変ありがたかったのですが、その後、この本を見たというところで先輩の方や、あるいは別の大学の方からお手紙とかいろいろといただくことができたのです。その中に、やはり日本の現在を憂いて何か新しいものをつくっていききたいと思われるような読み方をされている方がものすごく多くて、その多い理由というのが、多分皆様が語ってくださったことというのは、自分語りの単なる自慢話というのはなくて、ある歴史観の中に基づいて言葉を言うことができた。そして何か美しい倫理観というものがあった。

現実私はまったく分からないのですが、私のつくりたいという方法の中にどんなものが入ってきたということは事実として、そういうところに触れて若い方からも意外とお手紙をいただいているということをお話したいと思うのです。

寮歌をずっと読んでおきますと、先ほどは自然憧憬というよ

うなことを話させていただいたのですが、それだけではなくて、時代というものがすごく反映されていて、特に戦争前後の歌とというのは本当に涙なくては聞けません。

日本というのは戦後史の処理の仕方が非常に下手な時代を過ぎしてしまつて、社会全体としては戦後史も何も処理していないと思うのですけれども、その中でやはり対等の地平に立ったレクイエム、鎮魂歌というものが残されているとか、平和への祈りが残されているとか、そういうことを一つひとつの心を通つて日本史というものを書くことも可能なのではないかと

いうくらい、良いものを残されているという気がいたします。ということで、大変失礼なことばかり申し上げまして、アナクロニズムの野蛮の男尊女卑から始まつたわけですけれども、ただそうはいっても世の中でどのように過しているのかというのとはぜんぜん存じ上げませんので、私は採点しておりません。それは今度、『恵迪寮の妻たち』という本でも書いた時にたっぷりとお伺いしたいと思っております（笑い）。

どうも失礼いたしました。（拍手）



恵迪寮歌・寮史をめぐる

「環珞みがく」 作曲者・置塩（星野） 奇遺稿と群馬寮歌祭

織 茂 利 治
(昭和十五年入寮)

昭和四十七年（一九七二）に産声を上げた群馬寮歌祭は、回を重ねる毎に充実して盛況であったが、会員の高齢化とともに運営にも支障を来とし、残念ながら平成九年（一九九七）第二十五回を最後として閉幕した。

平成十二年（二〇〇〇）は「環珞みがく」生誕八十周年に当たるといので、作曲者故星野奇（旧姓置塩）さんに、群馬寮歌祭で大変ご配慮いただいたことに因りて紹介してみたいと思う。

群馬寮歌祭十周年記念事業として、メンバーである旧制高校（学習院高等科を含む）三十五校、旧帝国大予科三校、旧商大予科三校、旧工大予科一校の計四十二校について、各校の代表的寮歌二曲を選び、作詞者あるいは作曲者がその誕生の由来や経緯、背景などを語った文章を、歌詞と楽譜とともに収録して「寮歌物語―わが寮歌の誕生」が、昭和五十六年十一月十五日に発行された。

そのおり北大予科は、私が編集委員を担当することとなり、卒業生の皆さんと協議の上、代表歌として当然「都ぞ弥生」と

「環珞みがく」が選ばれた。「都ぞ弥生」は昭和四十二年十一月一日旧制高校寮歌保存会発行「寮歌は生きている」の中から松山茂助氏（明治四十二年入寮。明治四十四年度寮歌「藻岩の緑」作歌）の想い出の文を、宍戸昌夫氏のご了解を得て転載させて頂いた。（なお松山氏のご子息寛君は私と同期入寮で学徒出陣で二十年フィリッピンで戦死。）「環珞みがく」については、山口哲夫氏のご紹介で作曲者の星野奇先輩から貴重な寄稿を頂くことができた。ただ編集の都合から字数制限のため、折角の玉稿を全文掲載できず、ご了解を得て割愛せざるを得なかったの

が誠に残念であり、そのまま手元に温存したままでは何としても申し訳ないので、ここに星野大先輩の遺稿として全文を皆さんに紹介させて頂くことにした。なお次の記録は星野さんの遺稿なので原文のまま忠実に記した。

北大予科桜星会歌「環珞みがく」に関する記録

作曲者 星野 奇

(旧 星置)

目次

- 一 序言
- 二 作曲当時の思い出
- 三 アメリカで環珞のラジオ放送を聞く
- 四 東京エールム会編纂「環珞みがく」について
- 五 環珞歌記念碑
- 六 「環珞みがく」の作曲に関する考察
- 七 作歌六十年記念北大寮歌祭
- 八 故内田常雄厚生大臣と環珞歌

一 序言

昭和五十六年八月十九日に、前橋市にお住まいの同窓、織茂利治氏より電話並びに書翰にて、十周年記念の群馬県寮歌祭に

出す冊子に「環珞みがく」作曲当時の思い出を記載するにつき、原稿を送られたいと云う事であったが、どうせ書くなら関係事項を思い出すままに、年代を追って書いてみようと思い、おこがましくもこんな記録になってしまった次第である。

(昭和五十六年八月二十二日記)

二 作曲当時の思い出

北海道帝国大学予科の徽章が桜の花輪の中に北斗星があることから、予科の会を「桜星会」と言い、大正九年度の会歌を募集され決定したのが「環珞みがく」であった。作詞者は佐藤一雄君一人であった。

佐藤君は、私と一緒に大正五年北大予科に入學した大分県出身の豪放磊落な九州男子で、北大初代の応援団長でもあった。しかも演説もうまく、文才もあった。道会議員から国會議員に立候補した経験もある。樺太に在住の時現地召集の陸軍少尉であったが、戦後直後札幌に帰還して亡くなられた。

作曲の応募者は六人あり、大正九年三月恵迪寮の食堂に於て、桜星会の役員及寮生約百名が集まり作曲の発表会があり、私は四番目に発表した。前三人は何れもオルガンを弾くだけであったが、私は弾きながら蛩声を張り上げて歌った。其後桜星会の選考委員会が開かれたが決定出来ず、北星女学校に依頼した。北星女学校には音楽学校の卒業生や外人の音楽教師が居り、数人で選考の結果私の曲が決定された。

三月末に予科の講堂で桜星会の役員より賞金を贈られた。賞

金は大きな奉書に包まれ水引きのかかった立派なもので、恵迪寮に帰ってから開いて見たところ、猪の札三枚が入っていた。金三円は大金であつた。当時は一カ月の学費は十円位であり、三ヶ月に一回位料理屋に行き大いに飲み寮歌を高唱し、肉鍋を突つきたらふく飯を喰つても一円で済んだ時代である。

又料理屋のビールは高いので、安いサッポロビールの一升びんを求め袴の中にかくして料理屋にあり、机の上に袴から出してデンと置くと女中も心得たもので、黙ってコップを人数だけ持つて来てくれた。又私は、恵迪寮の肉の購買係をしたことがあるが、牛肉が高くなり従来の舍費一ヶ月八円ではやつていけないが、牛肉を馬肉に代えればやつて行けるがどうだろうと舍生大会を開いて協議したところ、全員馬肉でいいから舍費を上げないでくれとのことであつたことを思い出す。

「環瑠みがく」の作曲が当選したので、賞金三円で南寮二階東端の八号室で当選祝を行った。落選した五人と同室の四人、寮の友人六人計十五人を招待した。大学の正門前に大谷屋というそばやがあり、一杯五銭のそば六十杯を求めて招待者等待つた。ところが、今日は置塩の所へ行けばそばが食べられるぞと宣伝され、招かざる客大勢加わり、そばは忽ち無くなつたが後を断たず続々そばが出てきたのには驚いた。聞いてみると無断で電話を掛けて注文したらしい。支払の時には、更に追加三円を加えて六円払つた。嬉しい悲鳴であつた。

作曲に当つては、その前年大正八年の寮歌「暗雲低く乱れてし」がちょっと歌いにくいと云われたので、歌い易い曲を主眼

として作曲したのが、今日これ程愛唱されようとは思わなかつた。作曲は、同室の諸君が寝静まつてからメロディーを考え、翌日寮の食堂にあるオルガンで作譜した。

三 アメリカで「環瑠」のラジオ放送を聞く

昭和四十一年六月一日、一ヶ月の海外旅行のため羽田を飛び立ち、最初に行つたロスアンゼルス兄の家にて図らずもホームキャストの日本語放送を聞いた。最初に北海よされ節が前奏され、続いて日本語室長の前田絢子女史が私の来米を紹介され、続いて「環瑠みがく」とダークダックスの「都ぞ弥生」が放送された。これは昭和の始めに、北大の音楽部が録音されたレコードを兄の家へ送つた事があり、それを放送局に持つて行き歓迎の意味で放送を依頼したもののようであり、室長の前田絢子女史も札幌生れであり、この歌をよく歌つたとの事である。

四 東京エルム会編纂「環瑠みがく」について

この本は、昭和四十五年の十二月に発行されたものであるが、その年の春、山科武氏の家へ樋口櫻五先輩を初め山口哲夫先生、故山科武院長、佐藤一雄氏の未亡人千代様、それに私の五人が集まり、「環瑠みがく」作歌五十周年の記念出版のための編纂に関する座談会が開かれた。

座談会では、樋口先輩のこの歌に関する御感想に初まり、私より作曲応募から当選までの状況をお話し、他の山口、山科、佐藤千代さんも夫々述べられ、且つ各方面からの寄稿をまとめ

られ、充実した本の内容になっているが、当時エルム会の編集長をしておられた山口先生が編集されたもので、作詞者と作曲者にとって、もったいない様な本である。

五 瓔珞歌記念碑

瓔珞の記念碑について述べたい。東京エルム会の計画と主催に依り、作歌五十年記念事業として、昭和四十五年十月二十三日に北大植物園に記念碑が建立された。始め、北大構内の都ぞ弥生の碑の近くに建立の計画もあったが、堀内寿郎学長の諒解を得て、植物園に決定されたものである。

除幕式には、学長、学士院会員木原均先生の祝詞について、北大応援団の合唱等盛大であった。碑は、高さ五メートルの清楚なるもので、この碑の小型のもの（1/2大）を副碑として自分の家の前に建てたい希望切なるものあり、その翌年昭和四十六年十一月三日に完成し、東京エルム会及び全国寮歌振興会の有志も加わり盛大に除幕式が行われた。

六 「瓔珞みがく」の作曲に関する考察

数年前、北大音楽部の吹き込んだレコードの第四節終りの「玉と湧く」がつまっているの、エルム新聞に意見を述べたことがあり、昭和五十一年の北大創基一〇〇年の式典に出席の為、札幌に行き宿舍の郵便貯金会館に行った時、哲学の水野一先生は常任指揮者の川越守先生と訪ねられ、「玉と湧く」は徐々に歌うべく「RIIT」（リタルランド）を付するようにと

指示を受けた。六十年来原譜と異り徐々にゆったり歌っては来たが、矢張り原譜にRIITの符牒をつけるべきであったと反省している。然るに、昭和四十一年十月十日発行「日本寮歌集」の瓔珞譜には、既にRIITの符牒が記入されていることが判明した。このことは、その寮歌集の編集の北大委員である故山科武氏が記入されたものと思われ、発行後十五年を経た今日、改めて山科氏に感謝しご冥福を祈る次第である。

（筆者付記、私が在寮時の昭和十六年五月二十五日記念祭のとき発行された、恵迪寮歌集（改訂版）の「瓔珞」の譜には、「玉と湧く」の頭に「riit」が付されており、昭和十六年寮歌「湖に星の散るなり」の作曲者岡田和雄氏が新版を起こして改訂された時に記入しようです。）

七 作歌六十年記念北大寮歌祭

北大応援団より、第十二回の北大寮歌祭は「瓔珞みがく」の作歌六十年を記念して行われるため御出席されたし、という招待状が来り、五十五年四月二十五日札幌に行く。空港では北大応援団顧問の山元周行先生と「瓔珞」の大合唱に迎えられ、又恵迪寮の前では、更に大勢の学生諸君の歓迎を受け、寮の食堂では六十余年前に弾いたオルガンに対面し、そこでも学生諸君の合唱と家内の演奏を聞き、感無量であった。

八 故内田常雄厚生大臣と瓔珞歌

昭和四十三年十一月三日孫の長男喜忠の結婚披露宴に故内田

最後に、そのおり星野大先輩から頂いた貴重なご返書の肉筆コピーを添付紹介させていただきます。

和の隆昌位には此方の字が附く。其の
 和の隆昌位を合昌とてくれますので
 其部が青まの時代にかゝります
 今、糖い事とす。今、和の隆昌位
 湖へ出かける。和の隆昌位は、和の隆昌位
 下へ下され、和の隆昌位とて、和の隆昌位
 是の和の隆昌位の隆昌位とす。この
 和の隆昌位は、和の隆昌位とす。

鐵茂 創 源 稔

日 量 抄

高

寮歌「時潮の波の」はこう歌おう

寺 井 幸 夫
(昭和十九年入寮)

昭和二十一年寮歌「時潮の波の」を作曲した私のところへ、現在の寮歌集の譜面には作曲当時の原曲と違う箇所がある、これでもいいのか、との指摘がありました。平成十一年夏のこと、手紙をくれたのは札幌在住の木村咲哉氏(二十二年入寮)。私が二十二年三月に退寮しているのと彼とは入れ違いになり、面識はありません。が平成十一年七月十八日、同二十九日発信の木村書簡に込められた彼の寮歌への情熱に深く感動、私自身も長年気にしていたことではあり、現在の譜面を一部修正して、「時潮の波の」をよりよい姿で後輩に伝える努力をして見ようと思いたちました。

平成十二年十月一日、上野池之端文化センターで行われた東京寮歌祭には、作家の渋谷富業氏(予科同級)と共に出席し、初のアピールをいたしました。会場は百七十人余の北大OBで満員。私は壇上から、木村氏とのやりとりを説明しつつ歌唱指導を行い、修正案通り皆さんに歌って貰いました。第二弾がこの「恵迪」への寄稿です。私と木村氏との間で交わされた手紙を、彼の了解を得てここに収録いたします。そのやりとりの中に、私が作曲に当たって意図したものを汲み取って戴ければ大変有り難いと思います。

平成十一年七月十八日付、木村氏の手紙

恵迪寮の後輩というだけの関わりで、突然無様にお尋ね申し上げる失礼をお恕し下さい。私は昭和二十二年入寮、旧制予科最後の三年間を恵迪寮で過ごしました。当時、盛んに歌われた「時潮の波の」は思い出深く、私の最も愛唱する寮歌の一つで

すが、最近の寮歌集には、この歌の楽譜の一部が原曲と違っており、この点を作曲者の寺井先輩にお確かめ致したく、思い切つて筆をとりました。

最新版の寮歌集は、平成七年発行で、これは昭和五十一年の全面改訂版(北大創基百年記念)が初版です。改訂版では、原曲のイ短調をハ短調に変調していることは領けませんが、問題の

曲譜の違っている箇所は、一番第一句「時潮の波の寄する間を」の（ドドシラミが、第五句「緑の星を夢む時」と同じ節の（ドドレレミ）に変わっており、現在ではそのように歌われております。テープやCDでも誤って歌われているのは甚だ残念です。

右のことは、既に寺井先輩も作詩者の渋谷先輩もご存知と思いますが、改訂時に原曲作者のご了解なりご校閲を経たものでしょうか、大変気になります。寮歌の旋律は、歌い継がれていくうちに変わっていくのが自然で、その例はたくさんあり、「時潮の波の」も、曲の一部がデフォルムされたからとて、名曲の格調を損ずるものではありません。しかし歌われ方はともかく、寮歌集には出来るだけ原曲で残るべきだと思います。私の個人的感覚では、ほんの僅かの節の違いですが、原曲の方が、曲全体のバランス上優れていると思います。寮歌集の誤りが正され、歌も正しく唱われることを、寮歌オンチの一人として切望しております。少々こだわり過ぎるのは、老化のせいでしょう。

◇ 寺井からの返信

あの寮歌について、今はもう原曲を知っている人が数少ない中での貴兄のご指摘は、私にとつてこの上ない貴重なものであり、いまだに私の意図を感じとってくれてる人がいるんだと、言葉にいい尽くせない程の嬉しさを久し振りに感じ、早速筆をとりました。

我々の仲間では、何時も譜面を見ず原曲通り歌っていますが、貴兄が指摘された「寄する間を」の歌い方の誤りについては、随分前から気になっていました。というのは、作曲の詰めの段階で一番考えたところだったからです。その理由は、「寄する間を」の後は曲を高揚させたかったし、一方「夢む時」の後は曲を沈潜させたかった、そのためには同じ旋律ではまずいなど思い、替えたところだったのです。即ち、前半の「寄する間を」の点の部分を思い切つて下げ、次の高揚する音との高低差を大きくして感情を高めたかったし、後半の「夢む時」は、出来るだけ平板にして次の沈潜した音になだらかにつなげたかった、そしてそれは割合思うようにいったなと考えていたからです。

しかし貴兄の仰せのとおり、寮歌の旋律は歌い継がれていくうちに変わっていくのが自然で、事実、我々自身も勝手にデフォルメさせて歌っていた者の一人なので、余り大きなこともいえない。現にこの寮歌の中でも、序・結の「汲まざらめや」「うるわしき」のところは、現在の寮歌集で小さな音符で補足している部分（現在歌われている）の方が、原曲よりよいのではないかと思っています。この部分については、最初寮の食堂で発表し指導した時から、みんながこの小さな音符のように間違えるのです。何故なのか当時は分からなかったのですが、随分後になって、この小音符が実は「時潮の波の」「緑の星を」と全く同じ旋律になっているのですね。そう思うと、むしろこの方が自然で、後になだらかに続いて良くなったな、と思っています。このようなことは、余り他の人に言ったことはな

いのですが、貴兄には思っていることを書いて見ました。

我々の作った寮歌が随分歌われているぞ、という話は同僚や後輩から聞き半信半疑でいましたが、『北大恵迪寮の男たち』（向井承子著）という本を読んで初めて事実と知り、六〇年安保騒動の時には、この寮歌が素晴らしい使われ方をしたことを知るに及び、これほど名誉なことはないと大変嬉しく思っていました。そして今回の貴兄の手紙：やっぱり歌う歌わないに拘わらず、原曲を残すべきだという貴兄の正論をうけて、このことを訴えて見たいと思うようになりました。ご指摘、本当に有難うございました。

〔追記〕譜面の誤りは、後年手に入れた昭和三十八年寮歌集以前から既に始まっていたようです。私を知ったのは昭和五十一年、水野一氏が改訂した時でした。この時も作歌の改訂が主だったようで、曲についての問い合わせはありませんでした。

◇ 平成十一年七月二十九日付、木村氏の手紙

早速ご丁寧なご返事を賜り恐縮です。唐突なこと、さぞ戸惑われたことと存じます。

「よするまを」「ゆめむとき」の旋律を、敢えて別にされた理由をはっきりご説明いただき、やはり小生の推察どおりと釈然と致しました。（ここはこの曲の大事なポイントで、以前から誤りが直らぬものかと思っていましたから）。私どもの同期会では、ここのところは“二部合唱”になり易いのですが、間違

って歌うのは大方寮外生でした。現代の学生は曲譜に強いですから、楽譜が正しく直されれば、また自然に正しく歌われると思います。

さて、更に差出がましくて気が引けますが、若干気のついたことを申し上げますのでお許し下さい。結の最終句「すすまざらめや」は、原曲（シシラ）が改訂版では（シドラ）になっており、ここも原曲に復して欲しい所です。（実際には「惜しむ」「うたげ」「明けぬ」と共に全部シシラで歌っています）。

次に、お手紙にあるように「くまざらめや」「うるわしき」の所は、たしかに今歌われている小さい音符の方が自然で、そのように直されることには賛成です。現実には歌われているのを譜にすると、つぎのとおりです。



もう一つ。曲に添えてある仮名の歌詞の中で「ふえのまたまをいさり（漁り）する」が「いざりする」と誤字になっています。CDでも「いざりする」と歌われています。

またまた勝手なことを書き申し訳ありませんが、良い寮歌を正しく伝承したい気持ちからですので、ご容赦下さい。何れ寮歌集は改訂されるので、それまでに是非、作曲者のご意向を編集者にお伝え下されば、大変有り難いと思います。

◇ 寺井からの返信

前回に続き、今回の「進まざらめや」のご指摘も、私の感じていた違和感と全く同じで、本当に驚いています。送って戴いた譜面（水野一氏の改訂版ですね）の中で、これは嫌だなと思ったのは、前回の「寄する間を」と今回の「進まざらめや」の二点でした。作曲してからもう五十四年も経ち、原曲譜も散逸して手元になく、証拠品となるものはありませんが、貴兄の記憶の通り（シシラ）でした。もしこのような（シドラ）のままだと旧制高校の寮歌らしくなく、流行歌風で俗っぽくなってしまうな、と嫌悪感を持ちました。

ここが（シドラ）になった原因は多分、序の「たまのをおしむ」

「いのちのうたげ」「はやくはあけぬ」、結の「あとかなしみて」

「うべからざりし」の原曲の点の部分が（シドラ）になっているところから、誤って書かれたのだろうと思われます。しかし、この場合は○印の部分が（シシシラ）又は（ドドシラ）と自然に下がってくるので、それを受けて（シシラ）では余り曲が平板過ぎないかという理由で、下品にならない程度で（シドラ）とした訳ですが、結果は余りかんばしくありませんでした。

しかし、ご指摘の「進まざらめや」では、○印の部分が（ミ

ミラド）と上がっているので、（シドラ）と小細工してはかえって下品になってしまうし、むしろ（シシラ）と平板に抑えた方が余韻に浸ることが出来るのではないかと思います。

それらの事をいまだに見事に感じとってくれている人がいるという事は、私にとっても大変嬉しい事ですし、また「いさりする」の件もあり、作歌者の渋谷氏とは会うチャンスもあるもので、二人でしかるべき処置をとりたいと思います。その節は、場合によっては貴兄のお名前をお借りしたいと思いますので、どうぞご容赦下さい。

以上、集成希望箇所をまとめると

(一) 本歌の「よするまを」の部分は原曲に戻す。



(二) 結の「進まざらめや」の部分は、原曲に戻す。



(三) 序の「くまざらめや」結の「うるわしき」の部分は、原曲を修正して現在歌われている曲とする。



となります。

私は既によりい七十五歳を越え、そろそろ先の見える時期に達しました。寮歌集改訂版の時期を出来るだけ早めて戴き、是非希望が叶えられるよう切望する次第です。

この草稿を、平成十三年二月十日付で作歌者の渋谷氏並びに木村氏に送りましたところ、折返し返信で貴重な意見を戴きましたので、ここに載せたいと思います。(編集委員会)

◇ 作歌者渋谷富業氏のコメント

音譜の下歌詞に「ふえのまたまをいざりする」とあるのは、明らかに「いざりする」の誤り。「いざり」では全く別の意味(座ったまま進むこと)になり、音もわるい。単純な、しかし有害なミスプリントと考えます。

また寮歌の歌詞校訂に当たって、編集者から問い合せを受けたことは、寺井君の場合と同様、一度もありません。寮歌は作った人間から独立して皆の共有物になり、著作権など元々ないという解釈なのでしょう。「時潮の波の」にしても、ルビがでたらめで情けない思いをした期間が、水野一君の校訂まで続きました。

なお曲の問題ですが、小生は全面的に原曲主義です。従って寺井君の提唱する第三点「くもがらめ」「うるわしき」の歌い方修正には反対です。この寮歌を皆で歌う時、小生はこの部分では沈黙してきました。今回、周辺を取材してみたら、何と皆さん寺井説。再び沈黙することに決めました。

◇ 木村咲哉氏からの返信

早速乍ら「時潮の波の」についてのお手紙と草稿を拝受致しました。ちよつとしたお尋ねの手紙がきっかけで、作歌、作曲の両先輩が、積極的に応じて頂いたことは感激で、誠に有り難く存じます。「恵迪」第四号への引用については一切お任せ致しますので、よろしくお願いします。

現在札幌に、「蒼穹会」という寮歌オンチの集まりがあります。北大予科修了者即ち旧制のみのOB二十数名がメンバーで、寮外生も含みます。(代表者は昭和二十年医類修了、小菅高之氏)。二ヶ月に一度集まり、予科時代の寮歌を殆ど全部歌い、忘れられた寮歌も復活させています。今年は二月十日に行われ、次回は四月ですが、正規の「時潮の波の」を自信をもって歌唱指導させて頂くつもりです。

「瓔珞みがく」とハマナス

水庭 久尚

(昭和二十六年入寮)

数ある名歌揃いの北大寮歌の中でも、特に広く一般に知られるのは、「都ぞ弥生」と「瓔珞みがく」であろう。全国各地でいまなお開催される寮歌祭で、北大ではこの二歌がよく歌われる。

天下の三大寮歌の一である都ぞ弥生は別格として、瓔珞みがくが特に愛唱される理由は何なのか。私見だが、それは瓔珞みがくの二番の歌詞に負うところが極めて大きいと思う。すなわち二番の「浜茄子紅き磯辺にも、鈴蘭薫る谷間にも、愛奴の姿薄れゆく、蝦夷の昔を懷ふかな」の歌詞が、いかにも開拓以前の北海道のイメージを彷彿させ、北方への情景を刺激するからである。また我々北大OBはこの名歌を高唱するとき、清澄な大空の下、北の浜辺にハマナスが色鮮やかに咲き誇り、可憐な鈴蘭の薫りが辺りに漂う広々とした原野を思い、青春の熱き想いが甦ってくるからである。

このように浜茄子は鈴蘭とともに、我々の魂の故郷である北海道を象徴する植物である。浜茄子は北方系の海浜植物で、日本海側では鳥取県以北に、太平洋側では茨城県以北に自生する。野生のバラ科植物としては、最も大きく、最も美しい紅紫色の花をひらく。

実はこの浜茄子をハマナスと呼ぶか、それともハマナシというかが、しばしば北大OBの間で論議の対象となっている。

少し資料が古い、東京エルム新聞(昭五四・九・一〇 第二二五号)八面の「談話室」欄に次のような記事が載っている。

名歌「浜茄子紅き磯辺にも鈴蘭薫る……」に出てくる浜茄子と鈴蘭は、我等が心の古里北海道の象徴である。之を「ハマナス」と云うか、「ハマナシ」かで、先ず乱戦、北大の生んだ山岳画家・坂本直行は、以前は「ナス」と記入していたのに、最近の画には「ナシ」と書いてあると云う。牧野博士の説だと「ナシ」が正しく、東北の「ズーズー」弁がシをスに訛(なま)らしたとあり、我々はこの訛りに愛着を感じるのであるが、暑いせいかそれぞれ自説を固守して纏まらない。

また、身近な例では我々恵迪寮昭和二十六年入寮組の同窓会

が仙台近郊の松島で行われたときも、寮歌祭終了後の宿舎で、ハマナスかハマナシかで論議が白熱し、結論が出なかった。

そもそもこの論議の原因は、日本植物学の泰斗といわれる牧野富太郎博士の説にあるようである。手元の『牧野新日本植物図鑑』をみると、「はまなし（はまなす）」の解説として、「浜梨の意味で浜茄子ではない。浜梨は食べられる丸い果実をナシになぞらえたもので、しかも海浜生であるからである。ハマナスは東北地方の人がシをスと発音するため生じた誤称である。」とある。

この解説の原文と思われるものが、牧野博士の著書である『植物随筆集』（昭和十年、誠文堂）の中の「はまなす」の項にあるので次に転記する。

はまなすハ土地ノ小兒等が之レヲ食用ニスル、其圓キ赤キ甘酸イ實カラ来タ名デアルガ然シ其レハ濱茄子ノ意デハナクテ濱梨ノ意デアル、東北ノ人ハ通常シヲスト発音スルノデ此誤リヲ来タシタモノダガ今日デハ其誤ツタモノガ普通ノ名トナツテ居ル。

以上の解説では、いずれにしても浜梨が正しく、浜茄子は誤称であるといっているが、これらの説明では何故浜茄子でなくて浜梨なのかの明確な根拠が示されていないのが疑問である。ただ一方的に浜梨が正しく、そのハマナシを東北の人が東北訛りでシをスと発音するのでハマナスとなったのだから、浜茄子は間違いだといっているに過ぎない。しかしこれでは余りにも主観的な意見ではないだろうか。

そこでこの牧野説に対する有力な反論として、寮友河原克美君（二十六年入寮）の精力的な調査の結果を紹介したいと思う。

同君は、「牧野先生が東北の人の訛りで、ナシがナスになったというのだから、この植物が自生している地方で、その土地の人びとが何と呼んでいるか、特に重要なのは東北訛りのない地方でハマナシと呼んでいることがあるかどうか決め手にはないか」と、日本海側は東北を除く鳥取以北各県の主要都市の役所の観光担当部署に電話で問い合わせたところ、いずれもハマナスと言ひ、ハマナシと言うことはない、とのことであつたという。

さらに東北六県はどうだろうと同じように問い合せてみると、いずれもその植物はハマナスであつて、ハマナシではないとのことであつたが、青森では「津軽地方ではスとしがあいまいに発音されて、ハマナスと言っているつもりでもハマナシと聞き取られることはあるのではないか」とさえ教えられ、仙台でも発音上のことで青森と同じように教えられたという（河原克美「浜茄子に学ぶ」『朝光ハイツヴェラス季刊誌「夢」』vol.20 夏号）。

これによつて、いわゆる東北訛りがハマナシをハマナスと誤称させたという牧野説の論拠は崩れた訳であるが、更に念を入れ駄目押しの意味で、ハマナス自生地方の近世から近代初期にかけての地誌等（本草書・産物誌）に、この植物の名称がどのように記載されているかを確かめてみた。以下に地名・書名・名称等を掲げる。

○東北を除く日本海側の自生地

石川・富山（加賀・能登・越中）『三国名物志』玫瑰花

ハマナスビ 安宅濱ニ多シ

新潟『越後名寄』（丸山元純・宝暦六年）玫瑰花 ハマナス
海濱ノ沙中ニ生ス

新潟（佐渡）『佐渡事略』（中原広道・天明元年）濱なす

○東北（日本海側）

山形『出羽風土略記』（進藤和泉・宝暦十二年）濱茄子

山形・秋田『阿羽博物図譜』（松森胤保）濱茄子

○北海道

『蝦夷草木図』（小林源之助・寛政四年）漢名玫瑰花 和名

ハマナス 蜜名ロウザ 『松前志』（源広長・天明元年）

玫瑰花 『松前方言考』（淡斎如水・嘉永元年）

ハマナシ 此もの海辺土砂まじりたる所に多し、所々にあり、二三尺にていばらの如く、枝條に白き刺多く、五六月花をひらく、花は長春※によく似たり、考るにハマナシは濱茄子なるべし、梨子の形には似ず、茄子の形にちかし。

※長春は長春花の略でコウシンバラの漢名

○東北を除く太平洋側の自生地

茨木『水府志料』（小宮山楓軒・文化四年）玫瑰 ハマナス

茨木『常陸物産誌』（木内玄節・文政元年）波末奈寸^{ハマナス} 四、

五月に五弁の深紅花を開く、形牡丹に似たり、その香氣馥郁として殆ど梅花に類す、花謝して実を結ぶ、形茄子に似

たり。

茨城『新編常陸国誌』（中山信名・天保年間）ロウサ

俗云ハマナスビ

茨城『日本植物名彙』（松村任三、明治十七年）ハマナス

以上のようには確認したところでは、ハマナス（ハマナスビを含め）説が圧倒的に多く、僅かにハマナシと記載されたものでも、「考えるにハマナシは浜茄子であろう、その果実は梨の形には似ず、茄子の形に近い」（『松前方言考』）と注記しているほどである。

ハマナスの果実の形について、これをはっきりと「形茄子に似たり」と書いている『常陸物産誌』の著者木内玄節は、ハマナスの自生南限地帯にほど近い常陸国久慈郡小目村（現常陸太田市）の出身で、江戸後期本草学を大成した小野蘭山の高弟である。また、ハマナス説の『日本植物名彙』の著者松村任三博士は、かつてハマナス自生南限地帯として天然記念物の指定（内務省告示大正十一年）を受けた高萩海岸に近い常陸国多賀郡松岡村（現高萩市）の出身で、東京大学植物学教室や小石川植物園の基礎を築き、前記の牧野富太郎博士を東大へ助手として招いた植物学者である。

以上やや繁雑なくらい例をあげてきたが、浜茄子はその自生地においては、古くから「ハマナス」と呼ばれてきたことは確かな事実であり、我々はハマナシではなく、ハマナスであることを確信する。そしてこのような確かな事実を等閑視して、

「昔から呼ばれている固有名詞を勝手に変更してよいものだろうか」という菅野邦夫氏（仙台市野草園名誉園長）の意見に全く同感するものである。

いまや我々北大恵迪寮OBは、何の気兼ねなく、「浜梨」ではなく「浜茄子紅き磯辺にも」と、声高らかに名歌「環珞みがかく」を歌い継いで行きたいものである。

註1 本文に紹介した各地の産物誌等の記述は安田健編『江戸

後期諸国産物帳集成』によった。この膨大な産物帳集成をまとめられた安田健氏（北大・農学部 昭和二十一年卒業）に感謝申し上げる。

註2 ハマナスの果実の形が茄子に似ているということに疑問を持たれる向きは、深津正・小林義雄著『木の名の由来』をご参照願いたい。

仙台出身の二人の北大寮歌作者を尋ねて

小 出 精

（昭和三十年入寮）

仙台一高生が北大ストーム

平成七年三月に私がそれまで十八年勤めた仙台一高を離れることになり、離任式のあと地学教室に戻ると思いもかけず応援団員の生徒達がやって来て、饒けに北大ストームを舞ってくれるという嬉しい一幕がありました。

名古屋と東京にて

定年後、その思い出等を書いて寄稿した平成十年七月刊の北大宮城県同窓会報の文を恵迪寮時代の先輩や友人達に近況を兼

ねて送った結果、名古屋の近藤智雄さんからその年の八月の東海寮歌祭に招待して頂くことになり、出席した会場で今度は、その催しに東京からここ数年毎回顧けつけられているという篠原猛さんから、東京で開かれる秋の北大寮歌祭にもぜひにと誘われ喜んで出席した所、その場で何と昭和十三年寮歌「津軽の滄海の」の作詞者である二階堂孝一が、仙台一中の出身者であることをを一人の大先輩の方から知らされました。長年知らずに愛唱して来たので驚き、暫し絶句するばかりでした。

「魔神の呪」と「津軽の滄海の」と

そのように教わった直接のきっかけになったのは、上京の一週間前にやはり仙台一中出身で大正六年寮歌「魔神の呪」を作詞された佐藤惣之助さんの生家を初めて訪問して来たことにあったと云えますが、その背景にはもう一人、東北高校の一生徒の存在も大事な役割を果たしていることを紹介しなければなりません。このことは後で述べます。

百を超える北大寮歌の中でも特に多くの人々に唱われて来た歌の内の二つが仙台出身の大先輩によって作られたのです。以下はこの二つの寮歌に関しての私の探訪記です。（文中では、それぞれ「魔神」「津軽」と略記します。）

佐藤惣之助さん

「魔神」の作者が宮城県出身であることを一人の大先輩の方から教わったのは、私が卒業後帰郷して教員となって間もない頃でしたが、しかし作詞者の佐藤惣之助さんが旧仙台一中のOBではなからうかと思いつくまでにはいつの間にか三十年余りの時が経過していました。ようやく平成四年頃のある日仙台一高の同窓会事務局で調べている内に昭和四十年代の同窓会名簿の中についてにお名前を見つけたことができました。住所は仙台市柳生（やなぎう）とありました。早速生家に電話して御家族から、惣之助さんが（残念乍ら既に故人となっておられました）まさしく「魔神」の作者であることを教えて頂きそして私に快く来訪もすすめて下さいました。私もぜひひと望んでいたものの多忙に紛れまた六、七年の時が流れていました。

仙台寮歌祭は終わっても

平成九年に仙台寮歌祭が最終回を迎えることになり、私も名残を惜しんで参加しそのときの模様も、冒頭に記した北大宮城県同窓会報への寄稿文に加えました。近藤智雄さんからの招待の理由の一つには「仙台が終わって淋しかろうが名古屋はこれからも続いているからこっちに來て唱え」という暖かい思いやりも込められていました。夏なのに梅雨明けがいつになかった冷涼な仙台をひととき離れ、暑い名古屋に出かけて存分に唱った都ぞ弥生は又格別なものがありました。学生時代と同じ応援団の正装に身を包んだ近藤さんの勇姿に久々にお会いできたの

も嬉しく、又もう一つの喜びは前述の篠原猛さんとの寮以来初の再会であり、秋にも東京で必ず唱おうと心に決めて帰仙し、翌日からの新学期の仕事に戻ったのですが、やがて数日後奇しき縁との出会いが待っていました

インスピレーションが的中

結論を云えば（私は講師として東北高校に勤めていましたがそこで）四月以来授業を受け持っていた中の、一人の佐藤君という生徒が佐藤惣之助さんの血縁者であることが分かったのです。それはその佐藤君の住所が惣之助さんの生家に近いらしいということとを八月下旬のある日、全くひよんなことから偶然に知ったことがきっかけでした。その瞬間もしやこの生徒はあの惣之助さんと何か関係があるのでは？とひらめいたのですが、しかし佐藤姓は極めて多く、しかもその生徒の名には惣の字も助の字も入っているわけではなく、そもそも仙台の人口は今や百万人にもなるし、その中でそう簡単に惣之助さんの縁者に勤め先の教室の中で会えるなどと考えてるのは早計に過ぎるとも思いましたが、十月半ばになってついに本人に聞いてみたら果たして当たっていたのです。奇遇というか惣之助さんが糸を手繰っておられたのでしょうか、本当に事実は小説より奇なり之感を深くしました。佐藤清文君というこの生徒も家に帰ってから惣之助さんのことについて新たに初めて聞かされたこともあったと喜んでいました。

ともかくこの縁を今度こそ大切にと思い愈々数日後（平成十年十月下旬に）佐藤家訪問を実行するに至ったのです。

生家を訪問

佐藤家は仙台市の南部、太白区柳生の田園地区に建つ大きな旧家で、御子息の健二郎さんが懇切に説明して下さいました。

それによると惣之助さんは明治二十八年（一八九五）に生れ兄弟の内三人が北大に学び、仙台一中時代は、鉄道駅の設置数もまだ少なかったため一中までの約八キロメートル余りは徒歩で通われたとのこと、若い頃は身体を壊された時期もあったが、北大卒業後、今の農水省に入省、後に帰郷し中田村（今の南仙台地区）の助役、県会議員を経て貴族院議員となり終戦により引退された。



七十歳を過ぎたとき仙台祭歌祭が始まりその第一回に出席されたが、昭和四十五年に七十五歳で亡くなられた。若いときから文学が一番好きで、「魔神」の中では特に六番が好きでよく愛唱していたと健二郎さんは懐かしそうに語っておられました。きっと幾度となく御本人が唱われる「魔神」が流れたであろうこの生家

の風格ある家屋や門などをカメラに納めさせて頂いたあと佐藤家をあとにしました。

”魔神の呪…”とは？

私が入寮して初めて「魔神」を唱ったとき「アルペンの」の所では、三高の逍遙歌に出てくる「ラインの城やアルペンの」を連想しつつも、歌詞の意味についてはそれ以上の解釈をすることとを長い間怠っていたのですが、つい最近（平成十二年一月）になって、大正六年のこの歌の「魔神の呪アルペン」とは、第一次大戦（大正三―七年）の暗雲が覆うヨーロッパを意味しているに違いないと気付くに至りました。折しも二月下旬のある日佐藤健二郎さんから電話を頂いた際、そのことを伝えた所、「そう云えば確かに父は『学生の頃（第一次世界）大戦があった、平和というのはなかなか長続きしないものだ』と慨嘆していました。又『戦争と平和をよく読んだものだ』とも聞かされました」とおっしゃっていました。「魔神」が時の世界情勢を憂えた内容の歌詞から始まるという点からも実に貴重な寮歌であることを再認識している次第です。

さて平成十年の佐藤家訪問の一週間後、東京での北大寮歌祭でその訪問談を短くスピーチし席に戻るとすぐ、一人の大先輩の方から「仙台一中なら、津軽の滄海のを作詞した二階堂さんですよ」と教えられたのです。

”灯台下暗し”とはこのことでした。私は仙台出身の大先輩！

すばらしい歌をありがとうございます！と叫びたいほどの感激と喜びを味わいました。

いつも身近だった「津軽の滄海の」

私が恵迪寮に入寮して数日後に習った多くの寮歌の中でも特にこの歌は、北の地への熱い想いに始まり四季の自然を思う存分に謳い上げていて、新入生の心情にもびつたりの歌だという印象を受けたものでした。帰省中の仙台のわが家でも色々な寮歌を唱っていましたが、不思議と「津軽」を唱った時の情景は今も鮮やかに甦って來ますし、その後教師になっても学生生活の中でこの歌については、都ぞ弥生と並んで色々な思い出がありました。例えば宮城二女高では北海道に修学旅行に行くときは案内書の中にこの作詞を引用し、泉高校ではある秋晴れの日、グラウンドで生徒達にこの歌の四番「豊穣の秋の賛歌を奏でボブラの高梢さやかに揺ぐ…」を唱って聞かせたことがあり、仙台一高ではクラス新聞の中にやはり四番の詞を紹介したことがありました。北大寮歌の中でも特に思い入れが強かった歌の一つである「津軽」が仙台出身の方の作とは全く感慨一入なものがあります。

昭和十一年に仙台一中を巣立って二年、「人の世の清き国」とも謳われた北海道で、希望に胸を膨らませる二階堂さんの瑞瑞しい感性と豊かな表現力は益々磨かれて行ったのに違いありません。

二階堂孝一さんをたずねて

しかし東京の寮歌祭で、二階堂さんは僅か二十代半ばの若さで戦死されたことも聞かされ痛恨の極みでありました。が、あの名歌の作者についてもっと知りたいとの思いは絶ち難く、昨（平成十二）年十二月に、一中での同期の同窓会幹事さんである大場正彦さんにお尋ねした所、何とお二人が南太平洋をはじめ各地の激戦地で共に戦っておられたことなどの情報を直ちに頂けました。

数日後大場さん宅を訪問した所、一中の卒業アルバムや戦地からずっと大事に保管されていた隊員名簿等を用意しておられ、当時の模様を詳しく説明して下さいました。アルバムでは、二階堂さんの聡明にして温和なお顔にお目にかかることができ、さらにこのアルバムの編集委員の代表として書かれた編集



後記も拝見することができました。大場さん

によればお二人はガダルカナル区域で合流のあと次第に北西方面に転戦されたが、最後に二階堂さんは小隊長として中国雲南省に転じられ、昭和十九年に龍

アルバム写真の立派なお顔や、編集後記の文章からも窺える暖かく友情厚きお人柄と重ね合わせ誠に惜しい限りで戦争の非情さを痛感します。ご冥福を心よりお祈り致します。

北大卒業後おそらく二年後という早世の故か宮城県内の北大OBの何人かの方々に話しても「津軽」の作者が仙台出身の人だったとは初耳だったと驚かれるばかりです。しかし戦死された後、半世紀余りを経た今多くの方々を紹介することができるに至ったことは感無量なものがあります。

大場さんは昭和二十一年に帰国し、二階堂さんの遺品の合羽等を携え生家を訪問されたとのことでした。しかし乍ら、現在二階堂さんの墓所の所在地や御遺族の消息等は分かっておりません。先輩諸兄の中でご存知の方はぜひ教えて頂きたいと願っております。

多くの皆さんに感謝

こうして振り返りますと、仙台一高生の北大ストームのことを紹介した文がきっかけとなって名古屋と東京に向き、一方では東北高で佐藤君に出会えたことから愈々佐藤家訪問を実行し、そのことを語った東京で二階堂さんのことを知ることができました。ここに関わって下さった先輩諸兄並びに高校生諸君に大いに感謝する次第です。仙台一高生が仙台一高で舞った北大ストームがその五年後、彼等の大先輩のことを広く紹介できる結果に結びつき大きな喜びです。

札幌を離れて四十年余り経った今、私は北大寮歌への新たな感慨が生れ、そして奥行きの深さを感じている所です。おわりに、お二人のことを色々教えて下さった佐藤健二郎さんと大場正彦さんに厚く御礼を申し上げます。

(付記) 詩人で佐藤惣之助さんという人が、「湖畔の宿」など多くの有名な流行歌や、阪神タイガースの応援歌「六甲嵐」などを作っていますが、本文中の佐藤さんとは同姓同名で別の人です。

(平成十二年二月記)

「追記」

二階堂さんの墓所と御遺族の消息が判明

平成十二年八月に一同窓生から情報を得ることができ、仙台にお住まいの二階堂さんの妹さん宅を訪問し、同じ日に二階堂さんのお墓にもご案内頂き、お参りして墓前で「津軽の滄海の」を献歌して参りました。

情報とは次のようないきさつによるものでした。

北大の東京同窓会報・「フロンティア」の平成十二年五月号に私が寄稿した小文の中でも二階堂さんのことを尋ねたのですが、その文を仙台のJRR東北工事事務所に勤める五十嵐得郎氏(昭和四十八年工卒)が読んでくれていて、同氏と同室に勤務

している二階堂彰一さんという人に心当たりを尋ねてみた結果、果たして彰一さんは孝一さんの従兄のお子さんであったというのです。この知らせを受けとった東京同窓会の石川舜さんが早速電話で知らせてくれました。

東京の同窓会員であった五十嵐氏は昨年仙台に転勤されたばかりで、そこで二階堂孝一さんの親戚に巡り合えたということとは本当に奇遇なことだったと思います。このお蔭で二階堂孝一さんの妹さん(嶋倉孝子さん)が仙台市内にお元気に住んでおられることが分かり、私は八月末に訪問できたわけです。嶋倉さんは兄・孝一さんのことを最近のことのように色々とお話して下さいました。

妹さんが語る兄・孝一さん

二階堂さんは幼少時から読書が大好きで、ご家族が福島県内に在住時に磐城中学に進学した後、希望して仙台一中に転校し単身下宿生活を送り、卒業後北大豫科農類に進まれたとのことです。「津軽の滄海の」の作歌をし終えて帰省されたときは「いい歌ができたぞ、自信作だ」と語っておられたそうです。そして妹さんには寮歌当選の賞金で錦模様のアルバを買ってくれたとのこと、そのアルバを「神棚に供えました」と嶋倉さんは懐かしくも楽しそうに語っておられました。

嶋倉さん宅には二階堂さんが仙台一中時代に校内学術選手権保持者となって表彰された記念品だとか、北大時代の愛蔵の四

冊のアルバムも保存されていました。

貴重な記録・愛蔵のアルバム

アルバムの表紙には恵迪寮の寮章が大きく金色で刻まれてあるものや、「北海道帝国大学豫科農類」の金文字が刻まれてあるものもあり、昭和十年代の寮の予算とか大学の教育姿勢に豊かさやゆとりのようなものを感じとることもできました。そしてアルバムには六年近い北大生活中の写真が豊富に納められ、その殆ど全てに説明が記されていて、二階堂さんの几帳面なお

人柄を偲ぶことができ、当時の寮生活、学生生活さらに札幌を始め北海道の情景も彷彿とされ、又野球部活動の他にスキーにも大いに打ち込まれた様子も窺え実に興味はつきませんでした。又、このような貴重な資料性のある記録とも云えるものが立派に保存されていることに大いなる感銘を受けました。

情報を寄せられた五十嵐得郎氏、二階堂彰一氏と東京同窓会の皆さん、色々お話して下さった嶋倉孝子さんに心から感謝申し上げます。

(平成十二年十月記)

「蟹玉」のふしと「Paul I. Ota」のふし

石 村 義 典

(昭和四十年入寮)

『養老令注解』、向かいの席の同僚の問いかける声に、身を乗り出し、大冊の書名を確かめ、とび出ようとする声を身のうちに吞み込み、奥底でその書名をもう一度ひくく重く反芻したことがある。大尾の見返しには古書店からの購入を知る、その古書店のラベルがあった。図書の分類記号を与えている同僚が、その分類が適当かどうか、確かめるべく、私に声をかけてきたのである。

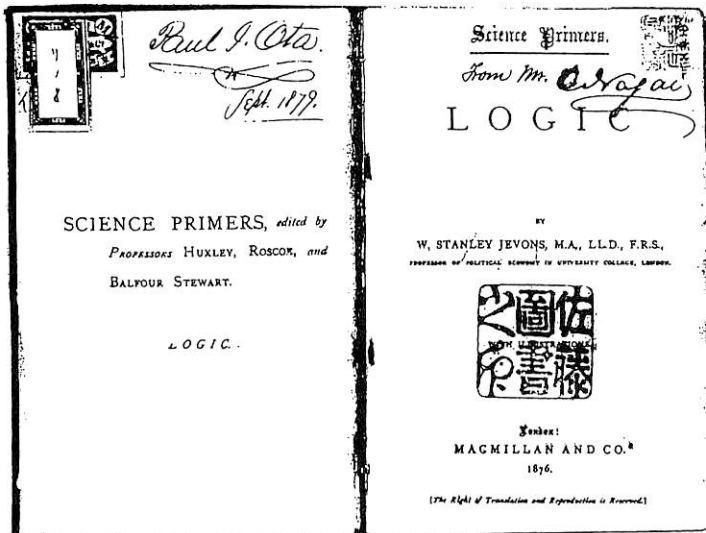
せまり来る、去る日の近いのを一日一日と受けとめる時間を学寮の一室でもつていた。その一日、街に出た私は年少の友人と「蟹玉」をそれぞれ一皿ずつ、注文した。自費での、老舗の中華料理店で味わった始めての中華料理であつたらうか。大冊の、番号入りの稀観書一冊を持ち出し、処分したのが二皿の「蟹玉」であつた。

少くない人々の好意、その東奔西走のお陰で授かつた職場での、棄てた、かつての自己の希望との再会でもあつた。一年余の後の、その再会は「懐かしさ」をもたらずものではなく、それは自己の人生の時間について、もう一度思いめぐらせるものであつた。その職場を四年後に辞し、そして、またその二十年後、その職場に再び通勤する日々をもち、旧同僚の変らない、暖かさをうけることになつた。

三十数年前の夏休み明け、農作業の区切りをつけての北上の途、神田の古本屋街でもとめた、あの『養老令注解』にも、その健在を確かめることができ、そして、また、その大学図書館の地下書庫の一隅で、予期しない出会いをもつことになつた。

一冊の洋書 (Logic by W. Stanley Jevons) の見開きのタイトルページに、「Paul I. Ota. Sept. 1879. From Mr. O. Nagai」とのサインを見出し、はるかな時間への想いを抱きしめ、その書込をのこしていった人の温もりの痕跡をも確かめようとした。門限八時、消灯時間十一時、消灯時間をすぎてもランプのもとでの読書は、その始末書の提出につながることも

あつた。この「Paul I. Ota」との書込をのこした少年たちの生活空間を記録した資料を覗く機会をもつたとき、そうした始末



書にこれでもか、これでもかという頻度で出合い、深夜の寮をゆく彼らの登音をも偲んだ。

「Paul I. Ota」とは太平洋の架け橋たらんとした新渡戸稲造であることは、人の知るところである。Paulはクリスチャン・ネーム、Otaは旧姓で、彼の受洗はこの書込の前年明治十一年十一月である。「O. Nagai」に該当する人物は札幌農学校卒業者のなかには発見できないが、『札幌農学校第三年報』（明治十一年三月）の在校生初級に太田稲吉（造）、内村鑑三とともに「静岡県 永井於菟彦」を読む。この札幌農学校第二期生二十名の内「イエスを信ずる者の誓約」に署名したものは十五名、それを拒絶したものは五名、その五名のうちの一人が、この「永井於菟彦」であることを知る。「イエスを信ずる者の誓約」に署名した十五名のうち受洗し、クリスチャンとして生きたのは七名のみである。

「永井於菟彦」の、この在校記録以後の消息は『札幌農学校簿書』（北大百年史 札幌農学校史料）に追跡することができ、Paul I. Otaの書込の翌年の明治十三（一八八〇）年五月五日付の、教頭心得ベン・ハローより札幌農学校校長調所広丈に提出した伺「農第五拾五号」、その付「第五拾九号」に、「永井氏ハ偷物ト放蕩ノ廉ヲ以テ正規ニ照シ該校ヲ放逐スヘキ事」として、放校処分が付されている。「偷物」の内容とは、「永井於菟彦儀ハ本年二月農学校園事務所江忍入り官金盗取り同四月三日其旨自首ニ付退校ノ上警察署江引渡シ山田義容外四人ハ校則ヲ犯シ品行ヲ紊シ自然校中ノ風儀ニモ間渉候ニ付本月十五日退

校申付候」（同五月二十日 開拓使大書記官調所広丈から開拓長官黒田清隆宛の「地廿九号」）により判明する。薄野の紅灯に魂を奪われ、そのための償を得んがための行為であったことを知る。この北国までやって来て、そこに魂の置き場所を見出すことができず、「logic」のそとに自己を置いた永井は自己に無用のものとして、Jevonsの「Logic」を新渡戸に贈ったのであろうか。（同じタイトルページにある蔵書印は「佐藤圖書之印」となっていて、新渡戸から「佐藤昌介」に渡った可能性を示唆している）

札幌を去る永井には、埋め尽くせない虚空とともに、経済的負担の重さ、月々支給された九円の貸費の、二年九月分の返納をも担うことになったはずである。その総額は三百円に近いのものであつたらう（貸費規則では卒業後、北海道で農業に従事するもの、および開拓使に奉職、満五年を経ば貸費の償還は免除されることになっている）。貸費返納額の例を「札幌農学校簿書」の明治十八年にひろって見ると、

貸費生徒 長谷川豊太郎

元受金 五百六拾五円五拾四銭八厘

明治十四年八月一日ヨリ

全 十八年七月五日マテ学資

一金 五百六拾五円五拾四銭八厘

明治十四年八月一日ヨリ

全 十八年七月五日マテ支払高

内

金三百拾七円九拾八錢四厘

賄費

金九拾貳円〇四錢貳厘

被服費

金五拾壹円七拾九錢

消耗費

金九拾貳円壹厘

備品

金貳拾四円〇七錢二厘八毛

洗濯料

金五拾貳円八拾五錢八厘

雜費

金 拾四円九拾三錢八厘

保存費

金 拾円八拾九錢貳厘

現金渡

右之通在校中之学資校則第二十條第二項ニ基キ返可致候也

明治十八年 月

札幌農学校

他の例では「五百四拾七円貳拾五錢八厘」となっているのに
も出会う（貸費は明治十四年からは月額十二円となっている）。

「学業進歩セサルカ品行修マラサル等ヨリ退学セシムル者若
クハ契約書ニ誓ヘル期限前不得已事故アツテ自ラ乞テ退校スル
者ハ在校中ノ貸費三ヶ月間ニ其金額ヲ返納ス可シ」と「貸費規
則」にあつて、退校後三ヶ月内の全額返納を義務づけられてい
る。しかし、病氣その他の事情が考慮される場合は、猶予また
は返納期間の延長が考慮されているのを、つぎの資料で知る。

札幌農学校生徒貸費金返納之義ニ付伺

当省所管札幌農学校生徒貸費ノ義卒業ノ者ハ其翌月ヨリ一ヶ月
金拾貳円ツツ疾病其他止ヲ得サル事故ニ依リ退学ヲ許シ若クハ
学力不足等ノ為メ学期中退学ヲ命シ又ハ落第セシ者ハ即納セシ
ムヘキ校則ノ処半途ニシテ退学ノ者ハ勿論卒業ノ者ト雖モ資力
菲薄ニシテ實際予期ノ通返納難行届保証人於テモ一時弁納相成
兼延期出願其事情万止ヲ得サルモノ往々有之候間右ハ十ヶ年以
内ノ年賦又ハ月賦ヲ以テ返納許可致度此段相伺候也

明治十八年六月十六日

農商務卿西郷從道

太政大臣三条実美殿

（明治十八年 北発第一六二号ノ内、「別紙」乾理第一五八号）

前稿「窓シヨンのことなど」でもふれたように、貸費の支給
は現品支給が原則で、この稿の例でも、それを確かめ、現金支
給額は四年間の在学期間中に僅か「十円八十九錢二厘」、一ヶ
月に二十三錢弱で、これでは自己の書籍代、雜費はいかに節儉
しても到底まかなえないはずであり、況や「紅灯への費」の余
裕などないことは明々白々である。

その後の「永井於菟彦」の消息の手懸かりは得ていないが、
この「永井於菟彦」と「Paul I. Ota」との人生を分けたものは
何であつたか。もう一度、それに想いをめぐらす。

”寮歌で北大へ入って、いまだに寮歌に生きている”

旧・旧寮最後の入寮生（昭和五年） 中山二郎さん

私の兄貴が中山一郎って言うんですよ。私の三年前だから昭和二年に北大予科に入って、恵迪寮で炊務委員（注・第八十九期）か何かやってるよ。その兄貴が湘南中学の一回の卒業生で、私が三回。それでね、兄貴が夏休みだ、冬休みだで寮から帰ってくるとね、大きい声で寮歌を歌ったんですよ。その寮歌に私が感激してね、それで俺も北大行こうという決心をつけたわけだ。だから寮歌で北大に入って、いまだに寮歌で生きてるみたいなもんですよ。



東京から夜行で行って朝、青森に着いて、青森の棧橋がないところで、ハシケで連絡船に乗って、函館からまた急行に乗って、とにかく二十四時間以上かかった。その時の藤沢から札幌まで学生二割引で八円五十銭、もちろん三等。寝台が三段階でね。下段と中段が一円五十銭、上段が八十銭ね。その八十銭の寝台券で乗って、結局九円三十銭、十

円足らずで行けたわけです。急行ですよ、全部。

私の入った昭和五年の恵迪寮は明治時代に出来た寮で、今の理学部の前に建ってたんだ。で、その寮費が月七円でしたよ。それで寮の委員をやると寮費が免除になるんだね。部屋は四人一部屋、寮全部で二百人ちょっと。

当時のエッセンは請負制でね。以前に借金いっぱい作ってね。それで請負制になってたの。なんとか自炊制を復活させようと委員が迷惑かけた商店をまわって借金を棒引きにしてみたら、負けてもらったり、交渉して歩いたんだね。私と入れ違いに寮を出たヤヨイちゃん（軽部彌生一・昭和二年入寮、八十八期炊務交渉委員）の功績が非常に大きいんだ。弁舌さわやかに語り草になってたね。

その時借金負けてくれたお店に、後に知事をやった堂垣内くんの堂垣内商店の名前もあるね。お父さんの頃だね。堂垣内くんは私のちよつと下で柔道部。私は剣道部。だから稽古するところは同じ道場で半分は剣道部、半分は柔道部でね、だから剣道部と柔道部仲よかったですよ。

飯は、なんぼでもおかわりができた



寮の食事は向かい合わせに座って、夕食は一膳、一葉。四人に一人くらいになべが一つで、お櫃が一つ。大きい肉皿にカツでも焼き魚でも煮魚でもついて、みそ汁がついて、それでおかずのおかわりはできなかつたけど、飯はなんぼでもおかわりができた頃でね。季節になると、鰯や鰯”って言うってね、犬に曳かせてりやカーで鰯売りにきたですよ、表通りを。腹減ってるやつが、おい残飯あるかなんて夜、残った飯をもらって、それでいろいろいれて食べたもんですよ。定食外に。

食うもんは貧しかったけれど、ご飯が食べ放題っていうのは

よかったね。「チャメ（給仕の男の子の愛称）、おかわり、チャメ、おかわり」っていえば、何杯でもお櫃を持ってきた。

イチゴなんてね、農場へ行って買ってきてね、洗面器いっぱい五十銭。それを洗って蒂とって、ミルク買ってきて、手でもんで、イチゴ・ミルクにして食べたわね。寮に購買部あったけど、イチゴなんてのは売ってない。卵とか、納豆とかね。



給仕“チャメ”はね、遠友夜

先生をやってましたね。学校へ通ってたんですよ。年は中学生くらい。小学校を卒業したあと、昼間は寮の給仕をやって夜は通ってたわけです。遠友夜学校というのは、明治時代、新渡戸稲造先生が創設したんですが、それを北大の学生が皆アルバイトして

寮歌は、風呂場で覚えたね

寮歌を教えたり覚えたりするのは風呂場。風呂場にその年に出来た寮歌を大きく書いて掲示するの。そうすると作詞作曲は誰で、その作った連中が直に教えたり、だれかがリーダーになつて教えてくれてね、明治四十五年の「都ぞ弥生」から、私ら昭和の初めまでの寮歌ね、みんな風呂場で覚えて盛んに歌った。



お風呂に入って、熱い湯が欲しい時には、「暖房、湯をくれー」と窓をあけてどなるとね、熱いお湯がどんどん。その寮で入浴してる写真があるんだ。裸で背中が写っているのが、私。なんだ、こんなところ写真とるのか、なんて(笑)

僕らの頃歌ってた歌い方と、今の若い寮生の歌い方は、だいぶ違うね。私たちの頃は歌っていうか、念仏みたいなもんだね。本当にことばでなくて、なんかこう、お経あげてるみたい。だけど、寮歌の精神は籠ってましたよ。今、テンポの早い音符のままに歌う寮歌と、私たちの歌ってた時代の寮歌と、精神的にはほぼ同じだと思うね。ただ歌い方が違うだけで。

あの頃は太鼓なんか叩かない。ただ旗を大きくこう、振っただけ。太鼓もなきや、手拍子もない。こうやってゆつくり歩いてゆつくり歌う、だから、大通りから寮まで一節歌うくらいでした。晩餐会なんか、食事の前に当然「都ぞ弥生」歌うんだ

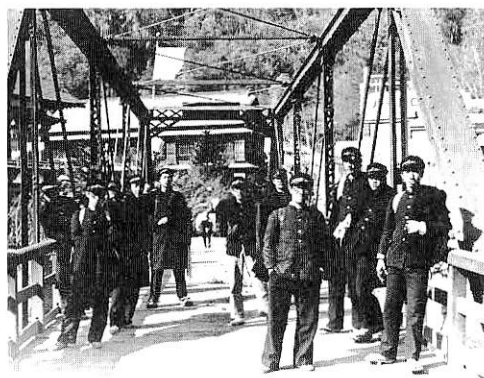
が、今のいわゆる楽譜的なスピードじゃなくて、それ以上に長い。でも、そぞろ歩きをしながら歌うテンポよりは早い。

横山さんが作られた頃はそんなにゆつくりじゃなかった。それがいつのまにか長くなって、で、現在はまた短くなっている。でも、それはそれで、いいんじゃないかと思うの。そして今の歌い方がずーっと続くんじゃないかと思う。昔には帰らないと思う。僕らは、僕らの頃の以前の寮歌をやつぱり歌うんだ。で、それ以後、例えば戦後の「時潮の波の」、あれなんかも、ついて歌うだけで、文句を見ながら歌う。私たちの年代の人だけでは歌えない。やつぱりね。宍戸くん(昭和十年入寮)が作曲した「春まだ浅き」なんてのだった、見ながらじゃなきや、私らもう歌えないもん。

札幌でやる恵迪寮の寮歌祭で、必ず、現在の寮生が、最近できた寮歌をみんなに紹介するけど、よくこんなのが寮歌だな、と思つてもね。でも、これも寮歌だと僕も感じますよ。彼等にとってはそういう歌が寮歌なんだ。これも時代だなんて。

よく歩いたね

我々が寮にいたときの定山溪マラソンね、あれは定山溪温泉ホテル。橋渡つてすぐ。鹿の湯の反対側にあるホテル、あそこだったんですよ、寮生が泊るのはね。寮からとにかくマラソン、定山溪まで走つた。寮からあそこまで何キロあったかね。三十キロ以上あるね。それを二時間半で走つた。着いてからホテル



で豚汁会やったの。記録とったりしてね、誰が何杯食ったとか。で、私らの時の記録はたしか六十二杯。あの頃で一泊一円位だったんじゃないかな。

予科入った年の夏休みの前かな、石狩川の河口に同級生がいてね、おまえの家行くよって言って、歩いて行つたよ、寮から。あの頃はみんな歩いた。

それでそこのお父さんがね、翌日サケ漁をやつてね、どれでもいいの一匹やるつて、それで一匹かついで帰ってきた。昔は不便は不便だったけど、意気込みと力があつたから、ムリとも思わないで歩いたり、馬車鉄で石狩まで行つて、帰ってきたりなんかしたもんだ。

寮の建て替えは突然だったんですよ

昭和六年っていうと、明治（三十八年）にできた寮が、もう出来てから二十何年たつてはいたんだが。だけど、寮を北十七

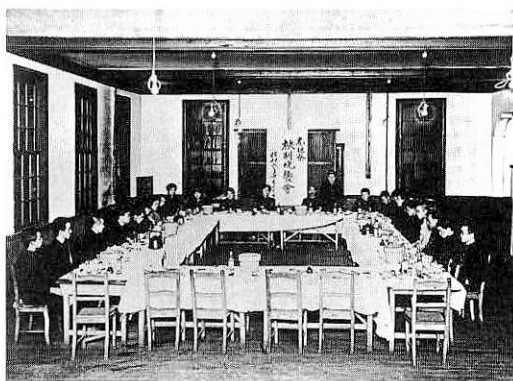
条に建て替えていう動きが出たのは突然だったんですよ。それでびっくりして対策委員会っていうのを作つてね。それで私もその対策委員に選ばれ、また、閉寮中の連絡のための委員会の委員にも選ばれて、さんざん苦労したんですよ。

一月中旬、及川書記より突如寮移轉のことを聞く。委員一同事の意外に驚き、直ちに藤原・成田両主事を訪ひ其の真否を匡すに、大体移轉費拾五萬圓を以てラグビーグラウンド西側の地に移転、従つて来る四月一日より一時寄宿舎を閉鎖しなくてはならぬとの確答を得。一月十七日、茲に於て寮移轉のことを全寮生に発表し、一方対策委員会を設立し、之が対策を練る。（寮史）

法文系の学部を作ろうっていう大学の方針だったんだが、それが予算的にだめになつて、寮の移轉だけが残つた。あの時ね、理学部ができて年数がわずかしか経つてなかったからね、私ら、北十七条にいくことには抵抗あつたですよ。それまでの寮では、五分前に草履ひっかけて予科の教室まで走れたんだから。十七条からだそうはいかないもの。

それで寮のなくなった間どうするっていうことで、えらい騒ぎで、まあ、頭の悪い我々がいくら努力したつて役に立ちはないけどね、藤、今は大学になつてゐるけど、あの頃は女学校だったね。藤高女。その寄宿舎をね、一時、我々に半分貸してくれという交渉までしてみたり。でも、ちょっと大きい下宿屋

は、半分を割愛して寮生を受け入れてくれましてね。



寮生は一時ちりじりになってしもうた。

十一月十七日、委員長の名の下に「寮舎移転工事完工セルニ付キ來ル二十一、二十二両日中ニ必ス、人寮スヘシ」の召集令が下された。町の下宿屋にくすぶって恵迪寮的雄大な生活ぶりをけちけちした下宿屋のマダムに制約され、市井の汚塵をかこつてゐた寮生である、召集令を手にして全寮生は雀躍した。待望の日は遂に來たのだ。(寮史)

その年の四月の末に閉寮の訣別晩餐會つていうのをやつてます。その時の委員長はね、庭球部のキャプテンやつてた瀬野周治。その最後の訣別晩餐會まで私、寮にいたんだ。ほんのわずかな人間でね。そのあと私は、私の兄貴が予科を修了して大學生になつて下宿しててね。そこどころがりでこんで一緒に下宿したわけ。まあ、それで、

やつと新しく寮ができてね、そこへ全部が戻れるということになつたんですよ。でもね、北へ行つて遠くはなつたけど、新しい寮は部屋はきれいだし、風呂はきれいだし、いろんな面でよかつたんじゃない。けど、ただマドベンができなくなつちやつた。廊下の窓が高くなつちやつたから。

(笑)

寮委員会



その年の暮れの選挙で寮務部長になつた。九十五期委員会で、昭和七年の一月からのスタートだつたね、その時の委員長が大津俊次郎。次の委員長が折笠彰、死んじやつたよ。結核で。剣道部だ。福島県出身でね。

寮務部長が終つたあとは評議員やつてね。評議員つていうのはだいたい引退してからね。名誉職だからね。

昭和七年五月に二年ぶりに開放記念祭やつた。一年休んだから。全室部屋デコ、犬飼の最後とか、最後の審判とか、その時代の時局をね、ちくりと。朝から大勢やつてきたよ、何てたつて札幌の春の名物行事だつたからね。

新しい恵迪寮の横にプールが出来て九月にプール開きが行わ

れてね。プールができたのは新しい寮ができたときで、それまではなかったね。

予科のウラオモテ

三年の一学期の終わる試験のほんの二、三日前に熱をだしてね。関節がこわばって痛くて動かなくなつた。首まで回らなくなつた。どうもリウマチ熱じゃないかつて。それでその頃第二内科に入院して、それで一学期の試験を棒にふっちゃつてさ、それで二学期、三学期の点の合計をしても、一年分の点数にはならんだらうと、もう落第したと思つたよね。でもまあ、どうにか押し上げてくれて。

あの頃は勇気があるというか、だれだれが今度の試験、ここがでなくて、どうも落第しそうだというかね。よしよし、たとえば三田村先生なら、三田村先生のところは今晩行こうって言つてね。二、三人で行つて、先生、だれそれが先生の試験にうまくなさそうですけれども、なんとかお情けで及第点だけは下さいと言つてね、廻つたもんですよ。そしたら、そうか、お前、なんて言うんだ。中山です。中山？ おまえもロクな点とつてないな。なんていわれて。そんな時代でしたよ。

私は昭和五年に予科に入った医類だけど、予科ウラオモテつて言つてね、私より三年おくれで卒業したのがいますよ。予科六年やって。二人ね。一人は寮歌「別離の歌」を書いた大槻

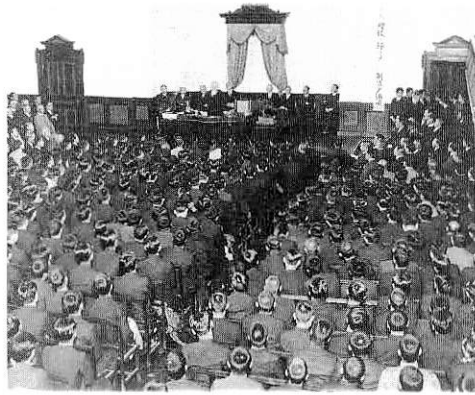


均さん（写真・左。右は作曲者の中村小弥太。彼が一年二回、二年二回、三年二回やつた。ウラオモテやつて……。でね、大槻の兄貴がおえらい方で、札幌に来たときに歓迎会なんかやつて、弟をひとつよろしく頼むよって言つて。それじゃ弟つてだれだつていったら。ああ、そうか、落第で有名な（笑）。とにかく学校出ないんだもの。その大槻、変わつてゐるんだよ。数年前に亡くなつても葬式は出させなかつた。そしたら奥さんが耐えかねて、そのあと、「大槻 均を偲ぶ会」つていうのを催して、それで鎌倉の八幡前通りの旅館に集まつて、お葬式がいのをね、やりましたよ。

寮生と寮外生、大学、結構仲が良かった

寮に入らなかつた地元出身の予科生と、寮生つていうのは結構仲が良かったですよ。それはね、部。私ら剣道部にいたけど、運動部とか、文化部ね、音楽、和楽、洋楽ね、こういう部つていうのが、寮生も地元もみんな一緒ですからね、そういうのも

影響してと思うね。みんなが同じ部で同じ生活をする、だから自然と仲良かったんじゃないですかね、差別がなくて。寮外生も寮にきて一緒に、特に運動部の場合は。



開識社っていうのがあってね、有名な人や有名な教授が講師となつて、寮生に特別な講義をしたりした。

開識社ではないけれど、あの頃、新渡戸先生が北大にこられて講演なさつてね（写真）。私がどういふわけだからその委員になつて、感激したね。

予科の桜星会なども学校の中の組織と一体となつていたので、予科の運営もうまくいってたんじゃないかね。大学と寮がケンカするということとはなかったよ。

勉強ガツガツやったのは早く死んじゃった

私の入った医学クラスは四十人づつ二組で八十人。現在残つてるのは十人足らずだね。だから八十分の十しか生きてないわ

け。で、勉強をガツガツやったのは特待生になつて、皆早くに死んじゃった。生きてるの一人もいないよ。まあロクでもないのがいっぱい生き残つてるけど（笑）

十年に医学部出たんだが、十一年に支那事変が起きてね、軍隊にとられた仲間が多かった。だからノモンハン事変から、ク拉斯の中からもう戦死者が出ましたよ。そして戦時中は陸海軍にとられて戦死して、もったいないことした。私も召集されて軍医になつて、最後に石垣島で終戦になつて帰ってきたんです。ここ（藤沢）で開業したのは戦後、つまり戦地から帰つてきてから。

まだ私、現役だけど、もう診察はほとんどやってません。けど、そのまま、看板だけは出してある。高校や中学、保育園の嘱託医、それから工場の産業医が三つばかり、みんないっしょくたにやつてるわけ、だからまだ看板下ろせない。外來はもう来ない（笑）、来れば診ますよ。一人でも二人でもね。昔からの患者さんで、他所へ行かない変わったのがいますからね、そういうのはやっぱり診てますけど。新しい人はみんなもう、新しいところへ紹介して。

”恵迪寮無くして予科は無し”

なんていうかな、本当の平平凡凡に過ごしたけれど、今こう、寮生時代の三年間で一番思い出すことつて、やっぱり友だちですね。青春時代に寮の共同生活を楽しくやつてね。生きがいを

感じたっていうのはやっぱり寮ですね。これはちよつと自宅から通ったんじゃ、ああいう生活は味わえないと思うね。恵迪寮っていったら、予科の中では大きい存在だったからね。

“恵迪寮無くて予科は無し”と、そういうこと。寮生は、札幌近郊から通う人はごくわずかで、ほとんど全国的な出身者が多かったね。八割は道外でしょうか。二割は地元。十七、八歳くらいからです。か三年間の寮時代、一番感激しやすい頃に友だちになって。大学に進学しても、卒業して社会人になっても、そういう友だちがやはり続いている。だから今、日本の高等教育を考える会っていう、昔の旧制高校の組織を生かそうという会があるんですよ。懐古的な人が集まっていると思われるかもしれないが、今の教育のあり方をなげいて、旧制時代には旧制の良さがあった、昔の教育について再考しようということ。

現在の寮生が、どんな希望をもつてやってんのかはわかりませんね。でも若い人にはね、そうね、学校の制度、学制はどうなるうとも、人生の青春時代をね、しっかり人間の基礎を作る学びの場所としてもらいたいと思うね。ナマイキいうようだけど。そして、一生付き合える名友を作れと。

私ら平凡に人生を送っているけれども、自然にこれやってくれ、あれやってくれ、という社会的な、なんていうかな、リーダー的な役が回ってくるね。学生時代の精神がどっかで認められてるんじゃないかな。私が医師会の役員をやったり、看護学校ができれば、その校長にされたり、あるいは藤沢市の体育協会の会長をずっとやらされたりね、自分で立候補しなくて

も、そういうふうに認めてくれるような人間に、やつぱりなってもらいたいと思うな。

とにかく私は寮歌が好きでね。だから今でも寮歌を歌いに札幌にも行くわけだ。寮歌はね、寮生以上に好きな人もいっぱいいるんだ。だから恵迪寮寮歌祭が寮のOBばかりでなく、寮歌の好きなものが誰でも参加できるような、そういう道が開ければ喜んで参加してくるでしょう。寮歌を歌ってね、若返ってね。また、寮歌祭を引き継いでいく人が多いとうれしいね。

私も同窓会主催の寮歌祭ができてから、毎回ずっと札幌へも行つて、私の入寮した昔の寮のある開拓の村の入口から歩いて、そして寮の前で献歌祭をやつてね。そのあと京王プラザに集まって寮歌歌つて。今年ももうホテルの予約とつてある。



（聞き役 井口光雄―昭和二十八年入寮―）

思い出の恵迪寮

旧寮を想う

中 川 義 一

(昭和三年入寮)

恵迪寮

昭和三年四月

立 地

恵迪寮はエルムの大木に囲まれ、緑のローンの中で学園内一等地に立地して居た。高く聳える二階建六十室、南、中、北、新寮と四棟竝立して居た。

入 寮

玄関の入口には「恵迪寮」の大きな立て表札、中に入ると横に長押に墨痕鮮やかに大きな額が「格物致知」と書かれて居た。えらい処に来たと身の締まる思いがした、と同時にヨシと決断した。寮は自治寮とは名許り、当局は共産党を恐れ退役将

校三人を当直させて居た。寮生はそんな事には馬耳東風、三人にはアダ名付けて、鼻糞と思つて居た。

寮は当時運動部の合宿の觀を呈していた。入寮するには、何処かの運動部に入らねばならなかった。柔道部、剣道部、弓道部、水泳部、ラグビー部、馬術部、陸上競技部等々、全部を網羅するのであった。柔道部と陸上競技はインターハイで四覇を唱えた歴史があつた。一室四個の木製ベッド万年床である。周囲の白壁は落書き、名句、名画で汚れて居た。中には有島武郎使用のもその儘残つて居た。

通 学

寮から予科の教室までは二百米、上バキ、スリッパ通学した。

寮 祭

寮祭は、開識社と定山溪旅行（マラソン）の三大イベントの一つであった。寮は通常は女人禁止であったが、此の日許りはフライ（自由）で、札幌中のメッチェンの憧れであった。あた

かも札幌中の祭りのように来寮者は朝から引きも切らず、寮内は満タンであった。



また寮祭は新入寮生の頭脳の優秀さを示す場所でもあった。各室、主に新入生を主として、優秀な頭脳を絞って、見事な飾りを、又奇想天外な試みをして入場者をアツと云わせた。中には北海タイムスに写真入りで報道された傑作もあった。又此の日は此の年の新寮歌が発表された。

開 識 社

寮生の教養を高める為にエライ人物にお話を依頼した。佐藤昌介の昔話、松村松年のオオボラ等があった。

寮 歌

寮歌「都ぞ弥生」は、一、開識社、二、野球で小樽高商に負けた時、三、級友が凱旋（二年連続留年）して郷里に帰るのを札幌駅ホームで、皆が「都ぞ弥生」で送ってやった。此の三つが正式に斉唱された。

秋のイベント

定山溪旅行

土曜日の午後授業をサボって定山溪へと遠足、運動部の連中はマラソンで行った。夜は大宴会場、定山溪中の客で大広間を埋めた。寮生自慢の郷土の歌踊り、学生カブキ、漫才、奇術等々、此の時許りは、教授連中は常に絞まれ、格好の餌にされた。

ストーム

貯ったものを吐き出すのに時々ストームが行はれた。夜中、禪一つでスキーを廊下を突き廻り大声でワメキ散らした。冬でも衣服を着て居ると水をかけられるのが常道であった。暴れ廻って後でツケが廻って来るのであった。

寮 雨

窓の下緑のローンも白雪も、此の場所許りは黒土露呈して居り、少し悪臭もあった。

入 浴

大浴場があった。運動部の連中が垢だらけ汗一杯で来るので一般の寮生は早くから済ませていた。湯船には近くの暖房小屋から水湯がパイプで通って居たので、窓越しに、寮生の「ダンボー湯を呉れ、水を出せ」の大声が夜中響いていた。

食 堂

時にオカラが続くことがあった。ストームのとはつちり、破れた窓硝子は食費をつめて修理されたので、成り行き上食堂の副食はオカラが続いた。

娯楽室

当時マージャンが流行し、寮生にも人気があり全道大会に出る選手も居た。一方であまり熱中して留年が出る始末であった。当時当局はあまり学生が勉強すると優秀なのが赤に走るのを恐れ自然、運動や酒は大目に見られた。

サッポロビール

寮生は狸小路のサッポロビールのビヤホールを溜まり場として居た。中には大デヨッキ三十六杯の猛者（モサ）も居た。又

友人が泥酔したので、近くにタムロして居た人力車を奪って此れに乘せて、自ら引つ張って寮迄たどり着いたのもあった。更に酔狂に、北海道長官官舎の長官の表札を失敬して寮の己の部屋の表札にしたのも居た。

夏休み

内地の学生生徒のワンダーフォゲルが続々とやって来て、寮に泊って行つた。食堂、入浴は寮生と一緒に、寝具は寮生の万年床、皆な大満足であった。

冬

裏の小川をせき止めて作った急造リンクスケートでは、内地からの連中は布団を背負ってスッテンコロリ。当局の好意で夜間照明が付けられた。小川の土手に十メートル位の斜面があった。スキーの初歩は此処からであった。此処を卒業すると先輩に藻岩、円山のゲレンデに連れられて行つた。

万 六

寮生が一匹の子犬を拾って来た。万六と命名して、皆んなで万六、万六と可愛がつっていた。万六とは当時の生徒主事（校長）青葉万六の御名を頂いたものだった。

腕白恵迪寮生

繁 富 一 雄

(昭和六年入寮)

腕白恵迪寮生の名に相應しいのは、吾輩もその一人である。

昭和六年四月、北海道帝国大学予科に入學した時は、古い寮は取り壊されて無かった。札幌駅に下車すると、二三人のヒゲもじゃもじゃの汚い格好をした予科生が私の処によって来て、繁富君だね、と声をかけられた。“ハイ、そうです”と答えると、持つて来たりユックサックをサッサと取り上げて、北大中央コートの近くの下宿屋に連れ込まれた。この下宿が北大庭球部の合宿であつた。



(予科帽も真新しい一年目)

入学式は忘れもしない四月十八日で、それ迄二三日、中央コートの手入れをさせられた。折悪しく入学式の四月十八日には雪が一尺(約三十センチ)も積つて折角のコートの手入れも台なしに

なつて終つた。この下宿から私の北大予科生の生活が始まつた。九月に漸く新しい寮が完成して、十月に入寮する事が出来た。私が中学時代に読んだ本には、高等学校の寮は凄く汚いとい書いてあつたが、北大の新しい寮はトテモ綺麗であつた。

庭球部は北寮に割り当てられた。寮に入つて一番困つた事は、ベッドであつた。畳一枚のベッドの上に寝る事は、若い吾々には大変な苦難の道で、四人一部屋に寝るのであるが、四人共、夜中には床の上のころがつて寝て居るのが暫く続いた。その内、皆が馴れてベッドからころげ落ちる事が無くなつた。

寮には娛樂室も図書室もあり、楽しい毎日で六ヶ月はすぐ過ぎて、二年生になつた。学生生活に馴れて来ると二年目から本當の恵迪寮生になつて来た。学校では、講義中うるさいので下駄履は許されて居ないのに、恵迪寮生に限つて下駄履で登校して、廊下では下駄をぬいで、裸足で下駄を持つて教室に入つた。先生に廊下で会うと丁寧に帽子を取つて朝の礼をする。そして教室では先生が入つて来ると起立の号令の下に立ち上がつて礼をする。之は今の学生に見せたいものだ。札幌市内の自宅から通學する者、又、下宿して居る者で、下駄履で登校する奴は

一人もなく、下駄履は必ず恵迪寮生であった。

吾々は軍事教練に大反対であった。ある日、吾輩は軍教の時、足に靴の絵をかくて草履を履いて軍教に参加した。萬年特務曹長（将校にならない兵隊。これを萬特と云って馬鹿にしたものだ）が教官で、早速、靴を履いていないのが見付かって、草履を脱いで砂利の上を歩かされて、流石に吾輩も参った。



（三年目の筆者。居室にて）

て飛び廻って演習の指揮をしていた。

二十五連隊長が観閲に来られた時、私達は演習に空砲三十発を与えられていたのて、命令がないのに寮生仲間と示し合わせていて、祝砲と称しパンパンと空砲を打った。その時、近藤中佐は馬を飛ばして吾々の列に飛び込んで来て、一犬虚に吠え萬犬鳴くと凄いい形相で怒鳴られた。

当時予科生は、学科試験の中、六十点以下をコンデと云い、

秋の野外演習に

参加した時であった。札幌の二十五連隊長（少将、二十六、二十七、二十八連隊は旭川師団にあった）の観閲があるので、予科の配属将校 近藤中佐は張り切っていて、馬に乗っ

二科目で落第であった。然し軍教は六十点以下であれば、他の科目が良くとも文句無しに落第になる、こんな事をすれば軍教は六十点以下になると思ったが、幸いにして出席率が良かったのでパスパスで落第せずに済んだ。

秋になると、恵迪寮から定山溪温泉迄マラソンがある。恵迪寮は運動選手が殆どであるから全員走らされた。当時の平岸街道には小川が流れて居り、両側共林檎畑になって居るので咽喉が乾くと林檎を盗んでかじりかじり走った。然し、林檎園の持ち主は何とも云わない。之は三年の寮の委員になった時に判ったのだが、寮生が走った後、寮の委員はトラックに沢山の御馳走を積み込んで定山溪温泉に向かうので、その中に林檎園の持ち主に必ず御菓子箱を持って行き、一軒一軒廻って御詫びするので文句が出ない事が判った。冬になると、酷寒零下三十度の中を寮の廊下では毎日の様にストームがある。裸に赤揮一貫の出で立ち（装い）で寒さも何のそのと夜中の二時ごろ迄ワイワイと騒ぎ廻る。恵迪寮生でないとは出来ない事である。

三年になって寮の委員で寮の事をやるのでは満足出来ないで、北大予科学生を全部取り纏める予科の総務委員になり、各運動部応援団を傘下にしたいたいと思ひ、農類、工類、医類より各二名選出の選挙に立候補して、工類から選ばれて総務委員になった。予科長の青葉萬六先生が私を大変信頼してくれて、今年の子科の運動部の予算は全体でコレコレだ。之を各部に分配してやって欲しいとの事で、私に任せて呉れた。

この写真にある様に桜星会の総会の式次第は私が全部書い



(前列右から、鯨江中佐、青葉予科長、三田村予科次長、藤原予科主事、後列中央は筆者)

た。総会も終わり愈々予算会議に入った。この予算会議は中々易々と行かず、雪国でも一年中練習の出来る柔道部、剣道部が強いので、強い処に予算を出せとケンケンゴウゴウ二日間続いた。又、応援団長からも、勝ち進む処に応援団を出さなければならんと強硬な意見も出たが、それをキチンと私は取り纏めて、その責務を果たした。

恵迪寮の方は購買部長に推されて、剣道部の高山英美君と野球部の浅野秀雄君と仲良く相談して、寮の中に之迄なかった喫茶部を作った処、大麥に評判が良く、大盛況で寮生を喜ばせた。之から北大恵迪寮に永く伝わっている数え歌を紹介するが、この歌の文句の通り、如何に恵迪寮生が腕白であつたか判ると思う。尚、ストームの歌も追加しておく。

恵迪寮数え歌

一、一ツトセ

人も良く知る札幌の ここは北大の恵迪寮

ソイツア豪気だね

二、ニツトセ 禪一ツのストームも 素面(シラフ)じや

しもせぬさせもせぬ ソイツア豪気だね

三、三ツトセ 見たか聞いたか北大の

恵迪寮生の飲みっ振り ソイツア豪気だね

四、四ツトセ 止(ヨ)せば良いのに酒を飲み

金のないのも知らぬ顔 ソイツア豪気だね

五、五ツトセ 何時も学校じゃ沈没し

落第するのも何のその ソイツア豪氣だね

六、六ツトセ 難し試験も気にしない

一夜作りのカンニング ソイツア豪氣だね

七、七ツトセ 七ツ不思議のある処

星のある夜に雨が降る(窓から小便) ソイツア豪氣だね

八、八ツトセ やさしい処なぞありやしない

恵迪寮には熊が住む ソイツア豪氣だね

九、九ツトセ 此処らで止めとけ もう一度

落第すれば凱旋(ガイセン)だ(凱旋・放校になること)

ソイツア豪氣だね

十、十ツトセ 時は三時か未だ早い

並べた銚子が十三本 ソイツア豪氣だね

恵迪寮ストーム替え歌

一、早くなりたや札幌の 農学士

肥え桶かついで えつささー

コチャ理想は高いが どん百姓

二、早くなりたや札幌の 工学士

ノミ槌叩いて トッテンカン

コチャ理想は高いが ヘボ大工

三、早くなりたや札幌の 医学士に

ウグイス鳴かせて喜んで

コチャ理想は高いが 人殺し

四、早くなりたや札幌の 理学士に

フラスコ立てたり壊したり

コチャ理想は高いが 皿洗い

五、早くなりたや札幌の 文学士

エロ本書いて喜んで

コチャ理想は高いが エロ文士

ストームの歌

ゝ醒めよ迷いの夢さめよゝ醒めよ迷いの夢さめよゝ

一) 札幌農学校は蝦夷ヶ島 熊が住む

荒れ野に建てたる大校舎 コチャ

エルムの樹影で真理解く

コチャエ コチャエ

二) 札幌農学校は蝦夷ヶ島 手稲山

夕焼け小焼けのするところ コチャ

牧草片敷き詩集読む

コチャエ コチャエ

三) 札幌農学校は蝦夷ヶ島 クラーク氏

ビー・アンピシアス・ボーイズと コチャ

学府の基を残し行く

コチャエ コチャエ

恵迪寮のぬくもり

大久保 一良

(旧恵迪寮居候)

昭和二十九年早春、リュック一つを背負い、札幌へたどりついた。その夜は、大通公園のベンチで、丸井の屋上から黄色い光りのサーチライトが廻転するのを数えながら、夜あけを待っていた。一瞬止まった思いがする、私は一点の存在しかなかったのだ。

前年、武蔵野美校主催の絵画講習会は、北大教養部の教室が会場で、私はその講習会の手伝いで参加した。この期間の宿泊が恵迪寮であったのを幸いに、今度は単身、一週間の逗留を申し込んだ。恵迪寮の夏休中は、運動部員以外は帰省中で、その部屋で同居が許された。男臭さが充満し、天井、壁のいたるところ墨痕あざやかに自由奔放な青春が爛漫とさき誇っていた。

一畳敷のタタミと五十糎位高さのぶかっような木造ベ

ッドが六台、机も古色蒼然たるものであった。重い引戸を引くと、廊下は木目が鈍く光り、斜めにかたむいたりしていた。東面へ伸びる四棟の奥は食堂の広間であった。何等かわりのない私が、半年間もの居候ができたのはどうしたことか。食費のない私は、同じ釜のめし、アルバイト、酒場まで同じで、朝になると学生達は講義へ。取り残された私は恵迪寮前で、第二農場から放牧される乳牛の群れに囲まれて、デッサンにてこずっていた。

ヨソ者は退却せよ、永居はケシカランと聞こえてくると、前回の委員会の骨折りで、南棟の二階の登り口に二坪の細長い便所跡の物置が、アトリエとなり、ベッドがもちこまれた。階段を昇り降りし、絵画の制作にうちこむことができた。第一回の油絵個人展が、この便所跡から産まれたのである。

そして、これらの作品展のために、寮生達がリヤカーに積んで、ワイワイと運び展示まで仕立ててくれたのだ。

恵迪寮は最高の青春であった。

「恵迪寮の思い出」——追記

野 原 博

(昭和十二年入寮)

はじめに

「恵迪」第三号に寮の思い出を書きましたが、当時の寮務委員の一人として担当した「定山溪旅行」の学校とのトラブルが誤解されて伝えられている点があるため、当時の情況、経過等を書き残しておきたかったためです。

学校の強い反対を押し切って伝統行事である演劇会を実施し、途中で中止を余儀なくされたため、終わってからの虚脱感が大きく、又半世紀以上の年月を経ているため思い出せないことが多い。一緒に寮務委員として行事の推進に苦勞した石浜渉君から間違いを指摘され、改めて当時を思い返しており、古い写真も出てきたので訂正すると共に「思い出」を追加したいと思います。

一 寮務委員の編成

寮務委員一名欠と書いたが森本君が抜けたあとに山際義秀君が入り四人になった。昭和四十六年に作成された「恵迪自治寮史」を参照して忘れた点を補ったための失敗であった。写真一は委員長を含めた寮務室五人が寮の中庭で撮ったものです。

山際君（寮務会計）は医学部に進み、陸軍々医として入隊、戦後北大の医局に帰っていたが連絡が無くなったこともあり失

念し、この文を借りて深くお詫びします。千野純之君（寮の同期で医学部、弓道部）に問い合わせた結果、彼はその後青森で開業、平成三年三月三日亡くなられた（病名不詳）。

南部君（委員長）は農学部に進み、学部生の時風邪から結核になり、郷里に帰り養生のかいなく亡くなられた。柔道部の主将を務めた頑健な身体であったが、結核には抵抗力が無く大変残念でした。彼は八戸南部藩主の一族で、葬儀には柔道部の同期を代表して笹島君と参列した。

笹島君（寮務部長）は医学部に進み、海軍々医として戦艦



写真 1

「金剛」に乗艦、南方海域（フィリッピン）で昭和十九年十月二十五日戦死。医学部では海軍に行つた者が軍艦と生死を共にし戦死者が多かつたように思います。

一年遅れて工学部に進み、新設の大学院生として学校に残り現在東北大学名誉教授として仙台に在住。

二 寮行事の風景

入寮は予科新入生に限られ写真二の如き「入寮宣誓」をさせられた。寮務室の中で電燈を消し、ロソクの火の薄暗い中で、寮委員がずうっと並ぶ中で行われた。

その夜は総長等の先輩教授を招待して盛大な歓迎晩餐会が行われ、その後「鈍才会」の洗礼を受け、夜中には委員



写真 2

による歓迎ストームを受けて恵迪寮生の誕生となった。
入寮した昭和十二年には第三十回記念祭が五月二十九日に盛大に行われ、戦前における最後となった寮開放記念祭が行われた。
当日は沢山の一般市民を迎え、各部屋は工夫をこらした飾り付けを競い、これが記念祭の名物として話題となった。写真三は私の居た南寮四号室の当日の記念写真である。写真四は寮の中庭に設けられた臨時の食堂で、沢山の来客、特に若い女性（メツチェン）でにぎわった。

写真 3



写真 4

この年の七月支那事変が勃発した。そのため以後の寮の年中行事は学校の要望もあり中止又は自粛して行われるようになった。

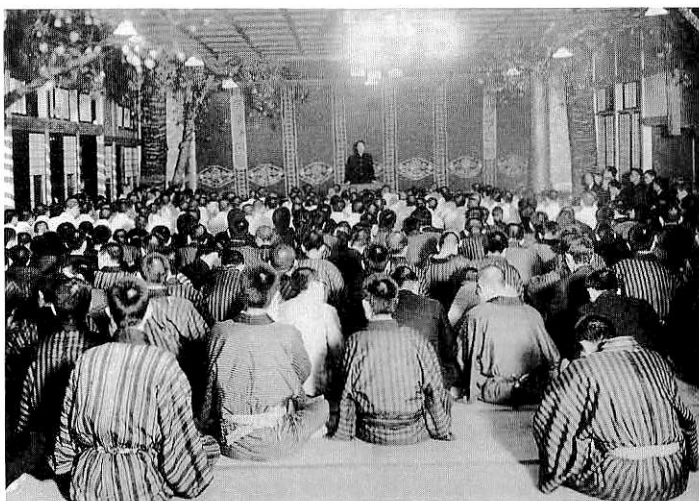


写真 5

三 当時の北大、札幌の風景

昭和十四年秋の定山溪旅行は伝統の行事に復帰することが委員会でも決まり、行事の推進は寮務部が担当し、学校の反対を押し切って演劇会を行った。写真五は演劇会の開会挨拶をする笹島寮務部長。前の席の白衣は招待した療養中の傷夷軍人。

北大の構内、特に恵迪寮付近にはまだ自然の景色が残っており、構内を流れる太子川には春になると水芭蕉が咲いた。

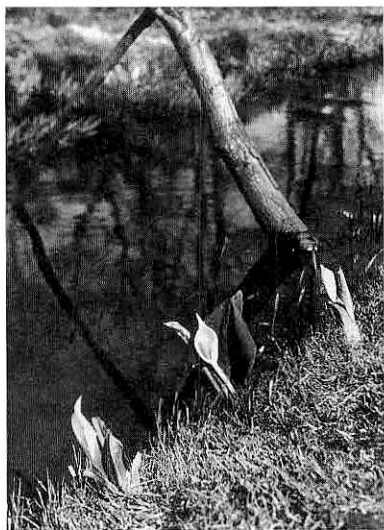


写真 6

札幌の街は人口二十万位の落ち着いた地方行政都市で、大正

十二年の寮歌「春雨に濡るアカシヤ花」の雰囲気が残っていた。
写真七は四丁目通りのアカシヤ並木で右側のビルはグランドホテル。



写真 7

最近の札幌はラーメンが有名になったが、当時は街にラーメン屋のあった記憶がない。ラーメンは街で酒を飲んだり、映画を観た帰りなどに夜の屋台で食べるものであった。期末試験で徹夜の時、寮の前に来たラーメン屋台がなつかしい。写真八はラーメン屋台を囲む予科生。

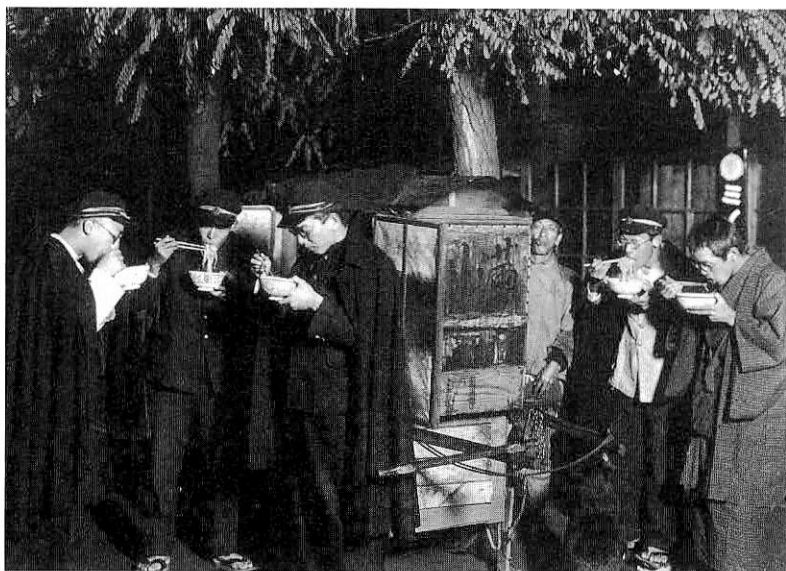


写真 8

昭和十七年ごろの恵迪寮

小 沢 久 弥
(昭和十七年入寮)

恵迪寮の思い出

昭和十六年十二月八日の真珠湾攻撃と共に、いよいよ日米戦争が始まったが、その頃、私は受験勉強の真最中であつた。

そして翌年の昭和十七年三月、東京で北大予科の入学試験を受け、無事合格したわけであるが、やはりいざ出発となると仲々大変であつた。戦争が始まったばかりであるし、初めての北海道行きということで、私のみならず父母も大変に心配だつたように思う。

然し、幸いなことに、私が卒業した麻布中学（現麻布学園）の当時の校長が、札幌農学校出身の清水由松先生であつたこと、更に、麻布中学出身で而も恵迪寮の大先輩である高松正信先生が、当時の北大農学部教授でいらつしやつたことなどもあり、これ以上ない恵まれた紹介状を書いていただき、勇んで上野駅を出発することになったのである。

然し上野駅から北上し、汽車が仙台駅を過ぎた頃から、殺伐とした東北地方の風景と共に、いよいよこれは大変な所に來たもんだと、一人心細い思いをしたことを覚えている。

又青森から函館まで、津軽海峡を渡る青函連絡船の中で、船底に雑魚寝させられたが、その時の大森の臭のきつかった事は今でも忘れることの出来ない思い出である。

このようにして漸く札幌に着いたものの、昼間うつかり、真新しい白線帽子で、街中の三越のあたりをうろちよろしていると、後から先輩達に、「新丸!」とおどかされ、周りの市民の人達に良く笑われたものである。

これも、遥々と遠くからやって來た新入生に対する暖かい歓迎の風景であつたのであらう。

恵迪寮の生活

恵迪寮の生活は、先ず宣誓式に始まり、歓迎晩餐会、鈍才会、返礼ストームと続いていったが、兎に角、今までと全く違う行事が次々と進んでゆくので、何が何だか分からないままに時が過ぎて行くような感じであつた。

然しその中で一番感じたことは、私のように都会から來た者



恵迪寮の幹事室（昭和十八年）
右から松島 健（剣道部）、
小沢久弥（剣道部）石井寛輔
（柔道部）、安曾武夫（柔道部）



支笏湖の寮歌祭（昭和17年）

にとつて、地方から来た、どちらかと言えば田舎育ちの仲間達
が、まことに素朴で遅しく、且つ立派に見えた事であったよう
に思う。

当時の恵迪寮は運動部毎に部屋が割りふられていたが、私は
南寮の剣道部に属していた。

剣道部には、海軍予備学生の特攻隊として戦死した、河 晴

彦が当時の主将であつたし、又、足が悪い為稽古はせずに、皆
の為太鼓を叩くだけの部活動を続けた富山健一等、立派な人物
がそろっていたように思う。

富山健一はその後、第七期と第八期の幹事長を務めた快男児
であつた。

各運動部の練習が次々と終り、夕方一斉に大浴場に集合する
が、全員で蜜手を振り上げて寮歌を合唱する勇壮な光景は、今
でも忘れることの出来ない、懐かしい青春の一齣である。

又、食事で思い出すのは、メニューの中に、「手稻の白雪」
と、「藻岩の緑」と云うのがあつたが、これは夫々、「バター付
きジャガ芋」と「カボチャの煮物」のことで、ロマンチックな
生活部幹事のお茶目な工夫であつたのである。

昭和十七年入寮の年の秋に、恒例の支笏湖旅行が実施された
が、戦時下であつたにも拘らず、貴重な体験が出来たと思つて
いる。

全員マラソンで出発し、湖に近くなつてから徒歩になり、夕
陽が沈む頃支笏湖に到着したが、湖の辺で、全員で寮歌「湖に
星の散るなり」を合唱した時の美しい光景は、一生忘れること
の出来ない思い出である。

恵迪寮の精神

昭和十七年に恵迪寮に入寮し、今日まで約六十年が経過した
が、私にとつて今後も一生付き合つて行きたいと思う人々の殆

どが、恵迪寮時代の友人であるように思われるのは何故であろうか。

恵迪寮に入寮してから間もなく、何か事あることに先輩から、「馬鹿になれ」、「馬鹿になれ」と云われたことがあり、その度に、私は何故馬鹿にならなければならないのか分からず抵抗したものである。

然し、いつの間にか此の「馬鹿」の意味が分かるようになり、

寮歌感傷



二年生に進む頃には、「馬鹿」になり切ってしまったように記憶している。

今、恵迪寮時代の友人が皆懐かしく思えるのは、どうも此の「馬鹿」になり切った者同志の心の繋がりが、今になっても生き続けているのではなからうかと思われるのである。

(第七期(指導部長)幹事)

鈴木恭一郎

(昭和二十八年入寮)

新恵迪寮玄関前の草むらの中に小さな石碑が建っている。その石碑には、「俺は寮歌が好きだ！俺は寮が好きだ！俺は寮友が好きだ！俺はみんなと騒ぐのが好きだ！俺は恵迪を愛している」と彫ってある。こう自分の思いを吐露した寮生は不幸にして在籍中に亡くなったということだが、それを悼んで在寮生が資金をカンパしてこの石碑を建立したと聞いた。寮史に残すべき美談ではある。

しかし小生は、この青年がどのように寮、寮歌に対する熱烈な思いを吐露するに至ったその心情に思いをいたす。若者らしいその感性と憧憬と夢は、他の追隨を許さない何か一途な純粹なものがあるように思えてならない。早逝したこの寮生の若々しい精一杯の自己主張、アイデンティティの表出。旧寮各室の壁に先輩達が残した美文調名文調の言葉とは違った、この石碑に彫られている単純なことは小生は何故かひかれた。

ひるがえって思う。今日は、政治・経済・文化の諸相において、国の、そして国民個々人のアイデンティティが問われている。かの北海道開拓使農学校の古寮に住した我々の大先輩たち、弱冠十六、七才の内村鑑三や新渡戸稲造博士らが、未開の北の大地に渡って来た時の彼等の心情はいかなるものであったろうか。維新の動乱未だ収拾せぬなか、若き強烈な自己主張を秘めて渡道し、やがて「尊き野心の訓え培い」、時代の先駆者として主体的に活躍し、近代日本の歴史を築いて行った彼等のアイデンティティに改めて驚く。

人間のこころの平安を願い、自然を愛し、人類の平和を希求し、友情を尊び、そして人生に大きな夢を育み、感性豊かに、真理探究の道に生きる生きざま。建学の精神たるフロンティアシップ。それらの在り様こそが恵迪寮生としてのアイデンティティではなかったろうか。と、特に現役寮生の諸君に聞きたいのである。(さて、お前はどうかとと自問反省しつつも)

時は下って、小生と同期の恵迪寮生の中には、専ら己が精神の涵養に務めつつ、リーダーシップを発揮して文化学術等分野

の国際交流に今なお身を挺している人が多々おられる。

その心情においてクラーク精神の淵源を訪ねつつ、学問的業績として「W・S・クラーク博士論文集」を集大成された人。ノルウェーの探検家且つ海洋学者であるF・ナンセンの名著「フラム号・北極海横断記―北の果て―」を、自ら極地科学者としての学殖をもつて裏打ちしつつ、翻訳し論評を加えた人。ドイツ文学者として世界の名曲「野ばら」を収集し、その演奏まで手がけた人。異文化状況を追いつつ、シルクロード四千キロを走破した人。チベット・ヒマラヤ・アンデスなど地球高所の自然・社会環境の調査をすすめている人。あるいはまた、文学者有島武郎の主として恵迪寮とのかかわりについてユニークな評伝を著した人。等々極めて多士済々である。

まことに敬すべき寮友である。愛すべき恵迪寮である。小生はかの石碑に言葉を残した青年ならずとも、かつて恵迪寮生であつたことに限りなく誇りを抱く者である。

老残、時に少楽少善ありまた少苦少憂あり、臨んで寮歌集を繕き好きな寮歌を口ずさむ。

昭和二十八年(一九五三年)寮歌「手をとって美しき国を」を読む。歌詞は時潮のしからしむるところ、時代閉塞の状況を映して一部に悲愴感が残るが、時局を見る目の確かさ、歴史に対する先見性が行間に読み取れる。表現は青年らしく直接的であり、国の未来に対しての壮大な期待に満ちている。その意味で同時代性を保持している。作詞後五十年を経た混迷の現在状況を先取りして把握していると言えぬでもない。

作詞者の当時の心情を慮れば、表現こそ違ふけれどもかの石碑に言葉を残した青年の心情に一脈通ずるものがあるのではなからうか。

小生入寮当時の寮生は皆、等しく貧しかったけれども心に豊かさがあつた。精神力において何でも取り込める余裕があり、表情にも明るさがあつたように思う。新生日本を担う青年の時代変革へのロマンチズムがあつたかも知れぬ。それは名歌「都ぞ弥生」のもつ感傷性とはまた別の心情であらう。

旧寮大食堂での月一回の全寮生参加の夕食会。寮歌斉唱を導く大太鼓の響きが今も耳に残っている。

懐かしき恵迪寮の壁

清水 信

(昭和二十八年入寮)

北大に入学し四ヶ月、柔道部の七大学定期戦に参加した後、オホーツク海に面する枝幸のかに缶詰工場で稼いだ金を手に帰札したが、下宿代と前期試験でのアルバイトなしを契機に恵迪寮に入り、都ぞ弥生を初めとし多くの寮歌を覚えた。

しかしながら、私にとり想い出に強く残っているのは、毎晩眺めて覚えた南寮の壁に記されていた「北帰行」である。この歌は、思想弾圧厳しき時代、東京の一高校生が特高警察に追われ我等が恵迪寮に匿われ、さらに北上し、樺太よりロシアへと去つていったときに残され、密かに歌い継がれてきたと教えられた。

昭和二十九年秋に冶金工学科へと進み、北学寮で二年を過ごし、東北大に勤めて一ヶ月、父を亡くして上京した。何時しか札幌のことは忘れていたが、こんな私でも忙しい東京生活になれ、少し気持ちに余裕が持ててきた頃、コーヒーを飲みながらのロシア民謡、知床の歌や雪山讃歌、また吹雪で山頂に達したとき薄暮となり、数分交代で腰まで埋まる新雪をかき分け、暗くなり、磁石頼りに直行で沢を上下の悪戦苦闘、十時間以上続いた春香山スキー登山。同室の小林君とともに道を間違え、遠回りしたために後続の先輩にビバークの迷惑をかけた無意根小屋などを想いだしていた。

このとき耳にしたのがこの歌で、聞くたびに恵迪寮の壁を思い出し、この他にも多くの歌が書かれていたことを懐かしく思い出している。

* 恵迪入寮四十八年目の集いと総会案内を頂き、三浦半島の突端より若き頃の札幌を想いだし書いてみました。

ゴジラ映画の中の「都ぞ弥生」

小 出 精

(昭和三十年入寮)

昭和三十年四月、恵迪寮に入ったばかりのある晩、同室のT君とゴジラ映画を見に行った。映画館は道庁の東の方にあって、二番館だったから、そのゴジラは前年初登場して話題を呼んだ、ゴジラの第一作目だったに違いないと思う。

白黒のスクリーンにストーリーが面白く展開する内に、やがて夜の東京の、ある賑やかな飲み屋街の場面が流れて来たと思うや、何と「都ぞ弥生」の歌声が聞こえて来るではないか。それは、料亭のような建物の二階の宴会場とおぼしき部屋の中から、大勢で歌っている声だけが聞こえて来るものであったが、札幌に来たばかりで初めて見る映画に「都ぞ弥生」とは！と一瞬嬉しくなったものだ。

しかし、その「都ぞ弥生」の歌い方は、いかにもドンチャン騒ぎ風の俗っぽいものに聞こえたのがっかりもし、名歌「都ぞ弥生」をこういう扱い方をすると、といささか憤慨もしたものであった。

ゴジラは、もう半世紀近くも人気者の座を保ち続けているが、その第一作目の一場面に、ともかくも「都ぞ弥生」が登場して

いることは、案外知られていないのではないかと思うがいかがだろうか。

さて、翌年のある夜、同室の数人と共に寮から街に出かけたとき、札幌駅前あたりから、「都ぞ弥生」を皆で、天にも届けと云わんばかりの勢いで朗々と謳いながら歩いた。四丁目三越前迄来てもまだ五番を歌い終えていなかったと思う。

駅前通りは現在程ではないにしても、既に相当数のビルが林立していたので、夜の街に「都ぞ弥生」はよく響きわたった。あとで考えれば、ホテルの泊まり客などには或いは安眠妨害になっただかも知れない。

しかし少なくとも私の胸中には「都ぞ弥生」とは、ゴジラ映画の中で歌われていたような歌ではないことを知って欲しいという意識があったことは確かであった。



恵迪寮と適塾

―教育の原点を求めて―

佐 久 間 哲 郎

(昭和二十六年入寮)

昭和五十九年七月のある日、当時学生部委員会第一小委員会（学寮担当）の委員であった私の部屋を、前年開寮したばかりの北大学生寮（現恵迪寮）執行部の寮生数人が訪れた。その中の一人が、第三期寮長の佐川光晴と名乗ったが、雑談の中で神奈川県茅ヶ崎の出身で、文三類の二年目一年であることがわかった。色白で育ちのよさを感じさせたこの寮長は、開設当初から寮が抱えこむことになった自主入寮詮衡による大学側の入寮募集一時停止をいかに解除するかという難問に對して、寮執行部がどのように考えているかを縷縷述べて帰って行った。

この入寮募集一時停止は、解除に至るまでほぼ二年の歳月を要し、代々第一小委員会と歴代寮執行部とのせめぎあいが続くことになるが、これについては触れない。佐川君は、このあと平成元年四月めでたく法学部を卒業し、東京の出版社に就職したが、そのあと間もなく埼玉県内の食肉処理の会社に転職した旨を記した年賀状を受け取り、驚いたことを記憶している。賀状の交換は三年ほど続きその後音信は途絶えていた。

再び佐川光晴君の名を目にしたのは、平成十二年十一月二日の北海道新聞夕刊の紙上である。

彼は、食肉処理場での生活をモチーフにした小説「生活の設計」によって、同年十月、第三十二回新潮新人賞を受賞したのだ。彼は「北に向かつて姿勢を正せ」という寄稿文の中で、「北大―恵迪寮での生活は、あらゆるナルシズムを笑いとばし、目の前にいる吹けば飛ばようなちんけな他者と向き合うこ

とだけをひたすら強要する生活」と規定し「それは、ユーモア」の連続だった」と述べている。そして彼の内面は全て「恵迪寮」によって構成されているとまで言い切っている。

佐川君のこの言葉は表現を少し変えたと、恵迪寮での生活は強烈な個性同士の裸のぶつかりあいであり、この過程を経て原石が輝きを得てゆくということであろう。そして「恵迪寮」での生活が持つこの意味あいは、我々が五十年前に木造二階建ての寮で体験したものと全く共通するものであり、新しい、恵迪寮にもこのような精神が生きていたことを嬉しく思うとともに、これこそが半世紀以上の歳月を経てなお我々、恵迪寮OBを強く連帯させているものに違いないと思うのである。

漱石の「夢十夜」の中で、鎌倉時代の佛師運慶に要約次のように語らせているくだりがある。「佛の像は、佛師が原本から彫り上げるものではなく、もともと原本の中に埋もれている佛の姿を彫り出すものである。」この言葉は、強烈な個性の持ち主同士の裸のぶつかりあいが、個々の中に埋もれている多彩で豊かな資質や才能を目覚めさせ浮き彫りにしてゆく恵迪寮での生活そのものを示すものであり、教育というものの原点はまさにこの点にあるのではないだろうか。

このような教育の例は幕末の私塾の中に見出すことができる。当時当然のことながら、まだ系統的な学校制度は存在せず、国内には大小とりまぜておびただしい数の私塾があった。その中の一つに、蘭方医の緒方洪庵が大坂に開いた蘭学塾「適塾」がある。塾生数は一千人に及び、我が国の近代化に大きく貢献

した大村益次郎、橋本左内、福沢諭吉、大島圭介、長与専斎等錚々たる在野の逸材を輩出している。この適塾での教育でまず注目すべきことは、師である洪庵が高所から塾生を教えるという一方通行の教育ではなく、実力主義に裏付けられた塾生相互の自治的運営に委ねるシステムを採用したことである。入門早々の塾生は、まずオランダ語の文典により語学の基礎をマスターすることから始め、達成度に応じて上級へ進む。等級は十に分かれ、その上に塾生でトップクラスの実力を持つ塾監、塾頭がいて全体を掌握する。したがって、適塾では真の意味での実力主義が機能しており、自治に基づく実力主義が良い意味での競争原理を生みだしていたといえよう。

もう一つ大事なことは、塾生全てが、貧乏してはいても智力思想が活発高尚であることについて高い誇りを持っていたことである。このことは、福沢諭吉の自伝「福翁自伝」にも述べられているが、学問すること自体に無限の楽しみがあることが、適塾の塾生たちの共通認識であったという。このような意識を教え子たちの間に涵養できたことは、洪庵の教育者としてのぬきんでた識見のあらわれである。

現在のわが国に、適塾のような教育システムを望むことは、当然のことながら不可能である。しかし、人間に本来具わっている潜在的な資質や才能を発見し、それを磨き上げる方法論は参考にできる筈である。能率的ではないかもしれないが、強烈な個性の持ち主が互いに切磋琢磨することによって、潜在する資質や才能が磨き上げられ開花する、教育システムとしての恵

迪寮の意味を、教育の原点として問い直すべき時ではないかと思ふのである。

思えば半世紀前の恵迪寮時代、私は平凡で怠慢な一寮生であった。卒業後も大学院を経て母校に職を奉ずることになったが、この五十年間の社会の激動を反映して、寮を含む大学全体もまた激動の時代を経験することになった。私自身も学生部委員として、また平成三年からの二年間は、大学評議員の立場で学寮

問題と真正面から向きあうことになった。したがって、私の内面での恵迪寮は風化もせず美化もされず、依然として生々しい存在であり続けている。

しかし、最近のわが国の教育、特に高等教育のあり様の推移については憂慮すべき点が多く、四十余年の教育研究の現場での経験をふまえて私なりに考えていたこともあって、恵迪寮をめぐる一文を草した次第である。

異文化の共存

——世界遺産と恵迪寮——

神 野 善 司

(昭和二十六年入寮)

【バーミヤン石佛】

アフガニスタンの中央部に位置するバーミヤン遺跡。その石窟の中の大佛がこっぴどく爆破された。今年(二〇〇二)三月二十七日のCNNはその衝撃的な映像を世界に伝えた。

バーミヤンの大佛は高さ五十五メートルと、三十八メートルの二つがあり、周辺には無数の石窟僧坊跡がある。いずれも六世紀から九世紀にかけて建造され、中国の敦煌や雲南ともつながる東西文明の融合を示す佛教遺跡である。唐僧玄奘の

「大唐西域記」は、当時まだ黄金に塗られて輝いていた大佛の荘嚴さを記録している。

もっともこの石佛破壊は急に起こったことではない。四年前の一九九七年四月、イスラム原理主義勢力のタリバン派は、バミヤンの東方六十キロのゴルバンド渓谷まで進撃し、同地を拠点にするイスラム統一党ハリリ派と戦闘を続けている最中から、「同地にある大佛は、偶像崇拜を禁ずるイスラム法に反したものであり、ダイナマイトで爆破する」と公言していたのである。

「世界文化遺産」の指定保存運動を進めているユネスコ（国際連合教育科学文化機構）は、この大佛がシルクロードの世界的文化遺産であるとして、日本ユネスコ協会の副会長でもある平山郁夫画伯らはバリの世界ユネスコ本部マイヨール事務局長と共に世界に働きかけたが、解決することなく今日に至った。

この間、周辺の中小遺跡をはじめ、首都カブール博物館のガンダーラ美術など佛教遺産は散逸し、アフガニスタン全土を支配するようになったタリバン勢力をして「望むなら、持ち出しやすいようにこなごなに砕いてやる」とまで言わせて破壊されてしまった。

アフガニスタンは「世界遺産条約（世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約）」に加盟していながら、世界文化遺産の指定をしていない。他国からみて類なき文化遺産であると言っても、アフガニスタンが佛教遺産を「文化」と認めていないことにほかならない。

二十世紀、人類は三つの大きな大戦を経験したあと、情報革命の始動と共に大きな対立は解けたが、多様な民族、宗教、歴史の違いによる多数の対立を生じている。二十一世紀の人類の課題は異なる多様な文化の共存であると言われている。

我々日本人も、国家の成立以来今日まで、宗教の対立や排斥がなかったわけではない。戦没慰霊者の参拝にしても、外国からの批判のほか、国内でも対立している。しかし他宗教に比較的寛容であり、大きいもの、古いもの、文化の異なるものを感じ動をもつて受け入れてきた。だから今度の石佛破壊は文化を異にする価値観の差を思い知らされた。

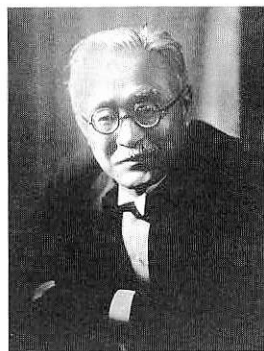
【新渡戸稲造の武士道】

一九九九年末、駐フランス大使であった松浦晃一郎氏が、マイヨール氏の後の世界ユネスコ事務局長に選ばれた。戦後日本が国連加盟を認められて初めてのことである。

経済力はあるが軍事力はアメリカに負い、文化力は低い日本と、未だに日本を揶揄するヨーロッパにあつて、平和を希求するユネスコの「異文化間の平和」をどう舵取りするか、正念場である。日本の国連加盟にさきがけてユネスコ加盟が認められて、今年でちょうど五十年でもある。

八十年前、新渡戸稲造はバリーに在住して当時の国連の事務次

長に就任している。今の松浦氏の立場である。その新渡戸がその二十年前、今からちょうど百年前、英文で「武士道」を出版して日本人を世界に紹介している。そこでは、日本人を西欧の「騎士道」になぞらえ、異文化に対する日本人の特質を次のように言っている。



「あらゆる民族の伝統文化の中にそれぞれの精神的価値があり、その存在と価値を認めつつ平和に共存し奉仕し合わなければ人類の未来はない。とりわけ宗教についてもそのことが言える」さらに、

「文化がどんなに違っていても、人間としてその魂の底の底では相通じるものがある」という。また、
「日本人の魂は形や表現こそ違っても決して失われず、その世界的役割を果たす」とも言う。

百年たった今、二十一世紀に入った我々へのメッセージでもある。開学百二十周年事業で北大構内に設置された胸像の台座には「我れ太平洋の懸け橋とならん」と、丹保憲仁総長の英文で揮毫されている。太平洋戦争後五十五年、アメリカとの同盟関係で平和のうちに世界の経済強国になった日本は、アジアはもちろんイスラム中東からヨーロッパまで、全世界への懸け橋を懸けなければならない。懸け橋は異文化を結ぶものである。

【汝殺すなかれ！】

ところで異文化を結ぶ最低限の価値観とは何であろうか。ユネスコの平和宣言では、その第一を「命を大切にすること」と言っている。「殺さないこと」「殺されないこと」である。当たりまえのことのようであるが、ただ命を全うするだけではない。極めて倫理的価値観である。

東西統一を実現し、首都をベルリンに移転統合したドイツは民族純化の名のもとに行われたホロコーストを戒めるためのメモリーを検討した。教育、科学、文化のあらゆる分野に亘る世界の睿智を集めて平和のための研究所を設置する。いや、広大な土地に数多くの慰霊碑を建てる。議論のすえ結局、ただ一文「汝殺すなかれ！」の碑を建立することになったという。

昨年、月刊誌の文芸春秋が「どうして人を殺してはいけないのか？」を特集して反響を呼んだ。またその類書が多数出版された。確かに平和である日本において、少年によるあるいは親子間の殺人や、職業倫理観の欠如による結果としての人を死に至らしめる行為など、ここでも人と人を結びつける最低限の倫理的価値観が「殺さないこと」と言わざるを得ない。

【えひめ丸事件】

今ヨーロッパでは壮大な実験が試みられている。民族の純化を反省するドイツとライン河をはさんで争ってきたフランスが

核になってEU統合が進んでいる。民族、言語、宗教の違いを超えて軍事、経済、政治までも一緒にしようとする。それぞれの言葉と文化はあくまでも別で融合はさせない。むしろ個別で多様な文化を尊重しながらEU統一を進めると言う。

アメリカ合衆国も多様な民族、宗教、言語の国民で構成されながら一つの国体をなしている。あと二十年もたつとアフリカン・アメリカンが六割を越えるという国で。違いを結びつけているものは何か。米潜水艦が「えびめ丸」を沈没させた事件は憤りに耐えないが、事件の背景が次々と明らかにされた。自由で民主主義だからだけではない。臭いものには蓋をする、閉鎖的な日本では考えられないオープンネスとクリンさがある。それが異なる民族を結んでいることに気付く。

人類が情報社会に突入して国境がとれた。そして多様な主張が生まれてきた。同時に自らを守る手段が難しくなってきた。IT革命(情報技術革命)Ⅱ欧米ではICT革命即ち情報通信技術革命)は直接多数の相手に対する技術であるが、自分も多くの相手にさらされる。弱点もさらされる。オープンとはそういうことであり、それが人と人との結びつきを深める。

【白川郷合掌造り集落と恵迪寮】

一九九五年、奥飛騨の「合掌造り集落」が世界遺産に指定された。訪れた観光客は言う。人が住み電気洗濯機まであってイメージがこわれた、と。勝手な言い分である。人間の営みが係

わる遺産こそ価値がある。白川郷には見せるだけの保存家屋群もあるが、ただ古い、大きい、珍しいという感動だけでなく、当時と現在の文化の関わりを読み取らなくてはならない。

恵迪寮が札幌市郊外の「開拓の村」に保存されている。半世紀前の恵迪寮の生活を偲ぶことができる。しかしここで営まれた二年間の共同生活のなかで醸成された青年の魂の社会的連帯を評価しなくてはならない。旧きを回顧するのではなく、異なった青年個々の共生の中で結びついた魂が後の半世紀の文化を築いてきたことを。恵迪寮が青年にとり第二の胎内であつたことを。

「三歳児の魂百までも」という。三歳は満齢で二年である。哺乳動物のなかでも直立歩行を始めた人間は骨盤の関係で未熟児でうまれるようになったという。出生して一人歩き出来るまでは胎内相当の母の懐の慈しみが必要である。

異文化を結ぶ倫理的価値観は、異文化を学び理解することだけでなく相手の立場に立つだけでも生まれえない。オープンやクリンであればよいというでもない。共に生きながら共感し感動しなければならぬ。「美」に対する感動のように。その点、バーミヤン石佛は「美」ではないのかもしれない！

(注、漢字は文化である。佛を仏にした仏教会に反対する)

一人、オンブズマンを行く

小 寺 義 彦
(昭和二十七年入寮)

今六十七歳。四十四年間の会社勤め(三井物産三十二年、㈱ラルズ十二年)を終えてフト天を仰ぐ時、残された時間を如何に送るか、感多々である。矢張り予て考えてきた通り、先送りしてきた問題と予定の順序で取り組んで行こう、ヤットその時が来たのではないか、そうだそうしよう!と、少し動き出したが。

然しどうやら又しても先送りせざるを得ない状況となつて来た。恵迪四号の編集者井口氏と話をする内、「小寺さん、その事を書いてよ、恵迪の仲間には知らせてもいいんじゃない!」と言われて気持ちが悪くなった。一人黙々とやるうと思つてたが、ここに寮友各位にお知らせし一言を待つ事とした次第。

◎私の当初からの先送り問題

恵迪寮で人間を学び、法学部で方法論(考え方)を学び、仕事に就いて四十数年、この四十四年間は一に「責任を果たす事」を最優先とした日時であった。社会人としての責任、長男坊としての責任、男性としての責任、そして父親としての責任等々…全て「なすべき事」を優先して来た。

もし人生の日々の在り様に「したい事」、できる事(機会)、

「すべき事」、「そしてその組み合わせ」があるとするならば仕事の時代は將に「すべき事」を最優先として過ごした日々であった。換言すれば、それは「建て前」を中心にした日々とも言える。結果として、あとの事はどうしても先に送らざるを得なかったし、且つそれで良いと思つてやつてきた。私が退職後に取り組むとして先送りして来たものを簡潔に記すと、略、次の通りとなる。

一、信仰なるものを観点を変えてもう一度見直してみたい。
(本ばかり読むのは止めて)

一、リズムなるものを体で理解したい。(古代から人間は体をゆすつて来た)その為には。

一、もつと多くの人を見たい、知りたい。その為には出掛けたい、インターネットも見たい、その為にはパソコンを。

一、貧乏学生を一人でも応援したい(フィリピン)、其の他。

十年あれば何とかできるだろう：時間はある：これで吾人生は充分：と。が、どうやら又しても前記の先送り宿題は、再先送りをしなければならぬ心状況となつてきた。それは前述の宿題が全て一個人としてのやりたい事に對し、今は人間としてやつておかなければならないと考える宿題が頭から離れなくなつたからである。

◎それは正義の実現である。

一寸オーバーで申し訳ないが、具体的に言えば、日本の民主主義を市民の手に取り戻したいという事であり、更に具体的に言えば官組織の不当不正を正す事であり、同時に私自身の不作為の非を改める事である。

この数年來知らされて來た「官」の不祥不正を看過する慙愧はもう嫌である。こんな日本を子供に残したくない。マスコミも事實はその時には知らせてくれるが、それがどうは正されたかの検証は殆ど示してくれない。（民故の限界でもあるが）全てがその場その場で消えて行く。怒りの二、三だけ記して置く。

（一）国。外務大臣の宿泊費が二十八万円から九万円で実行出來た。なれば二十八万円と言う吾々の税金は何の爲であつたのか。局長は？課長は：こんな事を何十年もやつて來たのか。それを國に開示させる必要がある、権利がある、機密費をチェックしようとしぬ官の體質、是正されたのか。要検証。

（二）北海道。道議會議員は公務の爲であり公費の支出は當然と主張しておきながら、自費負担の判決が出た途端、それから野球は止めたとチームを解散してしまつた。今までの理屈は如何説明するや、同様のへ理屈でどれだけの公費が今も支出されているのか。調べなければならない。

（三）札幌市。市営バスの運転手の平均年収は九百五十万円（平成八年）であり、これは道内民間バス十七社の平均給与の約二倍である。高の上に諸手当の基準も不透明である。市の交通事業は大赤字なのに市はコストダウンの努力を如何進めているのか。この六年間で給料は幾らダウンさせたのか開示させる必要がある。民間の現状を見よ。涙が出る。

月々給与の中で通勤手当をもらいながら毎日公用車で出勤していた市の幹部職員：。それをチェックもしない役所の體質は是正されたのか。本年三月からスタートした札幌市オンブズマンはメスを入れているのか？？何に、どこに。

今の若い人にやつてくれとは言えない。彼等は日々「しなればならない仕事」を最優先にする多忙の毎日であるから。

北海道苦情審査委員（制度）は期待出來るのか。六十七歳はそれが「出来る」。マクロの改善は専門家の奮起を信じたい。例え私の一人オンブズマンが蜂の一刺しであつても出來ることからやつて行きたい、そしてそれを市民に知らせたい。日本の民主主義を官僚の手から市民に手に取り戻す為に。今がすべき時であると思う。活動は既に始めている。

日本の学校教育の諸悪の根元

「受験勉強」を断ち切る教育運動

坂 下 五 郎

(昭和二十八年入寮)

確か「恵迪3号」に「北海道自由が丘学園をつくる会」への賛同を募る広告を掲載した。この学園はまだ法人としての認可はとっていませんが、夕張市と札幌市の豊平区でオルタナティブ・スクールの形で生徒を募集し、活動を行っております。最近はマスコミに登場する機会も増えてきますので、活動内容をご存じの方も多いかと思えます。今日はなぜ私が発起人の一人になったのか、私なりの理由について話します。

十五年ほど前、私は二十数年間勤めていた公立高校の教員を辞めて、ダイカ株式会社と言う民間の企業に入りました。「生徒に教えるのは、もう終わりにして、今度は社員教育をやってみませんか」との誘いを受けたからです。公立高校の教員から途中で民間に移ると言うケースはあまりないので、結構珍しがられたのですが、私にとっては新しい発見の連続でした。

一番驚いたのが学校と実社会との乖離です。もっと正確に言うとうと学校教育で評価される学力とビジネス社会で要求される能力との乖離です。平たく言うと、今の学校は就職した若者には

何の意味もない知識の集積と、さほど重要でもない記憶力の訓練に血眼になっている、と言うことです。

ビジネスマンに必要とされる「問題解決能力」や「人間関係能力」、「コンピテンシー Competency *遂行能力」、「情動的知性 Emotional Intelligence」などについてはそっちのけです。ですから、企業が人を採用するときに、学校時代の成績はほとんど問題にしません。中には、出身大学すら問題にしない、いや、むしろ出身大学を考慮に入れると人選を誤る、と考える企業まで出てくる状況です。

この現実には、本当に驚きました。

更に、この学校教育とビジネス界との乖離は、実は学校教育と「人間としての生活」との乖離でもあるのだと言うことにも気がつきました。

こんな状況になってしまった原因は何か。はつきりしています。受験勉強です。

高校受験、大学受験で試され、評価されるのはペーパー・テ

ストの結果です。つまり、主として評価の対象になるのは「如何に知識を記憶しているか」です。私の考えるところ、記憶力が勝負だ、と言う職業はそう多くはないと思います。

何のためにこれまでして記憶力の養成に力を注がなければならぬのでしょうか。

私は多くの新入社員研修を手がけてきましたが、その中で必ず触れる一つのテーマに「メモの効用」があります。「正確な仕事をするには曖昧な記憶に頼るな。メモを活用せよ」が新人成長の秘訣です。しかし、これは学校では「カンニング」と称して、一番良くないこととされます。全く逆の価値観です。

ついでに言いますと「判らないことはすぐに尋ねましょう」が新人成長の秘訣ですが、学校では「隣りに訊く」のもカンニングです。これも逆です。

しかし、専門の知識がなければ専門の仕事は出来ないのではないかと反論される方がいるでしょう。それはその通りです。ただその時にはつきりさせなければならぬのは「おぼえる」ことの内容です。

英語の単語を一夜漬けて「おぼえ」たら、すぐ忘れることがあります。ところが、子供の頃「おぼえた」水泳は、その後何年泳がなくても、忘れることはありません。自転車に乗る、スキーで滑る、田舎の方言でしゃべる、全てこれです。

前者の頭でおぼえる受験勉強と、後者の身体でおぼえるトレーニングとは、脳の働きが異なることは最近の専門家の研究で明らかになっています。

今の学校教育は全てが前者の頭でおぼえる勉強に占領されてしまい、トレーニングによって身体でおぼえる教育の場がどんどん減っています。制度的にそうなっているだけではなく、先生や生徒が後者に興味を失ってきているのが一番気がかりです。全国的に高体連の加盟者数も加盟比率も激減している、つまり、どこの学校でも体育クラブに入る生徒の数が激減しているのなどがその一例です。

話は飛びますが、私は北海道ボート協会の理事長を務めて八年になります。これも学生のスポーツ活動を支援したいとの一念からです。社員教育を専業（現在も）としている私としてはこのほかにも、感性の教育、利己的行為と利他的行為の教育など学校教育が忘れているものがたくさんあるように思えて、私なりに、何とかしなければならぬと考えていました。

そんな矢先に、新しい教育に取り組んでいる人々がいることを知りました。北大名誉教授の鈴木秀一先生や恵迪寮OBの亀貝一義先生達が続けておられた運動です。

私は今の日本の学校教育の諸悪の根元は「受験勉強」だと思っておりますから、それを断ち切る教育運動であれば、私なりに微力でもお手伝いしようと考えているのです。

また、今の学校は典型的な「閉鎖社会」ですから、自己変革を期待することは無理だと思います。

参考・・北海道自由が丘学園をつくる会 ホームページアド
レス <http://www.sapporo-jg.com>

人生楽在相知心

横 山 清

(昭和三十一年入寮)

私は札幌を基点に、北海道一円でスーパーマーケットを中心とした事業展開をしております。出生時は村、物心がつき始めた頃が町、戦争が勃発しやがて敗戦、小学校四年の夏でした。典型的な田舎まちが産炭地として脚光を浴びブームに沸いた頃に市制が敷かれた土地に約二十年間生息していたカントリーボーイです。

家業の鍛冶屋を嫌い、高校卒業と同時に隣町の炭鉱に就職し独身寮に入寮しました。玄関側の綺麗な個室で大家族で育った身としては最高の環境を手に入れた至福の時でもありました。

私の寮生活はここからはじまりましたが、安い給料だけれど「勉強もできるし本も読めるぞ」と思ったのも束の間の夢で初日から深夜の訪問客が続き徹夜の応対に追われつ放しです。ナントこの部屋は酔漢の銀座通りで居住者は三日と耐えられぬ日く付きの開かずの間だったのです。

この生活を二年間続けましたが数多くの学習をしました。先ずプライバシーを捨てドアを開放、酒には酒、煙草には煙草、と順応力？を発揮したので、数週間で仲間として認知されました。厳しい労働環境と鬱積した青春のエネルギーを何かで発散させようとするのは古今東西、変わらぬことを学びました。

昭和三十一年、あこがれの恵迪寮に入寮し曲がりなりにも学

生生活を送ることになりましたが、寮の存在なくして私の現在は無かったと思います。寮に入った途端、巡視のK氏から新聞配達に間違われたのは意外でしたが、登山帽にジャンパー姿ですから無理ありません。

北大創基八十年の行事が続き、クラーク会館の建設工事は仕送りのない学生にとっては有り難いバイト先でした。時代によって寮生活の内容や印象は各人各様でしょうが、混沌の世界の中で、親切で過剰な程に心暖かな終生の友人を数多く得たことに対し、若し神が存在するならば心から感謝申しあげたい。

委員長時代は「都ぞ弥生」の歌碑建立資金を得るため、渡辺(侃)先生と足を棒にして企業訪問をくり返し金集めの苦勞を

味わったし、赤木頭次大先輩の警咳に接し、何度か相伴にあずかったことも無形の財産として大切にしております。眩めく時間が過ぎ、恵迪寮に未練を残しながら学部移行で函館に移ったが、寮歌を唱いストームを繰り返す生活を送り、夏冬休暇のたびに札幌に舞い戻っていました。学部の北学寮は宛ら梁山泊の様相を呈し、寮生活を遍歴した最後の仕上げでもありました。

閑話休題

卒業して水産系商社に就職し、札幌勤務となつてからは再び恵迪仲間と間断なき交流が蘇り、良く語り良く飲み歩いて現在に到っている次第です。

仕事は魚油、魚粕を集荷するバイヤーで、沿岸の加工業者との駆け引きもあり結構おもしろかったのですが、二年目の十二月いきなり配置転換を命じられ学生会社出向となりました。

資本金500万円スーパーマーケット経営、肩書きは営業部長とあれば格好の良いビジネスマンを想像されるでしょうが、実体は、潰れた市場跡を借りレジを並べ新聞募集で採用した素人集団で、七十五坪の店舗一店のみ、コンビニに毛の生えた程度の店でした。

伊丹十三監督「スーパーの女」という映画の試写会で、女房の感想は「うちのスーパーがモデルなのね」と言うほど酷似したシーンが続きましたが、魚屋が刃物を持って暴れ、肉屋が商品を手々と持ち出すなど、草創期のスーパーは全国で同じ問題

で悩んでいたようです。

スーツにネクタイの生活から作業服で長靴の世界に入り、トラックを運転して早朝の市場仕入に始まり、店舗の営業が終了してから伝票整理まで十五、六時間の労働で、社員の給料を払うと自分の分が残らない有様ですから、「こんな仕事は一刻も早く辞めるゾ」と決意したものの、次々と起こる難問奇問に振り回されているうちに逃げ遅れて丁度、今年で満四十年です。

この間も寮と寮生の関係は連綿と続き、応援団OB会として絶滅寸前の団員学生と酒を飲み、恵迪寮同窓会の発起人の一員として些かの手伝いをしてきました。炊務委員だった干場一正君も当社副社長で退職し、広大な農場とレストラン経営に転進して新境地を開いており、若い寮出身者も中堅幹部として活躍しています。同窓会で知遇を得た小寺義彦氏も株式上場準備で入社して頂き監査役を最後に退任されましたが、人の縁を大事にすることが豊かな人生を創る最大の要素と思います。

創業から携わっていましたが創業者ではありません。一株も保有していなかったサラリーマンが、給料の範囲で最愛の女性と結婚し二人の子を育て、平凡だが健康な生活を続けられたのも寮生活が基盤になっていると信じています。

定年を迎えて第二、第三の人生を歩む仲間が増えて来ましたが、主安石の「人生の楽しみは相知る心に在り」が私の心境です。

見直そう。生命体の常識

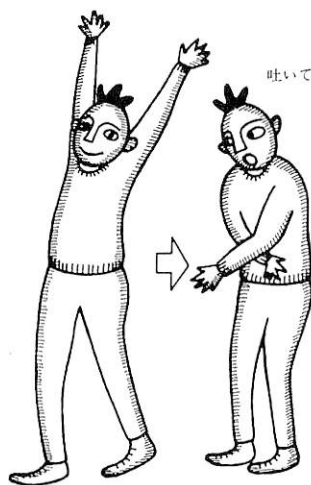
高 木 任 之

(昭和二十六年入寮)

本当に呼吸をしているか

NHKのラジオ体操の経験は誰にでもあろう。「大きく息を吸ってツ吐いてツ」。ところが、この深呼吸なるものは「呼吸」にはなっていないのだ。何故ならば「呼」とは息を吐き出すこと。「吸」とは、息を吸込むことにあるからだ。従って、ラジオ体操の通りにやっていたら、呼吸ではなく、「吸呼」となってしまう。これでは健康にはなれない。

大きく息を吸って



これは呼吸ではなく「吸呼」

まず、肺の中の汚れた空気を吐き出してしまふに限る。その後で新鮮な空気を存分に取り入れることこそが深呼吸なのである。深呼吸はどこをやっても良いものではない。汚れた空気の中でやれば逆効果というものである。できるだけ新鮮な空気が満ちている早朝の公園などで行うと効果は大きい。

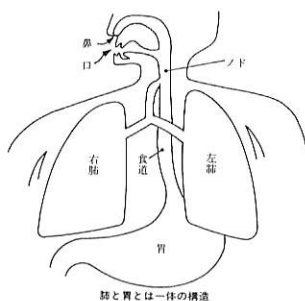
肺の中の空気がもうこれ以上吐き出すことができない程に吐き捨てる。そこへ新鮮な空気を吸込むのだ。これが正しい呼吸法なのだ。これを五〜六回行うと、その日は1日中、体内に精力が漲って来るものだ。だからと言ってやり過ぎてはいけない。精力が過剰となって鼻血が出る恐れもあるからだ。

腹式呼吸が大切である

人は肺で呼吸することは誤りではないが、普通は腹で呼吸をしているものだ。人間は腹で呼吸をしているときは、精神的に安定している。肩（肺）で呼吸をするようになると、病気でも重症と言わなければならない。

これを勘違いさせているのは肺活量検査かも知れない。これを受けるときのコツは、腹一杯空気を吸ってから吐き出すことである。これを肺一杯に空気を吸ってしまうから後半で苦しくなって吐く息がとぎれてしまうのだ。決して「肺活量」なる言葉に眩惑されてはいけない。あれは「腹活量」の検査とでも思っていた方が正しいのだ。

それでは腹式呼吸と肺呼吸とはどう違うのか。それは別のものではなく、一体のものなのである。腹一杯に吸った空気を吐く段階で、空気が寄り道をして肺に入るように感じられる。決して鼻から吸った空気は直接、肺に入っては行かないのである。

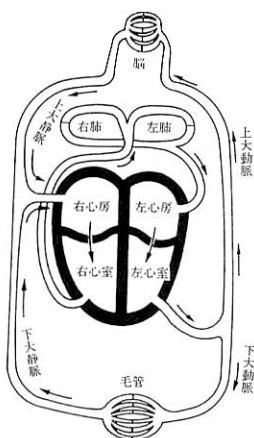


人体の各機関を余りに役割分担をして考えすぎるから、肺は呼吸、胃袋は食べ物を流し込

む場所と限定的に考えがちであるけれども、人間の体というのは、もっと一体的な関連を有しているものなのである。要するに呼吸によって一たん空気が溜まるのは胃袋なのである。胃袋は決して消化器官であるだけでなく大きな空気袋と教えるべきであろう。

心臓ポンプ説の錯覚

心臓は血液を体内へと送り込むためのポンプであるというのは、見た目にも正しく思われる。しかし、機能までポンプの役割を果たしているとは思われない節がある。何故ならば、あれ



心臓は果してポンプか血液ダムか

がポンプであって一生数十年にわたり、大量の血液を送り続けている。とすれば、心臓の筋肉の負担は大変なものとなる
建築設備でも温水暖房のように同一口径のパイプの

中を循環させるだけでも、パイプ中の摩擦損失もあって相当のエネルギーを消費するものである。

ところが、心臓は単なる血液の循環ポンプではない。動脈と静脈とが同一口径で繋がっているのではないからだ。血管は末端に向け分岐して行き、先は毛細管となっている。もしも暖房パイプが、このような構造となっていたら直ぐにパイプは目詰まりを生じ円滑に流れることは困難となってしまうであろう。

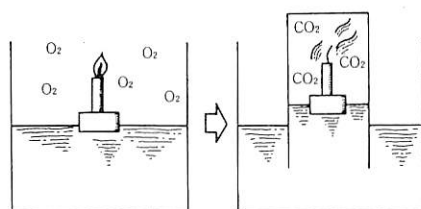
血液の流れの原動力は何か

そこで発想を変えてみる必要がある。それは決して難しいことではない。血管の末端に血液を吸込む原動力があると考えれば良いのだ。植物の根が土中の水分を吸い取る、あのエネルギーである。いわゆる毛管現象 (capillary phenomenon) である。血管が先へ行く程、細くなっているのは、この現象を考ええると合理的なものと言える。

静脈では細い血管が次第に合流して太い血管となるが、これは河川のように自然現象としても理解しやすいものである。

しかし、血管現象だけで説明するのは若干、無理がある。もっと決定的な原動力は、血液中の酸素の燃焼による二酸化炭素化にある。理科の実験でもやるように、水上に火をつけたローソクを浮かべておき、それをコップで蓋を閉めてみる。するとコップ内の水面は上昇する。これは、酸素が二酸化炭素化するときに体積を減少させるからである。

これは血液中の酸素が燃えて体温を維持し、その廃棄物である二酸化炭素を静脈を通じて捨て去る生理現象にも適切に応用することができる。すなわち動脈中の血液は先端において体積を(酸素の二酸化炭素化によって)減少し、それが血液を先端へと吸込む原動力になっていると考えられるのである。



1. 水上に浮かべたローソクに火をともし。

2. コップをかぶせるとやがて火は消える。
そのとき、コップ中の水面は、
幾らか上昇している。

燃焼により $O_2 \rightarrow CO_2$ で気積は少くなる。

心臓Ⅱ風車説も成立する

このように血液の流れというものの原動力が、心臓ポンプ説

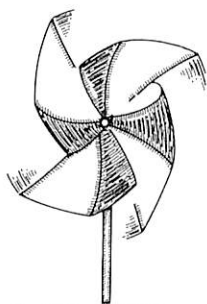
によらずとも説明できるようになると心臓の負担は一挙に軽減することとなる。血液がもつと別の原因で流れるようなシステムとなっているとすれば、心臓は単なる血液の溜まり場となつて、血液流の調節を行っている場に過ぎないことになる。

血管中にある脈は、建築配管設備中の逆止弁（チャッキバルブ）と考えればよい。血液の逆流を防止し、かつ、血液量の調整を行う役目を果たしている。

血圧とは、流体力学によれば管内を流れる液体の速度によって生じる側圧と考えられる。決して液体が加圧されて生じる静水圧（ポンプ圧）ではないであらう。密度 ρ の液体が速度 v で流れる場合の側圧 P は、ベルヌーイの定理により $P = \frac{1}{2} \rho v^2$ によつて表される。血管内にコレステロールが付着すること等によりその断面積が不足すれば流速が速まり側圧は増すのである。

このように考えると、心臓ポンプ説よりも、血管末端吸引説の方が、精神的にはウント気楽になれる。人間は心臓が停まるから死ぬのではなく、死ぬから心臓も停まると考えればよいのである。

言い方を変えたと「風が吹くから風車は廻っているのである。」決して



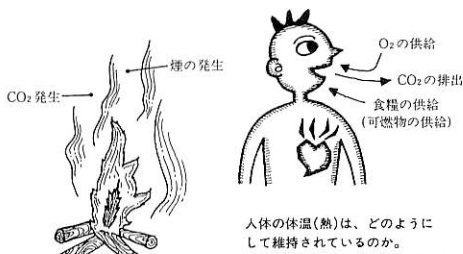
一体、風によつて風車が廻るのか。
風車が廻つて風を起しているのか
一考してみよう。

風車が廻ることによつて風を起こしているのではないのである。原因と結果を混同してはいけない。風が吹くままに廻っているから、風車は長持ちするのである。人間の心臓も同じように考えたらよい。

体温維持の謎・人体は精巧な燃料電池

人体が一定の体温を維持しているのは、人体が発熱現象を生じているからで、これは一種の燃焼現象といつてよい。燃焼には、酸素・可燃物・熱の三要素が必要である。人間は空気中の酸素を吸い、可燃物（食料）を食べている。後は熱源（着火温度以上）があれば良いのだが、それは見当たらぬ。

確かに不思議である。食料となつた炭水化物や脂肪分は、水分を含んでいて燃えにくいはずである。着火源もない。また、燃焼によつて生ずる熱（体温）も微妙にコントロールされている。燃焼によつて生じるは



燃焼の3要素
(酸素・熱・可燃物)

人体の体温(熱)は、どのようにして維持されているのか。
熱源は何か。温気があるのに何故燃えるのか。煙が出ない謎

ずの煙も発生しない。

これは、現代のエネルギー工学が必死になって追求している理想的な「燃料電池」の姿に他ならない。公害の少ないエネルギー源のあるべき姿をして、もっと生命体は研究されなければならない。

体温の維持についても、それをコントロールする仕組みが脳細胞にあるとも言われているが、それはエア・コンの吹き出し口で流量や温湿度調整しているようなもので、何故、空気が冷やされるのか温められるのかという基本的な問題を説明するものではない。それを解く鍵の一つは、本誌第三号に述べた生体内核変換説は有力である。

温度差エネルギー・水が蒸発する理由

水は低温にするよりも高温にした方が蒸発しやすい。それなのに冷蔵庫の中が乾燥しやすいのは何故か。家庭の主婦は経験によって知っているから冷蔵庫の中では乾燥しないようにラップをしておく。

要するに水が蒸発するために必要なのは、温度差であって「高温」ではない。常温では、温度差を作り出すために熱するだけのことである。従って冷蔵庫の中のように周辺の空気の温度を下げて同じ効果が得られる。

冬季、日本海をわたって来る寒気団が日本海からタツプリと水分を吸収してきて、それが降雪の原因となるのも、日本海の

水温そのものは低いがその上空の寒気がマイナス四十度というように更に低いから、水蒸気の上昇は激しいものとなる。

何故こんな話をするかというと、

この温度差エネルギーというものは、正しく理解されていない節があるからである。また、その結果、生命体を正しく理解する上での障害となっているからである。

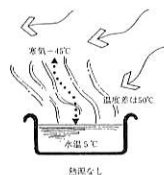
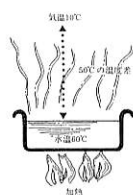
温度差エネルギー原理の二・三の例

このような温度差エネルギー原理は、一九七〇年に倉田昌造博士が発表されたもので、その骨子は、

(1) 引力は温度によって影響を受ける。温度が高くなると引力は弱く(軽く)、低くなると引力は強く(重く)なる。

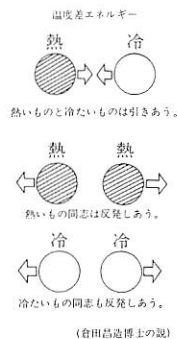
(2) 熱いものと冷たいものとは互いに引きあう。逆に熱いもの同士、冷たいもの同士は反発しあう、というものである。これまでは、熱すると膨張して軽くなり、上昇する。冷やすと収縮して重くなり、沈下する、という考え方しかなかったが、基本的な違いがある。

水を熱すると水の分子はエネルギーを得て蒸気となり、空気



冬は空気が乾燥しているから燃えやすいのではなく、外気が冷えているから火災が発生すると、温度差が大ききことにより良く燃えるというのである。(冷えた酸素が火熱に吸い寄せられてよく燃える。)

逆に周囲が暖かいと火は燃え難くなる。冬の宴会で鍋料理をしても良く煮えないことがある。それは暖房で室温が高いとポータブル式のガスレンジの燃えが悪くなるからである。ペテランのお姐さんは「アラッ空気が悪いからヨ」とか言いながらレンジを廊下へ出したりすると、周囲が寒いから火も良く燃えて、直ぐ煮えるのである。(高温空気の中の酸素は火と結合しにくい、冷えた空気の酸素とは結合し易いのである。)



ニュートン力学には、温度による補正項がないが

中を浮遊するようになる。これ膨張論では説明し難いが、水分子が水温よりも低い空気に引かれて上昇するというのである。この論によれば、

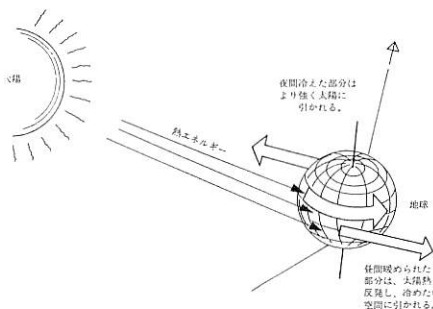
ゴルフのボールが良く飛ぶのは、ディンプルのせいもあるが、インパクトの瞬間、強力なエネルギーが注入され、それが熱エネルギーとして発散され、それが浮力となる。

巨大なジェット機が高空を飛ぶのは、強力なエンジンから発する熱と高空の気温との温度差を保っているためと考えたらい。高空は空気抵抗が少ないため飛びやすいと考えられがちであるが、それだけ空気が薄く浮力が生じにくいので、必ずしも空気抵抗だけのためとは考えにくい。

砲弾にしても、熱エネルギーがあるからこそ飛ぶのであって、スプリングやゴムの力では飛んでも知れている。冬になると自動車事故の多くなるカーブがある。夏の間はエンジンも熱いので外気も暑い。

従って温度差は少ないが、冬になると外気が冷えているので、エンジンとの温度差は大きく浮力が生じて車が浮き上がり、事故に繋がるのである。

地球の自転のエネルギーも、この温度差エネルギーで説明すると理解しやすい。昼間、太陽で熱せられた側は、夜間、その



エネルギーを宇宙空間へと放出して冷える。冷えきった表面は太陽熱と引きあい、温められた面は反発することによって自転のエネルギーとなっているのだ。

ところで、地球の中心部は灼熱のマグマであるから、熱のあるものは浮き、冷えると沈むこととなる。

人体は単なる物体ではない

実験室で行う物理実験は、無機質の物体であって、温度差エネルギーが生じにくいから或る面では好都合であるが、そこで得られた法則を体温を有する人間（生命体）に直接的に適用しようとするから、間違いを起こすことになる。

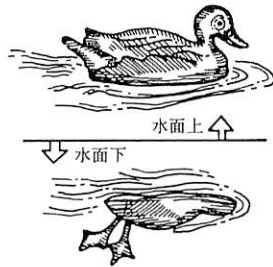
人間は単に熱せられた物体ではない。内部で発熱し、外部へ向かって熱を放散させている。

つまり定常的な温度の流れがあるから、生きている以上その重量（体重）は影響を受けているものと思わなければならない。

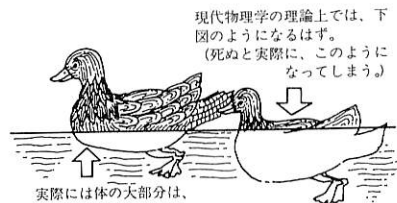
早い話が、人間が水に浮くというのは、比重が水（ $1 \cdot 0$ ）よりも小さいと考えなければならない。しかし考えて見給え。この肉や骨などで構成されている人体の比重が本当に水よりも



自分自身の比重を計算してみる



水面に浮く水鳥の水面下部分はあまりにも少ない



水鳥の浮き方は(現代物理学では)異常?

小さいかどうか。個人差はあるにせよ、大体のところ人体の比重は $0 \cdot 9 \sim 1 \cdot 3$ の範囲にあるらしい。太った人ほど比重は小さいらしいが、それにしても比重が大きいものが浮くとは、どういうことか。少なくとも物理学の法則には反している。

アルキメデスの原理によれば、排除した水の量と同じ重量だけしか浮力は生じないはずである。中には肺の中の空気の量が浮力を生じていると主張する向きもあるが、それならば息を吐いたら沈むものであろうか。骨付の肉を買ってきて、それが水に浮くかどうか確かめてみたら判るだろう。それにもかかわらず、馬でも犬でも水に浮くのである。

もっとハッキリするのは白鳥が水に浮いている姿である。水鳥は腹部を僅かに水面下に沈めるだけで身体の大部分は空中に

ある。腹部で排除する水の重量は僅か（二〇〇〜三〇〇グラム）でありながら体重は一キログラムもある白鳥は水面に浮いているのである。

ところが、白鳥が死ぬと物理学の法則どおり水没してしまうのである。どうして生きている間だけ浮いていられて死ぬと水没するのか。それは生命体が体温を持っているからに外ならない。

動かないと疲れるのは何故か

もしも人間がエネルギーを消費すると疲れるのであれば、できるだけジーツとしておれば良い。長距離の空の旅のように座席に座っていれば疲れないはずであるが、逆に疲れるのである。かえってブラブラしていた方が疲れないのである。それは何故か。それは動くことによって体温が上昇し熱を放散して体重が

軽くなるから楽なのである。

育ち盛りの子供がジーツとしていないのはそのためである。騒ぎ廻っている方がラクなのである。

逆に動かないと重くなるのである。オンプしていた子が眠ると妙に重く感じるのはそのためである。

物理学の常識では、静かにしている方が軽く、動くとき反動で重く



なるはずなのであるが、一説によると八キログラムの子供が眠ると八・四キログラムになったそうである。今の無機物理学では、こういう身近な事実に眼をつぶっていないか。

鳥や虫が空を飛ぶのは

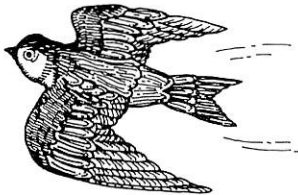
鳥や虫も死ぬば地上に落ちて来るのだから、決して空気よりも軽い訳ではない。その鳥や虫が空を飛ぶのは羽があるから、羽ばたくことによって浮力を生じているからだと説明されている。ならば何故、夜になると飛ばないのか。蚊や蠅は寒くなると飛ばないのは何故か。

寒くなると蚊や蠅が飛ばないのは温度が不足するからである。彼等は一定の温度にならないと飛ぶことはできない。幾ら羽をバタバタしてみても。そこで蚊は暖かい動物の血を吸い、蠅は暖かい物にとまって温度エネルギーを吸収しているのだ。

それにしても蜂はあの小さな体で十キロ以上の距離を往復するという。一体そのエネルギーはどこにあるのだろうか。

それに較べると鳥は温血であつて自身で体温を有しているか

ツバメは、あの小さな体で2000kmもの海を越えてくるのだろうか。



渡り鳥が飛び続けるのは

ら良く飛べる。特に翼を拡げて太陽熱を得る知恵を持っている。しかし鳥も夜間や寒い所では余りよく飛べないのである。

渡り鳥は空高く群れをなして飛ぶ。これは高空ほど温度差が大きくなるためである。それにしても燕は、フィリピンから片道二千五百キロから三千キロの道のりを一気に飛んで来る。シベリアからやってくるオオハクチョウにしても、あの大きな体で千キロメートル以上の海を休まずに飛び続けて日本にやってくる。帰るときもそうだ。

こういう昆虫や鳥の飛行能力を単純なエネルギー理論で説明しきれぬものである。あれだけの重量のハクチョウが単に羽ばただけで得られる浮力で一千キロメートルを飛び抜くには、どれだけのエネルギーが必要か計算することはできない。

しかし、それに見合うエネルギー源はあるのか。皮下脂肪も筋肉もすべてを焼き焦がしてみてもバランスをとることは不可能である。少なくとも、温度差エネルギーのような未知のエネルギーの導入を考えない以上は無理というものだ。飛んでいる間にエサを食べてエネルギーを供給するということは考えられない。

スポーツの前の予備運動とは

何でもスポーツの前には予備運動が必要である。プロの投手でも充分なウォーミングアップを行う。これは肩ならしとか称しているが、本質的には体内の発熱の促進なのである。発熱量

が増えれば、温度差が生じ、その流れによって体が軽くなるからである。当然に身のこなしが良くなるから体の動きは敏捷になる。

年寄りには、一般にやせていて体重は軽いはずなのに動きは鈍くなる。トッサの動きができないのは筋肉の低下というよりも、ト

ッサの発熱ができないからである。片足立ちをしてみると、両手を下げているよりも、水平に上げていた方がバランスはとりやすい。バランスが崩れそうになつたとき、実は傾いた側の手に力が入っている。力を入れると発熱量が増して軽くなるので、一瞬にバランスをとり戻すことができる。こういうことは、誰でも生まれながらに知っていることだ。

しかし、無機質の実験で得た知見を基礎としている物理学では、こういう説明はできない。何故ならば、力を入れても（発熱があっても）重量は変わらないと言うからだ。

ブランコ遊びの説明ができない物理学

とにかく現代の物理学は無機質の物質には当てはまるが、生



命体には上手く適応できないという弱点がある。例えばブランコを漕ぐ子供という極めて当たり前の現象を説明することができない。

これはブランコを漕いでいると、その揺れが大きくなるということは、絶えず日常生活じていて何の不思議でもないことなのに、現代物理学は判りやすく説明できず謎となっている。何としたことであらう。

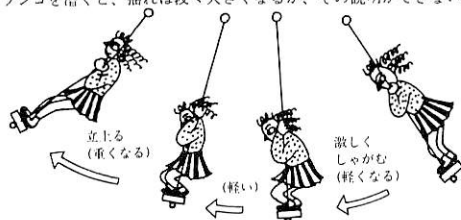
子供がブランコを漕ぐというのは、屈伸運動をすることによって、体内の発熱を促しているのである。発熱があれば体温に流れが生じ、その結果体重に変化が生じる。

そう考えれば何でもない。三才の子供でもその程度のことは体験的に知っていて、直に簡単にそのコツを覚えてしまう。にもかかわらず大の大人の科学者にとって謎であるというのは、何か大切なことが盲点となっているとしか考えられない。

折角、ゴルフで体重が減っても

ゴルフ場では、脱衣室に体重計があつてオフロへ入る前に測

ブランコを漕ぐと、揺れは段々大きくなるが、その説明ができない。



現代物理学の謎はこんな所にもある。ブランコは何故揺れる

ると、一日に二キロも減っていることがある。やはりゴルフは体に良いと感心する。これはゴルフの後には体内の発熱が激しいので、その分温度差による浮力が生じているだけのことである。確かに汗もかいたから減ったとも言えないことはない。

しかし、翌日にでも改めて測ってみると、キット元の体重に戻っているはずだ。そうすると、ゴルフの後のビールが良くなかったと反省する人もいるが、何もビールで急に体重が増えることはない。体内の発熱量が元に戻っただけのことなのである。水が蒸発するのは、水の分子エネルギーが注入されて、そのエネルギーの放出（温度差）によって軽くなるためであつて、決してその分子量が熱によって減量しているのではない。同じ分子量であるけれども、エネルギーの放出中は、軽くなるから空中に浮遊していられるのである。急激に冷却してエネルギーを奪えば、水に戻って結露するだけのことだ。

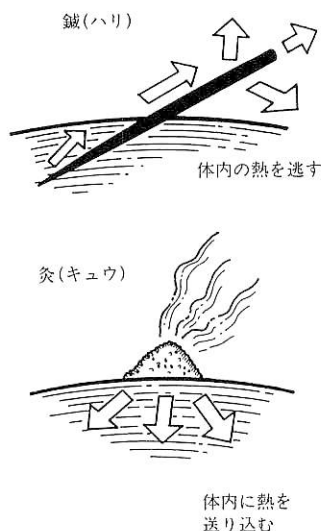
東洋医学の鍼と灸

とにかく酸素の供給が激しい程、その消費の激しい程、体は軽くなることが判る。風が吹くと気持ちが良いのは風によって熱を奪われる、すなわち体内から四方へ熱を発散するから体は軽く感じられ、それが心地良いのである。風呂上りの爽快さは同じことである。

逆に体内での温度の流れが不正常になると、人間の体はバランスを崩し、いわゆる病気になる。これは別に病原菌だけのせ

いではない。病気になるって体が弱るから病気菌が暴れ出すということはあり得るかもしれないが。

そこで東洋医学では、鍼や灸を用いて体の中の温度の流れを調整しようとする。体内の熱のアンバランスがコリのようなものを生じさせるので、プラチナの針を体内に打ってそこから熱を放散させたり、又は灸によって体内に強制的に熱を送り込んでバランスをとるのである。これにより体は温度の流れが正常化し健康体を取り戻すことができるのである。



東洋医学のハリとキュウ

物質には粒子性と波動性がある

早い話が、物質は粒子から成り立っていると同時に波動が重要な要素を占めている。それは粒子性（物質）の肉体と、波動

生命＝「生」＋「命」
 生→肉体（粒子性）……形状
 命→精神（波動性）……性質
 物質としての 精神としての
 「形（粒子）」 「心（波動）」



肉体+精神によって1人の人間が存在する。

性の精神とから成り立っていると言ってもよい。いずれか一方のみでは生命体は維持できない。タテ系とヨコ系の関係となつて織物を形成しているともみてよい。

それは生命場とでもいうべき「場」が存在していて、実験用シャーレに肺とか肝臓とかの細胞をバラバラに入れて培養すると、肺の細胞は肺、肝臓の細胞は肝臓同士、互いに集まって来るといふ。それは各器官には固有の波動があつて互いに共鳴しあうとも考えられる。

生命体というのは全体が先にあり、その調和の中に各器官がある。決して部分が別個にあり、その寄せ集めで全体が生じるものではない。

生命体は固有の波動を有しており、それが整然とし、充実していれば健康なのであり、それが乱れると病気になる。部分的な疾患は特にその部分での波動の乱れが激しいと考えれる。

好きな人・嫌いな人

人間誰でも好きな人、嫌いな人がある、これは互いに波長が同調しやすいかどうかによる。余りにも波長が異なれば心は通じにくい。

通常、親子は波長が類似しているので心は通じやすい。時には逆に増幅しあって感情が高ぶることもあり得る。夫婦仲も同じようなものである。結婚に際して家系を重んずるのは、それぞれの一族に波長の上で大差がないことを確かめる意味がある。

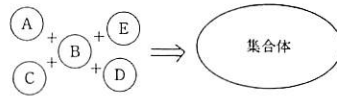
子供の頃からの親友は、互いの波長を知りつくしているもので、久し振りに逢ってもすぐに打ち解けられるのである。ウワサをすれば影というのは、その人が近づきつつあるとその波動を感じて、ついウワサをしてしまうということによるものである。

動物の帰巢本能のようなものも、この波動によって説明できる。蚊の幼虫であるボーフラは一定の超音波を水中で発するとことごとく死んでしまう。これは薬品で駆除するのと異なり環境に悪影響を与えない処から高く評価されている。

ミツバチは六〇〇ヘルツ一二〇デシベルの音に弱い。この音を聞くとミツバチは一斉に死んだようになる。生命体が共鳴し

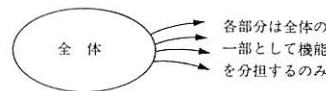
無機物質（機械のようなもの）

初めに部品が存在し、その寄せ集めから全体ができる。



有機体（人間のような生命体）

初めに全体が存在し、各部分はそれぞれの機能を分担している。



有機体と無機物質とでは、全体と個（部分）との関係が異なる。

た結果、悪影響が出るものであろう。

近頃、遺伝子操作による人工植物が出現しつつあるが、単にその栄養分を分析するだけでなく、その波動が問題と言える。自然界に存在しない波動を自然界の生命体が受け付けるかどうかが問われているのである。

病気の本質と薬品の効果

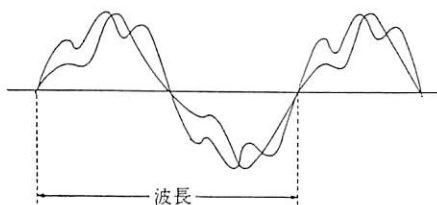
このように生命体の謎の部分が序々に解けてくると、病気の本質も次第に明らかになってくる。健全な調和のとれた波動が乱れると人々は病気になる。それは心の病いと言える。東洋で

は本来、病氣とは氣（心）の病いなのである。

従って、病氣を治すには波動を整えることである。患部は特有の波動の乱れがあるので、その波動に上手に共鳴したり唸りを生じたりする固有の物質を体内に送り込んでやれば患部の症状が柔らぐのである。この固有の物質こそが薬と呼ばれているものである。飲み薬であれ、塗り薬であれ効果の原理は同じこと。

昔から手当てというように患部に手を当て治すのは、手から発する波動が効くのである。特に心のこもった母親の手当ては子供の病氣には良く効くと言われる。霊能者と言われる人は、その波動エネルギーが強いので効果は大きい。

西洋医学の化学薬品は、その波動に安定性があるので、投与による効果に信頼性がある。一方、東洋医学は幅広い成分による生命体の活性化にあるので、穏やかな効果がある。すなわち、速効性よりも体質の改善に役立つ。西洋医学の薬品は攻撃的で集中性があるから効果も優れているが、それによる副作用を生じ易いものがある。



人はそれぞれの波長を持つ、波長が等しいと同調しやすいが、波形までは同一ではない。波形が異なれば性格（性質）は当然異なる。

薬品によらない治療法

本来、人間の細胞は少なくとも胎児の頃は全く同一の波動を有しているが、やがて成長につれ胃は胃としての固有情報（波動）を持つようになるらしい。各器官ごとに特有の波動を持つ細胞が共鳴して集団を形成するからである。

そのような組織は正常な波動を有しているが、それが何らかの原因で乱れると病巣となる。治療とは、その乱れの正常化にある。人間の体には元々乱れがあれば、それを正常化させようとする能力が備わっている。それが「自然治癒力」というものである。

その自然治癒力にも個人差があるので、数多くの治療法が存在するのである。自然治癒力とは乱れた波動を復元させるための自己努力である。他人に依存するだけでなく、先ず大切なのは自己努力であるが、どちらかに偏るのは良くない。努力しつつ他人（医者）の助けを有り難く感謝して受け入れれば回復は早まる。そのバランス感覚が大切だと思う。



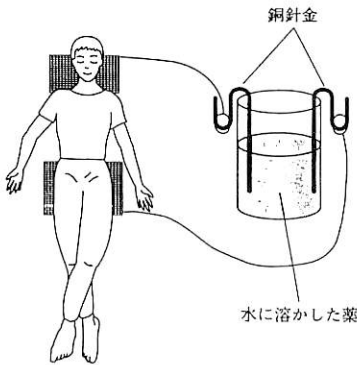
薬品（化学物質等）の波動が、患部の乱れた波動を共鳴・唸りにより、上手く調整する効果を有するためか。

薬を飲むと治療に効果が
あるのは何故か。

近頃のヒーリング（癒し）は、医学上の治療とは区別されているようだが、これは前に述べた手当てと同じような効果があるものと考えられる。

大体、痒い処を搔くと痒みが治まるから、人間では誰でも痒い処を搔くのである。しかし、考えて見給え。搔くことは医学的にどのような効果があるというのか。波動論で説明すると搔くことによってそこに電気エネルギー（波動）を発生し、それが痒みを癒すのである。

手足にあるツボを刺激する方法もある。これはツボが特定の臓器に繋がっており、その経路を通じて固有の波動が現れている。そこで刺激によって微弱電流を発生させ患部に伝えること



波動性による病氣治療の原理が解明されると、薬を服用しなくても、その波動を人体に採り入れることにより治療することが可能になるかも知れない。

によって病んでいる器官の波動を修正するのである。

更に進んで遠隔治療というものもある。遠くから波動を送っても患部と共鳴できれば治療の効果は生じる。昔から神佛に平癒祈願するのはこのためである。

同じような病氣でも、治そう、治ろうとする氣力の欠ける人や自己本位で我儘な人は治しにくいと聞く。それに反して「お陰様で」という感謝の気持ちの強い人は治りも速いという。これは良く考えてみる必要があるだろう。

大体、人間というのは勝手なもので、その身体も心理も一向に理路整然とした処がないものだから治療法も必ずしも理路整然としていなくても当たり前なのである。別に不思議なことではない。

生命をはぐくむ波動

先日、西原克成氏の「生物は重力が進化させた（講談社ブルーバックス）」を読んで大きな感銘を受けた。同書によると、生物の進化論も余りにも物質的に生物を眺めていたために論理に誤りがあったという。

同書では「われわれの体は酸素や水、栄養素のような形の物質のほか、重力や光、電気、温熱などのエネルギーという恩恵を得なければ一分たりとも生命体を維持できない」と記している。

このエネルギーこそ波動そのものなのである。

〔俳句〕

秋しゅう
灯ちやう

春

孫生まる京都洛北桃の花

夜桜や子等の遊べる太鼓橋

春一番またげば絡む新聞紙

夏

夕虹の立ちし日曜終りけり

開門を待つ園児等に新樹もゆ

今年また実梅沢山もらえりと

小沢久弥

(昭和十七年入寮)

秋

鷺一羽おりたつ畔の曼珠沙華

秋灯や創業古き漆器店

冷やかや滝壺までの杉木立

冬

輪飾の輪のふつくらと新しく

落葉掃き土産物屋も手伝いて

仏壇の横の障子を張り替えし

東京『恵迪会ゴルフ会』

中 村 勝 美

(昭和二十年入寮)

今年で日本のゴルフが始まって百年になる。東京「恵迪ゴルフ」は三十七年になる。

古い記録によれば昭和三十八年十二月三日、弘田幸裕、牟田悌三、伊藤清幸(故人)、黒沢 旺(故人)の四人でプレイしたのが第一回コンペであつたようである。戦争末期の昭和十九年から昭和二十二年頃に恵迪寮に入寮して起居寢食を共にし、たまたま東京近辺に在住の仲間が寄り集まり「恵迪会懇親ゴルフ」を始めて、次のコンペは第百五十回を迎える。

初代は古城正俊(昭和十九年入寮・医)会長を推載し、当時寮報部で同室で、同じサッカー部の現会長 弘田幸裕(二十年・工)、佐々木薫(十九年・経・故人)、ラグビー部の伊藤清幸(二十年・農・故人)、坂本義雄(二十年・文)、牟田悌三(二十年・農)、島海俊宏(二十年・農)に、寮報部で同室の中村(二十年・経)等々で発足したものである。

戦後、廃墟と食料窮乏の中から漸く立ち直り、日本のゴルフも、昭和三十二年、霞ヶ関カントリー倶楽部で開催された第五回カナダカップ(現ワールドカップ)で、中村寅吉と小野光一



第140回 恵迪会 平成11年3月25日 相模原C.C.

が優勝したのを契機に盛んになり、我々ときも棒振りに興ずる時代となった。現在では会員数約三十名、大方が古希を過ぎて尚意気軒昂、若き日の思い出忘れ難く、友情と健康に感謝しつつプレイを楽しんでいる。

主な常連は福田則郎(農)、鈴木禮三(農)、山口敬三(農)、宮坂正昭(農)、多田邦雄(工)、渋谷隈男(工)、富士野昭典(工)、村井郁生(工)、横山和昭(工)、大西一郎(工)、浅倉 悟(医)、田沢雄三(農)、中西久二(農)、早川次郎(工)、橋本桂一郎(工)、丸山恭一(工)等々の諸氏。毎年開かれる旧制高校のインターハイにもこの会のメンバーから何人かが出場している。

毎回思うのだが、戦争末期から戦争直後の寮生時代、瘦せこ

けた頬に蓬髪を靡かせ、弊衣破帽に薄汚れた手拭い腰に高下駄の面々が、自家用車を駆って、紳士のスポーツと言われるゴルフに興ずる等とは夢にも思わなかった。

(写真は第四百四十回恵迪会、平成十一年三月二十五日 相模湖CCC)

つるのママの死を悼む

小林 正 人

(昭和二十八年入寮)

在学時代通いつめた「千歳鶴サービスステーション」のママ、山谷君代さんが、去る三月亡くなった。八十五歳だった。

お通夜に出席したが、祭壇には以前、お店で誰にでも分け隔て無く接してくれていたあの優しい笑顔の写真がかざられていた。北大だけではない大学などの山岳部、スキー部の連中を始め約五十年間という長期間の広範囲の飲み仲間が三百人以上もかけつけた。

ママさんの人柄を慕って集まって、山を、スキーを、青春を、恋を、社会変革を、人生を語り合ったお客さんたちだ。私は写真を見、今村朋信葬儀委員長の話聞きながら、若き日にママ

に散々お世話になった時代に逆戻りしたような錯覚に陥ってしまった。

桑園寮を卒業して、下宿人として住みついて通勤し、その年の九月結婚するまで約半年間ごやかになった。こう書けば格好がよいが実は当時の金で百万円を超す「つる」のつけの人の質のつもりでもあった。



(在りし日のママ ー左ー)

山谷さんたちの話を聞き、憧れて、遂にネパールヒマラヤまでトレッキングにでかけたり、素敵な絵を描いたり、良く私たちの世話をしてくれるなど積極的に生きる姿と、優しく人に接する暖かい姿と両面をもっていて、私にとっては憧れの佳人で

あり人生の良き相談相手でもあった。

また音楽も大好きで、ドイツ民謡、シャンソン、クラッシックと奥が深く、よくお客の雰囲気に合わせて選曲してくれていたことを思い出す。私が音楽に関心を持ち続けてきたのもママさんの影響が大きいかも知れない。

またあの太木を輪切りにしたテーブルを囲んで、仲間たちでつどい、山の歌など聴きながら、蜜声を張り上げて、ママの笑顔をめつつ酒を酌み交わしたいと痛切に思う。

自作『わたしのススキノ』シャンソンムード

全国有線曲——第5弾発進——

田 中 信 義

(昭和三十二年入寮)

北の都「さつぼろ」の歓楽街「ススキノ」の灯がかすみがちである。日本のすみからすみまで吹き荒んでいる不況の渦は手加減を知らないということらしい!?

このままじりじりと「ススキノ」の『美しき花』をしぼませてなるものかとばかりに、四十余年の常連客が渾身の力をこめ

て送り出した作詞曲が『わたしのススキノ』である。「ススキノ」活性化へのロマン歌である。

北は北海道から南は沖縄まで全国域の有線リクエスト放送曲になっていきますので、各地におられます恵迪・北大同窓のみなさまにはどうぞ青春の街「ススキノ」を偲びながら、酒の肴にリクエストされたし!

かならずや、艶やかで趣のある歌姫が不夜城「ススキノ」の歌舞台に澆刺と登場することをお誓いいたします。

わたしのススキノ

井上けい子

作詞／たなかのぶよし 作曲／堀江洋三

一、人恋しさに

そぞろ歩いた 中島パークの黄昏は

いつしか 風花ちらつく、ネオンの街へ

カウンターグラスに 赤い唇 映して

ある日 燃えた愛の面影 重ねながら

ボルドーワインを 注ぎ込む

Bonjour 静かにシャンソン 口遊み

Ull... 移り香 移り気 移り行く

わたしのススキノ 未練街

二、人恋しさに

掛けた電話に お馴み酒場の 騒めきは
いつしか 祭りで賑わう ネオンの街へ
ブランデーグラスに 白い小指を
絡めて

今宵 粋な奴の優しさ 誘いながら
アバンチュールに 酔い痴れる

Bonsoir 静かにシャンソン 口遊み
Uir... 浮き名 浮き草 浮き沈み
わたしのススキノ 魅惑街

三、人恋しさ

心ときめく 駅前通りの 飾り灯は
いつしか リラ冷え漂う ネオンの街へ
カクテルグラスに 縞のハンカチ
くるめて

明日 好きな男の指切り 信じながら
アベックミューズを 味見する

Bonsoir 静かにシャンソン 口遊み
Uir... うわさ 売れっ子 嬉し泣き
わたしのススキノ 魅力街

♩=69

ひとこいしさに そぞろあるいた なかじまパークの たそがれは
いつしかかざはな ちらつく ネオンの まちへ
カウンターグラスに あかいくちびるうつしてある ひ
もえたあいの おもかげかさねながら ボルドーワインをそそぎこむ
ボンソワール しずかにシャンソンくちずさみ うう
うつりがうつりぼうつりゆく わたしのススキノ
みれんまち

世界をめぐる

「北欧からのご挨拶」

— 北欧の年金制度・大洋底層海流etc —

太 田 昌 秀

(昭和二十八年入寮)

前回の「恵迪」には「間もなく定年」と書きましたが、今回は「やっと定年になりました」と書き始めます。七十歳に近づく、何時消え去るか判らない、という気持ちになりますので、此度の原稿のお誘いがありがたい機会と思つて、同窓の諸兄姉にご挨拶を申し上げます。

功成り名を遂げた方々には、しがない給与生活者の年金の話など哀れなものでしょうが、最初に北欧の年金について書いてみます。

北欧の年金制度

この国（ノルウェー）の普通の勤労者（軍人や船員などを除く）は、六十七歳から年金を受けとることができますので、多

くの人々はこの年齢に達すると退職します。「定年」という制度はありませんので、雇用側が必要とし、本人にやる気があれば、七十〜七十五歳まででも働いている人がいます。

この国の年金の理念は、働いていた時期の生活水準を維持で

きる年金を支給することで、満額の年金は、働いていた時期の最後の一年間の給料の六十六%です。一般の国民年金は四十年、国家公務員は三十年働くと、満額の年金を受領できます。四十年働くというのは、二十七歳からずっと続けて仕事をするということで、年金なんて考えてもみない二十〜三十歳代をほんやり過ごす、年金は不足年数に比例して減りますから、年をとってからが大変です。

私の場合は、四十歳でこの国で就職しましたので、国家公務員年金でも六十七歳では三十年に三年不足しました。私はそれ以前にポスト・ドクトレート・フェロー (post-doctorate-fellow) として滞在したので、その二・五年を追加してくれ、更に不足の分は研究所が負担してくれて、ギリギリで満額期間に達しました。六十七歳で退職しない、という選択もあったのですが、二年前に研究所が北韓七十度付近の町へ、政治的な理由で強制移転させられ、この歳になって、暗くて寒い冬が長い北の町へ転居するのは大変なので、年金受給年齢で退職することになりました。

勤務期間中は、北欧の高福祉制度を支えるための税金が高く、年金年齢に近づいた頃には、給料の五十%以上を税金に取られましたので、年金で六十六%になっても、収入が減った分だけ税率が下がりますから、手取りは勤務期間中と大差なくなり、年金の理念がほぼ満足されるわけです。年金は、誰にでも同一額支給される基礎年金と、勤務期間に支払った税金に対応した点数に比例する追加年金から成っている、勤務期間に税金

を多く払ってきた人々は、追加年金が多くなります。

私は満六十七歳以後も、二分の一の仕事が続いています。研究所が地質調査所オスロ支所内に部屋を一つ確保してくれているので、以前通りに出勤し、妻に濡れ落ち葉扱いされずにいます。研究所が北へ移転した時、それまでの研究者の九割以上が転職し、現在の研究者のほとんどは新人ですから、成果が出版できるようになるにはまだ数年かかります。それまでの間を私共のような老兵が埋めている、ということです。

研究所がやって欲しいということをみんなやろうとすれば、まだ当分死ねません。

このように年金受領者が仕事で給与を得て、その金額が基礎年金の二倍以上になると、超過分だけ年金が減額されます。それでは折角の権利を返上するようなもので、私がいくら働いても、この限度額以上の給与はくれないように、と頼んでいます。この年金減額は七十歳まで、七十歳を越ええると、勤労所得がどんなに多くても減額されません。しかし、収入総額に対応する税金はガッチリ取られます。

私は日本を離れた時、共済組合から「退職一時金」を受け取り、残りは年金年齢に達した時、年金として支払われる、とのことでした。「私は外国で暮らすので、受給資格ができたなら、通知していただませんか」とお願いすると、「そういう規則はありません」とのこと、「忘れて申請手続きをしなかったらどうなるのですか」と尋ねると「さあ、それまででしょうね」という答えでした。掛け金は給料から天引きで差し引いておき

ながら、支給する時は本人が申請を忘れたら、通知もせずに「それでお終い、こちらのイタダキ」というのはあんまりです。

私は「畜生奴、断じて忘れないぞ」とその時は思ったのですが、三十年たつとやっぱり忘れていました。幸い日本から来訪された友人に忠告され申請に間に合いました。何事も制度というものはこうしたもので、それを墨守するのが官僚なのです。

長い目でみると、私達は大きな誤算をしていました。私達がこの国へ来た頃は、やがてこの国の年金を受領するようになれば、そのお金で日本での優雅な老後を過ごせる筈でした。ところが三十年間に円が強くなり、あの頃一クロネ五十五円だった交換レートが今は一クロネ十二、三円になり、円が四倍以上になってしまいました。私達自身は何も悪いことをしたわけではないのに、日本経済の発展のお陰で、私達は今この国の年金を持って日本へ帰っても、食べていくのが精一杯です。

これも世の中を知らない者の泣言でしょう。こうした現実的理由もあって、私達はどうかこの国の土になるようです。みみっちい年金の話はこの位でやめましょう。

大洋底層海流について

さて、世の中は昨年から二千年紀に入ったというので、大騒ぎをしました。その便乗商戦もすっかり熱が冷めたようです。二千年の元旦には、古えの預言者の言葉を信ずる人達がエルサレムに集まり、キリストの再臨を期待していたとのことですが、

何事も起こらず、人間の心とやらの働きで合成された期待が、如何にはかないものかが、また一つ実証されました。

私が永年かかわってきた北極圏の問題の中で、二千年といわれて思い当たることの一つは、北大西洋で生まれ、二千年かかって地球を一周するという大洋底層海流です。

こちらの方は自然の法則に従った運動ですから、信仰に基づく期待とはちがって、確実にキリストの頃の北大西洋で沈み込んだ低温・高塩分濃度の重い海水が、太平洋まで行く間に次第に軽くなり、やがて表層流になって、元の海域へ戻ってきています。そうでなければ、北大西洋の海面は低くなってしまう。

二千年をはさんだ数ヶ月には、それまでの数十年にわたる北極海の気候や氷況変化をまとめた論文が、いくつかの地球物理の雑誌に現れました。それによると、北極海の氷はその広さで約三十%、厚さで約四十%減少し、温暖化によって百年に数度上昇する、といわれている平均気温も、北極周辺では十年に一度の割合で上昇していることも判ってきました。これらの減少や上昇は、精々数十年の観測値に基づくものですから、変動の周期がこれよりずっと長いと、これらの結果は短期的なもので、実際は長い変化の一部なのかも知れませんが、信頼できる観測値が百年位しかないのですから、仕方がありません。

氷がとけた真水が北極海から大量に流れ出すと、大西洋を北上してきたメキシコ湾流の塩分は薄められ、冷やされても深海まで沈むほど重くならず、中間層までしか沈みません。従って、世界を巡る底層流を押し進める推進力が弱まり、海水の世界的

大循環が次第に止まってしまいかも知れません。

現に北大西洋では、沈み込みが数百米の深さで止まってしまっている事実が報告されています。北欧は今、温暖化による気温上昇を楽しんでいます、やがてはメキシコ湾流の北上が弱まり、北緯六、七十度相応の寒冷な気候にさらされるでしょう。

氷の減少についてのデータは、広さは主にサテライトの観察から、厚さは海底に固定した上向き測深ソーナーや潜水艦による観測から得られています。最近は新しい方法として、ソニック・トモグラフィが試験されています。

これは雌雄別のグループとして遊泳している大洋の鯨が、繁殖期になると遠くまで届く長波長音波を出して、出逢いの場所へ移動することから学んで、同様の音波を使って大洋を横断する側線を設け、その距離を音波が伝わる速さから、海水の平均密度（主に塩分濃度と水温の函数）を測定しよう、というものです。

この方法が実用化できれば、地域的なちがいは判らなくても、例えば北極海全体の水温変化を継続的に監視することができそうです。固体地球物理では地震波トモグラフィという同様な方法が利用されています。

温暖化を含めた現代の環境問題を考えてみる時、時間のスケールの問題が大きいのと思われれます。人間は、生活に少しでも役に立つものが見つかると、それが長期間にどんな結果をもたらすかを考えもせず、目先の利益を追いかけて利用し、自然が数万〜数十万年の単位で調節しているバランスを、数年〜数十年

で崩し、結果的には、人間自身が住めない環境へと変えつつあります。自然法則は不変で冷徹であり、神様のように信じたり祈ったりしても許してはくれません。自然法則に合わないことをする奴は、黙って絶滅させるだけです。何故なら、全ゆる生き物は自然が創ってきたものだからです。

結びに

私は最近、この国の作家が書いた「Sophie's Verden」を読みました。（日本語版は「ソフィーの世界」NHK出版）。この物語の主人公である一人の娘と、彼女に西洋哲学史を教える哲学者は、自分の娘の堅信礼の日のために、聖書の話ではなく、哲学史を話してやろうとする父親の作家が、作中人物として設定した人物です。

これら二人の作中人物は、やがて自分達が作家の頭の中で作られたものであることに気付き、作家から独立して、自分で考えて生きようとしています。そして二人が作家の意図から飛び出した時、二人は人間の眼には見えない魔女やおとぎ話の主人公達の国の住人となり、永遠の生命を得る、と結ばれています。この結びは、私には小説作家のナルシズムだと思われれます。おとぎ話や物語の主人公達も、やがては読者がかえり見なくなった時には死を迎え、図書館のホコリの中に埋められ、忘れ去られるのです。

この物語を読んで、私は人類もこの作中人物に似ている、と

思いました。自然の中で数十億年にわたる生物の進化が始まった時、やがて人類という種が現れ、彼等には頭脳が発達して、自然の仕組みを理解し利用することになるとは、すでにプログラムされていていました。そしてその頃になると、人間の社会生活の源動力として「欲」が顕在化することもプログラムされていたのです（作家の意図のように）。折角の「理性」があるのに、この「欲」を押さえることができないと、人類という種は、自滅することになっていくのです。この「欲」を押さえるだけの英知を、人類は発揮できるでしょうか。物語の作中人物のよ

北斗と南十字

一、ケイムキ恵迪ホクトと北斗

寮歌と北斗は良く似合う。北斗を詠んだ寮歌は二十五を数え

うに、おとぎの国で、かつて存在した絶滅種として化石になって残るのかも知れません。

先が短くなったこの人生を想う時、そんなことにならないようにと、次の世代に期待すること切であります。次号までまだ生きておりましたら、またご挨拶申し上げることもあろうかと想いながら、諸兄姉の健康を祈りつつペンを置きます。

（ノルウェー・オスロ市在住）

伊 藤 雅 夫

（昭和十一年入寮）

る。

育った東京（北緯三十四度）でも見えた北斗に改まって対面したのは、北大予科入学・恵迪寮入寮の時。札幌は北緯四十三

度にあり、星座はエルムの梢近くに止まりおごそかであった。

二、^{アカ}嚇い夕陽の満州で

昭和十五年・学部二年の夏・ノモンハン事変の翌年、興亜学生勤労奉国隊・満州建設土木特技隊・北大学部班の一員として、トランシットやレベルを擔い、北滿のサルト（北緯四十五度）で農地測量に従事した。

此の地、ハルピンとチチハルの中間点で、見はるかす平原に秋の七草が咲き乱れる。夕陽は嚇く、盛大で、これは黄塵が空に舞う故である。従つて夜も星が冴えない。白系露人の旧東支鉄道駅々長の娘、その白桃のような頬が星より美しく見えた。

此の地、後に石油の発見あり大慶油田と名付けられ、駅名もそのように変つた。

三、ラバウル小唄

『椰子の葉かげに十字星』とある。戦時、南方総軍に遣いつて昭南島・今のシンガポールに到つたが（殆ど赤道直下の地）、星を見ることもなく十字星には失礼した。戦地は一般に星どころではなかった。

しかし船舶工兵は天測にはげみ、夜間にしのび足にて舟艇機動した。恐らく此の小唄は彼等の作であらう。姫路に曙部隊の研究所が出来て、私も所属した。その軍歌に『南冥北斗幾千里』

とある。（ラバウル南緯五度）

四、西豪州のバースにて

戦後、天日製塩の計画にてバースに滞在し、現地の人から南十字星の委細を教示して貰つた。バースは南緯三十二度、星はびつくりするほど大きくて迫力があつた。そのダイヤモンド型の右下の辺の中間梢、上方に五つ目の星のあることも見届けた。サウスポートとは左ビッチャーのこと、即ち南極のことで、北斗・南十字の縁を真剣に考えることはバースで始まつた。

五、メキシコのバハカリフォニアにて

この塩田プロジェクトに二年ほど駐在した。米国のサンディエゴから南に伸びる半島があり、全長約千軒の半ばを南下したゲレロネグロ（北緯二十八度）にある。夜は星を見るほかに為すこともなく、日本でも見馴れた星座、北斗は勿論、オリオン・アンドロメダ・カシオペア・さそりのアンタレスなど、夜毎の友であつた。十字星は見えない。

六、イランのテヘランにて

皇帝の甥のシャールーム殿下の主催する国土開発会社の主任技師として招かれ、三年ほど駐在して主に国鉄改良の仕事をした。

此の地は清涼の高原にあり、星は輝く。しかし町の直ぐ北にエルボルツの高い山脈が聳え、北斗も直ぐに隠れるのである。
(北緯三十六度)。

七、トリニダッド・トバゴにて

ベネズエラの直ぐ北にある、名の通りのふたつの島から成る独立国で、トバゴはロビンソン・クルーソーの島、トリニダッドは大きい方の島で石油を生産して豊かである。此処に上水道用のダムを造って三年ほど駐在した。此の島々、カリブ海の楽園で乾季・雨季の別はあれど年中晴天にて、特に星空が素晴らしい。北緯十度にあり、北斗と十字星の両方が見える。

北斗は北極を廻る。南十字は南極を大きく廻る。従ってこの両星座が見られるのは、赤道ではなくて北緯十度が程良い。地図ではマラカイボ・コスタリカ・マーシャル群島・セブ島・クラ地峡・インドのコーチン・ジブチ・ギニヤなどがある。訪れるかたがあれば夜空を仰いで確かめて頂きたい。空飛ぶ旅の機上も、北緯十度の夜の星との縁あれば同じこと。

八、バンドンにて

インドネシア国鉄の本社はバンドンにあり、国鉄リハビリのプロジェクトにて長期滞在した。此の地、南緯八度で十字星は見えるが北斗は見えない。

仕事のストレスが積り、一夜胃の吐血あり、病院にて同国空軍の患予によるA B型血液の輸血を受けて蘇生した。翌朝、吾が身を励ます何ごとかを口ずさんだ覚えがある。同室の同国人患者によると、軍歌であったと言う。どうやら北大の校歌『永遠の幸朽ちざる誉』であつたらしい。その歌曲はもと米国北軍の軍歌である。

『北斗をつかん、たかき希望(のぞみ)は時代(とき)を照らす光なり』とある。

『イザイザイザ打ちつれて進むは今ぞ』となる。

終わりに

北大には北斗の魂が受け承がれている。恵迪の青春から老兵の今日までの、星の想い出を綴った。六十年となる。

ビルマの戦友は、北斗を仰いでいる。

ガダルカナルの戦友には北斗は見えず、南十字星に夜毎の思いを訴えている。星には魂が宿る。

天津脱出顛末記——天安門事件秘話——

村 山 正

(昭和二十三年入寮)

古くなった話だが、九十年六月、第十八回世界燃焼機関会議（C I M A C）に参加する為に、中国の天津を訪れた時の忘れられない一大ドラマである。同会議は、船舶用を中心とするガスタービン及びディーゼルエンジンに関する国際会議であり、本部はバリにあって、世界の各地で隔年に会議が開催されている。

成田出発当日の六月四日の朝刊各紙は、三日深夜から四日早朝にかけての天安門広場でのデモ隊と戒厳部隊との武力衝突に付いて大きく報道していたが、C I M A C本部では大会を予定しており開催する事を通告していたし、我々一行は、日本内燃機関連合会（C I M A Cの日本における組織、以下、日内連）企画、近畿日本ツーリスト（以下、近ツリ）主催のグループツアーであり、特に不安を感じる事も無く、予定どおり出発した。

午後、北京に到着したが、空港は全く平穏で軍服姿も見掛けられず、バスで一路天津へ向かった。天津はきわめて静かで、何処に騒ぎがあるのか分らない感じであった。夕食を共にしてから、それぞれの部屋に戻ったが、企業関係の人々は、各自が北京駐在員や事務所などと連絡を取って情報の収集を行ったようである。

某社の北京駐在員からは、事務所の前で戦車が発砲して何人

かの人が殺されたという報告があり、又、市街も混乱してきわめて危険な為、北京空港へのアクセスが難しい事、鉄道は民衆との接点にもなり、ゼネストの可能性もあるので利用しない方が良い、等のアドバイスも寄せられた。そして、天津は平穏でも、すでに多くの大都市で大規模なデモが始まっていて、明日にでもゼネスト、あるいは内乱が始まってもおかしくない状況にあるように思われた。

天津からは、香港行きの四十人乗り定期便が一日一便出ているだけなので、北京空港へ行けないとなると閉じ込められてしまう恐れがある。また、何人かの人々が自分だけは帰れると思つて勝手な動きを始めるとなると、そのような可能性を持った人いや、海外旅行が初めてと言うような人々の間で、パニックが起こりかねない。そこで深夜、コージネーターとしての小生の部屋に主要なメンバーが集まって状況を検討し、今後の対策

に付いて相談した。そして、ポスト コンGRES ツアーは中止して、大会終了後なるべく全員がまとまって、出来るだけ早く

帰国するという方針を決めて散会した。

翌六月五日は、朝から予定どおり開会式が行われたが、小生は、午後のセツション最初のスピーカーであったので、会場に行つてみたところ、

座長も講演者も到着しているにもかかわらず、別のセツションが始まるというような混乱が起きていて、我々

の発表がどうなったのか全然分からないまま、とにかく会議は進行した。夜は、某オイルカンパニーの晩餐会に出席して、表面的には、いたって和やかな一時を過ごしたが、十一時頃、部



(北京・天安門前広場)

屋に戻つてみると呼び出しが掛かっていた。

集まったのは、日内連副会長で三井造船常務の佐伯さん、CINACガスタービン日本代表でIHI理事の青木さん、近ツリ添乗員で中国から帰化した国本さん、そしてコーディネーターとしての小生の四名である。打ち合わせの結果、日内連が責任を持っている三十二名だけでなく、希望する日本人全員を無事連れて帰ろうではないかと言う事に成った。

その場合、六月八日に天津空港から香港に抜ける事を考えたが、天津―香港の一日一便のB737に頼っていたのでは、何時帰られるか全然当てにならない。何とかして、B737を707に取り替えて、増えた座席に日本人全員を収容する事は出来ないだろうかと言う事を検討した。ただし、殆どの人が帰りは北京―成田のチケットを持っていたので、これとホテルの予約金とは放棄して、新しく天津―香港の正規料金を円貨で支払う事にした。

ウイスキーを飲みながら、この分ではどうせ明日の会議もどうなるか分からない。どうも会議は白人優先で運営されているのではなからうか。など勝手な事を話しながら、深夜二時ごろ、ふと気が付くと、ドアの下から一枚の紙が挿し込まれていた。六日以降の変更されたプログラムで、何と小生は、朝八時三十分から講演をする事に成っているではないか。慌てて散会して部屋に戻りベッドに横になったが、神経が高ぶって眠れるような状態にはない。睡眠薬に頼るには時間が無過ぎる。そこで、とにかく目を閉じて朝を待った。

最低のコンディションではあったが、何とか予定通り講演を終わらせ、長い討論を切り抜けた。会場から脱走してホテルに戻り、脱出計画の細部について相談した。その頃に成ると、北京との電話は不通になり、CNNテレビは消されてしまつて、官製のニュースしか流れていない。情報収集は北京―東京―上海―天津といったルートに頼らざるを得なかった。

そうこうしているうちに、北京からウィスコンシン大学名誉教授のウエハラ先生ご夫妻が到着された。先生は、以前から中国訪問を切望しておられ、日本、中国には友人や教え子が多いので、小生が特に我々のツアーにお誘いしていたのであるが、便の都合で五日深夜に北京に到着されたのである。

先生ご夫妻のケアーは、かつて北大に留学したことがあり、中国政府直轄の研究所幹部である朴河鴻さんに依頼してあったのだが、同氏は、官用車を使い、党の公印のある通行証を振り直し、パリケードを突破してご夫妻を御連れして呉れたのである。しかし、朴さんとは旧交を暖める間もなく、ご夫妻に脱出計画に付いて説明しなければならぬと言つた具合であつた。

脱出計画の詰めが一番気を配つたのは、どうやってグループをまとめて行くかと言う事であつた。CIMACツアーの参加者三十一名に、個人参加の十名、それにウエハラ夫妻を加えて総勢四十三名であるが、内訳は、大学関係者十二名、団体、研究機関三名、企業関係二十八名である。海外滞在数年のベテランもいれば、生まれて始めて海外に出た人も居る。

いわば烏合の衆とも言ふべき四十三人の団体をまとめて引つ

張って行くには、何らかの形的全権委任と言うか、あるいは指揮権の確立的な事が必要であらうが、それをどのようにして実現するかが議論の中心であつた。そうこうする内に、CIMAC本部では、六月七日ですべての行事を終了する事、又、六月八日に香港のドラゴン・エアのチャーター便を手配する事などを発表した。

我々は夕食後二十一時に全員を招集した。佐伯さんが議長に成り、小生から、最新の情報やら脱出計画に付いて考え実施してきた事柄を出来るだけ客観的に説明して、一人一人から、グループに参加して脱出する事に付いての意志の確認を行った。そして我々は、結果に付いては何ら保証するものではないが、全力を挙げて事に当たるので、チケットの予約などで二股をかけるような人は参加しないでほしい事を、出来るだけ穏やかな表現で、しかし、はっきりと通告したが、結局、全員が我々の計画に参加した。

全体会議を終えてから、四名で深夜まで計画をつめたが、B707は北京空港から運んでこなければ成らない事、その為には中国民航の幹部と中国旅行社のスタッフが北京まで出かけて、最終確認を行う必要が在る事などが分かり、脱出の日取りや人数の確認などを何回も行った。ところが、会議最終日の七日に成つて、大会本部が手配したドラゴン・エアが、香港政府の方針によりキャンセルになった旨の発表があつた。そうになると、我々の手配が成功した場合、特に欧米の人々からの非難が集中する恐れがある。

そこで、混乱を避ける為に、バスはひそかにホテルの裏口につける事、ホテルの清算は目立たないようにして前日中に三々五々済ませておく事、水晶宮飯店以外に宿泊している人は、七日夜までにチェックアウトして、何処かの部屋に潜り込んでおく事など、考えられる限り細部にわたって計画を練った。

夕方七時から、天津賓館で閉会晩餐会が開催された。ところがその直前に、CA 103便の搭乗リストがホテルのロビーに張り出され、何と日本人分四十三席が、T・Murray aを先頭にして一枚の紙にタイプされ、他の一枚に欧米の四十人分がリストされていた。

CIMACの幹部の一部には、あたかも日本人が席を横取りしたか、裏金を使ったかのごとき発言をする人もおり、日本人の中には“Why Japanese only?”と怒鳴られたり、“おまえ達は、いくらBlack Moneyを使ったのか”などと聞かれた人も居て大混乱になったのである。しかし事實は、われわれがチャーターしたB707が成功したので、欧米の人たちも四十人ほどまとまって脱出できたのである。

パーティーでは、左隣に座ったチャールミングなドイツの夫人とは、此れは絶対に犬の肉などではない。此れも多分ヘビではないから大丈夫”など、かなり無責任な中華料理の解説をプロクンイングリシュで和やかに交わしながら、心のなかは脱出計画の事ばかり、食事の途中にも密かに伝令を飛ばして、あちこちの日本人達に、なるべく目立たないように早目に引き揚げるように伝えるなど、必死であった。

六月八日、八時にバスでホテルを出発、八時三十分天津空港に到着して、国本氏が手配したビップ・ルームに入った。三十分ほど待つうちに、B707が現われ、記念写真を取り、なんとなくつろいで買い物など始めて気が付いたのは、チケットが搭乗券に交換されていないという事であった。オーバリーブッキングの可能性がある。すぐに手分けして全員列に並んでもらい、搭乗が始まり、建物の出口で搭乗券をもらって飛行機に乗り気が付いたのは、何と座席が指定されていないのである。すばやく空席を見つけて、とにかく座り、見回したところ、さすが日本人、グルーブの全員が着席していた。

しかし、飛行機は動かない。どうやら出国審査の数と搭乗者の人数が一致しないらしい。そうこうするうちに、白人の中年女性が泣きながら引き摺り下ろされるといふ一幕があり、飛行機は動き出した。外は激しい雨である。永久に浮かび上がらないかに思われた大古のジェット機は、よたよたしながらもとにかく離陸して、三十分遅れで香港に到着した。着陸の瞬間、期せずして一勢に拍手が起こったが、空港では、金沢工大の佐藤学長が団員を代表して我々四人に謝辞を下さった。

成田には日内連理事の村田さんと近ツリの木部さんが出迎えて下さったが、お二人の嬉しそうな顔を拝見して、我々の脱出計画の成功が、日本で無事を祈り、心配してくださった多くの人々によって支えられていた事を思い、改めて感謝した次第である。

初めて感じた人種の偏見

岡 本 勝 群

(昭和二十六年入寮)

私は工学部で電気化学を専攻し、卒論には金属の腐食と防食に関するテーマを与えられた。それ以来、私の仕事は金属の腐食と防食に関するものになり、今でも、それを続けている。今年の仕事は公的には総務省消防庁の危険物技術基準委員会で石油タンクの規制緩和に関する検討をすることであり、私的には住んでいる団地の長期修繕計画委員会で給水管、その他金属構造物の腐食防食に関する検討をすることである。

また、この仕事についてお蔭で、一九六六年のモスクワをはじめとして、三十ヶ国に行くことができ、出国回数も四十回になっている。最近では、一九九七年五月、国際協力事業団（JICA）の専門家としてサウディアラビア王国に派遣され、一九九七年十一月には、JICAプロジェクトに発生した腐食問題を調査するため、ニカラグアに出張した。

旅の大半は気楽な一人旅で、行く先々では多くの人々の世話になり、また、失敗したときには見知らぬ人々から受けた好意に心から感謝の念を抱いたものである。

これだけ多くの旅をしながら、一度も人種の偏見を感じたことはなかった。初めて感じたのはサウディアラビア王国に派遣されていて、休暇をとってイギリスへ行き、ロンドンからエジンバラまで乗車した急行列車でのことである。

一九九七年五月から酷暑の地で三カ月勤務し、八月にリフレッシュのため一週間の休暇をとって、同僚と二人でイギリス旅行に出掛けた。計画ではロンドンに二日滞在した後、エジンバラへ列車で移動して、そこで二日、ネス湖で一日を過ごし、インバネスから空路ロンドンへ戻り、残り時間の許す限りロンドン市内を歩き回ることになっていた。

ロンドンへは若い頃から会社の出張で何回も行っているが、観光客の多いスポットだけを見物していたせいとか、人種の偏見などまったく感じたことはなかった。それどころか心温まる親切を何回も受け、イギリス人に深い尊敬の念を抱いていた。

しかし、今回エジンバラ行の急行列車の中で人種の偏見と思われる行為に遭遇し、大変寂しい思いをした。ロンドンのような観光客の多い大都市を旅しているだけでは、その国の人々の本当のことはわからないのだと思わざるを得なくなった。

サウディアラビアからロンドンへ着いて、まず最初にエジンバラ行の急行列車について調べ、どんな列車に乗るのかを知っておくためキングスクロス駅へ行った。プラットホームから車内を見たところかなり混んでいたもので、ホームにいた駅員に尋ねたら席を予約しておいた方がよいというので、駅の予約センターへ行って座席指定の乗車券を購入した。

エンジンバラ行の当日、早めにキングスクロス駅へ行き、列車の指定席を探した。日本では指定席車両と自由席車両が別々になっているが、この列車は全車両が自由席で、座席の背もたれに指定席番号が表示されている席だけが指定席になるというシステムであった。日本で満席で立っている人の多い自由席車両、一方、空席が目立つ指定席車両を見慣れている私には、実に合理的な方法だと思われた。私達には四人掛けの席の前向きの席が指定されていた。後ろ向きの席は指定されていないので、隣にイギリス人と思われる夫婦が座っていた。ところが、私達が座ると、この夫婦は席を立て別席へ移っていった。発車までには時間があつたので、まだ空席が幾つもあつた。

私達の前の席にはなかなか人が座らなかった。発車時刻が近くなり、他に空席がなくなつて初めて、私達の前の席に孫と思われる男の子を連れた年輩の婦人が座ってくれた。もし満席にならなかつたら、私達の前の席は空席のまま発車しただろう。やはり肌の色の違う私達は敬遠されたのだと思う。

人種の偏見については、いろいろな本や論説が出されている。海外勤務で家族と一緒に滞在して、近所の人達や知り合いの人達から何ら変わる事のない対応を受けたとか、車での旅行中にパンクして困っていたら、後ろを走っていた人がスペアタイヤに取り換えてくれた、したがって、人種の偏見はないと思うという論説を読んだことがある。

しかし、これは勘違いではなからうか。顔見知りの人達や困っている人をみた人達は、たとえ、人種の偏見をもっている

しても、面には出さないだろう。

この世の中に、肌の色の違う人種がいる限り、人種の偏見はなくならないのではなからうか。表面的にはあらわにしないとしても、多くの人々が潜在的に人種の偏見をもっているのではないだろうか。そう思えてならない。

道をたずねて

福田新葉

(昭和五十四年入寮)

私が恵迪寮にいたのは今から二十年近く前のことで、入学後しばらくしてから入寮した。それまで故郷で割と気ままに過ごし、人との交流にもそれほど積極的でなかった私にとって、全国津々浦々から集まってきている寮生との出会いは新鮮で、臆しながらも、時には酒の力を借りつつ交流を深めていった。しばらくして、寮での共同生活そのものは、極めて心地よい刺激

へと変わっていた。

それまで私は、人生について考えることを日々の思考の中心に据えると言うことはあまりなく、目の前の自分の好きなことに腐心し、考えを巡らせるばかりであったが、寮生は恵迪寮の大らかな雰囲気のもとで、よく生き方とか人間の目的とすることなどを話題にしながら暮らしており、私も自ずとその影響を受け、中心的に考えるようになって行った。

ある時、同室の先輩と話していると、確か何を目標に日々を過ごすのかといったことを話していたと思うが、最後に、結局は何事も楽しければいいのだ、それが一番大切なこと、と話された。一瞬考えたが素直に受入れることができなかった。楽しいことはそれ自体を求めるものではなく、ある行為の結果として生まれるものと考えていた。快樂や楽しみに対する慎みが先に来てしまい、楽しむことを素直に求めることのできない氣質を持ち合わせていたからかもしれない。

そのときは反論するまでには至らなかったものの、何となく素直に受け取ることができなかった。一方で、それを言い切った先輩には大層敬服したことを覚えている。実は、私はその頃、朝、授業に間に合うようにゆっくり起き、授業を受け、剣道で汗を流し、酒のみ、放歌し、寝ると言う如何にも楽しげな生活を送っていたのであるが。

そんな生活のなかで得たこの一言をきっかけに、楽しみに対して、考えを巡らすようになっていった。

ところで、現在私は、水産分野における海外協力事業に携わる団体に勤務している。世界の多くの沿岸国が距岸二百カイリ以内の水産資源を自国のものとし、外国船の漁業活動に対して許可制度を導入するといった所謂二百カイリの時代の到来とともに、日本の遠洋漁業はそれまでのようにこの沿岸国の水域で自由に漁を行なうことができなくなっていた。

時代の変化に対応し、我が国の漁場を確保する目的で、入漁の際、入漁料の支払の他に求められる研修生の受入、漁業開発プロジェクトの実施、専門家の派遣、資機材の供与などの漁業協力事業を漁業者に代わり実施しており、これらを通じ、日本と沿岸国との漁業分野における友好関係を作ることに努力している。最近では、漁場を確保することだけでなく、水産に関係する国際機関との協力や、増加し続ける人口問題に対処するために水産物による食糧確保を念頭に協力事業を実施している。

沿岸国は開発途上国が多く、海洋或いはその資源そのものを梃子とした自国の開発発展政策を持ち、自国資源の提供の見返りに外国の漁業国から入漁料や協力事業を引き出し、その目的を達成する手段としている。私は、太平洋の島嶼国を対象とした漁業開発普及プロジェクトの企画運営を担当しているので、しばしばこれらの国々を訪れることがある。

太平洋の小さな島々は、まだまだ美しく、きれいなさんご礁と白い砂浜、やしの木陰にでも休もうものなら、訪問の目的を忘れ去り、このまま人間の原点に戻っていくような錯覚に陥る。人々のくらしもゆったりしていて、その生活は正に太陽と海を

中心に回っている。厳しい自然環境のもとで飢えと病気に苦しむ多くの途上国と比べて、これらの国は基本的な生活が、恵まれた自然により保障されているので人々の生活にも悲壮感が無い。むしろ生きることに精神的なゆとりさえ感じる。

都市部はすでに貨幣経済が発達し、電気が通じ、車が走り、日本からの国際通信も可能で開発の一途を着実に進んでいるが、なぜか離島などの辺境地のほうがこの感じは強い。

これらの国々の開発は外国に依存するところが極めて大きく、その手段として用いられる機械やそれを支える技術は外国から導入されることが多い。このことが協力事業を実施していくうえでの障害となることがしばしばある。

協力事業で用いる機器や設備の多くは開発国が長い歴史と、その国の独自の土壌を背景に生み出されたものであり、それを利用する技術も国民性に基づくものである。開発のために供与という形で存在するこれらの機器、設備や技術は異国のものので、人々は伝統的な生活からしかるべき過程を経ないで触れていくわけである。

その結果技術の移転がうまくいかず、機械類はやがてはその寿命を全うすることなく遊休化していく場合も多い。普通三年から五年の期間で協力事業を実施しているが、その間で技術の移転を完了することは極めて難しいのである。先進的な機械を使用することのみが協力事業ではなく、むしろそれ以上に人材開発こそが重要なのであるが、技術や知識が研修を受けた人材により咀嚼され、国にあった独自の技術へと発展していくには

かなりの年月が必要であろう。

このような状況のもとで協力事業の難しさと痛感しつつも、何がその国の人々にとって役に立ち、国の発展に貢献できるのか考えて事業を実施しているのである。しかしながら、心の片隅には、開発を進めることにより、効率化を求め、便利さを求めることは果たして人間の生き方として正しいのか、楽しい未来が約束されるのか、と言う疑問も存在する。

日本の技術を持ち込みこれまでの生活をより便利にしていることはそこに住む人たちが切望するものかも知れないが、開発されし尽くした後の生活を知っている私からすれば、そのままだよいではないかとも考えたりする。先進国で便利な生活を享受しているものの驕りであろうか。

人間は何を目的に生活しているのかを考えると開発と同時に考えるべきことを置き去りにしているような気がしてならない。

大学を卒業してしばらくした頃、真に楽しく生きることは物質的に充足された結果として得られるものではなく、精神の満足で得られるものであることが何となくわかり始めてきた。物質的、肉体的な満足はすぐに到達する。また、その欲求は日常的に存在するが、年を重ねるにしたがって弱まっていくようである。楽しく生きるとはそんな安易なものではなく精神性の充実にあるだろうと考えるようになった。

なるほど楽しいことと楽をすることは似て非なるもので、楽

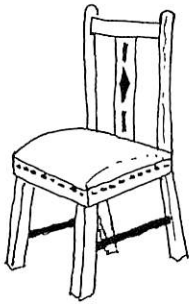
しみを追求し、それを人生の至上の目的として据えることにもはや迷いはなくなつた。と同時にあの時のわだかまりが氷解て行くような感じを得た。

今人生の半ばで精神的快樂の追求という果てしない目的にむけ遅延としながらも進んでいるつもりである。これからは加齢とともに肉体は衰えていくであらう。

人間には肉体と精神が同時に存在するが、お互いが他を束縛している、と一見できる。肉体的疲弊が精神をも引き込み、精神的緊張は肉体をも硬直させる。肉体的衰えが精神を道連れにするとならば、我が目的の到達はきわめて困難といわざるを得ないが、私はそうは思わない。

肉体を豊潤な土壌として共に育ち、やがては独立して成長をいつまでも続ける精神の有り方こそがこれから求めていくものではないだろうか。そして、その精神の行き着くところはやはり楽しみではないだろうか。

恵迪寮でいただいたあの言葉は、楽しみを求め、長い道のりを歩む私の中で今、迷いなく育っているのである。



私の研究留学

阿部英樹

(昭和五十六年入寮)

それは突然の電話でした。昭和二十八年度入寮のOB井口さんから、米国留学経験者の体験談を書けとのこと。しかし、私が渡米していたのは一九九二年九月から一九九三年十一月の一年三ヶ月で、すでに十年が経とうとしています。結局、引き受けせられました。

まずは、自己紹介が必要でしょうか。昭和五十六年度入寮で、部屋は腐草庵、スポ愛、ルネツなどでした。ここでシロ（編集者注、多分、犬）と親交を深めることになります。二年間の旧寮生活のあと、昭和五十八年から新寮へ、新寮では桑園学寮の方々と同室になり、恐怖におののいた時期もありました。

新寮では無事三の一から四の二へ進級し、同じく四の二の澤氏、矢部氏、太田氏ともども四年間の新寮生活を無事送ることが出来ました。私はその後、薬学部修士課程へと進みましたが、残念ながら院生棟への入寮は出来ませんでした。

旧恵迪寮が北海道開拓村に保存されていることは、みなさんご承知のことかと思えます。その一室では、寮生活や寮の行事

をビデオで見ることが出来ます。そのなかに「ジャンプ大会」があります。閉寮記念のもので、ここに私が登場しております。

同期の澤氏のアイデアによりルネツの面々（桜井氏、藤島氏、白浜氏）でウルトラ兄弟をやり、優勝しました。

と、思いうるは語るのはこのぐらいにしておきます。

さて米国留学の件ですが、私は就職した後、職場の意向で米国で研究することになりました。私の就職先は北海道赤十字血液センターです。血液センターでは献血をしていただき、検査をし、血液を成分ごとに分離し、各種血液製剤を医療機関へ供給するのが大まかな仕事の流れです（その昔、筵を巻いた格好で献血に來たやつがいたそうです。くれぐれも真似しないように）。

その研究部では、輸血用血液製剤の感染性因子の安全性に関する研究を行っております。当時友好のあった米国赤十字ホールランド研究所では、この分野において進んだ研究を行っており、その機序解明を目的に共同研究することになりました。

一九九二年九月、妻と二歳間近の息子の三人で、米赤十字ホールランド研究所のあるメリーランド州ロックビルに向け旅立ちました。その当時、成田ーワシントンDC間を全日空が直行便を飛ばしており、十四時間のフライトで行くことが出来ました。

ロックビルはワシントンDCの郊外と言っても良く、地下鉄で結ばれております。その途中には、世界の医学研究の頂点に

立つNIH（国立衛生研究所）があり、日本人研究者も数多くいます。留学生が多い中、私の友人のようにグリーンカードを取得した日本人もいます。

ホールランド研究所にはその当時日本人は三人居たのですが、研究室が違うため週に何度か話す程度でした。それでもクリスマスパーティーやお別れ会など、家族ぐるみのお付き合いはあり、楽しく過ごすことが出来ました。

私の研究室には、当然日本人は一人なので、日中は英語しか話しません。仕事の話は専門用語が多く、論文も読んでいるので不自由ないのですが、日常会話の話題になる政治、経済、文化、習慣、芸能、スポーツ等々、英単語が分からないためにいたことが言えず、歯がゆい思いをしました。

丁度、クリントンの大統領選、皇太子の結婚、細川政権の誕生、これまでにない円高など、話題が豊富だった時期でもありました。そうした知識と共に語彙もある程度習得してないと、何も知らないやつと思われかねません。

住居は研究所から歩いて十分ほどのタウンハウスでした。洋風長屋で、続き屋根の下に数軒あります。とはいえ、アメリカですから、地上二階地下一階、スリー・ベッドルーム、フォー・バスルームと、三人家族では持て余す広さです。しかも家具類もほとんど無いので、余計広かったです。

多くの研究者は、家具や車をムーヴィングセールで購入します。しかし帰国者から購入するため、タイミングが合わないといつまでも揃えることが出来ません。私たちはあらかじめ必要

最低限の家具をレンタルし、部屋にセットしておいてもらいました。

ここで気を付けないといけないのが、アメリカの家やアパートには、日本のように天井に灯りがついていないことです。キッチン、ダイニングには付いていることが多いのですが、リビング、ベッドルームには無く、初期の頃は夜、暗い生活を強いられました。

アメリカの生活で車は必需品です。幸い家から歩ける距離のところに中古車屋があったので、そこで購入しました。三菱ミラージュ、日本車です。帰国後、多くのアメリカ生活経験者から、車は日本車に限るという話を聞きました。

購入して驚いたのが、すぐ乗って帰っていいということです。ナンバープレートは紙製の一時的な物で、その内に正式な物ができたら取りに來いということでした。買ったその場で、乗って帰れるというところが、さすが車社会アメリカです。

そうそう、留学して一番最初にしなければならないのが、銀行口座を開設して、小切手帳(チェック)を作ることです。電気、ガス、水道、家賃、すべてチェックを郵送して支払います。アパートでは家賃に電気、ガス、水道代が込みになっているところが多いようです。

アメリカ人は小さな子供連れということで、買い物に行っても、地下鉄に乗っても、やたらと話しかけてきます。息子のおかげでコミュニケーションが増え、また円滑にいったと思います。

近所に同じ時期に引越してきて、同じ歳の子供を持つアメリカ人家族と仲良くなりました。誕生パーティーに呼び合ったり、サーカスを見に行ったりしました。帰国後八年たった今も交流が続いています。子連れは大変な面もあり、また楽しい面もあるようです。

当然、アメリカの病んでいる部分も垣間見ました。物乞い、引ったくりなどなど、幸い銃に関しては何事ありませんでした。私の出張中の夜、ヘリコプターのサーチライトで、家の周りを照らされたこともありました。逃走犯でも追っていたのでしょうか。

アメリカから日本に出した年賀状の返事で一番驚いたのが、二年上の太田松太郎氏からのものでした。なんと、アラスカに赴任中だとのこと。とはいえ、ワシントンDCとアラスカではおいそれと簡単に会いに行くことは出来ません。帰国するときに寄って帰ろうかと思っていたのですが、そのような余裕もなく日本に戻ってきました。

書き始めると、十年近く前のことなのに、いろいろ思い出してしまいます。本当にかいつまんでの事しか書けませんでした。アメリカ滞在経験者の方には共感いただけ、これから考えている方には参考になれば幸いです。

シリーズ 四

日本のスキー史に輝く北大スキー部

高 橋 邦 臣

(昭和二十八年入寮)

北大スキー部の沿革は、明治四十一年（一九〇八年）、コラー先生が北大に赴任されたことをもって始まりとするのが妥当といえる。先生はドイツ語のテキストに「Der Ski」という一冊のスキーの手引き書と、一台のスキー（二本杖のノルウェー式と言われている）を見本として携えてこられたのだ。

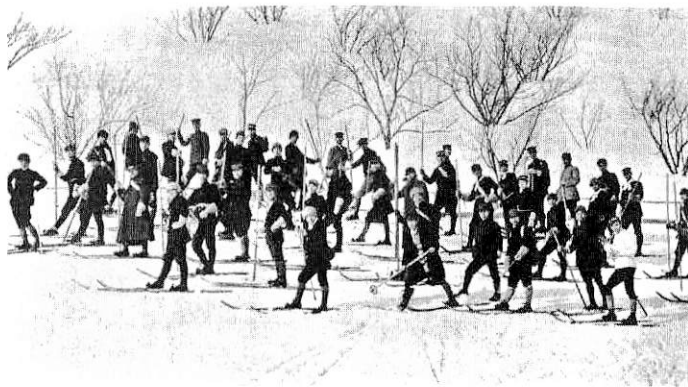
北大スキー部の第一頁は三角山でも手稲山でもない、つまり屋外でなく、ドイツ語教室内で始まったのである。スキーは屋外雪上で足につけるのに、ここでは屋内で先ず耳につけたのである。

先生の流暢な説明を聞かされた学生たちは、未知への興味と関心を強く心に焼き付けたのである。冬になり学園が白雪におおわれると、学生たちは戸外で実際にするさまを見たいとせがんだが、先生はこれを軽く拒絶して、今はその時期でないことをこれ亦巧妙に説明された。学生たちは先生がスキーの達人と信じて疑わなかったのであるが、実は先生はスキーに乗るすべをご存知なかったのである。

OBである稲田昌植（佐藤昌介総長の次男、のち男爵、初代日本スキー連盟会長）の回顧録によると「最初のスキー練習は明治四十四年の冬だと記憶する」とある。先生が持ってきたス

キーが始めて雪の上に持ちだされた。（注、以下敬称は省略させて戴く）この時のメンバーは稲田昌植、宮部金吾博士の長男憲次、野村龍吉、田中五一、金田正一、角倉邦彦の六名で、練習場所は三角山の麓であった。屋根形の小丘が練習地で、丘の上から下まで一直線に滑走するのであって、無事に転倒しないで行けようものなら大変な鼻息で、もう天晴れスキーの大家になったとのことである。

明治四十四年一月、高田にレルヒ少佐が来たということがわかって、尚一層猛烈になったと回想されている。一方、高田でもレルヒ少佐の来日前に一通り練習しようとしたが、教科書も



大正初期の一本スキー

いう。

このようにして、約一カ年二冬後、明治四十五年二月、レルヒ中佐（この時は少佐ではない。）が旭川に来て、その練習を

なく一本杖の使用法がわからなく、筏の水竿もどきに雪の中に突っ張ったという苦心談があった。

六人にスキー一台、交代に滑っていては待ち遠しいので、種々考えた末、形が似ているということ、先端を湾曲させてあるから馬櫓屋に頼めば作ってくれるに違いないと言って呆れた顔をしているものに、無理に作らせた。木材も何がいかに、身長との関係も知らないまま、又ビンディングは曲がつた金具を打ちつけてズツクのひもをグルグル巻きつけたと

終えた月寒二十五連隊の将校が三月末に練習をするということで、北大に勧誘があった。当時、全校八百の学生に呼びかけたが、参加したのは、僅かに七名に過ぎなかった。

しかし、この練習会で始めて、基本的動作、やや進んだ滑走方法を練習した。三日後、主任教官から藻岩登山を言い渡され、七日間で一通りのスキー術を習得したのである。スキーを一般に普及せんとして、札幌スキー倶楽部の設立が計画されたのは、この練習会の直後のことである。

また、北大から参加した七名（二本春松、荒木忠郎、徳岡松雄、柳沢秀雄、野村龍吉、角倉邦彦及び稲田昌植）が発起人となって文武会にスキー部を新設する運動を起こした。しかし、スキーが伝わってまだ日も浅く、学校当局や学生に理解されること事も薄かったが、趣旨書を持ち回り正規の賛成者を得て、北国の独特のスポーツであるという点で、了解を得、明治四十五年（一九一二）六月、スキー部が設立されたのである。

予算七〇円、初代スキー部長 大井上教授と記録されている。同年十二月（注参照）記念すべき第一シーズンがスタートしたのである。この歳は、奇しくも我等が寮歌「都ぞ弥生」の成立と同じ年であり、平成十三年（二〇〇一）、九十年の歴史を閲したのである。

（注）明治四十五年は七月までで大正と改元

当初ふれたように、コラー先生のもたらしたスキーは二本杖

のノルウエー式であり、レルヒ少佐のスキーは単杖のリリエンフェルト式（山岳滑降術）であった。発足当時のスキー部の活動は競技本位のそれとは異なり、登山、それも冬山登山が先行した。これはリリエンフェルト式が一足先に普及しはじめたからで、部員はもっぱら札幌近郊の山々に足をのびした。北大スキー部の誕生はスキー界にとつて記念すべき事柄であることは勿論のこと、山岳界にとつても大きな意義があった。

当時の主な活動状況を一覧表に纏めてみる。

大正二年 二月・部員総会を藻岩山頂にて開く・手稲山スキー

―登山参加者 八名

十二月・スキー講習会・第一回蝦夷富士登山、吹雪のため途中下山、参加者八名・駿河富士登山

三年 二月・スキー部大会 約二kmの距離レース

四年 二月・スキー競技会・円山一帯を会場として平地競争、距離レース、滑降競技、リレー等

五年 三月・毛無山及付近一帯のスキー地発見、これより盛んになる。この頃よりリリエンフェルト式を唯一の技術としていたスキー術も、次第にノルウエー式に移る傾向を示す

六年 三月・札幌―石狩往復の平地滑走を行う

これより平地滑走盛んとなる

七年 一月・以前から希望であったスキージャンピング、

この年、円山南麓の奥へ飛び台を作る

二月・五日間、中山峠横断を行う（約一〇〇km）、

本邦最初の長途スキーツアー・奥手稲初登山

十二月・「スキー術教程」作成し、部員に配付、スキー部モノグラム作成。

八年 二月・蝦夷富士登山、ニセコアンヌプリ登山等

十一月・スキー山岳写真展覧会（北海道最初の催し）

十二月・ヒマラヤ登山幻灯講演会

九年 一月・スキージャンピング合宿（第一回合宿）、小樽スタート北大ゴールの中学校スキー駅伝

二月・手稲山雪中露営、翌日登頂。ジャンプ大会

三月・ジャンプ練習（フォーム研究）

五月・並川 功教授 スキー部長就任

十月・昆布岳・奥手稲・ムイネ登山、第二回中等学校スキー駅伝

十一月 一月・旭岳登山、三月・黒岳登山

六月・雑誌「山とスキー」発刊

十二月・三角山に固定ジャンプビル建設（降雪のため未完成）スキー合宿・ジャンプ合宿

十二月 一月・ジャンプ合宿（新設固定ジャンツエ）

二月・第一回全日本スキー選手権北海道予選。本大会不参加（小樽）

十月・大島部長就任

十二月・ジャンピングビル工事終了

十三年 二月・第一回北海道スキー選手権大会（北海道山岳

会）、スキー部大会・第二回全日本スキー選手権大会（高田）

十一月・大野部長就任

十四年 一月・合宿（ジャンプ、距離の猛練習）・第二回北海道スキー選手権大会、札幌中学校スキー競技会を全国大会に改める

二月・第三回全日本スキー選手権大会（大鰐）。加納一郎、広田戸三郎等の発起人で全日本スキー連盟創設・スキー部加盟

一月・合宿。第三回北海道スキー選手権大会。手稲山下降競争

十五年 二月・第四回全日本スキー選手権大会（豊原）

三月・三角山麓、定山溪シャンツェで当部活動写真を撮影

五月・北大創基五十周年にあたりスキー参考品展覧会開催、高松宮ご台覧

七月・手稲山パラダイスヒュッテ着工

十二月・十五周年記念誌 発行

この十五年間の活動の実績を見るに、始めは技術的未熟、経験不足等から札幌近郊の山に限られていたが、羊蹄山遠征さらに厳冬の富士山遠征を敢行したことは特筆にあたいする。



（三角山山麓、札幌シャンツェ附近

・大正十二年頃）

のであろう。

大正九年一月、奥手稲から手稲への縦走のメンバーの中に板

登山ばかりではなく、スキー競技のさきがけともいふべき行事が次々と企画実行されている。距離（デイスタンス）レース、大々的なスキー競技大会の主催、新しいスキーコースの開拓、スキー技術向上のための合宿実施、ジャンプ台の建設、スキー技術テキスト作成等、当時の部員は勉学に部活動に行事の実施に多忙な日々を過ごした

倉勝宣の名が見える。板倉は学習院から大正八年九月、北大に進み、スキー部の一員となった。彼は学習院時代からスキーを学ぶと同時に夏山、冬山登山のすぐれたリーダーであった。この頃のメンバーを列挙すると、木原均、加納一郎等日本の近代登山の先駆者というべき大先輩の揃い踏みである。板倉は大正十一年三月卒業、同十二年一月、横 有恒、三田幸夫と立山にスキー登山にでかけ、一の越からの帰路、天狗平で猛吹雪にあい松尾峠で遭難、二十七歳の生涯を閉じた。

スキー部の「山登り」についてのたゆまない研究、普及といった面での活動で忘れてならない事柄がいくつか挙げられる。大正七年「スキー術教程」福地義二郎・六鹿一彦。大正九年「最新スキー術」木原均・遠藤吉三郎。広田戸七郎が開識社で「スキーについての研究」を発表している。これはまた「競技スキー」研究の始まりでもあった。

大正八年十二月、鹿子木員信による「ヒマラヤ登山幻灯講演会」が催されている。鹿子木は哲学者で、慶応大学教授で慶応山岳部創立に力をかしている。後年、インドにわたり研究のかたわらカンチェンジュンガ地区に入り、ヒマラヤ登山の先鞭をつけた。「ヒマラヤ行」は、わが国における最初のヒマラヤ登山記であるが、この講演会は先駆的な意義を有している。

大正十年六月七日付で月刊雑誌「山とスキー」が発刊された。発行所 山とスキーの会、発行者加納一郎。日本で最初の山岳雑誌である。論説、登山技術、スキー技術、随想、翻訳もの等意欲的編集であった。

第一号のトップは板倉勝宣「春の槍から帰って」である。大正十一年三月の第十三号では、図版で「エヴェレスト登山隊の首脳者」が紹介されている。一九二一年、第一回イギリス・エヴェレスト遠征隊のメンバーでマロリーが写っている。この時の遠征隊がエヴェレストの登頂ルートを見いだした旨説明されている。情報のキャッチの速さもさることながら、質の高さ、先見の明といい、すぐれた人々がこの雑誌に情熱をもやした。

この頃、高田はスキーのメッカであり、スキー競技会が年々開かれていたが、リリエンフェルド式スキーであったので、デイスタン・レースは見られない。北大では、はじめはリリエンフェルド式であったが、コラー先生はノルウェー式を持ってこられたし、大正五年、遠藤吉三郎教授がヨーロッパ留学から帰朝されたとき、ノルウェースキー術を習得、用具を持ちかえり新しいスキー理論を指導された。札幌では大正三年にすでに二kmのデイスタン・レースが実施されており、いかに先進的であったかが理解されよう。高田は海外との交流が全くといってないくらいだし、東京は雪がなく、北大はすべての面でスキー界をリードしていた。このように北大は海外と交流し、つねに新知識を吸収するとともに、木原、並河、遠藤、広田ら優れた指導者が次々に生まれ、北大という一つのからに閉じこもることなくスキー界の中核の役割を果たした。

スキー登山が興隆が続けると並行して、競技としてのスキーが芽生えはじめた。大正三年スキー部大会、同四年スキー競技会、同六年札幌く石狩往復平地滑走、同七年飛び台建設、同九



(全制度廻転)

年中等学校スキー駅伝（小樽―北大ゴール）等である。

大正七年、スキー部の伝統の象徴ともいえるべきモノグラムが制定された。沖野丈夫がデザインした直径3cmの銀の台に赤でHUSVの四文字が組み合わされたものである。「技術優秀にして北大スキー部に対し功労があり、且つ部員として恥ずかしからず尚熱心なる者に対し、幹事会の推薦により与う」とある。また、スキー部と縁の深い方にも特別にさしあげている。秩父宮、高松宮、三笠宮をはじめ稲田、木原など初期のひと、歴代の部長、茅誠司、東龍太郎の名がみられる。ジャンプがスキースポーツとして最高なるものと位置づけ、研究が始まったのは大正三年頃からで、大矢敏範が単独で研究をすすめていた。大正九年一月、遠藤教授、木原の督励で合宿を開始、小樽商業の大会で大矢が二・一m（当時、驚異的レコー

ド）飛んでいる。

大正十二年三角山に固定シャンツエ完成、海外の文献によるフォーム研究をすすめた。第二回、第三回、第四回全日本スキー選手権大会で緒方直光、青山馨、伴素彦と選手権を獲得している。大正十四年のスキー部大会では村本金弥が二八・二〇m、



当時の日本記録を出している。この頃から中学生にもスキーが浸透していたが、中学時代競技生活をおくっていた者がスキー部に入ることがようになり、部員が増えるようになった。南波初太郎、村本金弥、緒方直光、平塚直秀、伴素彦、神沢謙三が、あい前後してその仲間に加わった。

ジャンプ理論の中心人物は広田戸七郎で、一mでも遠くに飛ぶには前傾がポイントであり、いかにすべきか：大矢も早くから前傾を考えていたという。

ジャンプ理論研究に「航空力学のセオリー」を執筆したのが

青木真三である。ノルウエーのチュウエイン・タムスの飛型を解明した論文を紹介したものである。これによって、ジャンプフォームは、始めは直立不動型だったが、タムス型に移行することになり近代ジャンプへの開花につながった。「タムス型」とは飛ぶというより落ちるといったふうだった我流日本ジャンパーが憧れた、前傾のとれた「く」の字型の飛型である。

デイスタンスの組織的研究が始まったのはジャンプのそれより少しおくれた。リーダーは岡村源太郎で理論と実行、スキーマ材質、形、ワックス、競技規定、練習法にいたるまで研究した。例えば、シュナイダーの二か月の練習計画を短距離と複合のそれぞれについて詳細に紹介し、後進の指導標としている。

大正十二年二月、第一回全日本スキー選手権大会（小樽）が開催された。これは始めて全国的に統一された大会で、以後、新しい競技時代に入ることになる。スキー部は北海道予選に出場しているが、予選以来、小樽スキークラブの約束不履行を理由に絶交状態となり、本大会には不参加となった。

大正十三年第二回（高田）大会に岡村源太郎、伴素彦、相川正義、小川玄一等八名参加し、クリスチャニア・スラローム相川正義（一等）、ジャンプ緒方直光（一等 二〇・四〇m）の成績であった。

大正十四年第三回（大鰐）ではワックスを使った早大が距離で圧勝したが、ジャンプは青山（二位）、伴（二位）という成績であった。この大会の後、全日本スキー連盟の結成にあたり、北大スキー部は重大な役割をはたした。加納、広田が発起人と



（昭和初期のジャンプ、上方は札幌市街）

なり、規約案はノルウエーやイギリスの連盟規約を参考に作成したものである。初代会長は結局、大先輩稲田昌植男爵が満場一致で推された。ここにスキー界は大きくステップした。

大正十三年十一月、大野部長就任。二冬シユバルツバルツのフライブルクで留学生活を送った大野は、市民のスキー熱を目の当たりにした。病氣にかからぬ体づくりは医者としての仕事で、それにはスキーが一番というわけで学内にスキークラブをつくった。それと定山溪鉄道沿線を中心に山小屋を建設し、市民を冬の山に引っ張りだそうと考えた。

その第一号が手稲山中腹のパラダイスヒュッテで、スキー部創立十五周年にあたる大正十五年七月着工、大野部長が時の佐藤総長を説いて一千円、スキー部が五百円で計画したが、大工に逃げられたりして、結局千円超過した。建設委員佐々木政吉は「寄附金は一千円を超えたが、まだ、二、三百円不足する。しかし、十月中に完成させ、ヒュッテ生活を楽しみ得ることを誓う」と記録している。日本初の洋式ヒュッテの誕生である。

設計はマックス・ヒンデルで、彼は札幌市内にいくつかの建築物の設計をてがけているが、山小屋ではヘルベチア・ヒュッテも彼の設計である。

昭和三年、秩父宮が来道されパラダイスにお泊まりになられた。たいそう喜ばれ、山小屋に深い理解をもたれ、「私も一つ作ろう」ということでできたのが空沼小屋である。大野自身も私財を投じて、無意根小屋を建設した。昭和六年のことである。春香山銀嶺荘、奥手稲山の家、札幌岳冷水小屋と札幌近郊には数多くヒュッテが建設され、大野部長の夢が実現した。

ところで初代パラダイスヒュッテは、昭和五十三年には老朽化のため使用禁止、平成六年四月に倒壊した姿で雪の中で見だされた。六十八年の生涯であった。しかし、平成五年二月から再建について検討を進めて再建期成会を結成して募金をすすめ、平成六年十二月再建パラダイスヒュッテが竣工した。

大正十五年はスキー部にとって重大な年であった。それは「スキー部の活動は競技スキーにあるべき」という意見が強くなってきたことである。限られた予算のなか、山と競技の双方

を均等に推進することは極めて困難な情勢であり、その分化は促進されたのである。そこで、大正十五年三月、先輩、重要な地位にある部員が善後策を協議した結果、山岳方面の活動を行うために山岳部が分離独立することになった。

第四回全日本は豊原で行われ、デイスタンスはワックスの研究が進んでいた早大が覇権をにぎったが、ジャンプは連統三年、北大が伴素彦（一位）、緒方（温）（二位）とタイトルを手にした。この年日本スキー連盟はFIS（国際スキー連盟）に加入が認められている。この時日本代表で会議に出席したのは木原均であり、昭和三年、第二回冬季オリンピック（サンモリッツ）への招待状が届いた。連盟は広田戸七郎監督と六名の選手を決定した。

北大から岡村源太郎（距離）、伴素彦（ジャンプ）が選ばれた。だが、岡村は出発の前に不幸にも病没してしまった。オリンピックの結果は惨敗であった。「サツツの強さ、すごい前傾、我々は飛躍に対する観念を改める必要がある」、帰国した伴はこのように言っている。距離も同様であるが大きな勉強になった。

この年、全日本に次ぐビッグゲームである第一回全日本学生スキー選手権大会（インカレ）が一月開幕（大鰐）した。下馬評は距離の早大かジャンプの北大かと言われた。主将小林辰雄、伊藤健夫、村本金弥、神沢謙三等のジャンプ陣は上位を独占、さらに距離も善戦、特にリレーでは二位に入賞、複合では村本が一位。二位、三位も北大が獲得、第一回大会を制覇した。全



(第一回インカレ・ジャンプを制覇して凱旋。
トロフィーを持つは伊藤健夫)

歓迎会の思い出を書いている。

それによると、新人生はカラのリュックをもって出席する。

日本でもジャンプ四連統制覇を達成した。この昭和三年は北大スキー部の歴史で最も記念すべき年であった。

秩父宮ご来道にあたり、警護の役目は北大スキー部がお勤めした。当時、警察官でスキーのできる人がいなかったためで、この時、秩父宮はパラダイスヒュッテで北大生にお言葉を下さった。名ジャンパー伊黒正次がスキー部新人生

これは大野部長はじめ出席の先輩連は食べ物には殆ど手をつけないから閉会と同時に収納して、二次会のネタにするのである。それはともあれ、開会の冒頭、大野部長が読まれる「この度は諸兄の尊い学問の時間を犠牲にして……スキーを通じて諸君が示してくれた厚意は忘れることができない……」という宮のお言葉を、頭をたれて拝聴するのが恒例だった。

大野部長の思い出、「北大スキー部に二十円のお歳暮を下さった。また、別に三百円いただいたので、その利子でモナカを買って部員にわけた……」また、それを頂いた先輩がモナカを家に送ったら、おやじが感激して「スキーはどんどんやれ」といつてきたというエピソードがある。

パラダイスヒュッテの合宿が始まったのもこの年である。ヒュッテの夜は若人に楽しい思い出を残した。学外からも参加、呉越同舟スキーに親しんだという。後年、カラスの肉をみそ汁の具にして「鳥の肉でござる」と言って提供したのもこの合宿での話である。また、夕食後の愉快なコーラスは楽しい思い出になった。神沢のお国自慢秋田音頭、終いには、歌いながら踊りの輪になり、オケサ、伊那節、八百屋お七、八木節あり合宿の夜はふけていった。「わたしや手稲山谷間の娘、ジャンプ怖がる子は持たぬ」猛練習の間からうまれた歌である。

昭和四年第二回インカレ（札幌）に於いても、北大は圧倒的な強さで総合優勝をはたした。この時の得点六十一点は驚異的と言うべきであろう。ジャンプ一位伴、二位神沢、三位村本、四位宮村、複合では一位神沢、二位杉村。リレー優勝は後にも

先にもこの時だけである。全日本（高田）では、複合で神沢が優勝、長田二位だったが、ジャンプは始めてタイトルが北大の手をはなれた年でもあった。

この春、一騎当千の強者たち、小林、山田、伴、神沢、村本等がそろって卒業した。稲葉、関四郎、宮村、宮下等強豪は残ってはいたが、ギャップは大きく、昭和五、六年のインカレは早大に覇権をうばわれた。お家芸のジャンプは、第四回（飯山）で新人山田四郎が非凡な才能を発揮して二位を占めた。

昭和七年、第五回インカレ（札幌）は巻土重來を期し、猛訓練で鍛えた北大は各種目に上位を占めた。耐久で黒田、長距離と複合宮村、ジャンプ山田（四）がタイトルを獲得、長距離と複合二位に奥井、新人伊黒がジャンプ三位に入り総合優勝を奪回した。この年のレークプラシッド・オリンピックは前年の予定で振るわず、OB山田勝巳（距離）が選ばれただけであった。

この年は、ヘルセットの設計になる大倉シヤンツエが完成、七〇m級の台である。飛距離は昭和七年インカレで四四m、すぐ後中学校大会で五一・五m、昭和八年中学校大会で五六m、昭和九年には伊黒が六七mと飛距離をのびした。この台の完成は日本のジャンプ界の発展に大きく貢献することとなった。

昭和八年、第六回インカレ（飯山）は加盟校がふえ二部制となった。一部は早、明、日、法、樽高商、北大の六校によって争われた。この年はホルメンコーレン大会五十周年にあたって大野部長、宮村は渡欧したためエースを欠く布陣となったが、距離（一八km）、複合でタイトルを取ったが、ジャンプが振る

わず伊黒の四位のみで総合二位、早大が優勝した。

この頃から「学生スキー界は既成選手でなければ勝てない」状況が強まりつつあった。第五回インカレリレー優勝の早大メンバー四名中三名が一年生であった。既成選手のいない北大では考えられないことであり、伊黒の卒業（昭和九年）はコマ不足に悩む北大にとって大きな痛手であった。伊黒は、小柄で、ガニ股でおよそ運動神経はゼロに近かったが、激しい練習にもあくことを知らぬ精神力の持ち主で、ジャンプの第一人者となった。ガルミツシユ・オリンピック（昭和十一年）で七位に入賞という大きな成果をあげた。

また、この年に一九四〇年の冬季オリンピック札幌立候補が決まった。北大スキー部にとって長年の夢であった。大正時代からFISや各国と交流し、秩父宮のお力添え等一連の歴史があった。夏期オリンピック東京立候補で冬季も日本へ、それも札幌へと頑張ったのは大野部長、加納、広田等北大スキー部のOBが中心であった。せっかく札幌開催が決まりながら、この大会は戦争によって返上中止のやむなきにいたった。この夢が実現するのは、一九七二年、三十二年後になるのである。

昭和十年第八回インカレ（小樽）は、奥井、黒田、宮村等を送りだした痛手がありにも大きく、樽高商の下位四位となつてしまった。以後、インカレにおいては、北大は覇権を獲得することはなかったが、昭和十二年のインカレで新複合（アルペン）が加わった時が優勝を狙う機会であった。

というのは、この種目の専門選手はまだいなかったが、北大

た歴史を持っているのである。

参考文献

- ・ 北海道帝国大学文代会スキー部 創立十五年記念
- ・ 雑誌 山とスキー (創刊号) 二十六号
- ・ 日本スキー意外史 (伊 黒 正 次)
- ・ 北大スキー部五十年の歩み (北海タイムス社)

スキー部山班は以前からこの競技について研究を積んでおり、理論、技術ともに匹敵するもの無しと自他ともに許していた。すでにカンダハ、スチールエッジを使用し、優勝は北大という下馬評であった。ところが、ふたを開けた結果、北大は惨敗を喫してしまった。勝つということの難しさをこれほど見せつけたものはなかった。

中学スキー界の優秀選手を集め優勝にしのぎを削っていた明、早、法、日にたいして、期成選手を望めぬ北大の低迷はもはや「時のながれ」であった。選手の養成は地道に予科選手を育て、二部転落の危機を越え闘志で伝統を守ったのである。

昭和二十三年第二十一回で北大は最下位となり、ついに二部転落の憂き目に会ったが、翌年二部優勝して一部にかえり咲いた。この時のエースが盛合力で、彼は戦後最大のプレーヤーである。昭和二十五年の第二十三回(大館)から昭和二十九年の第二十七回(小樽)まで一部に止まったが、第二十七回の最下位で再び二部に転落、一部復帰の夢はいまだに果たせないままになっている。

新潟県上越市(高田)にはレルヒ少佐の像がたっている。この記念碑に「日本スキー発祥の地」と刻まれている。大正十四年二月、全日本スキー連盟結成総会において議論沸騰のすえ決まったことであるが、北大スキー部は日本のスキー術の向上、文献紹介、全国レベルの団体結成のためのリーダーシップの発揮、スキーの普及のための努力、先見の明、どれをとって見ても、日本のスキー界のパイオニアであり、先駆的役割を果たし



関西恵迪会の歴史と現況

辻 山 昌 佑

(昭和二十六年入寮)

ここに「第三十二回関西恵迪会会員名簿（一九九四・五・一八）」がある。小生のメモ書きが表紙にある。「これが最後の名簿（平成六年）、平成七年は震災で中止、平成八年は西日本大会、一応これで解散」とある。表紙裏には左記のように印刷されている。

関西恵迪会

北海道帝国大学恵迪寮の屋根の下で、同じ釜のメシを食い、同じ風呂に浸りながら「都ぞ弥生」を合唱した人々が、若き日の熾烈な「アンビシャス」の気概も薄れがちになって来た折柄、時にはささやかながら一堂に会して青春の気を喚起することもある。よからうではないかと、小泉一郎、中尾實の提唱により、関西在住者を中心として、関西恵迪会は昭和三十七年五月三日に発足した。初めの申し合わせとしては

一・会員は旧恵迪寮（昭和六年四月まで）の寮生であったものに限る。

二・当時の恩師は客員として迎える。

三・関西恵迪会と名付したも、会員の現住所にこだわらない。

四・利害関係は持ち込まない。

第六回会合（昭和四十二年）より、同時代の同窓の有志諸君を客員として迎え、第十四回会合（昭和五十年）より、移築後の現恵迪寮に昭和二十五年三月まで在寮し、主として委員や幹事であった人、及び有志諸君も会員として迎えた。

しかし、その精神は創立の時と変わらず、毎年一回相集い、遙かに過ぎ去った北海道の大地での若き日々^{（一）}に想いを馳せて、親睦を図ることにしている。

名簿のトップに

客員 西村 稔 京都市右京区大秦 安井車道町二二
次は会員となっていて、入寮の古い順に記載されている。

三輪勇四郎	大正十	昭和二・農・生
久保 二郎	昭和二	昭和八・農・経
大森司 論	昭和二	昭和八・農・畜

一番最後の若い会員には、三島史朗、渡辺次男、石川舜（いずれも昭和三十二年入寮）の名がある。

次は案内先で、一九九三年案は昭和三十三年と三十四年入寮の二十八名、九四年は昭和三十五年入寮の十二名が載っている。次は総会開催記録が載っている。

回 年月日 会場

一 昭和三十七・五・三 京都 嵐山寮 人数 四二

* 以下、開催年と会場、参加者数を記す。

二 (昭三八・京都・二六)	三 (昭三九・大阪・三七)
四 (昭四〇・芦屋・二四)	五 (昭四一・宝塚・三〇)
六 (昭四二・宝塚・三四)	七 (昭四三・吹田・三七)
八 (昭四四・宝塚・三四)	九 (昭四五・箕面・三九)
十 (昭四六・同上・三五)	十一 (昭四七・同上・四二)
十二 (昭四八・宝塚・四三)	十三 (昭四九・同上・三三)
十四 (昭五〇・箕面・五二)	十五 (昭五一・西宮・五一)
十六 (昭五二・有馬・四二)	十七 (昭五三・同上・四一)
十八 (昭五四・神戸・四三)	十九 (昭五五・神戸・三八)
二〇 (昭五六・同上・四〇)	二一 (昭五七・同上・三四)
二二 (昭五八・同上・三二)	二三 (昭五九・同上・四一)
二四 (昭六〇・有馬・三六)	二五 (昭六一・神戸・三一)
二六 (昭六二・同上・二〇)	二七 (昭六三・神戸・一七)
二八 (平成一・神戸・一九)	二九 (平成二・芦屋・二〇)
三〇 (平成三・同上・二五)	* 平成四・西日本恵迪会
三一 (平成五・芦屋・二二)	三二 (平成六・神戸)

裏表紙にはご入会のおすすめとあって、

現在、関西恵迪会は次のように行っておりますので、ご賛同願える方はぜひ寮友おさそいの上、ご参加下さい。

一、関西恵迪会は毎年五月頃に行う（年会費はない）、但し西日本恵迪寮同窓会のある年はとりやめ、それに参加する。

二、会場の都合によりウィークデーに会食（又は一泊）し、寮歌をうたう。

三、概ね、五十歳以上の方（出席しやすい方）とし、本年は近畿在住の昭和三十五年入寮者に案内を出しました。毎年一年くりさげます。但し、五十才未満の方の入会、参加は歓迎しております。

関西恵迪会

世話人 柏木 博 岸 浅彦
事務局 〒六六三―八二七 西宮市甲子園一番町七―八

昭和三十七年の第一回の関西恵迪会（四十二人）は、初代恵迪寮のメンバーで始まっています。小生（昭和二十六年入寮）は二代目の恵迪寮で新制ですから、昭和六十年頃から参加するようになりました。二代目恵迪寮で昭和二十五年三月まで在寮していた（旧制の予科）OBで、委員や幹事は第十四回、昭和五十年から参加するようになったとありますから、世話人であった柏木さん（昭十三）や岸さん（昭十七）はこの頃からでしょう。初めの頃は少人数でこじんまりと仲良くやっていたのだと思います。今は全国的に同窓会が組織され、西日本大会と

しては百六十～二百人の参加となっています。

◎第三十二回関西恵迪会員名簿記載事項のあとどうなったかと申しますと、

・平成七年（一九九五）は大地震とその後の大震災で初め五千人と言われた死者が最終六千人と言う大災害をもたらした。「阪神・淡路大震災」により中止。

・平成八年は恵迪寮同窓会西日本大会があり、それに合流参加で取り止めたが、このとき世話人の柏木、岸さんが特に発言を求められ、「関西恵迪会」はこれを以って解散する旨宣言され、預金残五万円を西日本支部に寄贈されました。

ここに「関西恵迪会」は、第一回の昭和三十七年（一九六二）以来、三十四年間の長きに亘る活動を閉じましたが、西日本支部と合流し、更に永遠に続いてゆくこととなりました。

特に永年お世話いただいた岸さんは、前年平成七年四月の二度目の喉頭ガンの手術後の複式発声法で壇上に立たれましたが、惜しくも翌々年、平成十年（一九九八）三月三日に亡くられました。

◎次にこの「関西恵迪会」と昭和五十八年の第二代恵迪寮（北十八条）の閉寮の際に創立された恵迪寮同窓会との関連、即ち西日本支部との関連を次に記します。

・第一回 昭和六十三年八月十二日（金）～十三日（土）

88 恵迪寮同窓会大阪大会

主催 西日本恵迪会 会場 神戸須磨荘

第一部 水族園見学、海水浴 第二部 大会

第三部 海浜ファイアストーム

特記事項：恵迪寮存続決議、閉寮ビデオ発表

・第二回 平成四年七月四日（土）

92 恵迪寮祭大阪大会

共催 恵迪寮同窓会、西日本恵迪会

会場 大阪港ハーバービレッジ

第一部 サンタマリア号港内周航

第二部 プレジャーレストランサイレン

・第三回 平成八年九月十四日（土）・十五日（日）

96 恵迪寮同窓会西日本大会

主催 恵迪寮同窓会 西日本支部

会場 神戸シーバル須磨

第一部 開議社・演題「恵迪の自治」：小島（昭和五）、

畑島（昭十九）、中野（昭二十二）、石川（昭三十

二）、石津（昭三十八）

第二部 大会 第三部 海浜ファイアストーム

特記事項 A・オブションツアー 須磨、姫路城

B・二十六年組飛鳥ツアー（十五～十七日）

・第四回 平成十一・七・三（土）

恵迪寮同窓会 99 西日本大会

主催 恵迪寮同窓会西日本支部

会場 神戸異人館街六甲荘

特記事項 恵迪四方山話：小島（昭和五）、中野（昭二十二）、

中瀬（昭二十六）、小寺（昭五十三）、合田（昭三

◎ そして第五回は来年、平成十四年に予定されています。

宿泊して夜通し語り明かしたり、寮歌だけでなく、ファイアストームやコロンブスのサンタマリア号での港内遊覧、海遊館といったその時々最新の場所を選定する。或るいは又閉寮ビデオの製作や寮の存続決議をしたり、更には開議社や恵迪四方山話などカタイ話もしてきました。硬軟とりまぜてアイディア豊かにやっております。第五回も乞うご期待です。

小生が本格的に参画するようになったのは西日本恵迪会を創立した第一回昭和六十三年の大会からです。実行委員長の安部さん（昭十四）や阿澄さん（昭二十二）、窪田さん（昭三十二）その他の皆さんと封筒の宛名書きや、幟の地を窪田さんのご夫人が作ったものに小生が墨で筆字したり、閉寮ビデオの製作では、阿澄さんのスジでアートボーンでしたか、寮歌振興会が撮影した数多くのテープ二十巻ぐらいあったでしょうか。

当時恵迪の現役は部外者の立入りを禁じていましたが、阿澄さんのついでで撮影した貴重なテープ。それを当時電通映画者にいた青山さん（昭二十六）のお世話で編集しました。二百万円ぐらいかかりましたが、百万円にマケて貰ったのでしたかね。

安部、阿澄、柏木、浜崎、浜野さんなどと、どの部分を入れ、どれをカットするかとなりましたが、どれもこれもなかなか貴重な映像で、これは絶対必要とやってみましたら二時間はこえてしまいました。なんとか一時間にまとめたら、プロの青

山さんに笑われて、こういうものは（二十分）にまとめるものだといわれて、出来上がったのがあのテープです。

ナレーションは予算がないので素人の小生が電通の録音ブースに入って吹き込みました。寮の存続決議文案作りや、巻物に筆字で書いたのも大層よい思い出です。

瀬戸の夜の風に赤々と燃えた、篝火と寮歌にみなみな大感激でした。ここは国立公園内ですし、海水浴場ですから篝火は問題です。そこで、我々が海水浴用に借切った浜小屋を仕切っているオッサンと交渉し、他から文句が出ないように捌いて貰いました。同時に阿澄さんの知人の警察署長さんにも手を廻しました。そして夜通し各々同年代の者が集ったり、先輩、後輩入り混つての話で盛り上がりました。恵迪は良い。

第二回、第三回、第四回とそれぞれ語り尽くせぬ思い出があります。どうしてこんなに恵迪となると大変な努力なのにやるのだらうと思います。そして第一回、第二回と実行委員長を勤めていた安部さんは、平成四年九月二十日に突然大動脈破裂で亡くなりました。第二回大会から二ヵ月後のことでした。

平成七年大震災の年十月三十日には浜崎さん（昭十四）が亡くなられ、お葬式は恵迪寮葬を故人の志を佳以子夫人と息子さんが表明され取行いました。司会是小生が行いましたが、数々の寮歌を寮友が歌い参加者に多大の感銘を与えました。全くの密葬で浜崎さんの寮への想い入れがそれだけ深かったのです。

平成十年には岸さんの他に一月三十日渡辺正さん（昭八）が亡くなられ、十月六日に浜野さん（昭十四）が亡くなられました。

みなさん、それはそれは恵迪を愛された方々でした。お葬式の際には、関西では故人それぞれが好きであった寮歌と「都ぞ弥生」とそして「別離の歌」を歌うことになってます。

従って生きていくうちに好きな歌をエンタリーする必要があります。小生のは「春未だ浅き」(第三十回記念祭歌―昭和十二年)であります。よろしくお願いします。

◎ このように先輩は亡くなり、そして小生もいずれ死を迎えます。しかしこれからも恵迪は、恵迪を愛する人々によって、今までのように連綿と受け継がれてゆくでしょう。しかし乍ら正しく受け継がれなければなりません。

恵迪寮は、明治三十八年に、現在の札幌時計台の所にあった札幌農学校の寄宿舎が廃止され、現キャンパスの旧理学部東側に新築されたものです。正式には、札幌農学校が東北帝国大学農科大学として認められた時に恵迪寮と命名されました。

従って、恵迪寮は明治九年の札幌農学校の寄宿舎を引き継いでいると申せましょう。恵迪寮名簿には第一期生十三名の名が載っていますが、この十三名は卒業したもののみで、明治九年の入学(全寮制)は二十五名でした。

クラークさんのいた頃から今日に至るまで、時代により人によりいろいろと変わってきています。我々同窓はただか二年か三年の短い年数しか体験しておりませんが、私達は恵迪を愛し、恵迪精神の伝承発展に努めなければなりません。

そして正しく恵迪精神を引き継ぐためには、特に温故知新で

なければならぬと信じます。恵迪精神とは何ぞや。学ぼうではありませんか。



(88 恵迪寮同窓会大阪大会―第一回―)

恵迪寮同窓会設立の足取り

中 瀬 篤 信

(昭和二十六年入寮)

北海道大学教養部学生寮である恵迪寮は、そのルーツを辿れば、東京芝山内に設置された開拓使仮学校寄宿舎（明治五十八）、ついで札幌に移り、札幌農学校寄宿舎として時計台講堂（のち演武場）の傍らに、白亜館として開設され（明治九十八）幾多の俊秀を送り出した。

明治三十八年、理学部前に新寮が建設され、名称を付けようという気運が高まり、明治四十年に寮名の募集が行われたが、寮生による委員会での選考、決定にいたらず。当時の予科教授、新居敦二郎先生に依頼、その中の一つ『恵迪』（迪に恵えば吉し）を寮生が自主的に選び、学校当局もこれに賛同し、公的に認められたという歴史的背景を持っている。

昭和六年、北十七条に移転されたが、爾来、七十八年、風雪に耐え、また、この寮舎を旅立った卒業生はおおよそ一人を数え、北海道はもとより広く全国において各界の中枢として活躍している人材を育んだ。

昭和五十六年頃：恵迪寮舎の老朽化に伴い、他の場所に新寮舎

を建て、昭和五十八年三月末をもって閉寮、旧寮舎を取り壊し、廃材となるというニュースが流れていた。

昭和五十六年六月：北大当局は修理不可能なほど老朽化した木

造の寮舎を取り壊し、別の場所に新しい大学寄宿舎建設を計画していた。伝統ある恵迪寮に敬意を表する意味かどうかは不明だが、新学生寮新設記念事業実行委員会を発足させ、旧恵迪寮舎の模型

を作つて残すことを決定したという。

昭和五十七年：それを察知したOB達は夫々仲間を集い、郷愁と愛着の念をもって旧寮舎を訪れていた。

昭和五十七年八月十四日：昭和二十八年以前の寮生（二十五—二十八年）たちが、同年八月二十一日には、昭和二十九—三十二年組『懐かしき恵迪寮舎に別れを告げる会』を旧寮舎にて開催した。

そして別れを惜しむだけでは我慢ができず、夫々が寮名の継承と寮舎の一部保存を決議し、八



〔懐かしき恵迪寮舎に別れを告げる会〕

月二十一日にその旨を北大当局に申し出た。岡部（二十九年）、幸（三十年）、横山（三十一年）、高井（三十一年）ら昭二十九―三十一年組の熱意は

強烈であつた。

昭和五十八年正月：両者の発起人らが新年宴会を開催、激論のうちにその意思を確認。

昭和五十八年一月二十九日：上村重信氏（昭和十三年入寮）北海道土地開発公社副理事長（元道農務部長）の呼びかけで、昭和二―五十四年までの代表十六名が集まり、第一回同窓会設立発起人会を自治会館で開催。発起人代表として北大名誉教授星光一先生（昭和二年）を推戴、1、『恵迪寮』の寮名、寮歌の継続、2、旧恵迪寮舎の一部保存。の二点を当面の目標として、北大、および道庁に交渉することとした。

これを受けて星先生の下に上村、井口光雄（昭和二十八年）の両氏が『北海道大学恵迪寮に関する要望書』を作成。同年二月十日：星、上村、中瀬、井口、幸、高井らが、北大有江幹男学長に要望書を手渡した。星会長は「恵迪寮を勝手に潰すのは不埒であり、何とかして寮舎の復元、保存と寮名、寮歌の継続を」と力説、嘆願した。

同

年二月十五日：道農地開発部長石上 勇氏（昭和十五年）の案内で、前記メンバーで道庁を訪れたが、堂垣内知事が不在のため中川、寺田阿副知事に陳情。又、道開拓の村担当の生活環境部長や瀬戸良一次長（二十三年）に何とかして、道が金を

出し、昭和五十八年四月オープン予定の開拓の村への寮舎移築復元を考慮するように迫った。

同

年二月十七日：開拓記念館館長高倉新一郎先生、開拓の村整備室長：中村 斎氏などに開拓の村への移設、復元を要請。開拓の村では昭和六年に改築した寮舎ではなく、明治三十八年に初めて造られた設計のものであれば移築、展示してかまわないとの意向を示した。この案を実現するためには、寮舎の明治時代における建築学的資料の収集、調査、加えて寮OB全員の熱烈な願望であることを表明する必要があつた。

一方、大学のほうは、寮名を残すことに関しては良好な態度を示すようになってきていたが、寮舎については、空き家になった建物の管理上の問題もあり、四月早々に取り壊し、野球場を造る計画を述べた。我々には、時間的余裕は全くなく、極めてひっ迫した状況に追いこまれたのである。

一方、資金源となる筈の道庁の方は、ちょうど、知事選挙の最中であり、三上頭一郎副知事と社会党の横路代議士との熾烈な戦いが始まっていた。仮に三上氏が当選したとしても六月七月の第二定例議会後でなければ予算が執行できないという。また横路氏が当選した場合、話は振り出しに戻り、資金の捻出は不可能に近い。こうした時期のずれと、大きな解体移築費用捻出が我々の前に立ふさがっていた。

こうした状況下で、北大当局、そして道庁関係者を相手として、強力に交渉するには、同窓会発起人代表などと称しては全く押しが利かない状態であり、早急に全国規模の恵迪寮同窓会を正式に設立する必要に迫られたのである。

同年二月二十八日：上村氏を議長に第二回発起人会を開催し、農学部OBの渡辺千尚先生（大正十四年）など二十五名の参加の下に恵迪寮同窓会設立を決定し、第一回総会を早急に開催することとした。

同年三月十八日、恵迪寮同窓会設立総会に先立って、北大有江学長に面会を求め、本年四月に新しく発足する新寮に伝統ある恵迪寮の名を引き継ぎ、新寮に入る後輩が恵迪精神を継承しよう、又、彼らが寮歌の作成を継続できるよう恵迪寮同窓会の名において要請した。その結果、学長より多少の好意ある返答を得たのである。

同日午後六時より自治会館において恵迪寮同窓会設立総会を開催した。急遽開催されたこの設立総会においては、短い準備期間と同窓名簿の不備という不利な条件にもかかわらず本州からの参加者を含め、約八十名が出席した。

緊急を要する問題である寮名、寮歌の継承や、旧寮舎の開拓村への移設復元を強力に推進するとともに、同窓会体制を強固にするため、明治から今日に至る約一万名の同窓会名簿を早急

に調査整理し、一日も早く全国の同窓を網羅した正式な同窓会総会を開催することを決議した。

同時に伊東孝弁護士（昭和三十年）の指導の下に船越氏（二十八年）が作成した恵迪寮同窓会規約案を審議、成立させ、初代会長に星 光一先生を選出した。名誉会長には、木原 均京大名誉教授（大正七年）、関東恵迪会会長御手洗 毅氏（大正十年）、関西恵迪会世話人山本吉之助氏（大正九年）を推戴し、既に関西、関東の各地域での恵迪寮同窓活動をされている恵迪会とも緊密に連絡を取り合い、共に活動することを確認した。

執行部としての代表幹事に佐山 峻（昭和二十五年）、副代表幹事 中瀬篤信、事務局長 井口光雄が選出され、同窓会の基礎が固まった。

こうした状況下の四月末、道知事選が行われたが、期待していた三上副知事が敗れ、なんと横路氏が当選を果たしてしまったのであった。道に奉職している寮OB達も新知事にはなかなか話しづらいことは十分に推測でき、それを強制することも出来ない。新知事は、予算の少ないことを理由に、移築復元費用の支出に全く否定的であるという情報が流れていた。

新知事からの予算獲得を理由に、寮舎の解体作業の延期を北大当局に嘆願、交渉していた高井農学部助教授（当時）も困り果てていた。この逆境の中で、同窓会執行部の全員に不撓不屈の恵迪魂がムクムクと湧き起こってきたのである。

昭和五十八年六月二日： 星会長を先頭に上村、佐山、中瀬、

井口、幸、高井は知事室に横路新知事を訪ね、『北海道大学恵迪寮に関する要望書』を手交、改めて陳情を行った。

要望書には「日本星光一之印」の印が押されていた。上村は、東大出身の新知事に駒場の寮の話や、校舎、講堂保存の四高、五高、松本高の例を出し、又明治以降、北海道に果たした都ぞ弥生に代表される恵迪寮の価値をるる力説した。

しかし、新知事は、少ない予算を理由に良い返事をしない。重苦しい雰囲気となった。北海道放送の佐山はふと話をずらし、「横路さん、新知事の道議会最初の施政方針演説をHBCで放映しようと思っています」と側面攻撃をした。

業を煮やした私は「道の予算上、困難なことは良く判りますが、もし知事が寮舎保存に協力されたとしても、あるいは予算をつけずに恵迪寮を廃材にしまったても、いずれにしても貴方の名前は北海道の歴史に永久に残りますね。恵迪寮を潰した横路、あるいは恵迪寮を残した横路、というように……」

私の名刺を手にした新知事は「中瀬さんは市立札幌病院ですか、先生はお医者さんなのに凄いいことを言いますね」と笑った。

旬日を経ずして寮舎解体保存の予算（約四千万円）がつき、北海道開拓の村への移設費は次年度予算でと決定されたのである。これは、北大出身の堂垣内知事の遺された事業である開拓

の村には、北大関係の古い建物が全く無いことから恵迪寮が選ばれたのもあるだろうが、道庁在職の恵迪寮OB（山中 洋・二十八年、後の副知事）たちの陰の力が大きかったのだらうと推測される。北大当局には、道予算執行可能期（八月末）まで移設復元部分の管理を交渉、協力を得た。

昭和五十八年八月九日：同窓会は北大より金八千円也で寮舎を払い受け、北海道に寄贈する手続きをとった。

昭和五十八年八月十三日：京王プラザホテル札幌において、第一回恵迪寮同窓会総会が開催され、東北、関東、関西、九州各地より多数の旧寮生が集まり、正式に恵迪寮同窓会が成立したのであった。

いま、同窓会設立当時のことを年表風に書いてみると、これらは、「懐かしの恵迪寮舎に別れを告げる会」から丸一年の間の出来事であったのである。これは私の人生の中で、仲間達と共に全速力で走った最も充実した時期であったのかもしれない。

恵迪寮同窓会設立後、十六年を経過した現在、初代会長：星光一先生、二代目会長：大原久友先生は既になく、三代目の繁富一雄現会長になって事業も拡大し、写真集、雑誌『恵迪』再刊、開識社など大きな業績を残している。

今回、恵迪寮同窓会西日本大会開催に当たって、請われて同窓会設立当時の経緯を記した。

（平成十一年六月三十日・恵迪寮同窓会副会長）



（北海道開拓の村に、明治三十八年創建当時の姿に再現された懐かしの恵迪寮寮舎）

〔編集後記〕

九月十五日（恵迪寮同窓会総会）発行に合わせて、同窓会通信などで何回か寄稿を呼びかけたのだが、予想以上に集まりが悪かった。

恵迪寮の思い出などは、私が関わった文集「恵迪の青春」や会誌「恵迪一〇三号」など、いくつかの出版で、特に旧制時代の先輩のそれは、あらかた出尽くしたのかもしれない。一方、六十年代安保以降は、そもそも同窓会への参加率も低く、また時代のせいか寮への思いも単純ではなさそうで、直接お願いしても色よい返事がない。そんなことで、二十年代後期の方々の執筆が目立つ結果になってしまった。努力不十分で申し訳ない。

しかし、企画記事は、編集委員会メンバーを中心に、中身の濃い文を寄せてもらった。特集「北大・恵迪・人脈」は、恵迪寮と命名し、寮歌を発足させ、名歌「都ぞ弥生」を生んだ明治四十年代を取り上げ、シリーズ運動部は、三回にわたった「野球部」が前号で終了し、今回は

「北大スキー部」を取り上げた。

北海道大学創基百二十五周年のことは、かなり知られているが、わが恵迪寮が札幌農学校寄宿舎以来、百二十五年になったことは、あまり人の口に上っていない。人は、何も昼だけで作られるのではない。ここは夜の効用でも、酒を酌み交わしながら大いに論じたいものだ。

さて、私儀、河原前委員長を引き継いで三、四号の編集責任者を務めたが、次号からは若い世代に引き継ぎます。これまでの協力有り難うございました。

（井口光雄 記）

会誌「恵迪第四号」編集委員会

（ ）内は、入寮年次

委員長 井口 光雄（昭和二十八年）
委員 富永 巖（昭和二十五年）

河原 克巳（昭和二十六年）
白井 俊三（昭和二十七年）
高橋 國臣（昭和二十八年）
鈴木 勝男（昭和二十九年）
高橋 陽一（昭和三十年）
湯浅 亮（昭和三十二年）

恵迪 — 第四号 —

平成十三年九月十五日 発行

発行者／恵迪寮同窓会

会長 繁富 一雄

〒〇六二・八六一一

札幌市豊平区平岸一条二丁目

（株）ラルズ 気付

（TEL・FAX）

〇一一・八一五・六三七七

編集・デザイン

（株）現代ビューロー

担当 中村 信夫

印刷

佐藤印刷株式会社

祝 寄宿舍開舎 百二十五年

昭和五年入寮(旧・旧寮)

小島悦吉

〒七七〇・〇八〇三
徳島市上吉野町二の一
電話 〇八八・六五四・三六七八

昭和十五年入寮

岩田善輔

〒〇六九・〇八〇三
江別市野幌屯田町三二一〇
電話 〇一一・三八四・五一〇

昭和十九年入寮

寺井幸夫

〒一四五・〇〇六四
東京都大田区上池台四一九十四
電話 〇三三・三七二・八二五八

昭和二十三年入寮
北海道自動車短期大学教授
北海道大学名誉教授

村山正

〒〇六四・〇九四四
札幌市中央区円山西町八・六一
電話 〇一一・六二一・八〇五五

昭和五年入寮(旧・旧寮)

中山二郎

〒二五一・〇〇五三
藤沢市本町三一九・一〇
電話&FAX 〇四六・六一二・二七四六

昭和十六年入寮

仲村参郎

〒〇六一・一一〇四
北広島市西の里北三七一一
電話&FAX 〇一一・三七五・二七五二

昭和二十二年入寮

木村咲哉

〒〇六三・〇〇二一
札幌市西区山の手二条一〇丁目
電話 〇一一・六二一・二二五〇

昭和二十六年入寮
(株)光ハイツウエラス代表取締役専務

河原克美

〒〇〇五・〇八四一
札幌市南区石山一条三丁目
電話 〇一一・五九二・一八〇八

昭和十年入寮

宍戸昌夫

〒一五四・〇〇〇三
東京都世田谷区野沢三二・六八三
電話 〇三三・三四一・四一八九

昭和十八年入寮

安井勉

〒〇〇四・〇〇一三
札幌市厚別区もみじ台西五丁目
電話&FAX 〇一一・八九七・一六〇三

昭和二十三年入寮

児島仁

〒一〇〇・八〇一九
東京都千代田区内幸町一・一六
電話 〇三三・三五〇・九二五〇

昭和二十六年入寮

神野善司

〒〇六・〇〇〇五
札幌市中央区北五条西七丁目
電話 〇一一・二七一・〇一一一

祝 寄宿舍開舎 百二十五年

昭和二十六年入寮

高木 任之

〒一五一〇〇六二
東京都渋谷区元代々木町
四九一三二三

昭和二十六年入寮

辻山 昌佑

〒五七一〇〇四七
大阪府門真市栄町九十一
電話 〇六一六九〇九三三二九

昭和二十六年入寮

沼田 久

小樽商科大学名誉教授
札幌学生野球連盟常任理事
〒〇六三一〇八六四
札幌市西区八軒四条東三丁目
電話 〇一一六三一八四八二

昭和二十六年入寮

水庭 久尚

〒三一七一〇六四
茨城県日立市神峰町四一一八
電話 〇二九四一二一三八六六

昭和二十七年入寮

小寺 義彦

〒〇六三一〇八〇二
札幌市西区二十四軒二丁目
電話 & FAX 〇一一六一〇五六〇

昭和二十七年入寮

吉村 洋吉

医療法人社団 信洋会 石山病院院長
〒〇〇五〇八四二
札幌市南区石山二条八丁目
電話 〇二二五九一七一六七
FAX 〇二二五九一七八七九

昭和二十七年入寮

囲碁同好会在札幌有志

坂田 理一郎
白井 俊三
鈴木 重雄
辻井 泰輔
小宮 進彦

昭和二十八年入寮

井口 光雄

〒〇六一二二八二
札幌市南区藤野二丁目一七五
電話 〇一一五九六一二五五三

昭和二十八年入寮

佐々木 勝敏

医々木動物病院
〒〇六三〇〇〇三
札幌市西区山の手三条七丁目
電話 〇一一六三一六七一八

昭和二十八年入寮

竹川 忠男

〒〇六四一〇九一五
札幌市中央区南十五条
西三十二丁目一三十五三〇一
電話 〇一一五五一五八九二

昭和二十八年入寮

船越 一幸

〒〇九〇八五五五
北見市北光二三五
電話 〇一五七一二二二七二
FAX 〇一五七二二二七二九

昭和二十八年入寮

槇 英哉

〒〇四七一〇〇三七
小樽市幸四丁目二十八番七号
電話 〇一三四一三二一〇四〇七

祝 寄宿舍開舎 百二十五年

昭和二十八年入寮

山中 洋

〒〇六一一・一四二
北広島市若葉町三丁目五十三
電話 〇一一・三七二・四三三七

昭和三十年入寮

専門学校 日本福祉リハビリテーション学院
学院長

厚谷 純吉

〒〇六一一・一三三
恵庭市恵み野西六丁目十七番三
電話 〇一一・三三三・七四五二〇
FAX 〇一一・三三三・七四五二五

昭和三十年入寮

幸 健一郎

〒〇〇五・〇八二
札幌市南区南沢二条四丁目五一
電話 & FAX 〇一一・五七二・三三二〇

昭和三十一年入寮
(株)ラルズ代表取締役社長

横山 清

〒〇六二・八六一
札幌市豊平区平岸一条一丁目
電話 〇一一・八三二・二五二五

昭和二十八年入寮

社団法人 空知建設業協会
常務理事・事務局長

吉岡 秀明

〒〇〇三・〇二八
札幌市白石区平和通三丁目
南二番十二・二〇六
電話 〇一一・八六五・六七三八

昭和三十年入寮

いざ寮友とちよ永久に謳歌はん
意気と血潮の恵迪寮歌

小出 精

〒九八三・〇八一四
仙台市宮城野区鶴ヶ谷
七十六・三
電話 〇三二・二五二・六八三八

昭和三十一年入寮

(株)地域計画センター
代表取締役社長

小笠原 孝之

〒〇六〇・〇〇〇三
札幌市中央区北三条西一六丁目
一九九
電話 〇一一・六四四・二二三三

昭和三十一年入寮

勝村建設(株)札幌支店取締役支店長

吉田 重一

〒〇〇六・〇〇一四
札幌市手稲区富岡四条五丁目
六一・七
電話 〇一一・六八三・二七三五

昭和二十九年入寮

村上 一良

〒〇〇五・〇八三二
札幌市南区北沢六丁目九・一六
電話 〇一一・五七二・五六六三

昭和三十年入寮

三井道路株式会社
取締役副社長

高橋 陽一

〒〇六四・〇八〇一
札幌市中央区南一条西二十五丁目
一一一
電話 & FAX 〇一一・六四二・一八八一

昭和三十一年入寮

(社)北海道農業機械工業会
専務理事

高井 宗宏

〒〇六〇・〇〇〇二
札幌市中央区北二西二 三博ビル
電話 〇一一・二五一・七七四三

昭和三十一年入寮

静岡県臨床整形外科医会 会長
国府台整形外科 院長

鈴木 暉男

〒四三八・〇〇七七
静岡県磐田市国府台四一・三二
電話 〇五三八・二五二・五二五

祝 寄宿舍開舎 百二十五年

昭和三十二年入寮
医療法人 社團開成病院 院長

田 中 信 義

〒〇〇一〇〇三三
札幌市北区北三十三条西六丁目
電話 〇一一七五七二二〇一

昭和三十二年入寮

酪農学園大学 教授
獣医師 理学博士

湯 浅 亮

〒〇六九一八五〇一
江別市文京台緑町五八二番地
電話 〇一一三八八四七〇四
(直通)

昭和三十三年入寮

(株)タカハ都市科学研究所取締役会長

鶴 井 哲 夫

〒一〇六一〇〇三二
東京都港区西麻布一三二二
電話 〇二三四七九一五五六一

昭和三十六年入寮
上野八郎法律事務所 弁護士

上 野 八 郎

〒〇六〇一〇〇二二
札幌市中央区北二条西一〇丁目
植物園グランドハイツ四一三三
電話 〇一一二八一二八〇一

昭和四十年入寮

石 村 義 典

〒〇六九一〇八六二
江別市大麻栄町五十二三
電話 〇一一三八六六三三八

昭和四十三年入寮

(財)北海道農業開発公社

皆 川 吉 郎

〒〇六五〇〇〇八
札幌市東区北八条東一六丁目
一一三三四〇一



豊かな社会づくりに創意と技術で貢献

エスケー産業株式会社

代表取締役 社長 木 村 保
代表取締役副社長 高 根 仟 (昭和28年入寮)

(営業内容) ■道路資材事業部 ■土木・環境資材事業部
■建材・内装事業部 ■住宅事業部 ■企画開発室

本社 〒003-0001 札幌市白石区東札幌1条4丁目8番1号
TEL (011) 811-6600(代)・FAX (011) 811-3540
旭川営業所 帯広営業所

医療法人社団 **高須内科医院** (病床数 5 床)

日本消化器内視鏡学会
永続認定専門医
院 長

高 須 重 家 (昭和26年入寮)

診療時間 月、火、木、金 8:30～17:00
水 土 8:30～12:00

札幌市中央区南18条西8丁目2番15号
(市電山鼻線19条下車 西へ徒歩2分)

TEL 011-531-5588 / FAX 011-531-5821

伊東 孝法律会計事務所

弁護士 **伊 東 孝**

〒060-0042

札幌市中央区大通り西10丁目 南大通ビル 3 階
電話 011-271-2475

五十五才からのお住まいと

一度ご覧になって見ませんか？

前略

光ハイツ・ヴェラスは、自由とプライバシーを尊重し、五十五才以上の方がお住まいになれる、さまざまなサービスが充実したところです。自立自助の精神で自分の人生を送りたい。自分の生き方に誇りを持ち、それを損なうことなく自由に生活を送りたい。そういった生活をお手伝いする住まい（有料老人ホーム）です。

専用居室のほかに、共用部分として食堂、スカイラウンジ、多目的室、大浴場などがあります。また、常時介護が必要になったときは、静養室にて介護をいたします。

光ハイツ・ヴェラスでは、毎月見学会を行っておりますので、ご自身の将来の参考のため、ご両親のため、ご親類のためにも是非一度、見学していただければ幸いです。

追伸 パンフレットだけでもお送りいたしますので、

ご遠慮なくお問い合わせください。

お問い合わせ・見学のお申し込み

(社) 全国有料老人ホーム協会正会員 (介護付終身利用型)

フリーダイヤル

0120-8080-62

札幌市南区石山1条3丁目3番33号

(株) 光ハイツ・ヴェラス

代表取締役社長 原 玉海

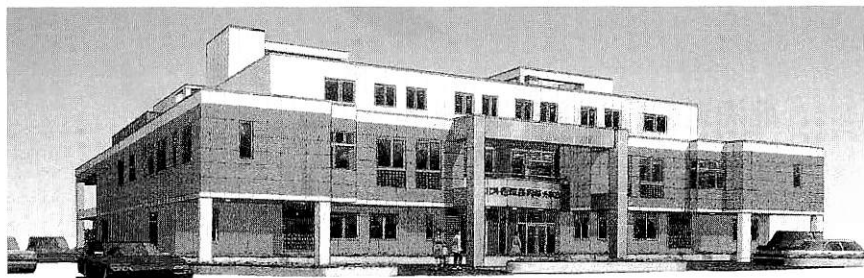
代表取締役専務 河原克美 (s.26 入寮)





医療法人
社 団

北斗循環器病院



■ 診療内容のご案内

- ・ 狭心症、心筋梗塞の救急外来及び風船治療（ステント留置術他）
- ・ 不整脈・ペースメーカー外来
- ・ 動脈硬化性閉塞症及び静脈瘤の外科的治療
- ・ 糖尿病、腎不全他の一般内科

循環器科・内科

理事長 **阿部 秀樹**
副院長 **青木 健郎**

心臓血管外科・外科

名誉院長 **中瀬 篤信**（昭和26年入寮）
院長 **南 勝晴**

◆ 診療時間

月～金／ 9：00～18：00
土／ 9：00～14：00
急患は24時間受付ます

■ 交通機関 ■

市営バス

地下鉄環状通東駅始発

地下鉄北24条駅始発

（東61）（東78）開成高校前下車

（東70）北24条東21丁目（西友前）下車

札幌市東区北21条東21丁目

TEL 011-785-7555
FAX 011-785-1188





〈グループ年商1,500億〉

北海道の豊かな暮らしを創造する

株式会社 ラルズ

(昭31年入寮 横山 清 社長)
(昭57年入寮 松尾 直人 ゼネラル
マネージャー)
(昭59年入寮 高橋 広樹 店 長)

ラルズスーパー部門

- ラルズブラザ
- ラルズストア
- ラルズマート
- フレッティ
- ビッグハウス

関 連 会 社

株式会社道東ラルズ(道東地区スーパー)
株式会社道北ラルズ(道北地区スーパー)
株式会社ホームストア
株式会社イワイ(酒販売)
株式会社エルディ(保険・清掃・ビルメンテナンス)
株式会社ライフポート(ドラッグ部門)

厳選した酒造好適米を磨きあげ、

清冽な雪清水で醸しました。

森林のなかの空気のような

さわやかな吟醸香、

爽快で透明感のある

味わいのお酒です。

純米吟醸
都ぞ 弥生



RALSE

※ラルズグループの店でのみ、お取扱い致しております。
※地方発送は恵迪寮同窓会 (TEL011-815-6377) へお電話下さい。

道銀取引優遇サービス「ステップDo」

ステップ
Do

（「ステップDo」にはお取引条件があり、お申し込みが必要となります。）

お取引に応じて、
お得なサービスが
ステップアップ!

ATM時間外
手数料無料 ※1

抽選プレゼント
最高3万円 ※2

振込手数料無料 ※3

〔キャッシュカードによる道銀本・支店あての
ATM振込に限りです。〕

道銀カード利用額
に応じて0.5%を
キャッシュバック

ローン金利最大
2.0%優遇

トラベラースチェック
発行手数料50%OFF

米ドル現金交換レート
1ドルあたり1円お得

※1. 他行ATMを利用した場合の時間外手数料は対象外となります。

※2. 抽選プレゼントは20%が税として源泉徴収されます。

※3. 振込予約手数料は優遇の対象外となります。

いろいろできます。電話で銀行取引。



道銀の
テレホン
バンキング



キャッシュカードを
お持ちなら、
ご利用は今すぐ!

- 残高照会・取引明細照会
- 住所変更・公共料金口座振替申込
- 外貨キャッシュ・T/Cお届けサービス
- ローン受付
- ステップDo申込
- 店舗案内・各種資料



テレバン会員の
お申し込みが
必要です。

- 振込・振替
- 定期預金
- 口座開設・入金・書替・解約
- 積立定期（口座開設・入金）
- 外貨普通預金
- 現金お届けサービス

- サービス開始時期／お申し込みから1～3週間でお手元に会員カードが送付されます。会員カード到着後、お近くのご利用電話番号まで電話するだけで、各種会員向けのお取引ができます。
- ご利用手数料／年間1,260円（消費税込）のご利用手数料がかかります。（ステップDoの各ステップに該当する方は無料になります。）
- プッシュ機能のついた電話をお使いください。ダイヤル回線の場合でもトーン信号機能付きの電話機でご利用いただけます。（携帯電話・PHS・自動車電話もご利用になれます。）

ご利用の際は、お住まいの地域によつて電話番号をお選びください。

- 札幌市…… (011)818-3333
- 稚内市…… (0162)24-3333
- 旭川市…… (0166)24-8888
- 北見市…… (0157)31-6633
- 釧路市…… (0154)22-1133
- 帯広市…… (0155)27-8855
- 岩見沢市…… (0126)22-4488
- 滝川市…… (0125)24-3344
- 苫小牧市…… (0144)33-0000
- 小樽市…… (0134)24-8888
- 室蘭市…… (0143)24-3333
- 函館市…… (0138)52-3333

窓口の説明書をご用意しておりますので、詳しくは窓口までお問い合わせください。

好評受付中! お申し込みはカンタン!

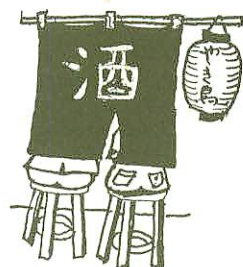
平成13年7月23日現在



50年の感謝をこめて

北海道銀行

<http://www.hokkaidobank.co.jp>



発行：恵迪寮同窓会